

福井県埋蔵文化財調査報告 第94集

東古市縄手遺跡

—鳴鹿大堰東古市地区暫定盛土工事に伴う調査—

2007

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

本書は、平成11年度に、鳴鹿大堰東古市地区暫定盛土工事に伴って福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した、東古市縄手遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものです。

九頭竜川中流域に位置する永平寺町では、主に縄文時代から中世にかかる多数の遺跡の存在が確認されています。今回調査の対象となった東古市縄手遺跡は、九頭竜川南岸の東古市地区に所在しています。近年、この九頭竜川南岸域では、中部縦貫自動車道の建設工事に伴って多数の遺跡が発掘調査されており、城館跡や寺院跡などを初めとして、周辺部における歴史が次第に明らかになりつつあります。

今回の調査では、発掘面積はさほど広くはないものの、弥生時代終末から古墳時代初頭に属す竪穴住居跡2棟を確認し、その内部から多数の遺物が出土したことが特筆されます。また、そのほかにも、縄文時代から中世までの幅広い時代の多量の遺物を検出することができました。それらの中には、当地域の歴史を探る上で、貴重な資料となるものも少なくありません。

今後、これらの資料が、埋蔵文化財に対する理解をより一層深める手がかりとなり、また、本書が学術研究ならびに郷土史研究のためなどに、広く活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行に至る間に、関係諸機関を初め地区住民の方がたなど、多くの皆様から多大なご協力とご支援を賜りました。ここに深くお礼申し上げます。

平成19年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所 長 中 司 照 世

例 言

- 1 本書は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが鳴鹿大堰東古市地区暫定盛土工事に伴い、平成11年度に実施した東古市縄手遺跡（福井県吉田郡永平寺町東古市所在）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は建設省（当時）の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、中森敏晴・白川綾（以上、文化財調査員）が担当した（肩書は調査時）。
- 3 発掘調査は、平成11年7月13日から同年10月20日まで実施した。出土遺物の整理は、平成13年4月1日から同19年3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は白川が行い、中森・山本孝一・御嶽貞義・白川（以上、主査）、森由佳・今林信祐・北野薫・奥井智子（以上、嘱託）、中野拓郎（現・敦賀市教育委員会）が分担して執筆した。文責は、以下のとおりである。

中森（第1章第1節、第4章第1節Ⅰ石器、同第2節Ⅵ、第6章第1節Ⅰ石器、同第2節Ⅴ・Ⅵ）
白川（第1章第2節、第3章、第4章第1節Ⅰ遺構、第5章、第6章第1節Ⅰ・Ⅱ遺構、同第2節Ⅰ、第7章第1節Ⅰ、同第2節） 北野（第2章、第6章第2節Ⅳ） 御嶽（第4章第1節Ⅱ遺構）
山本（第4章第2節Ⅰ） 今林（第4章第1節遺物、同第2節Ⅱ～Ⅴ、第6章第1節Ⅰ粘土塊、同第2節Ⅶ、第7章第1節Ⅱ・Ⅳ） 森（第6章第1節Ⅰ・Ⅱ土器、同第2節Ⅱ） 中野（第6章第1節Ⅱ土師器、同第2節Ⅲ、第7章第1節Ⅲ） 奥井（第6章第2節Ⅳ）

- 5 遺構・遺物の図版作成は白川・森が中心となってい、遺構の写真撮影は白川が、遺物の写真撮影は中森が、写真図版作成は中森・今林が、それぞれ行った。
- 6 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 7 本書に掲載した遺構図ならびに地形測量図は、株式会社国土開発センターに作成を委託したものを、一部改変したものである。また、鉄器の保存処理ならびにX線画像撮影は、株式会社武蔵文化財研究所に業務を委託した。
- 8 本書の遺構・遺物の挿図の縮尺は、次のとおりである。

遺構配置図	1 / 200	石器実測図	1 / 3 ・ 2 / 3
調査区土層断面図	1 / 100	鉄器実測図	1 / 2
遺構実測図	1 / 60	土錘・粘土塊実測図	1 / 3
土器実測図	1 / 3		
- 9 本書における水平レベルの表示は海拔高（m）を示し、方位は磁北（M. N.）と真北（T. N.）の両者を併用した。
- 10 発掘調査ならびに遺物整理に際しては、永平寺町教育委員会のご協力を得た。
- 11 本書の作成にあたり、次の方々からご助言・ご指導を頂いた（敬称略・五十音順）。
青木元邦・天井康昭・網谷克彦・加藤茂森・木下哲夫・佐々木勝・堀大介・安英樹

目 次

	頁
第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 I区の概要	11
第1節 層序	11
第2節 遺構分布	11
第3節 遺物出土状況	11
第4章 I区の遺構・遺物	14
第1節 遺構と遺構出土遺物	14
第2節 包含層出土遺物	20
第5章 II区の概要	31
第1節 層序	31
第2節 遺構分布	31
第3節 遺物出土状況	31
第6章 II区の遺構・遺物	33
第1節 遺構と遺構出土遺物	33
第2節 包含層出土遺物	63
第7章 まとめ	116
第1節 遺物	116
第2節 遺構・遺跡	126

図 版 目 次

本文対照頁

図版第一	遺跡・遺構	(1) I区	第一面	石組遺構完掘状況(南西から)	18
		(2) I区	第二面	全景(北西から)	13
図版第二	遺跡	(1) II区	全景(南西から)		32 - 33
		(2) II区	全景(北から)		32 - 33
図版第三	遺構	(1) II区	1号住居跡遺物出土状況(南東から)		35
		(2) II区	2号住居跡遺物出土状況(南西から)		49
図版第四	遺物	(1) II区	1号住居跡出土遺物		
		(2) II区	2号住居跡出土遺物		
図版第五	遺構	(1) I区	第一面	石組遺構完掘状況(南西から)	18
		(2) I区	第一面	石組遺構完掘状況(北東から)	18
図版第六	遺跡・遺構	(1) I区	第二面	全景(北西から)	13
		(2) I区	第二面	土坑2完掘状況(北から)	14
図版第七	遺構	(1) I区	第二面	土坑1遺物出土状況(北東から)	14
		(2) I区	第二面	土坑1完掘状況(北東から)	14
図版第八	遺跡	(1) II区	全景(東から)		32 - 33
		(2) II区	全景(西から)		32 - 33
図版第九	遺構	(1) II区	1号住居跡遺物出土状況(南東から)		35
		(2) II区	1号住居跡完掘状況(南東から)		34
図版第一〇	遺構	(1) II区	2号住居跡遺物出土状況(南西から)		49
		(2) II区	2号住居跡完掘状況(南西から)		48
図版第一一	遺物	I区	(1)	遺構出土土器	15
			(2)	包含層出土土器	21・22
図版第一二	遺物	I区	22・23		
図版第一三	遺物	I区	23		
図版第一四	遺物	I区	(1)	打製石斧	15
			(2)	打製石斧(ミニチュア)	30
			(3)	磨製石斧	30
			(4)	磨石類	30
			(5)	打製石斧	29・30
図版第一五	遺物	II区	37		
図版第一六	遺物	II区	38		
図版第一七	遺物	II区	39		
図版第一八	遺物	II区	40		
図版第一九	遺物	II区	41・42		
図版第二〇	遺物	II区	42・43		
図版第二一	遺物	II区	44・45		

图版第二二	遺物	Ⅱ区	·····	50
图版第二三	遺物	Ⅱ区	·····	50 · 51
图版第二四	遺物	Ⅱ区	·····	51 · 52
图版第二五	遺物	Ⅱ区	(1) 粘土塊·····	59
			(2) 粘土塊·····	60
			(3) 遺構出土土器·····	62
图版第二六	遺物	Ⅱ区	(1) 繩文土器(表)·····	64
			(2) 繩文土器(裏)·····	64
图版第二七	遺物	Ⅱ区	(1) 繩文土器(表)·····	65
			(2) 繩文土器(裏)·····	65
图版第二八	遺物	Ⅱ区	·····	68 · 69
图版第二九	遺物	Ⅱ区	·····	69
图版第三〇	遺物	Ⅱ区	·····	69 · 70
图版第三一	遺物	Ⅱ区	·····	70 · 71
图版第三二	遺物	Ⅱ区	·····	71 · 72
图版第三三	遺物	Ⅱ区	·····	72
图版第三四	遺物	Ⅱ区	·····	73
图版第三五	遺物	Ⅱ区	·····	73
图版第三六	遺物	Ⅱ区	·····	74
图版第三七	遺物	Ⅱ区	·····	74 · 75
图版第三八	遺物	Ⅱ区	·····	75 · 76
图版第三九	遺物	Ⅱ区	·····	76
图版第四〇	遺物	Ⅱ区	·····	76 · 77
图版第四一	遺物	Ⅱ区	·····	77
图版第四二	遺物	Ⅱ区	·····	77 · 78
图版第四三	遺物	Ⅱ区	·····	78
图版第四四	遺物	Ⅱ区	·····	86 · 92
图版第四五	遺物	Ⅱ区	·····	92 · 93
图版第四六	遺物	Ⅱ区	·····	93
图版第四七	遺物	Ⅱ区	·····	93 · 94
图版第四八	遺物	Ⅱ区	·····	94 · 95
图版第四九	遺物	Ⅱ区	·····	95 · 96
图版第五〇	遺物	Ⅱ区	·····	96 · 97
图版第五一	遺物	Ⅱ区	·····	97
图版第五二	遺物	Ⅱ区	·····	97 · 98
图版第五三	遺物	Ⅱ区	·····	98
图版第五四	遺物	Ⅱ区	·····	98 · 99
图版第五五	遺物	Ⅱ区	·····	100
图版第五六	遺物	Ⅱ区	(1) 打製石斧·····	45 · 52

	(2) 打製石斧	109
図版第五七 遺物 II区	(1) 打製石斧	110
	(2) 磨石類	112
	(3) 砥石	112
	(4) 打製石斧(ミニチュア)	110
	(5) 器種不明品	112
	(6) 器種不明品	112
	(7) 尖頭器	113
図版第五八 遺物 II区	(1) 鉄鏃	113
	(2) 鉄鏃(X線画像)	113
	(3) 土錘	115

挿 図 目 次

	頁
第1図 調査区位置図(縮尺1/5,000)	1
第2図 福井県地勢図(縮尺1/1,000,000)	4
第3図 志比地溝内の地形模式図(縮尺1/100,000)	5
第4図 東古市縄手遺跡の位置と周辺の遺跡分布図(縮尺1/100,000)	6
第5図 I区 東西方向土層断面図(縮尺1/100)	12
第6図 I区 遺構配置図(縮尺1/200)	13
第7図 I区 土坑実測図(縮尺1/60)	14
第8図 I区 石組遺構・土坑出土土器実測図(縮尺1/3)	15
第9図 I区 土坑出土打製石斧実測図(縮尺1/3)	15
第10図 I区 石組遺構実測図(1)(縮尺1/20)	18
第11図 I区 石組遺構土層断面図(縮尺1/20)	19
第12図 I区 石組遺構実測図(2)(縮尺1/20)	19
第13図 I区 包含層出土土器実測図(1)(縮尺1/3)	21
第14図 I区 包含層出土土器実測図(2)(縮尺1/3)	22
第15図 I区 包含層出土土器実測図(3)(縮尺1/3)	23
第16図 I区 包含層出土打製石斧実測図(縮尺1/3)	29
第17図 I区 包含層出土打製石斧・磨製石斧・磨石類実測図(縮尺1/3)	30
第18図 II区 南北方向土層断面図(縮尺1/100)	32
第19図 II区 遺構配置図(縮尺1/200)	32-33
第20図 II区 竪穴住居跡区割図(縮尺1/120)	33
第21図 II区 1号住居跡完掘状況実測図(縮尺1/60)	34
第22図 II区 1号住居跡遺物出土状況実測図(縮尺1/60)	35
第23図 II区 1号住居跡出土土器実測図(1)(縮尺1/3)	37
第24図 II区 1号住居跡出土土器実測図(2)(縮尺1/3)	38

第25図	Ⅱ区	1号住居跡出土土器実測図(3)(縮尺1/3)	39
第26図	Ⅱ区	1号住居跡出土土器実測図(4)(縮尺1/3)	40
第27図	Ⅱ区	1号住居跡出土土器実測図(5)(縮尺1/3)	41
第28図	Ⅱ区	1号住居跡出土土器実測図(6)(縮尺1/3)	42
第29図	Ⅱ区	1号住居跡出土土器実測図(7)(縮尺1/3)	43
第30図	Ⅱ区	1号住居跡出土土器実測図(8)(縮尺1/3)	44
第31図	Ⅱ区	1号住居跡出土土器実測図(9)(縮尺1/3)	45
第32図	Ⅱ区	1号住居跡出土打製石斧実測図(縮尺1/3)	45
第33図	Ⅱ区	2号住居跡完掘状況実測図(縮尺1/60)	48
第34図	Ⅱ区	2号住居跡遺物出土状況実測図(縮尺1/60)	49
第35図	Ⅱ区	2号住居跡出土土器実測図(1)(縮尺1/3)	50
第36図	Ⅱ区	2号住居跡出土土器実測図(2)(縮尺1/3)	51
第37図	Ⅱ区	2号住居跡出土土器実測図(3)(縮尺1/3)	52
第38図	Ⅱ区	2号住居跡出土打製石斧実測図(縮尺1/3)	52
第39図	Ⅱ区	2号住居跡出土粘土塊実測図(1)(縮尺1/3)	59
第40図	Ⅱ区	2号住居跡出土粘土塊実測図(2)(縮尺1/3)	60
第41図	Ⅱ区	土坑・ピット実測図(縮尺1/60)	61
第42図	Ⅱ区	土坑・ピット出土土器実測図(縮尺1/3)	62
第43図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(1)(縮尺1/3)	64
第44図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(2)(縮尺1/3)	65
第45図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(3)(縮尺1/3)	68
第46図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(4)(縮尺1/3)	69
第47図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(5)(縮尺1/3)	70
第48図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(6)(縮尺1/3)	71
第49図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(7)(縮尺1/3)	72
第50図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(8)(縮尺1/3)	73
第51図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(9)(縮尺1/3)	74
第52図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(10)(縮尺1/3)	75
第53図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(11)(縮尺1/3)	76
第54図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(12)(縮尺1/3)	77
第55図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(13)(縮尺1/3)	78
第56図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(14)(縮尺1/3)	86
第57図	須恵器・土師器分類図		89
第58図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(15)(縮尺1/3)	92
第59図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(16)(縮尺1/3)	93
第60図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(17)(縮尺1/3)	94
第61図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(18)(縮尺1/3)	95
第62図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(19)(縮尺1/3)	96
第63図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図(20)(縮尺1/3)	97

第64図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図 (21)(縮尺1/3)	98
第65図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図 (22)(縮尺1/3)	99
第66図	Ⅱ区	包含層出土土器実測図 (23)(縮尺1/3)	100
第67図	Ⅱ区	包含層出土打製石斧実測図 (1)(縮尺1/3)	109
第68図	Ⅱ区	包含層出土打製石斧実測図 (2)(縮尺1/3)	110
第69図	Ⅱ区	包含層出土磨石類・砥石・器種不明品実測図 (縮尺1/3)	112
第70図	Ⅱ区	包含層出土尖頭器実測図 (縮尺2/3)	113
第71図	Ⅱ区	包含層出土鉄器実測図 (縮尺1/2)	113
第72図	Ⅱ区	包含層出土土製品実測図 (縮尺1/3)	115
第73図		月影式土器の器種組成比率	119
第74図		須恵器・土師器の時間的位置づけ	122

表 目 次

		頁	
第1表	Ⅰ区	遺構出土遺物一覧表	15
第2表	Ⅰ区	遺構出土土器観察一覧表	16
第3表	Ⅰ区	縄文土器出土区一覧表	21
第4表	Ⅰ区	包含層出土土器観察一覧表	25
第5表	Ⅰ区	包含層出土打製石斧観察一覧表	30
第6表	Ⅰ区	包含層出土磨石類観察一覧表	30
第7表	Ⅱ区	遺構出土遺物一覧表	31
第8表	Ⅱ区	1号住居跡出土土器観察一覧表	53
第9表	Ⅱ区	2号住居跡出土土器観察一覧表	57
第10表	Ⅱ区	2号住居跡出土粘土塊観察一覧表	60
第11表	Ⅱ区	土坑・ピット出土土器観察一覧表	62
第12表	Ⅱ区	縄文土器出土区一覧表	65
第13表	Ⅱ区	包含層出土弥生土器観察一覧表	79
第14表	Ⅱ区	包含層出土須恵器一覧表	101
第15表	Ⅱ区	包含層出土土師器観察一覧表	104
第16表	Ⅱ区	包含層出土中世土器観察一覧表	107
第17表	Ⅱ区	打製石斧観察一覧表	111
第18表	Ⅱ区	包含層出土磨石類観察一覧表	112
第19表	Ⅱ区	包含層出土砥石観察一覧表	112
第20表	Ⅱ区	包含層出土器種不明品観察一覧表	112
第21表	Ⅱ区	包含層出土尖頭器観察一覧表	113
第22表	Ⅱ区	包含層出土土製品観察一覧表	115
第23表		月影式土器の器種組成比率表	119

第1章 調査の経過

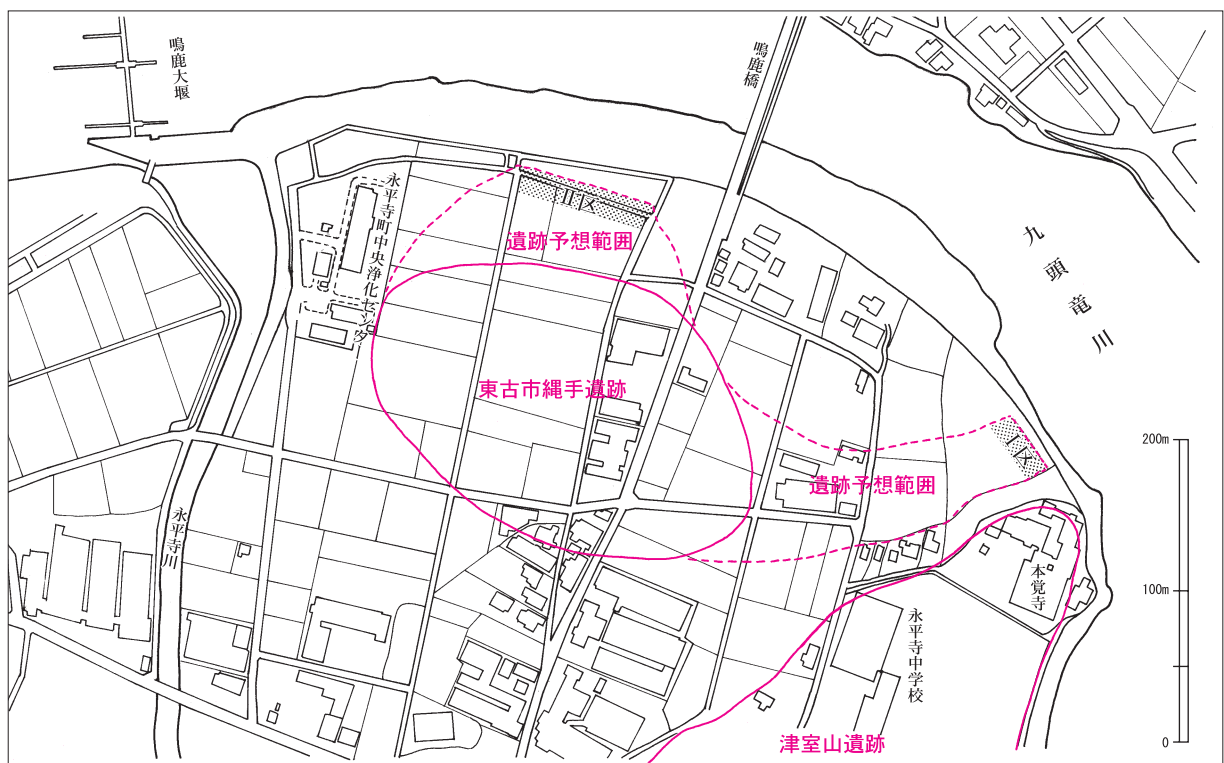
第1節 調査にいたる経緯

福井県最大最長の河川、九頭竜川をせきとめる鳴鹿大堰は、やはり当県最大規模を誇る用水堰で、福井平野一帯の広範な農地を潤す灌漑用水の水源を担っている。現在は坂井市丸岡町東二ツ屋と吉田郡永平寺町法寺岡との間にあるが、その名のとおり、かつては現在よりやや上流の、永平寺町鳴鹿山鹿と同町東古市との間にあった。その歴史は平安時代までさかのぼり、興福寺領河口荘開発のために開削された、十郷用水の取水口として設けられたのが始まりとされ、十郷大堰とも呼ばれている。

平成9年(1997)、建設省近畿地方建設局(現、国土交通省近畿地方整備局)九頭竜川鳴鹿大堰管理所(以下、鳴鹿大堰管理所)は、鳴鹿大堰建設事業に関連して、東古市地区暫定盛土工事を計画した。工事予定区域は、鳴鹿橋の南、九頭竜川左岸の低位段丘上で、当時の護岸壁から20~30m幅、鳴鹿橋を挟んで上流側に約110m、下流側に約160mの範囲であった。この区域内に周知の遺跡はなかったが、その南側に津室山遺跡と東古市縄手遺跡が存在し、そのさらなる拡がりが見込まれたため、同年7月、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター(以下、センター)が試掘調査を実施した。

調査の結果、事業区域の一部で、弥生時代末~古墳時代初頭と思われる遺構・遺物を確認した(第1図)。まず、上流側(I区)は、永平寺中学校のある高台から一段下がった、川よりやや高い平坦面上にあり、川沿いに展開した集落遺跡と判断した。一方、下流側(II区)は、南東から北西にかけて緩やかに傾斜する台地の先端部分で、遺跡の中心からはやや外れるものの、一部はそこまで広がっていたものと推測した。

以上の結果から、当該工事の際には、事前に記録保存のための発掘調査が一部で必要となる旨を鳴鹿大堰管理所に回答した。それを受けて、福井県教育庁文化課・センター・鳴鹿大堰管理所の三者で協議した結果、平成11年度中に調査対応することで合意に達し、東古市縄手遺跡の発掘調査が決定した。(中森)



第1図 調査区位置図(縮尺1/5,000)

第2節 調査の経過

本調査は、平成11年（1999）7月13日より開始した。調査区割りは、一辺5mの区画とした。I区は、東西に1～10区、南北にA・B区を配した。調査面積は約360m²。II区は、東西に1～17区、南北にA～D区を配した。調査面積は約1,240m²。I区は、すべて人力による調査を行った。II区の表土については、重機での掘削を行った。調査は、I区を先行し、その後II区の調査を行った。

以下、調査日誌を抄録する。

（白川）

- 7月13日 本調査に着手。I区の調査区中央部に土層観察用あぜを設定し、全面の表土剥ぎを行う。
- 7月14日 I区の試掘坑の覆土除去。壁面を観察し遺構確認面を把握。
- 7月15日 I区の客土掘り下げ。
- 7月16日 I区の客土掘り下げ。
- 7月21日 I区の客土・包含層掘り下げ。
- 7月22日 I区の包含層掘り下げ。杭打ちを行う。
- 7月23日 I区の包含層掘り下げ。
- 7月26日 I区の包含層掘り下げ。石組遺構確認。4分割して掘り下げ。
- 7月27日 I区の包含層掘り下げ。I区の遺構確認面精査開始。石組遺構の土層断面図実測終了。
- 7月28日 I区石組遺構完掘。
- 7月29日 I区石組遺構写真撮影。平面図実測開始。
- 7月30日 I区遺構掘り下げ。A・B-1～3区は遺構が残っていないため地山まで掘り下げる。
- 8月2日 I区遺構掘り下げ。A・B-4・5区も遺構が残っていないため地山まで掘り下げる。II区にベルトコンベアを設置。
- 8月3日 I区調査区東西に設置した土層観察用あぜの分層。II区の包含層掘り下げ。
- 8月4日 I区調査区東西方向の土層断面図実測。II区の包含層掘り下げ。
- 8月5日 I区調査区東西方向の土層断面図実測。II区の包含層掘り下げ。
- 8月6日 I区調査区東西方向の土層断面図実測。II区の包含層掘り下げ。
- 8月9日 II区の包含層掘り下げ。
- 8月10日 II区の包含層掘り下げ。
- 8月11日 II区の包含層掘り下げ。
- 8月13日 I区土層観察用あぜ除去。II区の包含層掘り下げ。
- 8月17日 I区土層観察用あぜ除去。II区の包含層掘り下げ。
- 8月18日 I区土坑1確認・掘り下げ。
- 8月19日 I区土坑1、遺物出土状況の写真撮影・平面図実測・取り上げ。
- 8月20日 I区土坑1、硬化面で写真撮影、硬化面の掘り下げ。II区の包含層掘り下げ。
- 8月23日 I区土坑1、完掘。写真撮影。I区の遺構はすべて完掘。平板で、I区の遺構出土状況の平面図作成開始。II区の包含層掘り下げ。
- 8月25日 I区遺構出土状況の平面図作成終了。I区全面清掃。
- 8月26日 I区航空測量。I区調査区全景の写真撮影。II区の包含層掘り下げ。
- 8月30日 II区の包含層掘り下げ。
- 8月31日 II区の包含層掘り下げ。

第2節 調査の経過

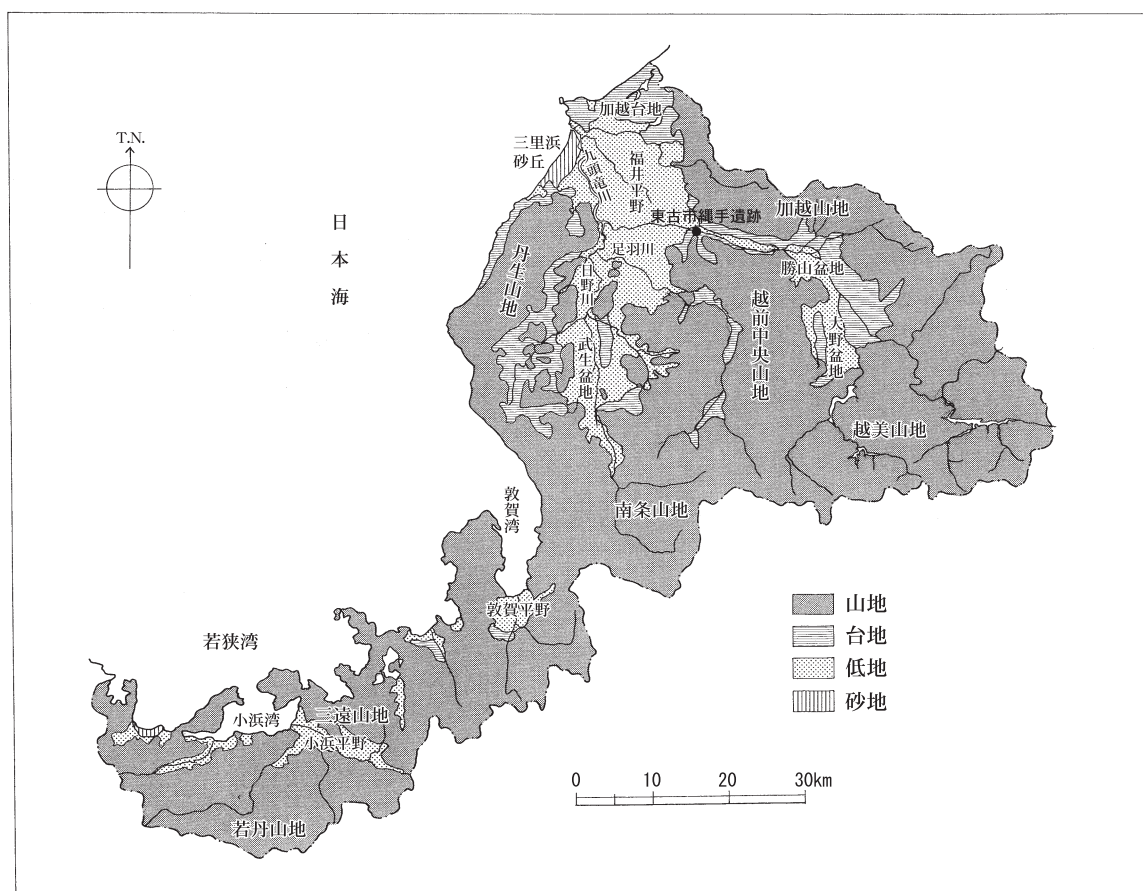
- 9月1日 II区の包含層掘り下げ。
- 9月2日 II区の包含層掘り下げ。遺構確認面を把握する。永平寺中学校の生徒、遺跡見学。
- 9月3日 II区の包含層掘り下げ。永平寺中学校の生徒、遺跡見学。
- 9月6日 I区の調査区中央にトレンチを設定、下層に遺構・遺物がないことを確認。トレンチ内の東西土層断面を分層、実測。I区での作業はすべて終了。（以下の作業はすべてII区）
- 9月9日 包含層掘り下げ。
- 9月10日 包含層掘り下げ。
- 9月13日 包含層掘り下げ。遺構検出開始。
- 9月16日 包含層掘り下げ。
- 10月1日 1号住居跡・2号住居跡確認。遺構確認および遺構の掘り下げを行う。
- 10月2日 1号住居跡・2号住居跡覆土掘り下げ。遺構確認および遺構の掘り下げ。
- 10月4日 1号住居跡の遺物出土状況および土層断面写真撮影。2号住居跡の土層断面写真撮影、土層断面図の実測終了、土層観察用あぜの除去、遺物出土状況平面図実測。遺構確認および遺構の掘り下げ。
- 10月5日 1号住居跡の土層観察用あぜの除去、遺物出土状況平面図実測開始。
- 10月6日 遺構確認および遺構の掘り下げ。
- 10月7日 遺構確認および遺構の掘り下げ。
- 10月8日 2号住居跡の遺物取り上げ。
- 10月9日 1号住居跡の遺物出土状況平面図実測終了。
- 10月11日 1号住居跡の遺物取り上げ。遺構確認および遺構の掘り下げ。
- 10月12日 2号住居跡の完掘状況写真撮影。遺構確認および遺構の掘り下げ。
- 10月13日 1号住居跡の完掘状況写真撮影。遺構確認および遺構の掘り下げ。
- 10月14日 調査区外にベルトコンベアを撤去。調査区全体の清掃。
- 10月15日 調査区全体の清掃。平板で1号住居跡・2号住居跡の遺構出土状況平面図の作成。調査区西壁の土層断面図を作成。
- 10月18日 調査区全体の清掃。調査区全景の写真撮影。道具の片づけ。
- 10月19日 調査区全体の清掃。航空測量。正午で解散。出土遺物および器材を埋文センターに運搬。
- 10月20日 器材搬出。プレハブ撤去。

第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

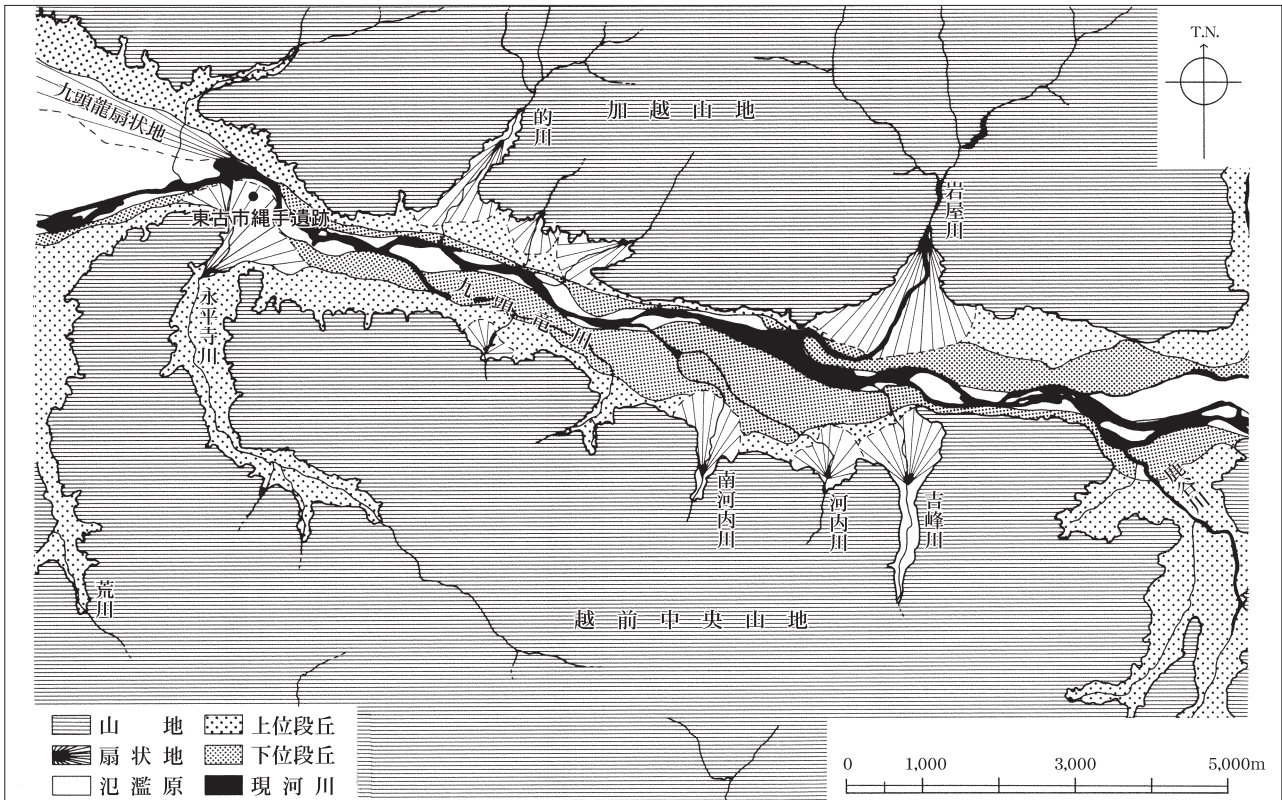
第1節 地理的環境 (第2・3図)

福井県は、本州中央部の日本海沿岸に面し、東西約130km、南北約100km、面積は約4,189km²を測る。一般的に、県のほぼ中央部に位置する木ノ芽山地（山嶺）を境に大きく二分し、北を嶺北、南を嶺南と呼称する。嶺北地方は、九頭竜川、日野川、足羽川といった大河川による沖積平野が形成されるのに対し、嶺南地方は、海と山地に挟まれた平地や小河川の河岸段丘から構成される。また、嶺北地方とは異なり、日本海側有数のリアス式海岸をもつ。嶺北地方は、加越山地、越美山地、丹生山地に三方を囲まれ、越前中央山地が南北にのびる。各山地に挟まれた平地に福井平野が位置する。この福井平野を貫くのが県内最大の九頭竜川である。九頭竜川は、福井県と岐阜県の県境に位置する油坂峠付近に源を發し、足羽川、日野川と福井平野部の西方で合流する。県北西端の名勝天然記念物「東尋坊」周辺が日本海への開口部である。河口部は三里浜砂丘となっており、古墳時代から平安時代までの遺跡が分布する。

吉田郡永平寺町は、九頭竜川の中流部にあたる。東側に広がる大野・勝山盆地と西側に広がる福井平野、坂井平野、鯖武盆地は、加越・越前中央山地により視覚的に分けられており、東西の間を長さ約13km、幅約1.5kmの「志比地溝」により連結されている。九頭竜川の両岸は、上位河岸段丘面と下位河岸段丘面に二分される。地溝内に点在する遺跡の多くは、標高約50~70mを測る上位河岸段丘面および山麓部に所在する。永平寺町内には、永平寺川が流れており、越前中央山地に源を發し、南方より九頭竜川中域に注ぎ込んでいる。永平寺川流域には、河川が形成した南北約3km、東西約1kmを測る「志比谷」



第2図 福井県地勢図 (縮尺1/1,000,000)



第3図 志比地溝内の地形模式図 (縮尺1/100,000)

が広がっている。

永平寺町東古市は、志比谷の北部に位置する。東古市縄手遺跡は、志比地溝西端部の九頭竜川左岸と永平寺川の合流点の下位河岸段丘上に形成された小扇状地の一部に立地する(第4図1)。鳴鹿橋の南東側調査区の360㎡をⅠ区、南西側調査区の1,200㎡をⅡ区とする。遺跡の標高は、36.5~39.7mを測る。

第2節 歴史的環境 (第4図)

本遺跡に関連する時代について、周辺の遺跡の概要を記す。

縄文時代 縄文時代の周辺遺跡は、『鳴鹿手島遺跡』(工藤1988)に詳しい為、ここでは、本遺跡と関連が深いと思われる津室山遺跡(第4図2)についてのみ記す。津室山遺跡は、河岸段丘化した地形上に立地する。多量の打製石斧が出土している。

弥生時代 本遺跡周辺での弥生時代の遺跡発掘調査例は希少であり、袖高林古墳群(同図3)と成仏木原町遺跡(同図4)にとどまる。まず、袖高林古墳群は13基以上の墳丘墓で構成され、南北の2群に分かれる。平成7・8年(1995・1996)に南群にある4基の発掘調査が行われ、墳丘付近より弥生時代後期後半から終末期にかけての遺物が出土した。1号墓の第2埋葬施設からは、鉄刀が出土している。成仏木原町遺跡は、縄文時代を本来主体とする遺跡であるが、弥生時代終末期の土器も出土している。

この他、永平寺町に所在する遺跡として、室遺跡(同図5)がある。断面V字状の環濠跡、竪穴住居跡、掘立柱建物跡が確認され、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての大規模な環濠集落遺跡である事が窺える。その周辺に位置する遺跡として、南春日山墳丘墓群(同図6)と乃木山墳丘墓(同図7)

がある。まず、南春日山墳丘墓群からは、四隅突出型墳丘墓1基と方形周溝墓3基が確認された。1号墓からは、弥生時代後期後半の遺物が出土している。また、乃木山墳丘墓は、弥生時代終末期の方形墳丘墓であることが確認された。3基の埋葬施設のうち第1号埋葬施設からは、木製枕、素環頭鉄剣等の副葬品が出土している。

福井平野東方の河川流域には、福井市荒木遺跡（同図8）と同市林・藤島遺跡（同図9）が位置する。両遺跡は、土器編年の標式遺跡として学史上重要な遺跡である。足羽川流域の扇状地上に立地する荒木遺跡からは、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡や、碧玉製玉作りの痕跡が確認された。旧河川道からは、弥生中期後半の遺物がまとめて出土している。また、九頭竜川流域の扇状地上に立地する林・藤島遺跡は、弥生時代後期～古墳時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が確認された集落遺跡である。



第4図 東古市縄手遺跡の位置と周辺の遺跡分布図（縮尺1/100,000）

国土地理院 平成5年2月1日発行 1/50,000「永平寺」使用

- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 東古市縄手遺跡 | 2. 津室山遺跡 | 3. 袖高林古墳群 | 4. 成仏木原町遺跡 |
| 5. 室遺跡 | 6. 南春日山墳丘墓群 | 7. 乃木山墳丘墓 | 8. 荒木遺跡 |
| 9. 林・藤島遺跡 | 10. 原目山墳墓群 | 11. 松岡古墳群 | 12. 永平寺支群 |
| 13. 重立山支群 | 14. 手繰ヶ城山古墳 | 15. 泰遠寺山古墳 | 16. 石舟山古墳 |
| 17. 鳥越山古墳 | 18. 二本松山古墳 | 19. 東諏訪間古墳群 | 20. 大畑古窯跡群 |
| 21. 丸岡古墳群 | 22. 六呂瀬山支群 | 23. 野中山王支群 | 24. 大森支群 |
| 25. 上銭瓶支群 | 26. 六呂瀬山1号墳 | 27. 六呂瀬山3号墳 | 28. 御野山古墳 |
| 29. 葵遺跡 | 30. 諏訪間窯跡群 | 31. 堂谷窯跡群 | 32. 奥乙ヶ谷窯跡 |
| 33. 吉波神明窯跡 | 34. 箱屋谷遺跡 | 35. 堤ヶ谷窯跡 | 36. 藤谷窯跡 |
| 37. 上吉野窯跡 | 38. 永平寺 | 39. 吉峰古寺 | 40. 大仏寺 |
| 41. 線刻磨崖仏9体 | 42. 波多野城跡 | 43. 三重山城跡 | 44. 波多野氏館跡 |
| 45. 諏訪間興行寺 | 46. 荒川興行寺 | 47. 京善藤谷口遺跡 | |

碧玉製玉作り関する遺物や弥生時代後期の遺物等が出土している。従来、「林遺跡」と呼称されていたが、平成4年度に「林・藤島遺跡」と改称されている。

林・藤島遺跡に時期的に後続する遺跡として、福井市原目山墳墓群（同図10）がある。80基中7基が調査され、1号墓の埋葬施設から323点の管玉や、弥生時代終末期の供献土器が出土している。また、3号墓の頂部より弥生時代中期から後期の遺物が出土している。弥生時代後期から終末期にかけての墓制の在り方を示しており、土壙墓→方形周溝墓→墳丘墓へという変遷過程が考えられている。

古墳時代 松岡古墳群（同図10～13）は、九頭竜川左岸の丘陵上にある永平寺（同図12）、松岡（同図11）、重立山（同図13）、原目山（同図10）の4つの支群により構成され、約170基から成る。まず、標高164.3mの丘陵上手練ヶ城山古墳（同図14）が位置する。全長約129mを測る前方後円墳である。墳丘は2段築成で、葺石や埴輪が確認された。4世紀中葉に造営されたと考えられている。泰遠寺山古墳（同図15）は全長約64mを測る帆立貝形古墳と推定されている。昭和初期に鉄道の施設に伴う土取りにより消失した古墳である。副葬品として、半円方形帯神獸鏡や内行花文鏡をはじめ、勾玉や管玉、棗玉、蜻蛉玉、丸玉、小玉といった玉類が伝えられている。5世紀中葉に築造されたと考えられている。三峰山の南方に石舟山古墳（同図16）が位置する。墳丘は全長約79.1mを測る。盗掘されていたものの、排水溝をもつ刳抜式の舟形石棺の身部が確認され、甲冑片や須恵器片が出土している。また、墳頂部、段築面、裾部からは埴輪列が確認されている。墳頂部では石棺蓋の破片が確認された。5世紀中葉に造営されたと考えられている。その南方には鳥越山古墳（同図17）がある。全長約53.7mを測る帆立貝形前方後円墳である。竪穴系横口式石室と舟形石棺が確認されている。円筒埴輪、朝顔形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪が出土した。山頂に立地する前方後円墳として、二本松山古墳（同図18）がある。全長約89mを測る。古く後円部頂から家形石棺が2基確認されている。第1号棺は、享保年間に盗掘されたものである。棺内から人骨、朱、甲冑、翡翠勾玉が出土したとされている。また、第2号棺は、明治39年（1906）に高橋健自氏により発掘調査が行われ、棺内から金銅製冠、銀銅製冠、仿製四獣鏡、碧玉製管玉、眉庇付冑、三角板鋌留短甲が出土している。5世紀末に築造されたと考えられている。

永平寺町古墳群は、九頭竜川に注ぐ永平寺川右岸の丘陵上及び丘陵裾に立地する。弥生時代から古墳時代前期に属する袖高林古墳群と、古墳時代後期に属する東諏訪間古墳群（同図19）で構成されている。東諏訪間古墳群の1号墳は直径約15mを測る円墳で、無袖型横穴式石室を持つ。また、2号墳は墳丘がすでに消滅しているものの、直径約16.8mを測る円墳で、両袖型横穴式石室を持つ。耳環、刀子、須恵器が出土し、遺物から6世紀末から7世紀前葉に位置づけられる。

東古市周辺の主要な窯として、大畑古窯跡群（同図20）が挙げられる。古墳時代後期の須恵器が出土している。

丸岡古墳群（同図21）は、九頭竜川右岸の丘陵上にある六呂瀬山（同図22）、野中山王（同図23）、大森（同図24）、上銭瓶（同図25）の4つの支群により構成され、約130基から成る。まず、六呂瀬山1号墳（同図26）は、北陸最大の全長約140mを測る前方後円墳である。昭和53年（1978）に墳丘の一部が調査され、2段築成であることや葺石や家形埴輪、鶏形埴輪が確認されている。また、石棺片も出土している。4世紀後葉に築造されたと考えられている。六呂瀬山1号墳の西方には、六呂瀬山3号墳（同図27）があり、全長約90mを測る前方後円墳である。4世紀末葉から5世紀初頭に築造されたと考えられている。このほか、九頭竜川の自然堤防上に築営された古墳として、御野山古墳（同図28）がある。4世紀中葉と考えられる割竹形石棺が確認され、「牛ヶ島石棺」とも呼称されている。墳丘は、消滅し

ている。

集落遺跡として、永平寺町葵遺跡（同図29）がある。古墳時代初頭を中心とする集落跡で、掘立柱建物跡10棟、柵列跡等が確認されている。弥生時代終末期の土器や土師器等が出土している。

古 代 九頭竜川左岸に諏訪間窯跡群（同図30）が位置する。昭和47年（1972）に永平寺町史編纂の一環として発掘調査が行われた。2号窯からは、7世紀後半から8世紀初頭の遺物が出土している。

志比地溝内の上位段丘上には、永平寺町堂谷窯跡群（同図31）と同町奥乙ヶ谷窯跡（同図32）が位置する。まず、堂谷窯跡群からは、窯の焚口と思われる遺構が検出された。8世紀前半の須恵器の大甕、皿などが出土している。奥乙ヶ谷窯跡からは、9世紀後半から10世紀初頭の須恵器・土師器が出土している。九頭竜川右岸に位置する永平寺町吉波神明窯跡（同図33）は、神社の背面にある水路の断面に灰原と判断される層が確認でき、9世紀後半から10世紀初頭の須恵器、土師器が出土している。また、坂井市丸岡町箱屋谷遺跡（同図34）では、8世紀代の素弁八葉蓮花文丸瓦や平瓦が出土している。平安時代の窯跡として、永平寺町堤ヶ谷窯跡（同図35）、同町京善藤谷口遺跡（同図47）、同町藤谷窯跡（同図36）、同町上吉野窯跡（同図37）がある。

中 世 永平寺町の九頭竜川左岸周辺には、最勝光院領である志比荘が所在する。最勝光院は、承安3年（1173）に女御（後宮）であった建春門院平滋子の御願により、後白河天皇が建立した寺である。越前を代表する中世寺院として、曹洞宗大本山永平寺（同図38）がある。志比荘の地頭で六波羅評定衆の波多野義重や日本達磨宗の越前波著寺の懐鑑の勧誘もあって、道元禅師が寛元元年（1243）、「吉峰寺」（同図39）に修行道場をひらいた。同2年（1244）に吉峰寺の西方にある吉祥山（大仏寺山）の山腹に「大仏寺」（同図40）を建立し、同4年（1246）には寺号を「永平寺」と改名する。その後、住持三世徹通義介の頃に現在の永平寺に移転したと推定されている。創建当時の所在地は「大仏寺旧址」として現在に伝わる。15世紀後半には応仁の乱が勃発し、一乗谷を拠点とする初代朝倉英林孝景が越前国を統率し、波多野氏は傘下となった。また、四代孝景は、永平寺の門前に地藏菩薩や聖観音菩薩などの線刻磨崖仏9体（同図41）を安置した。

波多野氏に関する遺跡として、永平寺町波多野城跡（同図42）がある。南北朝期に築城され、拠点を置いた。付近には、同町三重山城跡（同図43）や、土塁の一部が残る同町波多野氏館跡（同図44）が位置する。

志比地溝内には、越前における浄土真宗屈指の興行寺が所在する。応永13年（1406）に本願寺五世綽如の三男玄真（周覚）を開基とし、志比庄内下郷大谷（永平寺町諏訪間）に「華蔵閣（諏訪間興行寺）」（同図45）を創建した。寺伝によると、同18年（1411）には荒川門徒の要請により、志比庄上郷荒川の興行寺（荒川興行寺）（同図46）に移転した。永正3年（1506）に起こった一向一揆で朝倉氏に敗北するまでの約100年間営まれた。永禄5年（1562）に足利義昭の仲介により朝倉氏と和解し、越前に戻った興行寺は、元の寺跡から少し離れた藤巻集落内に再興した。旧地は「御坊屋敷（元屋敷）」と呼称され、「興行寺址」として現在に伝わる。

諏訪間興行寺遺跡の南方には、永平寺町京善藤谷口遺跡（同図47）が位置する。9世紀を主体とする遺跡であるが、白磁や越前甕、土師質土器も出土している。「京善」に関する文書として、明応4年（1495）の「永平寺 諸塔頭靈供田目録」や、天文14年（1545）の「志比庄下郷内闕所拾貫文分作職坪付文」（永平寺文書）があり、「慶禅名（きょうぜんみょう）」、「京善村」の文字が見てとれる。（北野）

引用・参考文献

- 赤澤徳明ほか 2003 『京善藤谷口遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第69集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 天井康昭 1994 『金合丸・成仏・木原町遺跡』 永平寺町埋蔵文化財調査報告書第4集 永平寺町教育委員会
- 印牧邦夫ほか 1986 『福井県の歴史』 山川出版社
- 永平寺町 1984 『永平寺町史』 通史編
- 上志比村史編集委員会 1978 『上志比村史』
- 工藤俊樹ほか 1988 『鳴鹿手島遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第15集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 窪田隆三 1987 「葵遺跡」 『昭和62年度発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 斉藤 優 1985 『足羽山の古墳』 福井考古学会
- 斉藤 優 1988 『改訂松岡古墳群』 松岡町教育委員会
- 清水孝之 2003 「諏訪間興行寺遺跡」 『第18回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 清水孝之ほか 2004 『発坂山ノ端遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第77集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 白川 綾 2000 「東古市縄手遺跡」 『第15回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 白崎昭一郎 1980 『越前若狭の古代史』 福井県郷土誌懇談会
- 鈴木篤英 2002 「三重山城跡」 『第17回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 高道正信 1993 『荒川興行寺史』 興行寺門信徒会
- 田中勝之 2005 「諏訪間興行寺遺跡」 『第20回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 月輪 泰ほか 2004 『市荒川興行寺遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第76集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 富山正明 2001 「林・藤島遺跡泉田地区」 『第16回福井県発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 富山正明ほか 2004 『林・藤島遺跡北野上地区』 福井県埋蔵文化財調査報告第80集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 中司照世ほか 1984 『泰遠寺山古墳』 松岡町埋蔵文化財調査報告書第1集 松岡町教育委員会
- 福井県 1986 『福井県史』 資料13 考古
- 福井県 1993 『福井県史』 通史I 原始・古代
- 福井県教育委員会 1993 『福井県遺跡地図 一平成4年度一』
- 松井政信 1991 「乃木山古墳」 『平成3年度発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

- 松井政信 1999 『泰遠寺山古墳Ⅱ』 松岡町埋蔵文化財調査報告書第2集 松岡町教育委員会
- 松井政信ほか 2005 『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳』 松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会
- 御嶽貞義ほか 1999 『袖高林古墳群』 福井県埋蔵文化財調査報告第46集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 山口 充ほか 1987 「東諏訪問2号墳」 『昭和62年度発掘調査報告会資料』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

第3章 I区の概要

第1節 層序 (第5図)

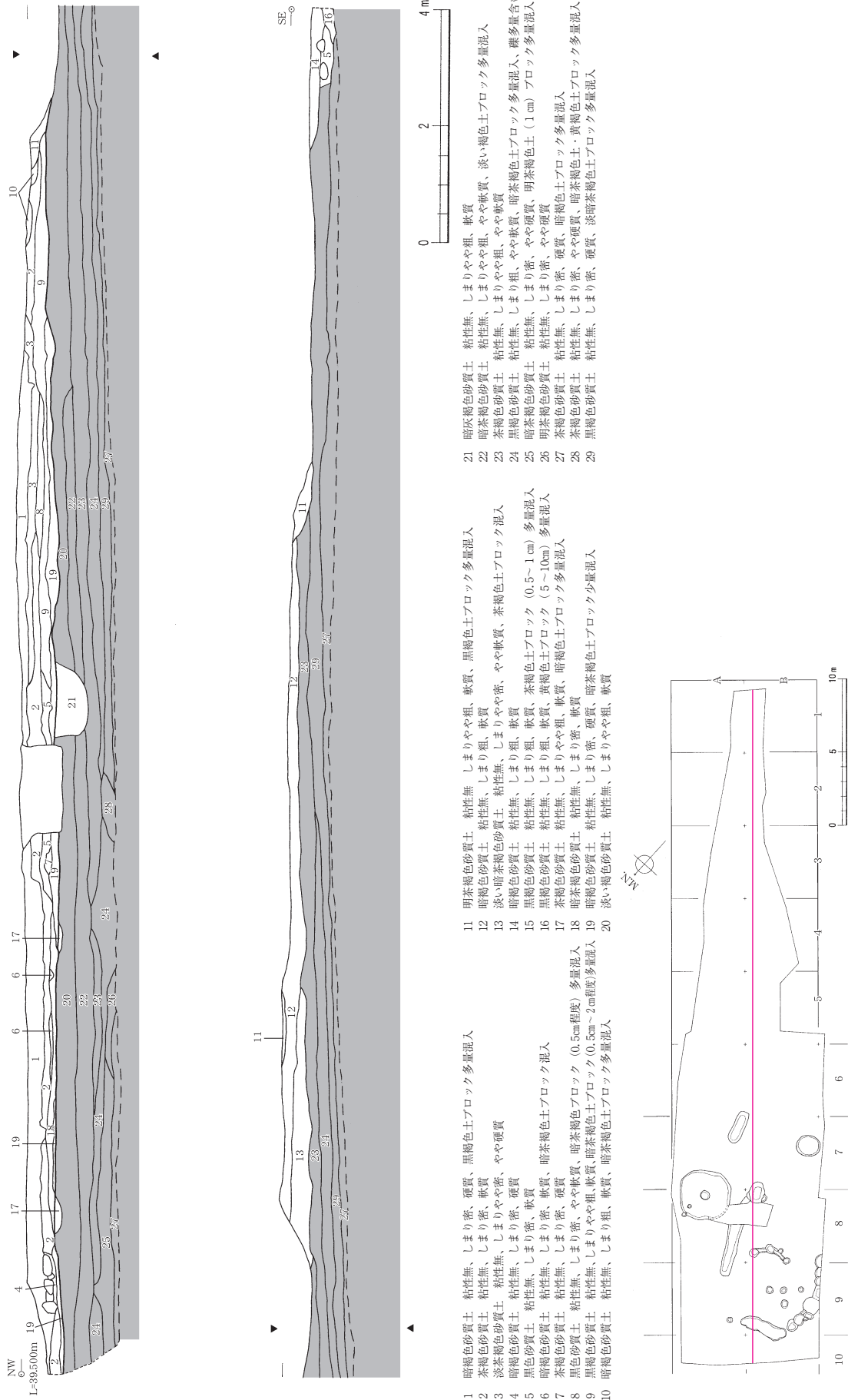
南北方向に約5～10m、東西方向に約45mの長さの調査区域を設定した。現地表面から遺構確認面に至るまでに、約0.5～0.6mの深さの堆積が認められる。いずれも砂質の層である。1層は表土、2～16層は客土、18・19層および20・24層が遺物包含層である。18・19層からは、須恵器、弥生土器・古式土師器を、20・24層からは、縄文時代晩期の土器を検出している。22～23・25～30層では遺物を認めなかった。調査区より南側は緩やかな斜面になっており、斜面上方は津室山遺跡として知られている。本調査区との関連性がうかがえる。遺構は、20層形成後に構築されており、調査にあたっては20層の上面を遺構確認面として把握した。遺構確認面は、ほぼ平坦である。

第2節 遺構分布 (第6図)

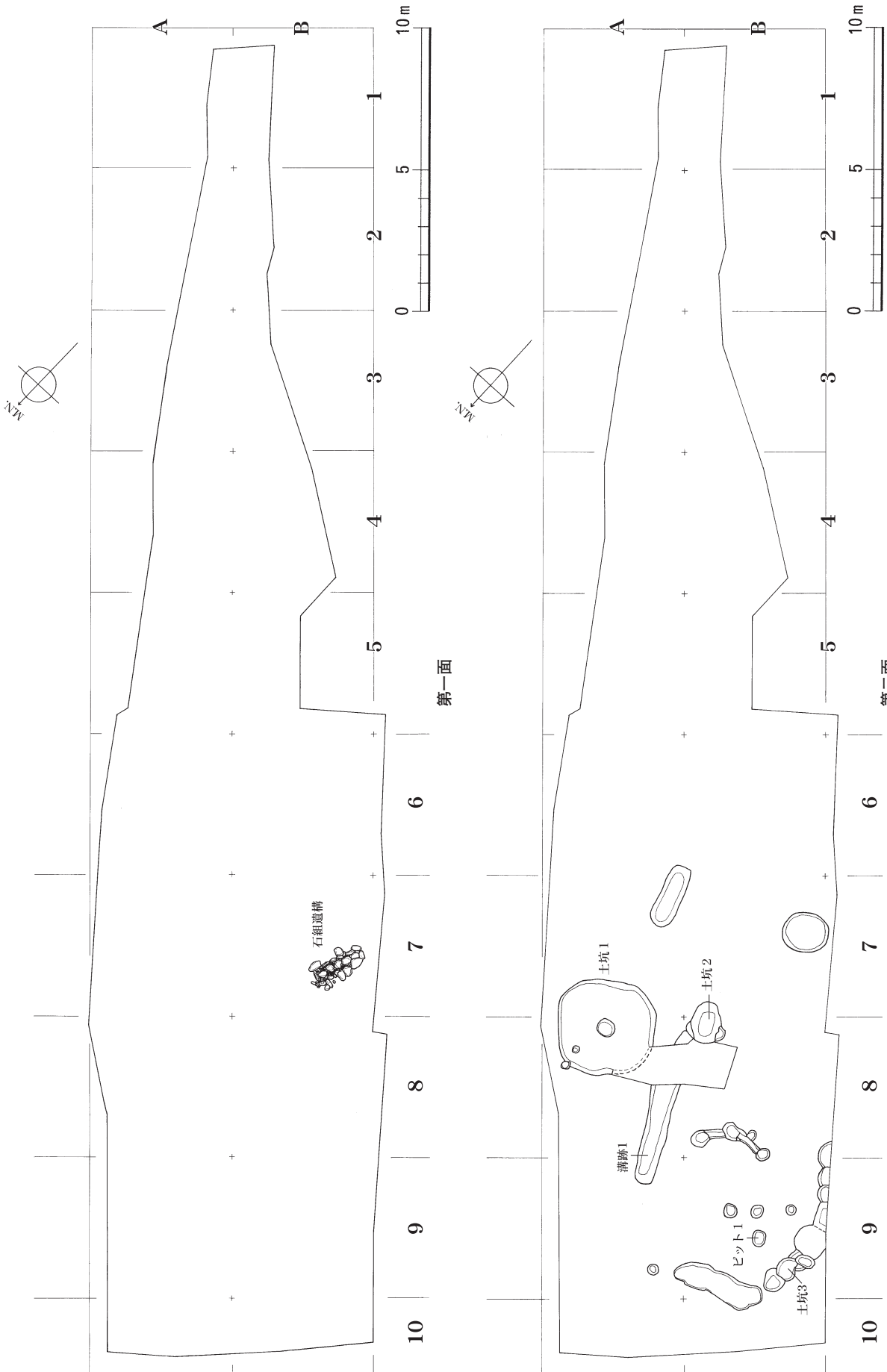
I区の調査で検出した遺構は、石組遺構1基、土坑12基、ピット12基、溝4条である。遺構を検出した面は、石組遺構が18層上面で、その他は20層上面である(第5図)。18層上面を遺構確認面第一面、20層上面を遺構確認面第二面とした。遺構は、いずれも調査区西半に集中している。

第3節 遺物出土状況

本調査区出土の遺物は、縄文土器・弥生土器を主体とし、これに若干の須恵器・土師器・石器が加わる。遺物の総量はコンテナで3箱である。遺物の出土量は調査面積に比して少なく、まとまりとして認識するにはいたっていないものの、遺物の平面分布は調査区西側に偏り、遺構の集中地区とほぼ重なる。包含層出土遺物の取り上げは、5m×5mのグリッドを設定し、区画ごとに行った。(白川)



第5図 I区 東西方向土層断面図 (縮尺1/100)



第6図 I区 遺構配置図 (縮尺1/200)

第4章 I区の遺構・遺物

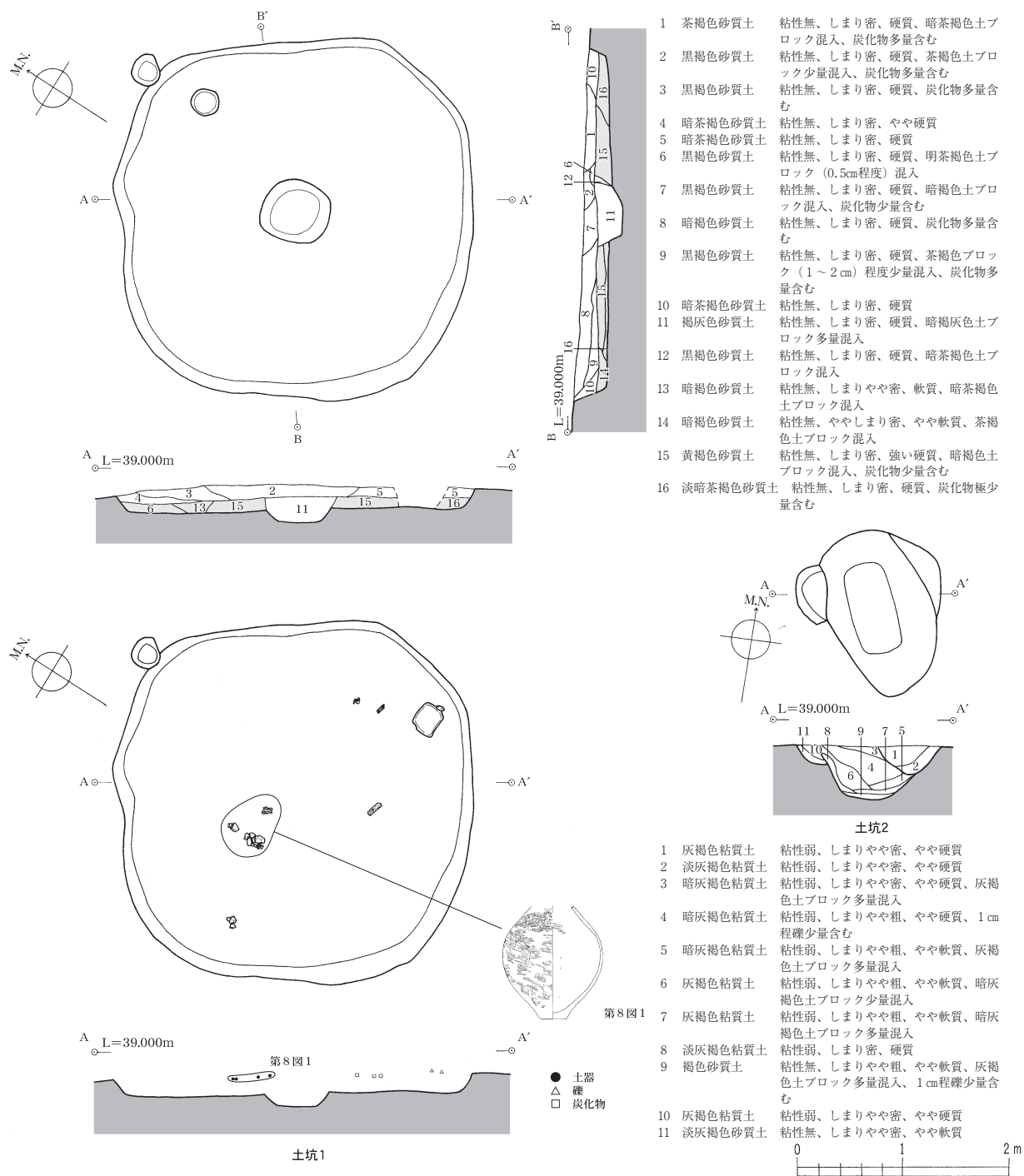
第1節 遺構と遺構出土遺物

I 土坑・ピット・溝跡

土坑12基、ピット12基、溝跡4条を検出した。遺物を検出した遺構にのみ番号を付した（第6図）。出土遺物は、大半が細片であり、図化に耐えなかった。以下、主要なもの2例の記載に留め、他の遺構の個別記載は、遺構出土遺物一覧表を付して記述に換える（第1表）。

土坑1（第7図）

遺構 調査区北西部で検出した（A-7・8区）。長軸長3.42m、短軸長3.38m、遺構確認面から床面



第7図 I区 土坑実測図（縮尺1/60）

までの深さ0.29mを測る。貼り床状に硬化した面を有する。中央で確認できる土坑は、硬化面からの掘り込みである。構築においては、時間的な差異が考慮される。遺構の性格は不明。居住には適さない規模であることから土坑の名称を用いた。なお、土坑1と土坑2で遺物の遺構間接合を確認した（第8図1）。

（白川）

遺物（第8図1） いずれも、貼り床状に硬化した面より上部で検出した。破片資料が大半であり、1点のみ図化し得た。

第8図1は弥生土器壺形土器の体部である。最大径を体部中央に持ち、外面を粗いヨコハケで整形を行う。1の大半は、土坑1からの出土であるが、土坑2から出土した細片1点と接合した。時期は弥生時代中期前半に位置づけられる。

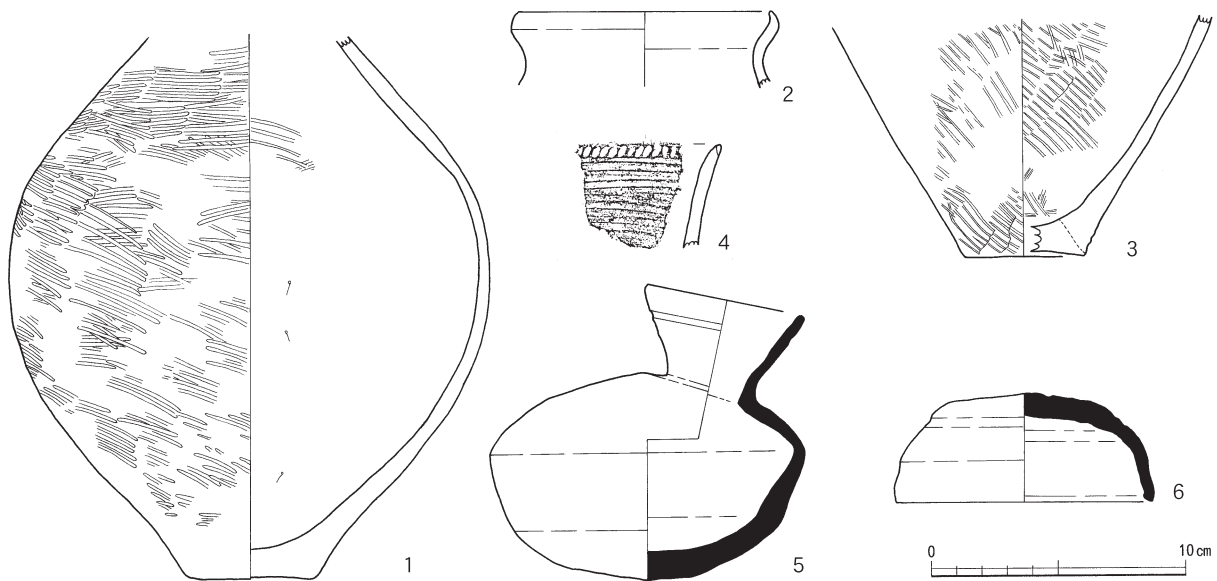
（今林）

土坑2（第7図）

遺構 調査区西部で検出した（B-7・8区）。長軸長1.59m、短軸長0.99m、遺構確認面から床面までの深さ0.5mを測る。

遺物（第8図2・3、第9図） 2は弥生土器壺形土器の口縁部、3は体部である。2は口縁部内面をヨコナデで整形を行う。外面調整は摩滅が激しく不明である。3は内外面を条痕で整形した後に、底部内面をナデで整形を行う。時期は弥生時代中期前半に位置づけられる。

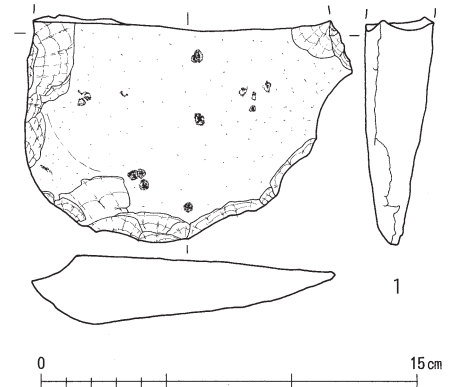
（今林）



第8図 I区 石組遺構・土坑出土土器実測図（縮尺1/3）

第9図1は、打製石斧である。刃部の破片と思われるが、調整もごく粗く、詳細は不明である。表面には自然面を多く残し、裏面には主軸に対して、側方からの大きな剥離面が観察できる。石材は安山岩である。

（中森）



第9図 I区 土坑出土打製石斧実測図（縮尺1/3）

第1表 I区 遺構出土遺物一覧表

遺構名	検出地区	出土遺物	備考
石組遺構	B 7	須恵器	第8図5・6
土坑1	A 7・A 8	弥生土器	第8図1
土坑2	B 7・B 8	弥生土器・石器	第8図2・3、第9図
土坑3	B 9	弥生土器	細片
ピット1	B 9	弥生土器	第8図4
溝跡1	A 8・A 9	弥生土器	細片

第2表 I区 遺構出土土器観察一覧表

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第8図1	弥生土器 壺	土坑1	(底)5.2	やや良	石英多・長石少	(内)灰橙色 (外)橙色	条痕	条痕・ハケ・ナデ	(口)3/4	外面に黒斑有
2	弥生土器 甕	土坑2	(口)9.9	やや不良	石英少・長石少・チャート極少	(口)淡灰色 (頸・体)橙色 (外)淡橙色	(口)ヨコナデ	摩滅	(口)1/6	
3	弥生土器 底部	土坑2	(底)4.8	やや不良	石英多 チャート極少	淡明黄色	(底)指頭圧痕→ナデ (体)条痕	(底)ナデ (体)条痕	(底)1/5	底に黒斑有
4	弥生土器 甕	ピット1		良	石英やや粗 雲母粗	(内)暗黄褐色 (外)淡茶褐色	(口端)刻み目 (口)ナデ	条痕	(口)1/5	外面に炭化物付着
5	須恵器 平瓶	B7 石組遺構北	(口)6.5 (高)11.5	良	密	褐灰色	回転ナデ	(底)ヘラケズリ (体)回転ナデ	(口)1/3	
6	須恵器 蓋	B7 石組遺構北	(口)10.2 (底)5.2 (高)4.3	良	密	(内)灰色 (外)褐灰色	回転ナデ・ナデ	(底)ヘラケズリ (体)回転ナデ	1/1	

II 石組遺構 (第10~12図)

遺構 調査区西部で検出した(B-8区)。この石組は、北北東-南南西を長軸とする土坑内に構築されている。石組は、側壁・敷石からなり、堅穴石槨状を呈する(第10~12図)。石組の規模は、外法で1.95m×0.5~0.6m、内法で1.7m×0.3~0.4mの長さである。側壁は、土坑底面からの残存高約0.5m、敷石からの残存高0.2~0.3mである。なお、この土坑は平面的に確認し得なかった。これは、土坑内壁と石組石材の隙間がほとんどなかったことに起因するものと見られ、土坑の平面形態・平面規模は、石組の外法とほぼ同等なものであったと捉えられる。

側壁は、長さ0.3~0.5m×0.15~0.35m、厚さ0.1~0.25mのやや扁平な川原石を用材としており、その石材の広い面を土坑内壁に沿わせて立て並べたものである。南北の両小口部分は各1石が使用されている。東西の両長側部分には各5石が使用されているが、東長側北端と西長側南端には各1石分の余地がある。これらの石は、その内側に土坑底面から0.1~0.15mの厚さで淡灰褐色粘質土を充填することで固定されている。敷石は、側壁石を固定するために充填した土の上に、側壁と同様な石5石を敷き並べたものである。その敷石材の空隙には、0.01~0.15m大の円礫を詰めて整えている。敷石は標高39.3m付近でほぼ水平に面を揃えている。

このほか、石組の周囲に石組材と同質・同大の石材が散在している(第10図)。これらの石材は、石組を構成したものが二次的に移動したものと見られる。石組の側壁は、扁平な円礫を立位で使用するものであり、複数の石を組み上げた想定することは困難である。そのため、これらの石は、側壁上に架構されていたことが考えられる。また、東西長側に認められる石の余地には、その脇に各1石の石があるため、本来は余地無く側壁が囲んでいたものと見られる。このように、本来この石組遺構は、堅穴式石槨あるいは組合式の箱形石棺のような形態であったことが窺えるが、ある時期に石を抜き取られて改変・破壊され、そのまま埋没したものと捉えられる。墳丘・標示物などの有無は不明である。

遺物は、石組内部に堆積した灰褐色粘質土層中や、石組構築過程で充填した淡灰褐色粘質土層中などから出土している(第11・12図)。出土遺物は、条痕の認められる土器小片と越前焼と見られる陶器片、須恵器平瓶(第8図5)・坏蓋(同図6)である。条痕の認められる土器小片は、内部の堆積土中から2片、敷石下の充填土中から5片が出土したが、いずれも細片であり図化し得なかった。これらは、その出土状況から石組遺構を構築した土壌に含まれていたものと見られ、この遺構に伴う遺物ではない。陶器片は、内部の堆積土中から出土した7cm大の破片1片であるが、甕などの大型器種の体部片であり図化し得なかった。これは敷石上面から約0.1m浮いた状態であり、また復元される甕の大きさは石組内に収まるとは考えられないため、後に外部から流入したものと捉えられる。2点の須恵器は、石組を構築した土坑の北東角付近から出土したが、土坑の外側となる位置である(第12図)。そして、埋設し

た痕跡は確認されていないため、2点の須恵器についても、石組遺構を構築した土壌に含まれていたものと捉えられる。これらの出土状況から、石組遺構の内外から遺物を検出したものの、遺構に直接伴う遺物はないと言える。

構築時期は、直接伴う遺物がないため、特定し得ない。しかし、出土した須恵器が、遺構構築時にその掘りかた内に埋め込まれたものであるという可能性も考えられる。遺構の性格は、人骨が確認されていないため、断定することはできないが、石組の形態から埋葬遺構¹⁾であった可能性が考えられる。(御嶽)

註

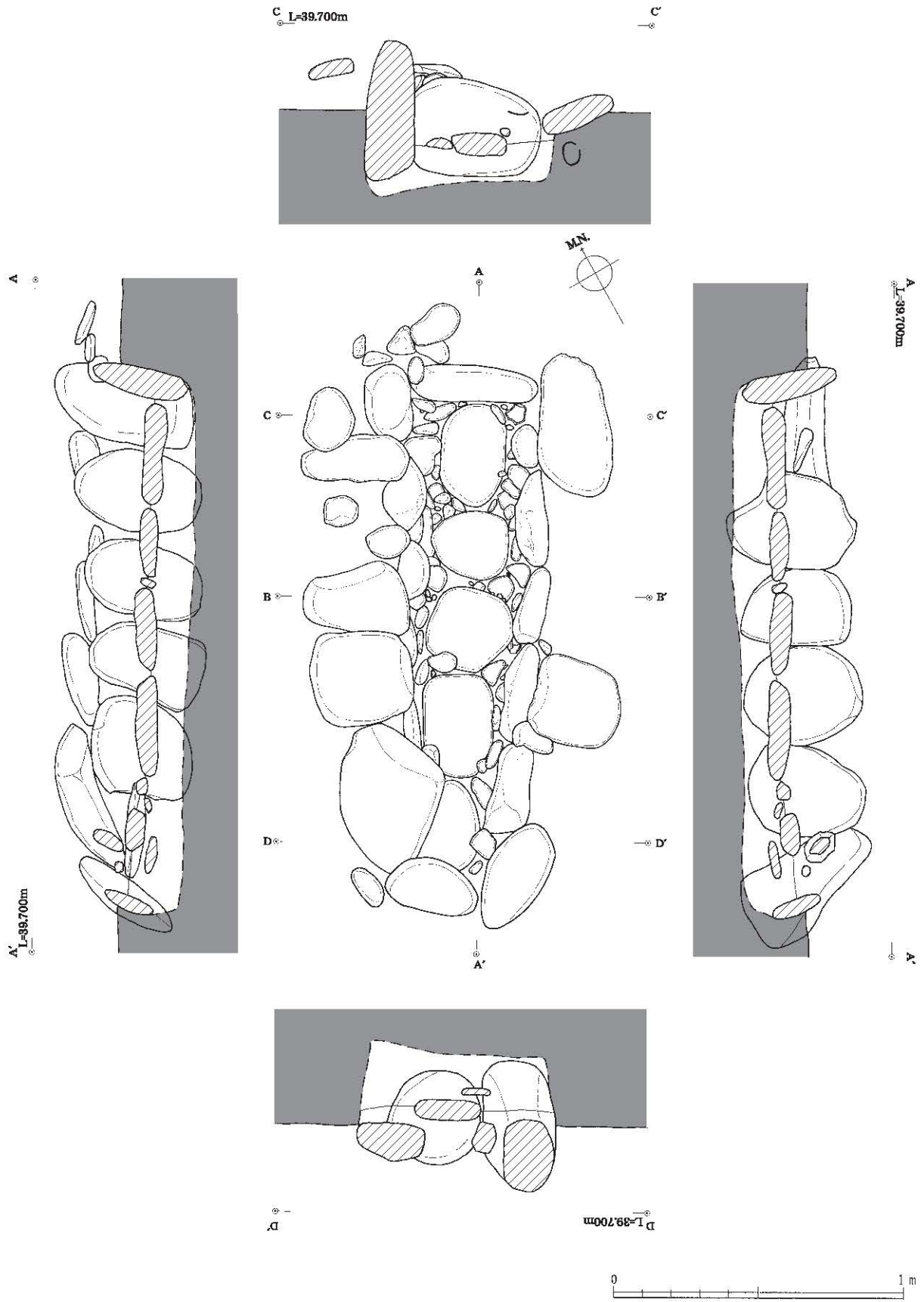
1) この石組遺構を埋葬遺構と判断した場合、土葬、あるいは土葬骨を選択的に採集し再埋葬したこと、蔵骨器等に納めた火葬骨を安置したことが考えられる。石組内からは木棺材や鉄釘等が検出されなかったため、木棺や木櫃のようなものは安置されなかったものと見られる。

土葬であった場合、石組を棺と見立てたものと言える。人骨は遺存しなかったが、石組=石棺は北側の小口部分の幅が南側よりも広いことから、被葬者が伸展葬の場合の埋葬頭位は北を指すものであった可能性が考えられる。また、石組の内法寸法の幅・高さが伸展葬にて一般成人を埋葬するには十分ではないため、被葬者は未成人や小柄な女性であったことが考えられる。再葬の場合、採集した骨を積み上げるように纏めたり、容器に納めたりして、再び埋葬するものである。採集した骨を人体状に配置して再埋葬することがあったとしても、ごく稀なことと考える。石棺状を呈する長方形の石組を構築する必要性がないことから、石組は当初の埋葬時の施設（石棺）であることが考えられ、当初の埋葬と同じ場所に再葬されたこととなる。

火葬骨を安置する場合、何らかの容器に納めることが考えられる。有機質の袋状の容器に火葬骨を納めると、遺存しやすい火葬骨片のみが散乱した状態で検出されることとなるが、この遺構ではそれは認められない。このことは、火葬骨は腐朽しない陶器等の蔵骨器に納められたことを示す。そして、石組内法寸法が十分でないことや、石組内部から出土した遺物が外部から流入したと見られる甕などの大型器種の体部片1片のみであること、骨片が確認されないこと、石組材が抜かれたり移動されたりしていること等の状況から、石組の改変時に蔵骨器に使用された小型の容器が無傷のまま持ち去られた可能性を考えることができる。ただし、小さな蔵骨器を納めるためには、石組内法寸法の幅・高さについては適当であろうが、長さについては1.7mと長い。再葬の場合と同じく、石棺状を呈する長方形の石組を構築する必要性はないものとする。

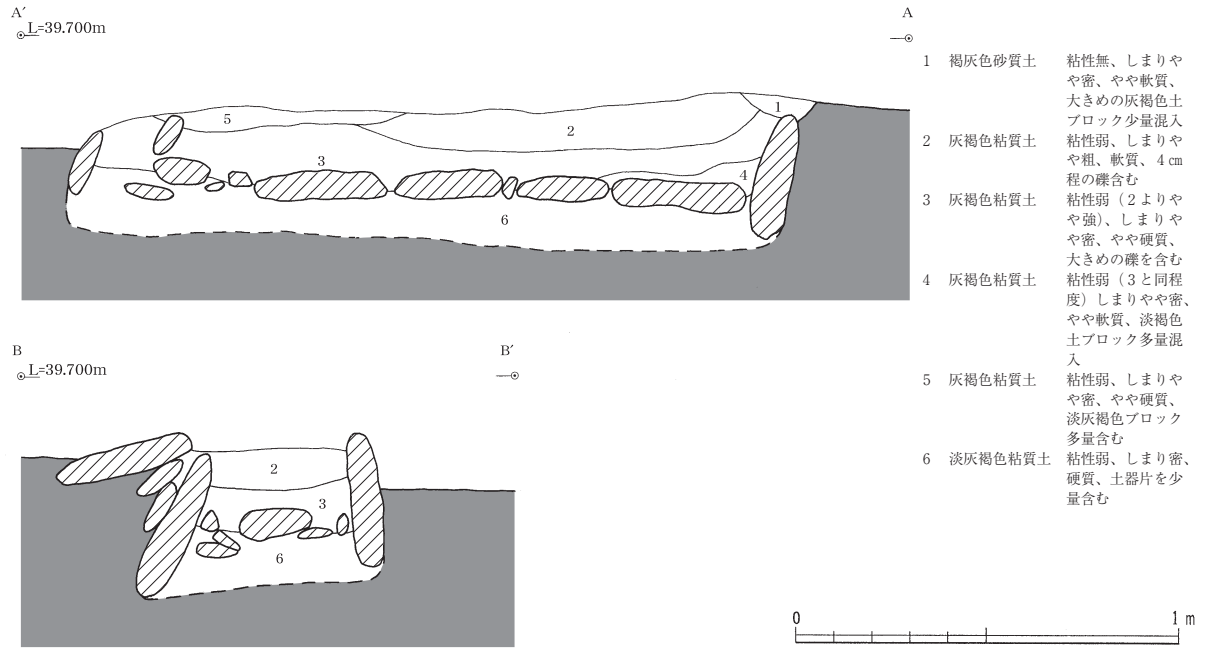
このように見ると、その形態・規模などから石組は組合式の箱形石棺として捉えることが妥当であり、被葬者は土葬であった可能性の高いものとする。

遺物（第8図5・6） 5・6は須恵器である。5は平瓶である。表面には自然釉が残る。6は蓋である。回転ナデで整形を行っている。これらは、TK217型式の新段階併行期に位置づけられる。(今林)

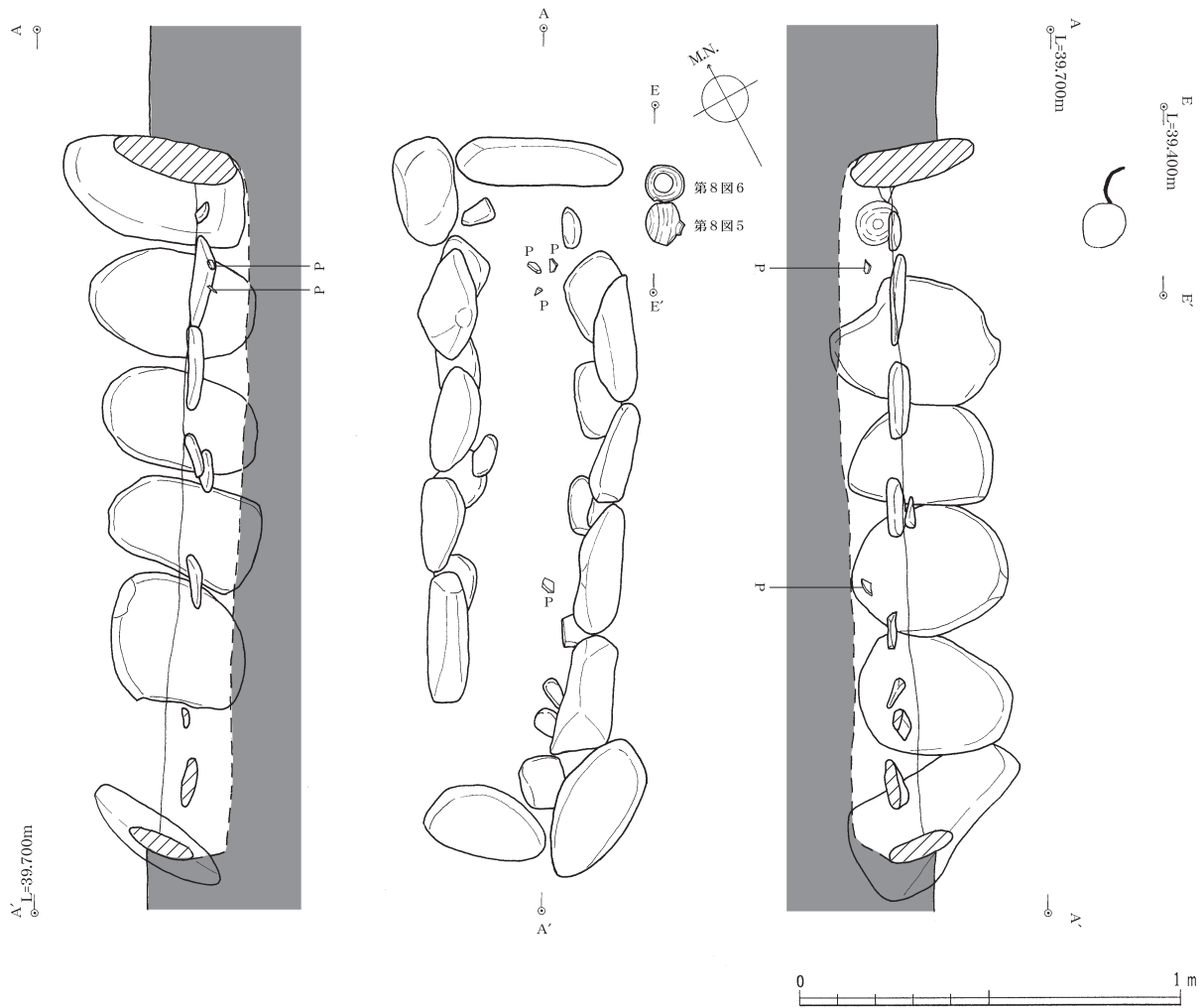


第10図 I区 石組遺構実測図(1) (縮尺1/20)

第1節 遺構と遺構出土遺物



第11図 I区 石組遺構土層断面図（縮尺1/20）



第12図 I区 石組遺構実測図（2）（縮尺1/20）

第2節 包含層出土遺物

I 縄文土器（第13図1～8）

1・2を除き、いずれも小片であること、区画内の分布でも有意な集中を見られないことから、調査区付近からの流れ込みと考えられる。時期は、おおむね縄文時代晩期前葉～中葉に位置づけられよう。以下、個別に説明する。

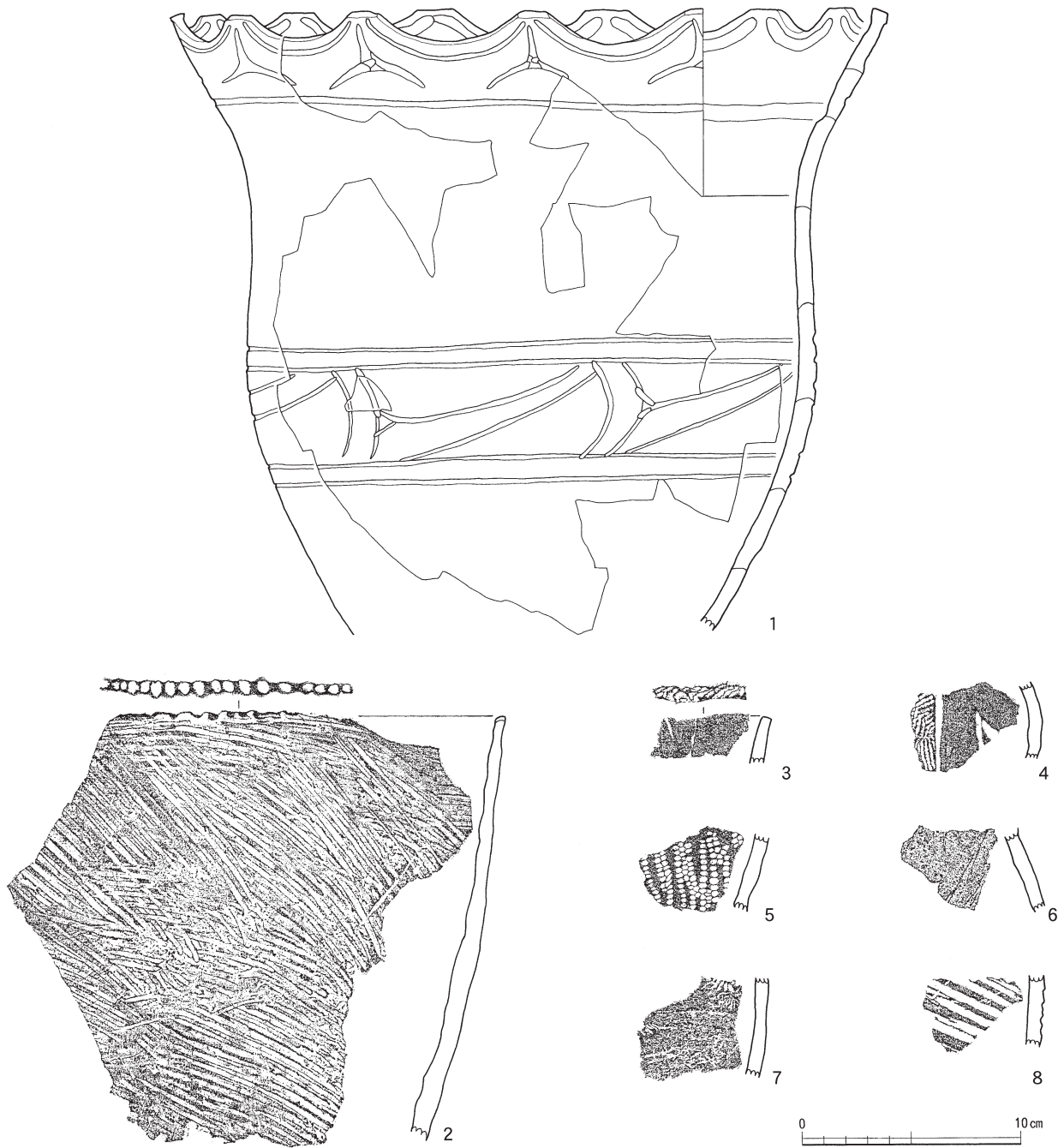
1は波状口縁で13単位の山形波頂部を持つ深鉢形土器である。口縁端部は平坦面を持つ。文様帯は口縁部文様帯と胴部文様帯の2帯構成である。口縁部は口縁形状に沿って弧線文と横走回線により区画し、波頂部下に大振りな三叉状文を配す。胴部には2条一単位の平行する横走回線で上下端区画し、内部に一辺が長い右上がりの三叉状文を7単位配す。口縁内面にも口縁形状に沿って、指ナデ状の太く浅い凹線による弧線文と、頸部内面にも横走回線を1条配す。外面は研磨する。2は粗製深鉢形土器で底部から直線的に立ち上がる器形を呈す。器面全面に二枚貝条痕を斜位に施し、口縁端部には刻みを施す。内面はナデ調整を行うが接合部の凹凸を残す。3は外反する口縁部片で端部に縄文LRを施す。内外面共に研磨する。4は沈線による区画文を配し、内部に磨消縄文RLを施す。注口土器ないし体部が強く屈曲する鉢型土器片である。5は単節斜縄文RLを施す。6は斜位に強いナデを施す。7は無文で外面の摩滅が著しい。8は斜位に太く深い条痕を施す。

編年の位置づけを述べると、いずれも北陸地方を中心に分布する諸型式群に比定できる。1～3は晩期前葉の御経塚式に、4は御経塚式もしくは中葉の中屋式に相当する。5～8は素文系土器であるが、おおむね1～4に伴うものと考えられる。 (山本)

II 弥生土器・古式土師器（第14図1～21・第15図1～19）

出土遺物の時期については、福井県における弥生時代中期の良好な一括資料が少なく、時期を明確に示すのは難しいことから、他地域の『弥生土器の様式と編年』(上村2002、兼康1990、永井・村木2002、藤田・高木2002)を参考に位置づける。比較的資料が多い後期から古墳時代にかけては、堀大介氏の編年(堀2002b)を参考に位置づける。出土遺物の大半は細片であり、明確な時期を位置づけるのは難しく、時期幅を広くとることになる。出土遺物は、客土・包含層からの出土である。詳細については観察表を掲載する(第4表)。

第14図1～21は弥生土器である。1は細頸壺形土器である。条痕により整形した後に、頸部に櫛描直線文を、口縁端部に刻み目を施す。2～13は甕形土器である。2は内外面ともにハケを行った後に条痕で整形を行う。4・6・12は口縁端部を押圧によって小さく波を立たせ、5・7～11・13は刻み目を施す。また、4は3条の櫛描直線文を口縁端部に施した後に押圧を行い、頸部には3条以上の櫛描直線文を施す。伊勢地域(上村2002)や近江地域(兼康1990)においても同様の技法が見られ、前期末や中期前葉に位置づけられている。福井市荒木遺跡では、同じ様相をもつ土器が出土しており、荒木Ⅲ式(弥生時代後期前半)に位置づけるもの(沼1986)やⅢ期新段階に位置づけるもの(赤澤1996)があることから、今後検討が必要である。ここでは、他の出土遺物や他地域との関係から中期前半に位置づける。7～13は横方向の条痕に対し、6は縦方向の条痕を行っている。14～20は弥生土器の底部である。17は条痕の単位が広い。底は、中央が若干飛び出しており、安定が悪い。17の底部は粘土塊を底として、器壁を巻き上げて成形(円板すえおき法)したのに対し、18の底部は粘土紐を輪状にし、これをベースにして体部を成形(底部輪台法)しており、底部の製作技法の違い(寺澤1986)が見てとれるが、観察した個体数が少ないことから、技法間の割合や時期による技法の違い等は出せない。19の底部には柵圧痕

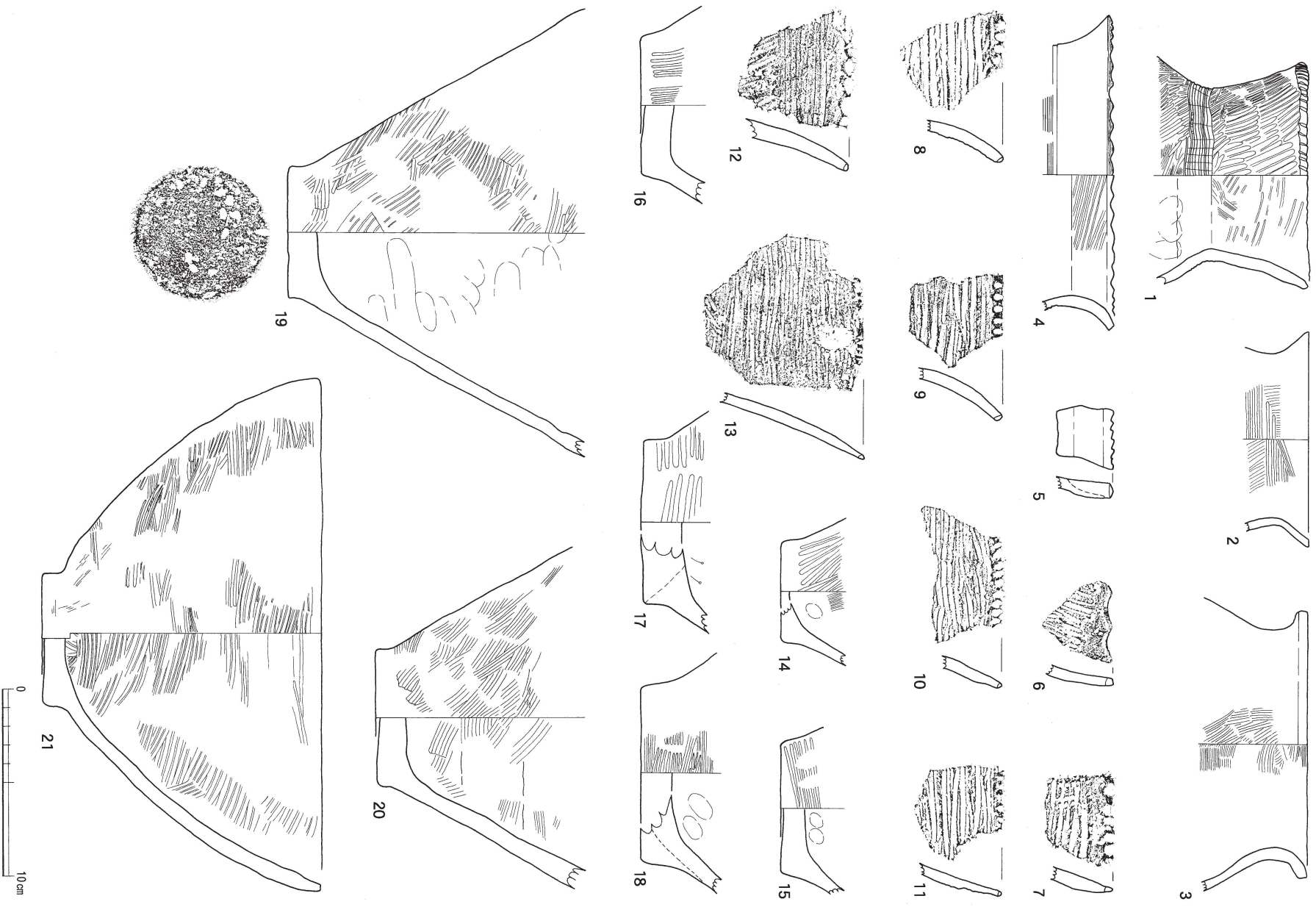


第13図 I区 包含層出土土器実測図(1) (縮尺1/3)

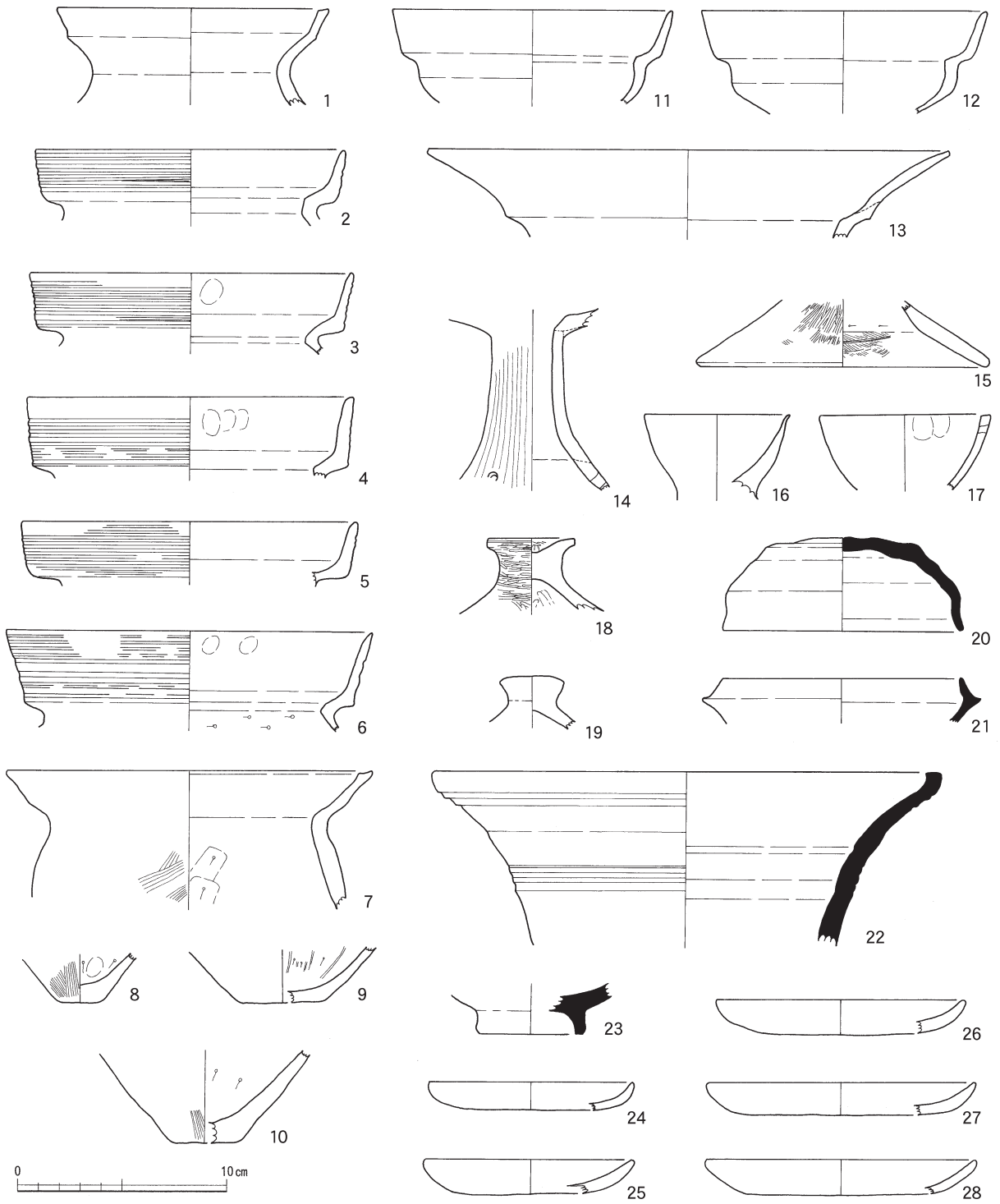
第3表 I区 縄文土器出土区一覧表

挿図No	出土地区	挿図No	出土地区	挿図No	出土地区	挿図No	出土地区
第13図1	B 7 包含層	第13図3	A 6 包含層	第13図5	B 2 包含層	第13図7	B 1 包含層
2	B 5 包含層	4	A 4 包含層	6	B 4 包含層	8	B 7 包含層

がある。体部内面中ほど全体に炭化物が付着しており、外面に火を受けた痕跡がないことから、焼成時のものとする。21は鉢形土器である。以上のように弥生土器の概要を述べたが、器種によっては時期が不明な点が多い。弥生土器は、条痕系土器であることや他地域の様相から、弥生時代中期前半に位置づける。



第14図 I区 包含層出土土器実測図(2) (縮尺1/3)



第15図 I区 包含層出土土器実測図(3) (縮尺1/3)

第15図1～19は古式土師器である。1は有段口縁を持つ壺形土器である。口縁部が緩やかに外反する。2～7は甕形土器である。2～6は有段口縁を持ち、口縁部が外半し、内面には指頭圧やナデを行う。2・3・6は頸部以下にケズリを行う。7は口縁端部内面を肥厚させ、体部内面をケズリ、外面をハケで整形していることから、畿内地域の影響を受けたものと考えられる。8～10は底部である。内面をケズリで整形し、底径が小さくなる。9は強い篋による押圧により、ケズリの単位が残る。11・12は鉢形土器である。口縁部は無文である。丁寧なミガキを内外面に行う。13は土師器高坏形土器である。口縁部が大きく外反する。14は器台の脚部である。15は裾部である。16・17は手捏土器である。整形をあまり行わず器壁が凹凸しており、作りが粗い。17は口縁部に穿孔を行う。土器が細片であることから、穿孔の数は不明である。18・19は蓋形土器である。18はミガキを全体に行い、丁寧に仕上げるが、19は摩滅が激しく調整は不明である。以上のような古式土師器の概要から、時期を位置づけたい。1・7は畿内地域の影響を受けており、布留式の中段階に併行する。その他の土器は、月影式の中段階に位置づけられる。

Ⅲ 須恵器（第15図20～22）

20～22は須恵器である。20は蓋、21は坏身、22は壺の口縁部である。21は口縁の立ち上がりが短くなり、口径が小さくなることから、時期は6世紀後葉から7世紀前葉頃に位置づけられる。

Ⅳ 陶磁器（第15図23）

23は陶磁器台付埴である。

Ⅴ 土師器皿（第15図24～28）

24～28は土師器皿である。24・26・28は、口縁端部に炭化物が付着していることから、灯明皿として使われていたと考える。時期は近世に位置づけられる。（今林）

参考文献

- 赤澤徳明 1996 「福井県地域」 『YAY!』 弥生土器を語る会
 上村安生 2002 「伊勢・伊賀地域」 『弥生土器の様式と編年』 東海編 木耳社
 兼康保明 1990 「近江地域」 『弥生土器の様式と編年』 近畿編Ⅱ 木耳社
 寺澤 薫 1986 「古式土師器の形式分類」 『矢部遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所
 永井宏幸・村木 誠 2002 「尾張地域」 『弥生土器の様式と編年』 東海編 木耳社
 沼 弘 1989 「荒木遺跡」 『福井市史 資料編1 考古』 福井市
 藤田英博・高木宏和 2002 「美濃（飛騨）地域」 『弥生土器の様式と編年』 東海編 木耳社
 堀 大介 2002 a 「越前における弥生時代後期から古墳時代前期前半の土器編年」 『甕谷』 福井県清水町教育委員会
 堀 大介 2002 b 「古墳成立期の土器編年—北陸南西部を中心に—」 『朝日山』 朝日町教育委員会
 山田邦和 1998 『須恵器生産の研究』 学生社

第2節 包含層出土遺物

第4表 I区 包含層出土土器観察一覧表

挿図No	器種	出土地区	法量 (cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第14図1	弥生土器 壺	A 7 包含層	(口)12.2	良	石英多・長石少 チャート極少	(内) 橙褐色 (外) 淡橙褐色	(口) 浅い条痕 (体) 指頭圧痕・ナデ	(口端) 刻み目(口) 条痕 (頸) 櫛描直線文 (体) 条痕・ナデ	(口)1/2	
2	弥生土器 甕	A 6 客土	(口)11.6	良	石英多 長石少	橙色	(口) ヨコナデ(頸) タテハケ→ヨコハケ	(口) ヨコナデ(頸) タテハケ→ヨコハケ	(口)1/5	
3	弥生土器 甕	A 7 包含層	(口)14.4	良	石英多 長石少	(口・頸) 赤褐色 (体) 淡橙褐色 (外) 橙褐色	ハケ	(口) ナデ・(体) ハケ	(口)1/6	外面に煤付着
4	弥生土器 甕	A 7 包含層	(口)16.2	良	石英少	暗黄褐色	条痕	(口) 直線文3条 (口端) 押圧による波状化 (頸) ハケ→直線文3条	(口)1/3	口縁部内面に黒斑有
5	弥生土器 甕	A 8 包含層	—	良	石英多 長石少	(内) 橙色 (外) 淡黄褐色	ナデ・条痕	(口端) 刻み目(口) ナデ	(口)1/5	
6	弥生土器 甕	B 3 客土	—	良	石英多 長石少	橙色	ナデ	(口端) 押圧による波状化 (口) ナデ→条痕	(口)1/5	
7	弥生土器 甕	B 7 客土	—	良	石英多 長石極少	(内) 淡明茶褐色 (外) 暗茶褐色	ナデ	(口端) 刻み目(口) 条痕	(口)1/5	外面に炭化物付着
8	弥生土器 甕	B 7 客土	—	良	石英多 チャート少	(内) 淡暗黄褐色 (外) 淡褐色	ナデ	(口端) 刻み目(口) 条痕	(口)1/5	
9	弥生土器 甕	B 5 客土	—	良	石英少・雲母少 チャート少	(内) 淡明茶褐色 (外) 淡明黄色	ナデ	(口端) 刻み目(口) 条痕	(口)1/5	
10	弥生土器 甕	B 6 客土	—	良	石英多	(内) 橙色 (外) 淡橙褐色	ケズリ	(口端) 刻み目(口) 条痕	(口)1/5	
11	弥生土器 甕	B 8 包含層	—	良	石英多・長石少 チャート極少	(内) 淡褐色 (外) 暗黄褐色	ナデ	(口端) 刻み目(口) 条痕	(口)1/5	
12	弥生土器 甕	A 7 客土	—	良	石英多・長石少 雲母少	(内) 暗橙褐色 (外) 暗茶褐色	ナデ	(口端) 押圧による波状化 (口) タテ条痕→ヨコ条痕	(口)1/5	外面に炭化物付着
13	弥生土器 甕	B 7 客土	—	良	石英多 チャート少	(内) 淡橙褐色 (外) 淡褐色	ナデ・条痕(摩滅)	(口端) 刻み目(口) 条痕	(口)1/5	内面に炭化物付着
14	弥生土器 底部	B 7 客土	(底)5.2	良	石英多 長石多	(内) 暗茶褐色 (外) 暗橙褐色	(底) 指頭圧痕 (体) ハケ	条痕	(底)1/3	
15	弥生土器 底部	B 6 客土	(底)6.8	不良	石英極多 長石多	(内) 橙色 (外) 淡暗黄褐色	指頭圧痕→ナデ	条痕→部分的にナデ	(底)1/1	
16	弥生土器 底部	B 5 客土	(底)7.2	良	石英多・角閃石多 チャート多	(内) 淡黄褐色 (外) 淡明黄色	ナデ	条痕	(底)1/3	内面に炭化物付着
17	弥生土器 底部	B 8 客土	(底)8.8	良	石英多・角閃石多 チャート少	(内) 淡明茶褐色 (外) 淡茶褐色	ケズリ	条痕	(底)1/3	
18	弥生土器 底部	A 8 包含層	(底)9.2	良	石英多・長石多 チャート極少	(内) 橙～淡褐色 (外) 淡褐色	(底) 指頭圧痕	条痕	(底)1/3	
19	弥生土器 底部	B 5 客土 B5・B9包含層	(底)7.1	やや良	石英多 長石少	(内) 淡明褐色 (外) 淡明黄色	ナデ→ハケ	ハケ・ヨコナデ	(底)1/1	内面全体に炭化物付着
20	弥生土器 底部	B 5 客土 B5・B9包含層	(底)7.0	良	石英多 長石少	淡褐色	指頭圧痕・ナデ	(体) 浅い条痕 (底) 木葉圧痕	(底)1/1	内面に炭化物付着
21	弥生土器 鉢	B 8 客土 B 8 包含層	(口)27.6 (底)7.3 (高)14.7	良	石英多 長石極少	(内) 灰褐色 (外) 淡橙褐色	条痕	ナデ→条痕	(口)1/6 (底)1/1	外面口縁部付近炭化物付着・底部に黒斑有
第15図1	土師器 有段口縁壺	B 6 客土	(口)13.0	良	石英多・長石少 雲母少	(内) 暗橙褐色 (外) 橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	(口)1/5	
2	土師器 有段口縁甕	B 8 客土	(口)14.8	良	石英多 長石少	(内) 橙色 (外) 淡褐色	(口) ナデ(頸) ケズリ	(口) 擬凹線7条→ナデ	(口)1/5	
3	土師器 有段口縁甕	A 7 包含層	(口)15.4	良	石英多・長石少 チャート極少	(内) 淡暗茶褐色 (外) 淡明黄褐色	(口) 指頭圧痕 (頸) ケズリ	(頸) 擬凹線8条	(口)1/5	
4	土師器 有段口縁甕	B 9 客土	(口)15.6	良	石英多 長石少	橙色	指頭圧痕→ナデ	(口) 擬凹線7条→ナデ	(口)1/5	
5	土師器 有段口縁甕	A 8 包含層	(口)16.0	不良	石英多・長石少 雲母極少	(内) 淡明黄色 (外) 淡明褐色	不明	(口) 擬凹線9条	(口)1/5	
6	土師器 有段口縁甕	B 8 客土	(口)17.6	やや不良	石英多・長石少 チャート極少	淡褐色	(口) 指頭圧痕→ナデ (頸) ケズリ	(口) 擬凹線→ナデ	(口)1/5	
7	土師器 甕	A 5 客土	(口)17.6	良	石英多 長石極少	(内) 明橙褐色 (外) 淡明茶褐色	(口) ヨコナデ (頸) ケズリ	(口) ヨコナデ (頸) ヨコナデ(体) ハケ	(口)1/5	
8	土師器 底部	B 8 客土	(底)1.8	良	石英多 長石少	(内) 橙褐色 (外) 淡明茶褐色	指頭圧痕→ケズリ	(底) 部分的にハケ (体) ハケ	(底)1/3	
9	土師器 底部	A 5 客土	(底)3.6	良	石英多 雲母少	(内) 淡茶褐色 (外) 淡暗黄褐色	ケズリ	ハケ?	(底)1/5	
10	土師器 底部	B 7 客土	(底)3.0	良	石英多	淡明褐色	ケズリ	ハケ	(底)1/5	
11	土師器 鉢	A 5 客土	(口)13.4	良	石英極少 雲母極少	暗黄褐色	ヨコミガキ	ヨコミガキ	(口)1/5	摩滅の為ミガキの単位不明瞭

第4章 I区の遺構・遺物

挿図No	器種	出土地区	法量 (cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第15図12	土師器 鉢	A 5 客土	(口)13.6	良	石英少	明橙色	ヨコミガキ	ヨコミガキ	(口)1/5	摩滅の為ミガキの単位不明瞭
13	土師器 器台	表採	(口)25.0	良	石英少・長石少 チャート極少	淡明黄褐色	ミガキ	ミガキ	(口)1/5	摩滅の為ミガキの単位不明瞭
14	器台脚部	B 5 包含層	—	良	石英少	淡橙色	ナデ	ミガキ→3方向に穿孔	(脚)1/2	
15	椀部	B 8 包含層	(底)14.1	やや良	石英多 チャート極少	淡明黄色	ケズリ・ハケ・ナデ	縦方向ハケ→ナデ	(底)1/8	
16	手握土器	A 7 客土	(口)7.0	良	石英少	(内)暗橙褐色 (外)暗茶褐色	ナデ	ナデ	(口)1/3	
17	手握土器	A 7 包含層溝	(口)8.2	良	石英少	(内)淡茶褐色 (外)暗橙褐色	指頭圧痕・タテナデ →(口)ヨコナデ	不明	(口)1/5	穿孔有り
18	土師器 蓋	B 5 包含層	(頂)4.25	良	長石少	(内)赤褐色 (外)赤橙～褐色	横方向ミガキ →縦方向ミガキ	(頂)沈線(体)横方向ミガキ →縦方向ミガキ	(紐)5/6	丁寧なミガキの 為単位は不明
19	土師器 蓋	B 5 客土	(頂)3.2	良	石英少	暗黄褐色	指頭圧痕・ハケ	ナデ	(頂)1/2	外面黒斑有
20	須恵器 蓋	B 8 客土	(口)11.6 (底)3.0 (高)4.5	やや良	密	(内)淡褐灰色 (外)淡灰色	回転ナデ・ナデ	(底)ヘラケズリ (体)回転ナデ	(口)1/3	口縁端部に炭化物付着
21	須恵器 坏身	B 4 客土	(口)11.4	不良	石英多	(内)淡明橙色 (外)白灰色	回転ナデ	回転ナデ	(口)1/5	
22	須恵器 壺	A 8 客土	(口)24.6	良	密・内面に 2mmの礫有	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	(口)1/4	
23	陶磁器 台付塊	B 1 包含層	(底)5.0	良	—	淡緑褐色(釉薬)	—	—	(底)1/3	全体に釉薬を施す
24	土師器 小皿	A 7 客土	(口)9.8	良	石英少 雲母少	淡橙色	ナデ	ナデ	(口)1/3	口縁端部に炭化物付着
25	土師器 小皿	B 8 客土	(口)10.0	良	石英極少	淡明橙色	ナデ	ナデ	(口)1/2	口縁端部に炭化物付着
26	土師器 小皿	B 8 客土	(口)12.0	良	雲母少	淡明橙色	ナデ	ナデ・工具痕有	(口)1/3	口縁端部に炭化物付着
27	土師器 小皿	A 7 客土	(口)12.7	良	石英極少	淡明橙色	ナデ	ナデ	(口)1/10	口縁端部に炭化物付着
28	土師器 小皿	B 7 客土	(口)13.0	良	石英極少 雲母少	淡明黄色	ナデ?	ナデ?	(口)1/3	口縁端部に炭化物付着

VI 石器 (第16・17図)

I区で包含層(表土・客土を含む)より出土した石器は、総数で22点を数える。以下、器種別に記述する。

イ 打製石斧 (第16図、第17図1・2、打製石斧観察一覧表)

総数で17点出土した。主に、九頭竜川もしくは周辺の支流の川原礫・転石を素材にしていると思われる。全体的な傾向・特徴として、以下の要素が挙げられる。

- ① 表面に自然面を大きく残し、裏面に第一剥離面と思われる側方からの剥離面を大きく残す。
- ② 刃部は素材(剥片)の鋭利な側縁辺をそのまま利用するため、調整は全体の形状を整える程度で、ごくわずかである場合が多い。
- ③ 刃部以外の形状調整、特に基部や括れ部への調整は緻密で、時に著しい潰れなども観察できる。

打製石斧は全体の形状および刃部の形状から分類した¹⁾。各類の詳細は以下のようになる。

I a 類：両側辺がほぼ平行し、直線的な刃部を有するもの

b 類：両側辺がほぼ平行し、外弯する刃部を有するもの

II a 類：両側辺が基部に向かってやや狭まり、直線的な刃部を有するもの

b 類：両側辺が基部に向かってやや狭まり、外弯する刃部を有するもの

III a 類：両側辺がやや外弯し、直線的な刃部を有するもの

b 類：両側辺がやや外弯し、外弯する刃部を有するもの

IV a類：片側辺がやや外弯し、直線的な刃部を有するもの

b類：片側辺がやや外弯し、外弯する刃部を有するもの

V a類：両側辺が基部に向かって狭まり、直線的な刃部を有するもの

b類：両側辺が基部に向かって狭まり、外弯する刃部を有するもの

c類：両側辺が基部に向かって狭まり、直線的な刃部が片側に張り出すもの

d類：両側辺がやや内弯しながら基部に向かって狭まり、外弯する刃部を有するもの

VI a類：基部側の両側辺に挟りが入り、直線的な刃部を有するもの

b類：基部側の両側辺に挟りが入り、外弯する刃部を有するもの

本資料中、分類可能であったのは12点で、I～IV類は確認できない。以下、確認できたV・VI類について記述する。

V類（第16図1・2、第17図1）

いわゆる撥形と呼称される一群である。総数で3点出土し、内訳は完形品2点（第16図1・2）、破損品1点（第17図1）を数える。いずれも表面に自然面を大きく残す。

第16図2は、左側辺は基部に向かって直線的に狭まるが、右側辺が括れており、刃部に対して基部がやや傾いているように見える。ここでは本類に含めたが、基端部の左右側辺はほぼ平行しており、本来は短冊形を意図していた可能性もある。

VI類（第16図3～9、第17図2）

いわゆる分銅形と呼称される一群で、総数で9点出土し、完形品は図示の8点（第16図4～9、第17図2）のほか、破損品は1点を数える。いずれも表面に自然面を大きく残す。

第16図4～6には、刃部の一部に摩滅や潰れが見られる。第17図2はいわゆるミニチュア品である。

ロ 磨製石斧（第17図3）

1点のみ出土している（第17図3）。刃部を欠いているものと思われ、最大長114.00mm、最大幅50.00mm、厚さ17.75mm、重さ131.6gをそれぞれ測る。石材は濃尾流紋岩である。石材の節理によるものか、ちょうど裏半分を全て欠失しているほか、表半分にもいくつか剥離面を残しているが、剥離面の輪郭が磨かれて潰れていることから、製作時の磨き残しと思われる。

ハ 磨石類（第17図4・5、I区磨石類観察一覧表）

総数で5点出土している。この類の石器は一般に磨石・凹石・敲石などと細別されるが、その機能・用途はしばしば重複することが多いため、ここでは上記の石器全てを一括して磨石類と呼称する。

磨石類について、観察した使用痕とその詳細は以下ようになる。

A 表面・裏面の敲打痕（凹穴を含む）の有無

観察可能なもの5点のうち、表裏両面に敲打痕のあるもの（◎）はなく、片面だけに敲打痕のあるもの（○）は2点、敲打痕のないもの（×）は3点である。

B 周縁の敲打痕の有無

観察可能なもの5点のうち、周縁全体に敲打痕のあるもの（◎）はなく、両端だけに敲打痕のあるもの（○）は1点、ほとんど敲打痕のないもの（×）は4点である。

C 表面・裏面の磨痕の有無

観察可能なもの5点のうち、全てが表裏両面に磨痕を残すもの（◎）である。

D 側面の面取りしたような顕著な磨痕の有無

観察可能なもの5点のうち、顕著な磨痕を残す側面が二面以上あるもの(◎)は1点、顕著な磨痕を残す側面が一面のみあるもの(○)はなく、顕著な磨痕を残す側面のないもの(×)は4点である。

以上、四種の使用痕の観察に基づき、次のように分類する(カッコ内は総数)。

I類 器面に磨痕を残すもの

I a 表裏両面または片面に磨痕を残すもの(4点)

I b 側面にのみ面取りしたような顕著な磨痕を残すもの(0点)

I c 両者をあわせ持つもの(1点)

II類 器面に磨痕を残さないもの

II a 表面・裏面の敲打痕だけを残すもの

II b 周縁部の敲打痕だけを残すもの

II c 両者をあわせ持つもの

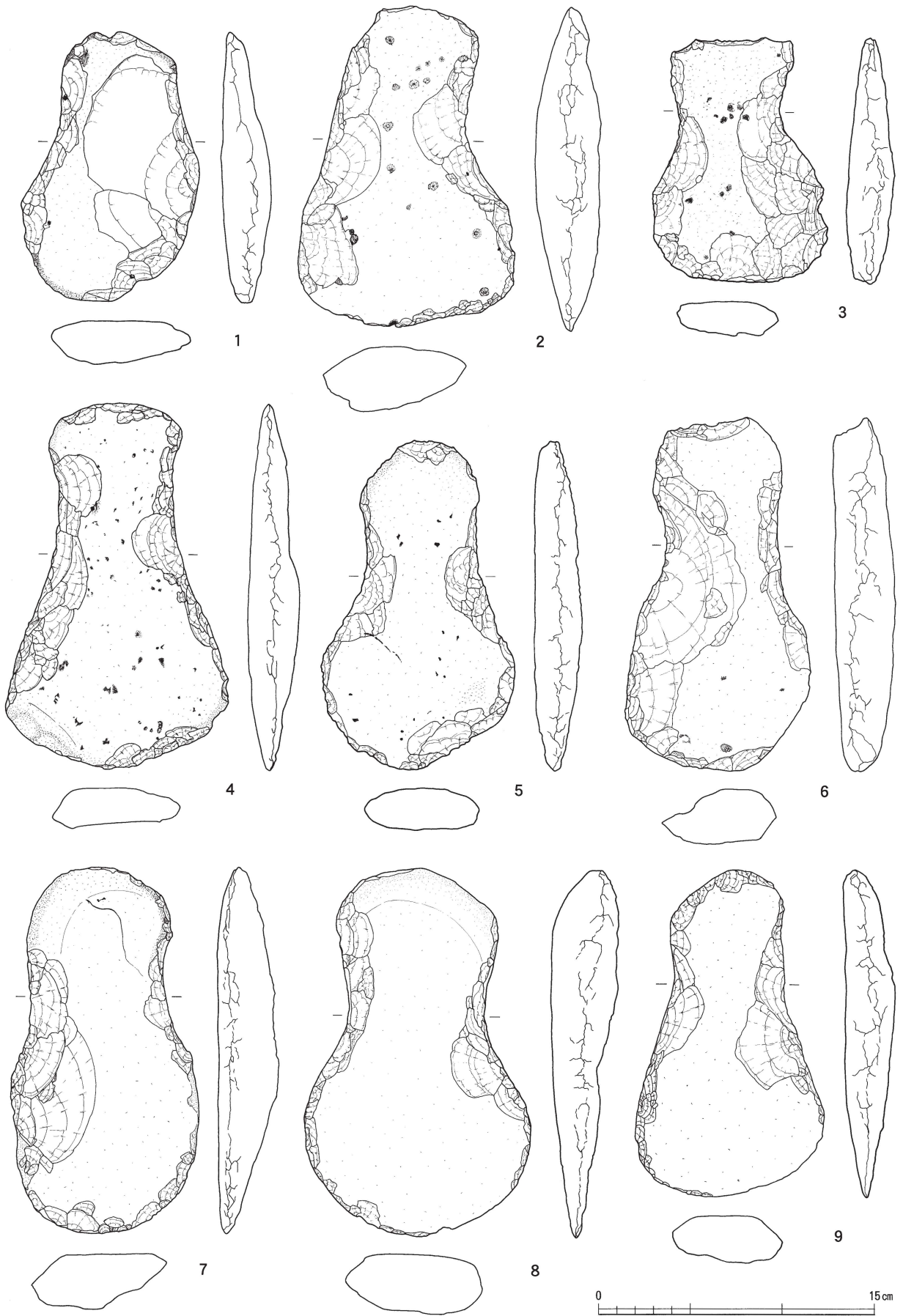
磨石類5点のうち、全てがI類、すなわち器面に磨痕を残すもので、いわゆる狭義の「磨石」である。その形状は扁平な円形・楕円形もしくは球形が大半を占める。当然ながら敲石・凹石との重複もあり得るが、各類の敲打痕観察の詳細については観察一覧表を参照されたい。(中森)

註

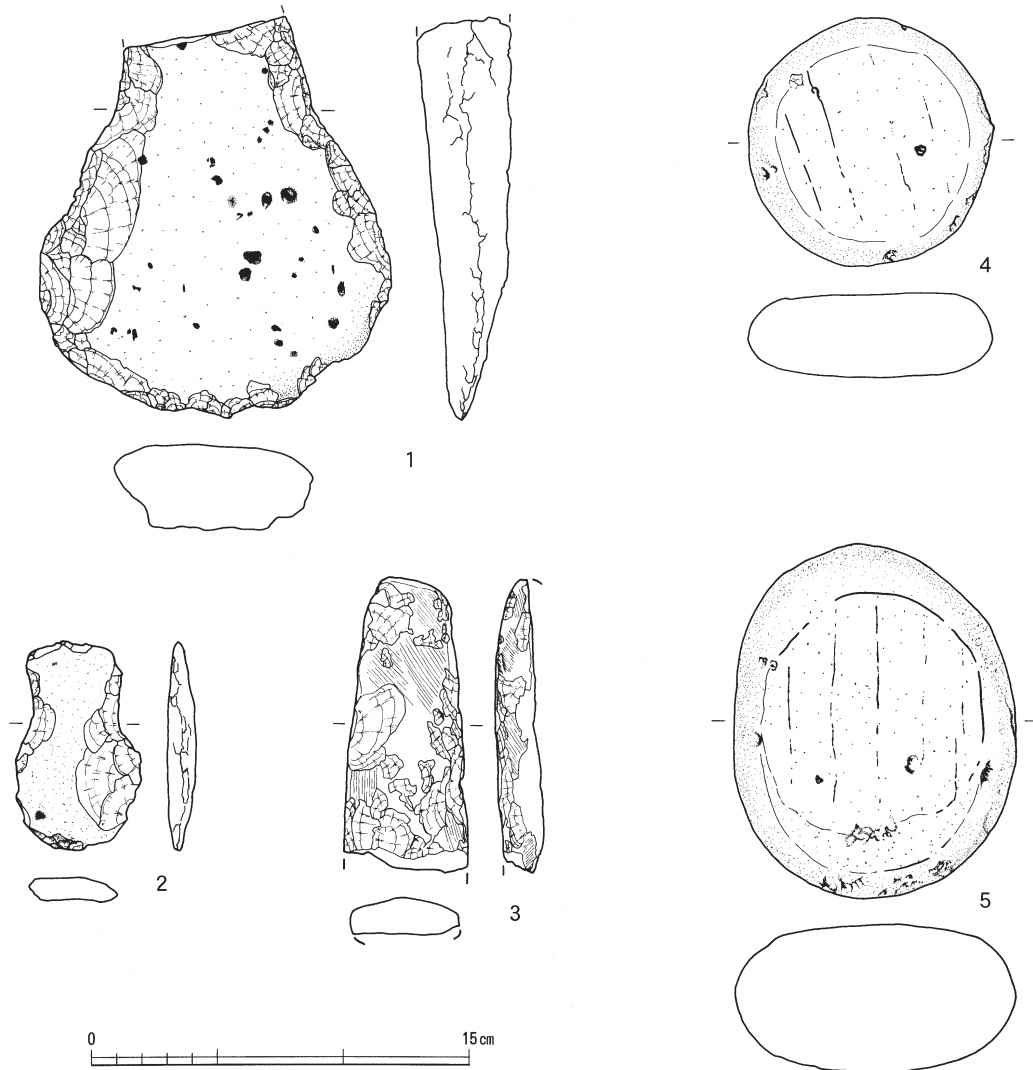
- 1) 本書における石器分類および器種別細分は、『鳴鹿手島遺跡』(富山ほか1988)、『常安王神の森遺跡』(中森ほか1997)などの案をそのまま援用している。確認できない類が存在するのはそのためである。

参考文献

- 富山正明ほか 1988 『鳴鹿手島遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第15集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 中森敏晴ほか 1997 『常安王神の森遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第35集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター



第16図 I区 包含層出土打製石斧実測図（縮尺1/3）



第17図 I区 包含層出土打製石斧・磨製石斧・磨石類実測図（縮尺1/3）

第5表 I区 包含層出土打製石斧観察一覧表

No	地区	出土	分類	遺存状態	最大長(mm)	刃部幅(mm)	基部幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考	図版 No
1		土坑2	—	刃部片	89.00	129.00	—	26.90	317.0	安山岩		第9図1
2	B1	表土	Vb	完形	147.50	93.30	61.90	27.25	387.3	安山岩		第16図1
3	A5	表土	VIb	完形	180.00	106.00	64.30	25.40	492.1	安山岩		第16図5
4	B5	包含層	Vb	基部欠	165.00	140.00	—	31.95	820.0	安山岩		第17図1
5	B5	表土	VIb	完形	201.00	123.00	72.45	27.20	556.2	安山岩		第16図4
6	B5	表土	VIb	完形	179.00	103.00	61.80	26.15	497.0	斑晶質安山岩		第16図9
7	B5	表土	VIb	完形	202.00	124.00	87.40	34.25	839.9	閃緑岩		第16図8
8	B5	表土	VIb	完形	200.00	99.00	77.75	31.85	674.7	安山岩		第16図7
9	B5	表土	VI	基部片	98.00	—	80.75	21.60	285.9	安山岩		
10	A6	包含層	—	刃部片	106.00	116.20	—	22.90	414.6	蛇紋岩	刃部潰れ	
11	A6	表探	Vc	完形	178.00	116.60	69.30	34.75	703.1	安山岩		第16図2
12	B6	表土	VIb	完形	82.25	51.00	38.55	10.00	49.1	安山岩		第17図2
13	A7	包含層	—	完形	91.55	46.70	43.25	15.60	65.2	斑晶質安山岩	剥片か	
14	B7	表土	VIa	完形	136.00	93.00	66.70	24.05	346.7	安山岩		第16図3
15	A8	包含層	—	破片	54.00	70.00	—	8.20	40.1	安山岩		
16	A8	表土	VIb	完形	194.00	101.00	70.50	32.00	680.4	安山岩		第16図6
17		表探	—	刃部片	123.00	113.70	—	34.00	432.5	安山岩		

第6表 I区 包含層出土磨石類観察一覧表

No	地区	出土遺構	分類	遺存状態	A	B	C	D	最大長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考	図版 No
1	A4	包含層	Ia	完形	×	×	◎	×	97.70	95.60	34.90	474.1	濃尾流紋岩		第17図4
2	B5	表土	Ia	完形	○	○	◎	×	75.35	71.40	50.60	403.7	安山岩		
3	B8	包含層	Ia	完形	×	×	◎	×	139.50	111.20	57.00	1300.6	石英安山岩		第17図5
4	B8	表土	Ic	破損	○	×	◎	◎	66.00	89.70	43.75	348.1	濃尾流紋岩		
5		表探	Ia	完形	×	×	◎	×	75.00	70.70	26.65	214.5	砂岩		

第5章 II区の概要

第1節 層序 (第18図)

現地表面から遺構確認面に至るまでに、約1.3~1.4mの堆積が認められる。いずれも粘質土である。遺物包含層は、地表から約0.7~1.4mの深さで確認でき、厚さは約0.4~0.5mである。南北方向に約15m、東西方向に約79mの長さの調査区域を設定した。遺跡周辺の現況は水田であり、ほぼ平坦な地形である。1層は表土、2~11層は客土、12層が遺物包含層である。13層および14層の上面を遺構確認面として捉えた。遺構確認面はほぼ平坦であるものの、南方から北方に向かい、緩い傾斜をなしている。

遺物包含層からは、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・石器・土錘を検出している。

第2節 遺構分布 (第19図)

本調査で検出した遺構は、竪穴住居跡2棟、土坑12基、ピット約390基、溝跡2条である。そのうち、遺物を検出したものについてのみ遺構番号を付している。いずれも同一確認面での検出である。遺構の分布は、調査区北側、特に北東側に偏る。調査区南側には礫が集中しており、遺構は認められない。

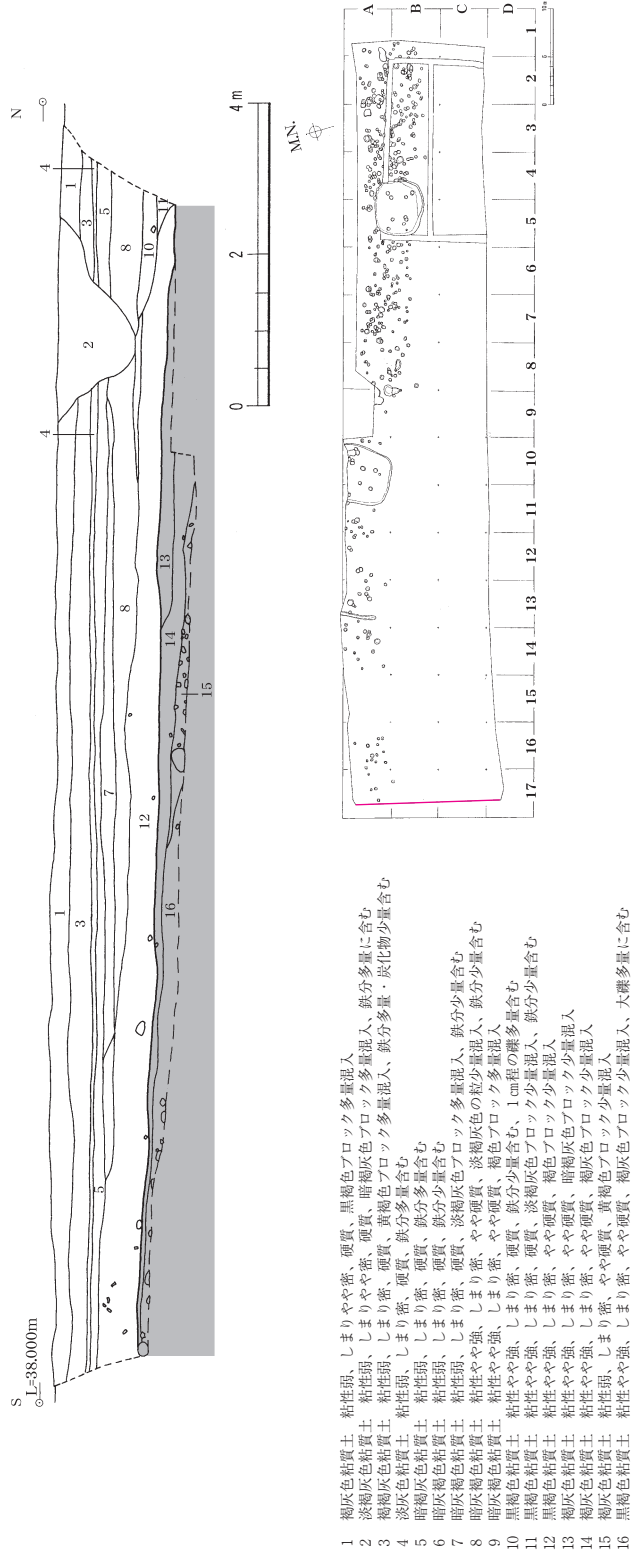
第3節 遺物出土状況

本調査区出土の遺物は弥生土器を主体とし、これに縄文土器・須恵器・土師器・陶磁器・石器・鉄器・粘土塊が加わる。遺物の総量はコンテナで27箱である。遺物包含層における遺物の平面分布は、調査区北側に偏り、遺構の集中地区とほぼ重なる。竪穴住居跡の上部にも遺物が多量に認められ、竪穴住居跡出土土器との接合関係があるため、掘りかた自体はさらに上方（少なくとも第18図の12層）に求められることが推察される。

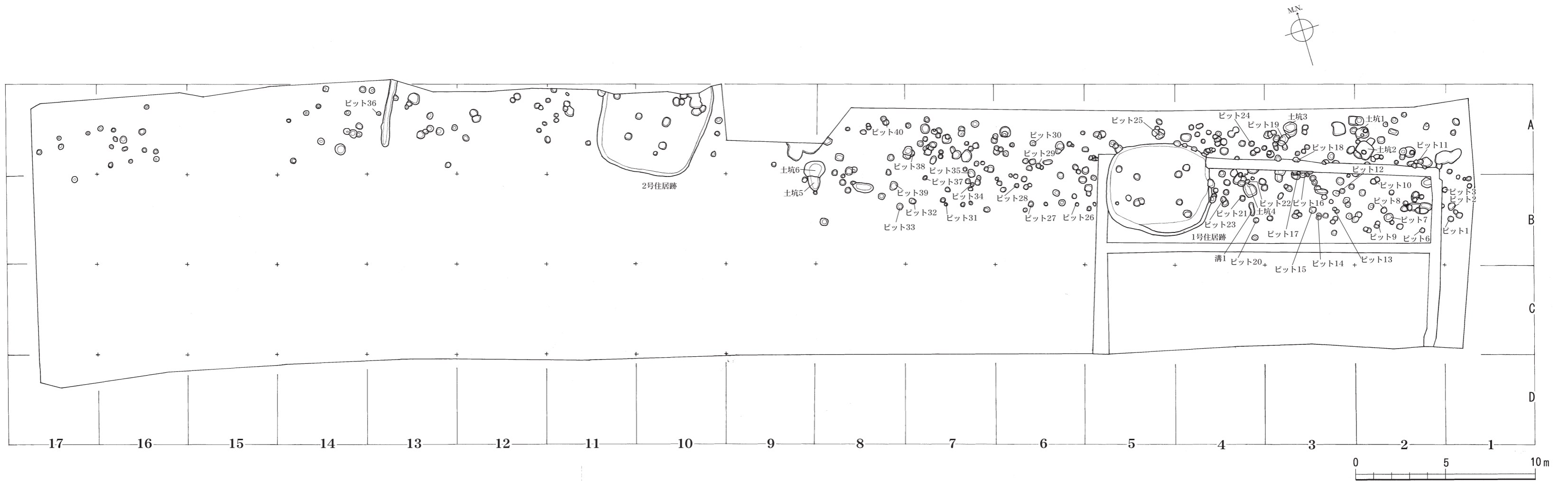
(白川)

第7表 II区 遺構出土遺物一覧表

遺構名	検出地区	出土遺物	備考	遺構名	検出地区	出土遺物	備考
1号住居跡	A4・A5・B4・B5	弥生土器・石器	第23~32図	ピット18	A 3	弥生土器	細片
2号住居跡	A10・A11・B10	弥生土器・石器・粘土塊	第35~40図	ピット19	A 3	弥生土器・須恵器	細片
土坑1	A 2	弥生土器	細片	ピット20	B 4	弥生土器	細片
土坑2	A 2	弥生土器	細片	ピット21	B 4	弥生土器	細片
土坑3	A 3	弥生土器	細片	ピット22	B 4	弥生土器	細片
土坑4	B 4	弥生土器	細片	ピット23	B 4	弥生土器	細片
土坑5	A8・A9・B8・B9	弥生土器	細片	ピット24	A 4	弥生土器	細片
土坑6	B 8・B 9	弥生土器	細片	ピット25	A 5	弥生土器	細片
ピット1	B 1	弥生土器	細片	ピット26	B 6	弥生土器	細片
ピット2	B 1	弥生土器	細片	ピット27	B 6	弥生土器・須恵器	細片
ピット3	B 1・B 2	弥生土器	細片	ピット28	B 6	弥生土器	細片
ピット4	B 2	弥生土器	細片	ピット29	A 6	弥生土器	細片
ピット5	B 2	弥生土器	細片	ピット30	A 6	弥生土器	細片
ピット6	B 2	弥生土器	細片	ピット31	B 7	弥生土器	細片
ピット7	B 2	弥生土器	細片	ピット32	B 7	中世須恵器	細片
ピット8	B 2	弥生土器	細片	ピット33	B 7	弥生土器	細片
ピット9	B 2	弥生土器	細片	ピット34	B 7	弥生土器	細片
ピット10	B 2	弥生土器	細片	ピット35	A 7・B 7	弥生土器	細片
ピット11	A 2	弥生土器	細片	ピット36	A13	弥生土器	細片
ピット12	B 3	弥生土器	細片	ピット37	B 7	弥生土器	細片
ピット13	B 3	弥生土器	細片	ピット38	A 7	弥生土器	細片
ピット14	B 3	弥生土器	細片	ピット39	B 8	弥生土器・土師皿	細片
ピット15	B 3	弥生土器	細片	ピット40	A 8	弥生土器	細片
ピット16	A 3・B 3	弥生土器	細片	溝跡1	B 4	弥生土器	細片
ピット17	A 3	弥生土器	細片				



第18図 II区 南北方向土層断面図 (縮尺1/100)



第19図 II区 遺構配置図 (縮尺1/200)

第6章 II区の遺構・遺物

第1節 遺構と遺構出土遺物

I 竪穴住居跡

2棟の竪穴住居跡を検出した。確認した順に、1号住居跡、2号住居跡としている。

(1) 1号住居跡 (第21～32図)

遺構 (第21図) 調査区北東部で検出した(A・B-4・5区)。平面プラン確認後、土層観察用あぜを十字に設定し、覆土を掘り下げた。時間的な制約から、覆土中の遺物を全点図化することを断念し、集中箇所および比較的大きい破片のみを記録化することとした。平面図で図化し得なかった遺物については、土層観察用あぜにより4分割した区画ごとに取り上げた(第20図)。

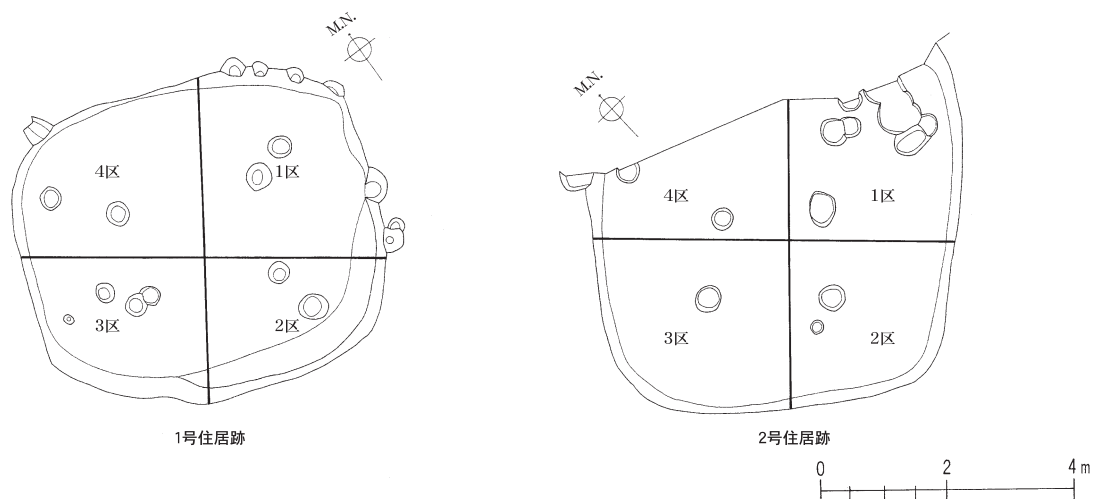
平面形態は隅丸方形を呈す。長軸長5.60m、短軸長4.90m、遺構確認面から床面までの深さ0.40mを測る。床面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ちあがる。遺構確認面より上部(包含層中)で遺物が多量に集中していたことから、本来の掘り込みはさらに高いレベルからなされたことが推察される。そのため、A・B-4・5区の包含層検出遺物の一部は、1号住居跡に帰属するものと思われる。南東部にテラス状の段をもつ。支柱穴は4本で、ピット1～4が該当する。ピットの覆土は、いずれも暗灰褐色粘質土であり、「第一次堆積土」に類似する。ただし、竪穴住居跡覆土とピット覆土を同一断面上で確認していないため、埋没の同時性は検討できない。床面で確認できる支柱穴以外のピットについても、掘り込み面を確認することができず、住居に伴うものかは確定できない。床面では遺物は確認できず、遺物の大半は「第一次堆積土」よりも上部での出土である。(白川)

遺物 (第23図～第32図) 本住居跡覆土からは、土器、石器を検出した。

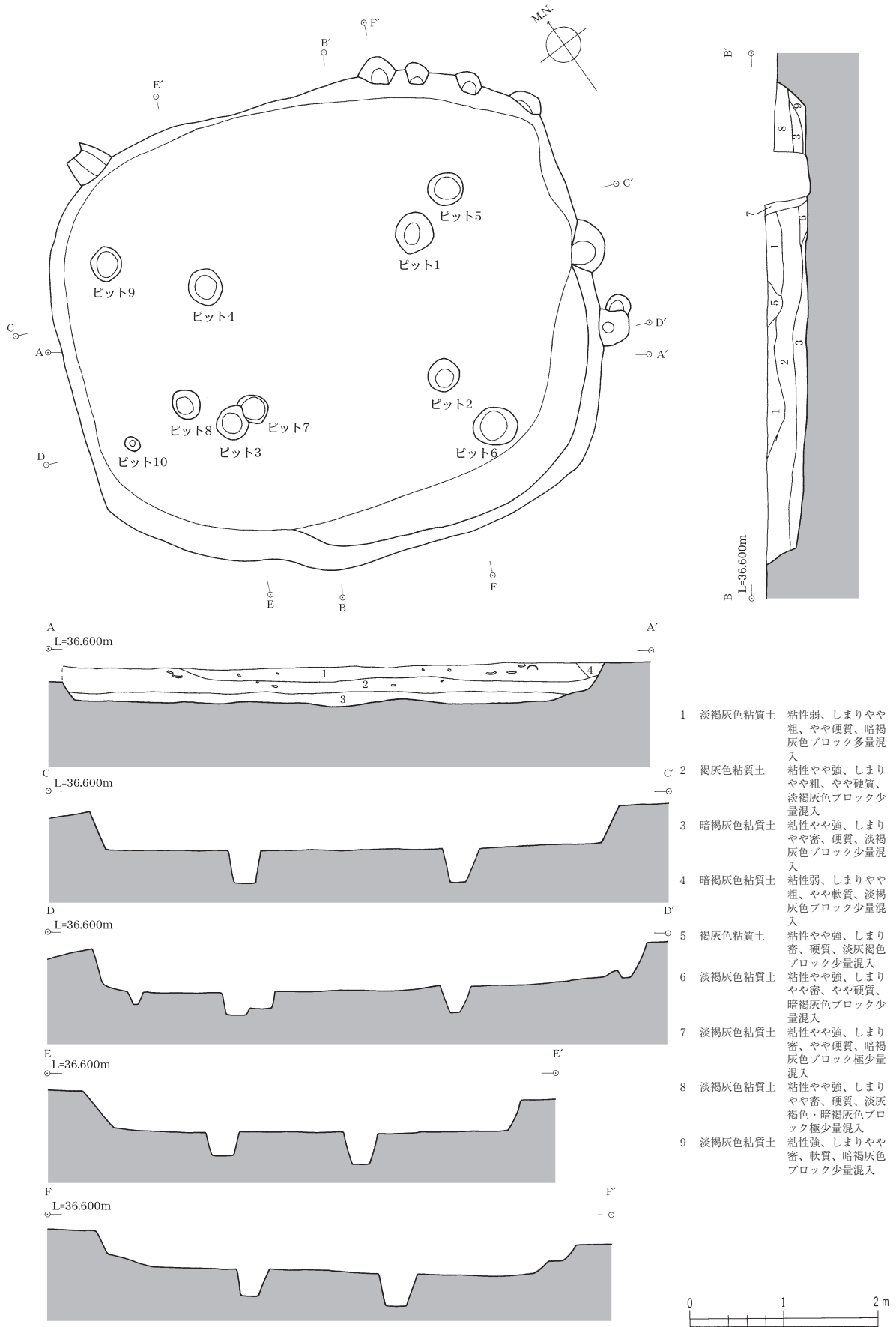
土器 (第23図～第31図)

甕形土器 (第23図～第26図)

ほとんどが口縁部外面に擬凹線を施した、有段状の口縁部をもつ甕形土器である。外面は体部に斜め方向のハケ調整を施したあと、頸部に横ナデ調整を施したものが多く、内面は口縁部に横ナデ調整を施し、半数以上に指頭圧痕が残る。頸部内面に平坦部をもつものが多く、平坦面に横ナデ調整やハケ調整を施す。なかには第25図8のようにミガキ調整を施すものや、第23図12・13のように指頭圧痕が残るものもある。体部内面は上半部に斜めまたは横方向のケズリ調整を施したあと、底部から上方向にケズリ

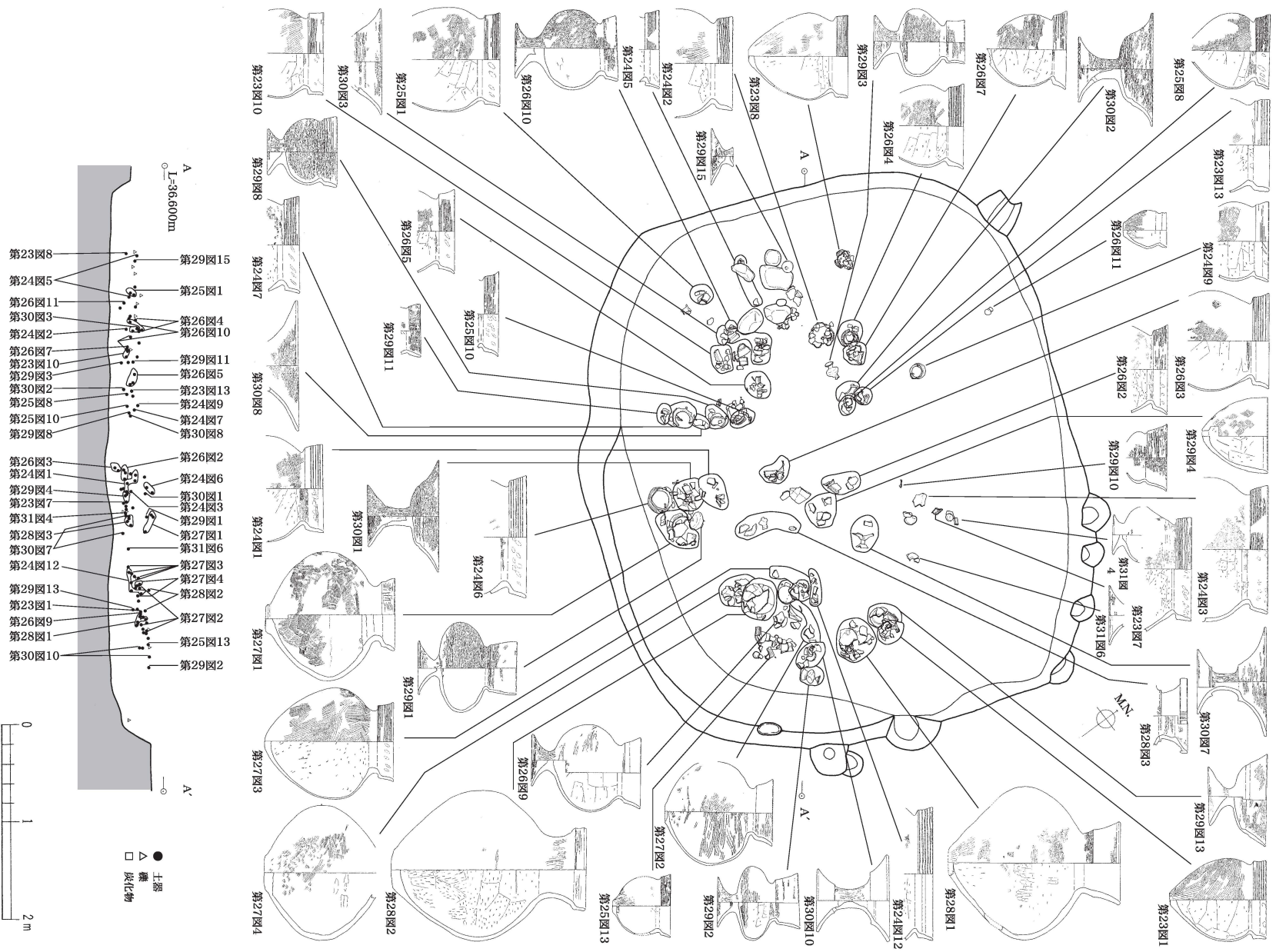


第20図 II区 竪穴住居跡区割図 (縮尺1/120)



第21図 II区 1号住居跡完掘状況実測図 (縮尺1/60)

第1節 遺構と遺構出土遺物



第22図 II区 1号住居跡遺物出土状況実測図(縮尺1/60)

調整を施す。第23図9、第26図1は体部外面上半にタタキ調整を施し、第23図13は頸部外面に櫛状工具による刺突がみられる。口縁部形態は、直立して立ち上がるもの(第23図1～13)、内弯気味に立ち上がるもの(第24図1～3)、外傾して開くもの(第24図4～14)、外反しつつ開くもの(第25図1～13、第26図1～8)がある。口縁端部の形態は丸く収めるもの(第23図1～3・5・6、第24図2、第25図4、第26図7)、平坦面をもつもの(第23図13、第24図3・6)、先細りするもの(第23図8・9、第24図4・10・14、第25図6、第26図2)、外反するもの(第23図11、第25図10、第26図5・8)がある。口縁部が直立するものや外傾するものには、口縁端部を丸く収めるものや平坦面をもつものが多く、外反するものには先細りするものが多いようである。体部最大径は中心より上に置かれ、自立不可能な平底をもつ。口縁部外面に擬凹線を施さないものは、第26図11の口縁部内外面に横ナデ調整を施した、器高9.0cmの小型品のみである。内面を底部から上方向に棒状工具でナデ上げている。第24図12・13および第26図5・6は胎土・焼成から、それぞれ同一個体と考えられる。第26図9・10は有段状の口縁部をもつ台付の甕形土器で、球状の体部をもつ。共に外面全体にミガキ調整を施し、体部内面にケズリ調整を施している。同図9は台部が中心よりずれて接合されており、焼成も甘く、同図10の精製品に比べて、粗雑な作りである。

壺形土器(第27・28図、第29図1～3)

第27図1～3、第28図1・2は有段状の口縁部をもつ壺形土器である。第27図3、第28図2は口縁部外面に擬凹線を施している。第27図3は肩部外面に篋状工具による刺突を施す。器形・調整とも甕形土器によく似たものである。同図1・2、第28図1は口縁部外面が無文で、第27図1は球状の体部に安定した平底をもち、口縁部外面に篋描きの記号文と思われる縦5条の直線が見られる。同図2は同図1と同様に球状の体部をもつが、口縁部がやや発展して長く伸び、器壁も薄い。第28図1は器高35cmを超える大型品で、内面はケズリ調整を施したのち、ミガキ調整を施す。同図2は長頸の壺形土器の系譜を引く大型品で、肩部内面に篋状工具による沈線が見られる。同図3の壺形土器は、直に立ち上がる頸部に外傾して開く口縁部を貼り付け、口縁端部に粘土帯を付加し、3本一対の棒状浮文を3箇所貼り付けた痕跡が残る。肩部にも突帯を貼り付け、その上に篋状工具によるキザミを施す。同図4・5は無頸の壺形土器である。4は短い口縁部に2個一対の円孔を2箇所穿ち、体部と口縁部の接合部にキザミを施す。5は体部外面下半全体に煤が付着している。第29図1～3は有段状の口縁部をもつ台付の壺形土器である。1・2は扁球状の体部をもち、3は下膨れの体部をもつ。1・3は丁寧なミガキ調整を施し、2は外面に赤彩を施した精製品である。

鉢形土器(第29図4～13)

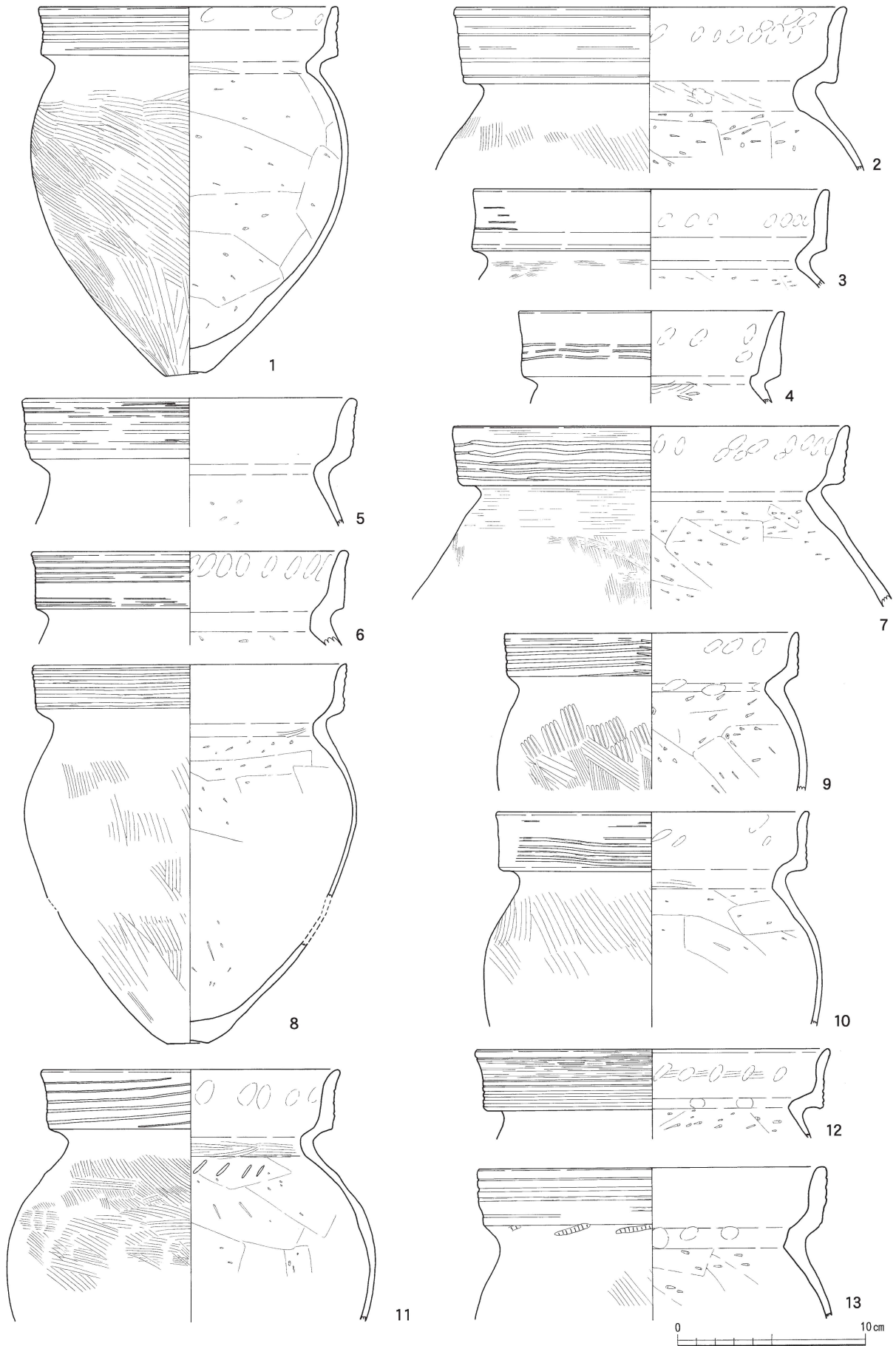
4～6は底部に円孔を有する鉢形土器で、7は深い体部をもつ小型の鉢形土器である。9～11は有段状の口縁部をもつ鉢形土器で、10は口縁部外面に擬凹線を施した精製品である。8・12・13は有段状の口縁部をもつ台付の鉢形土器で、8・12は内外面全てにミガキ調整を施した精製品である。8は口縁部外面に擬凹線を施し、甕形土器に近い器形をもつ。3は浅い体部に大きく開いた口縁部をもち、高坏形土器に近い器形である。

蓋形土器(第29図14・15)

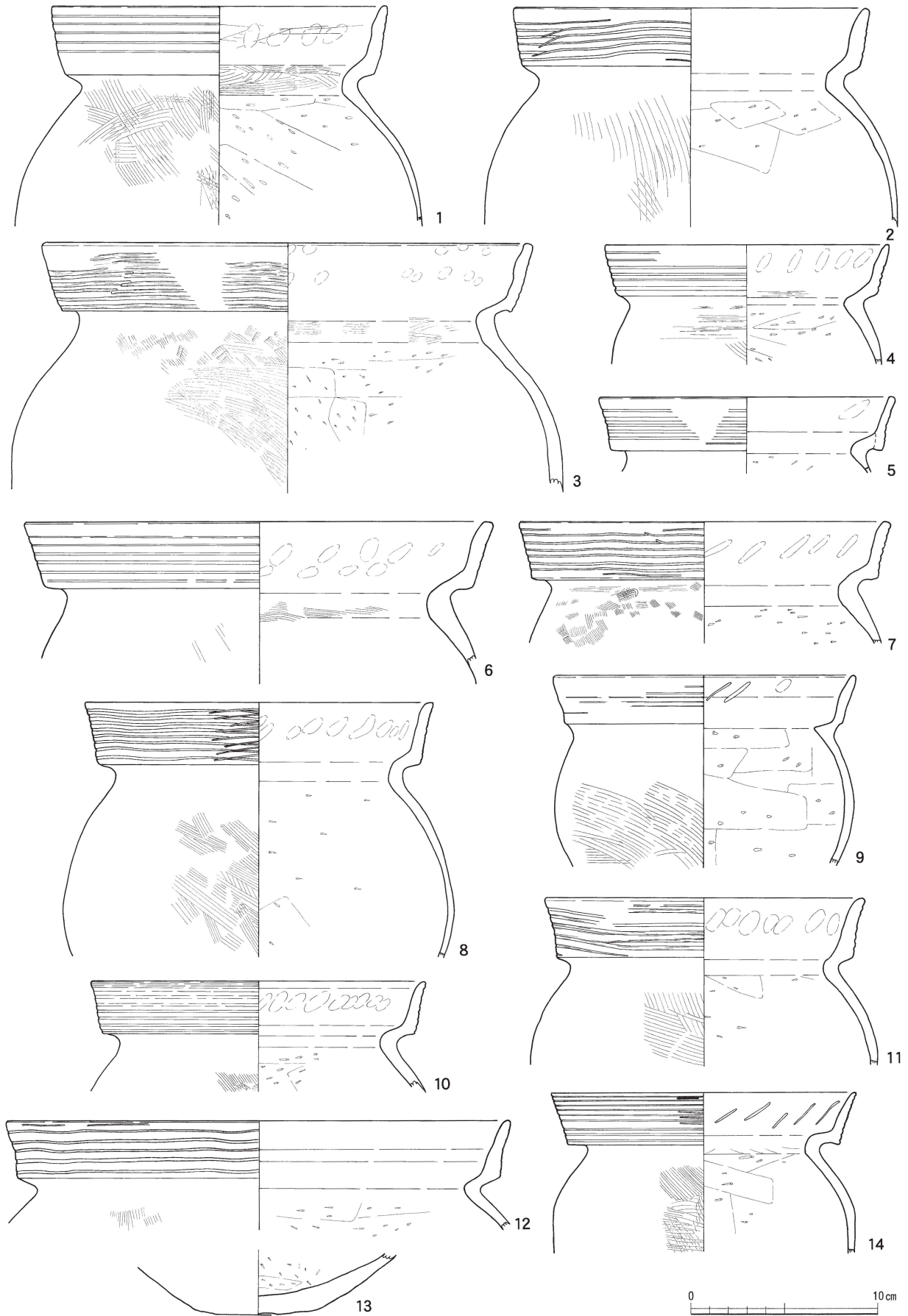
14・15は内外面にミガキ調整を施した精製品である。15は外面に赤彩を施す。

高坏形土器(第30図1～5)

全て有段状の坏部をもち、ハケ調整ののちに丁寧なミガキ調整を施した精製品である。2は沈線が口



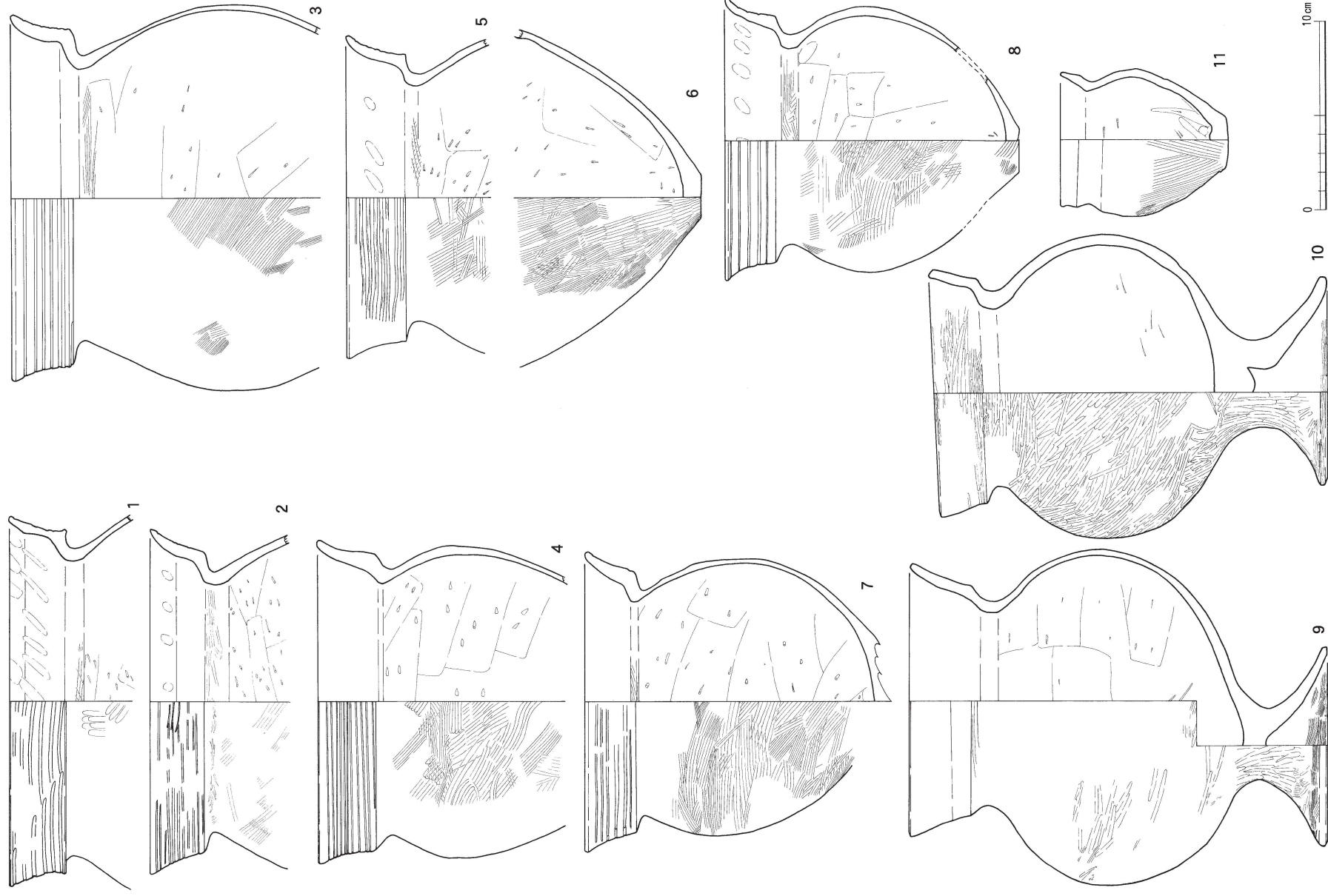
第23図 II区 1号住居跡出土土器実測図(1) (縮尺1/3)



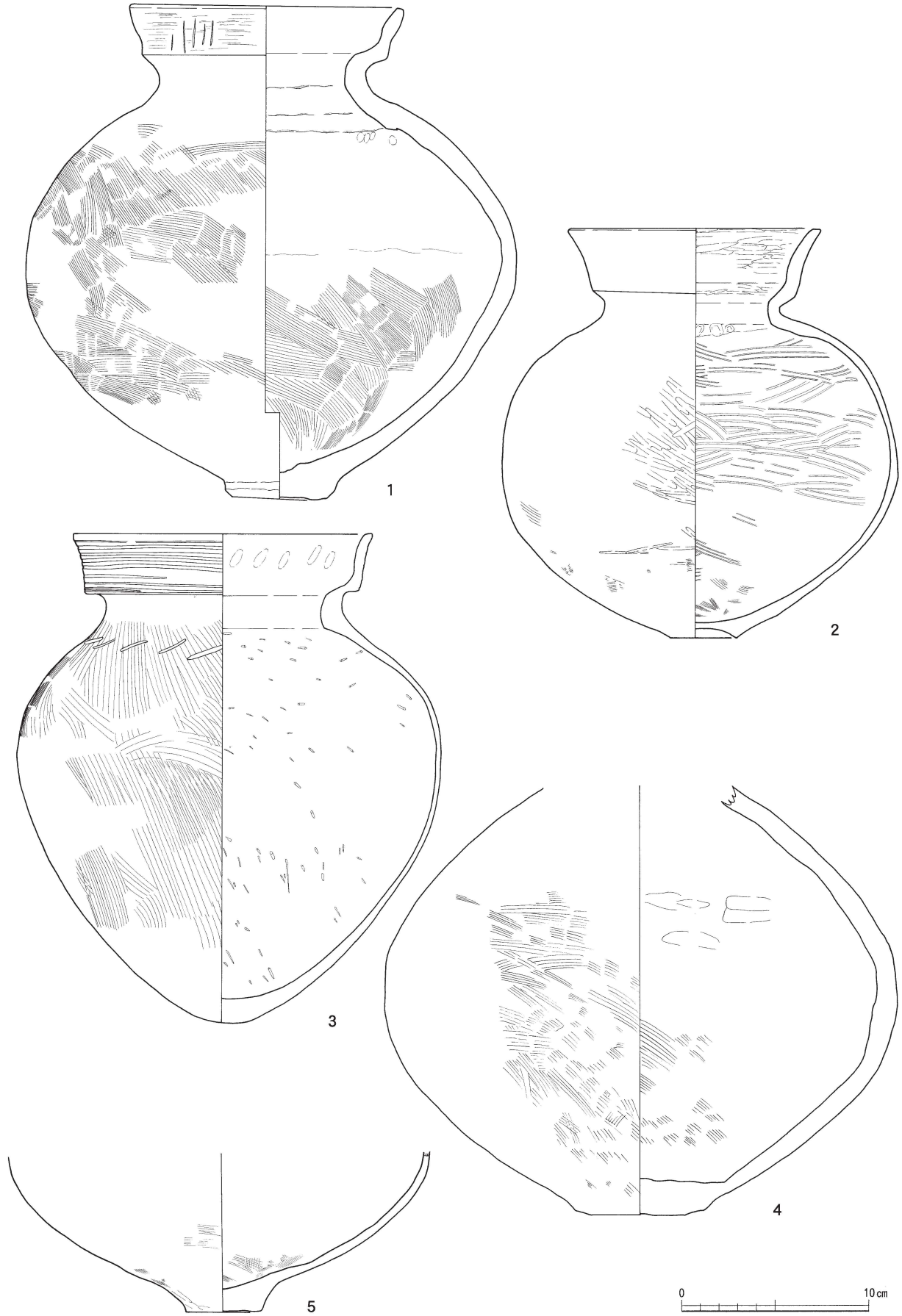
第24図 II区 1号住居跡出土土器実測図(2) (縮尺1/3)



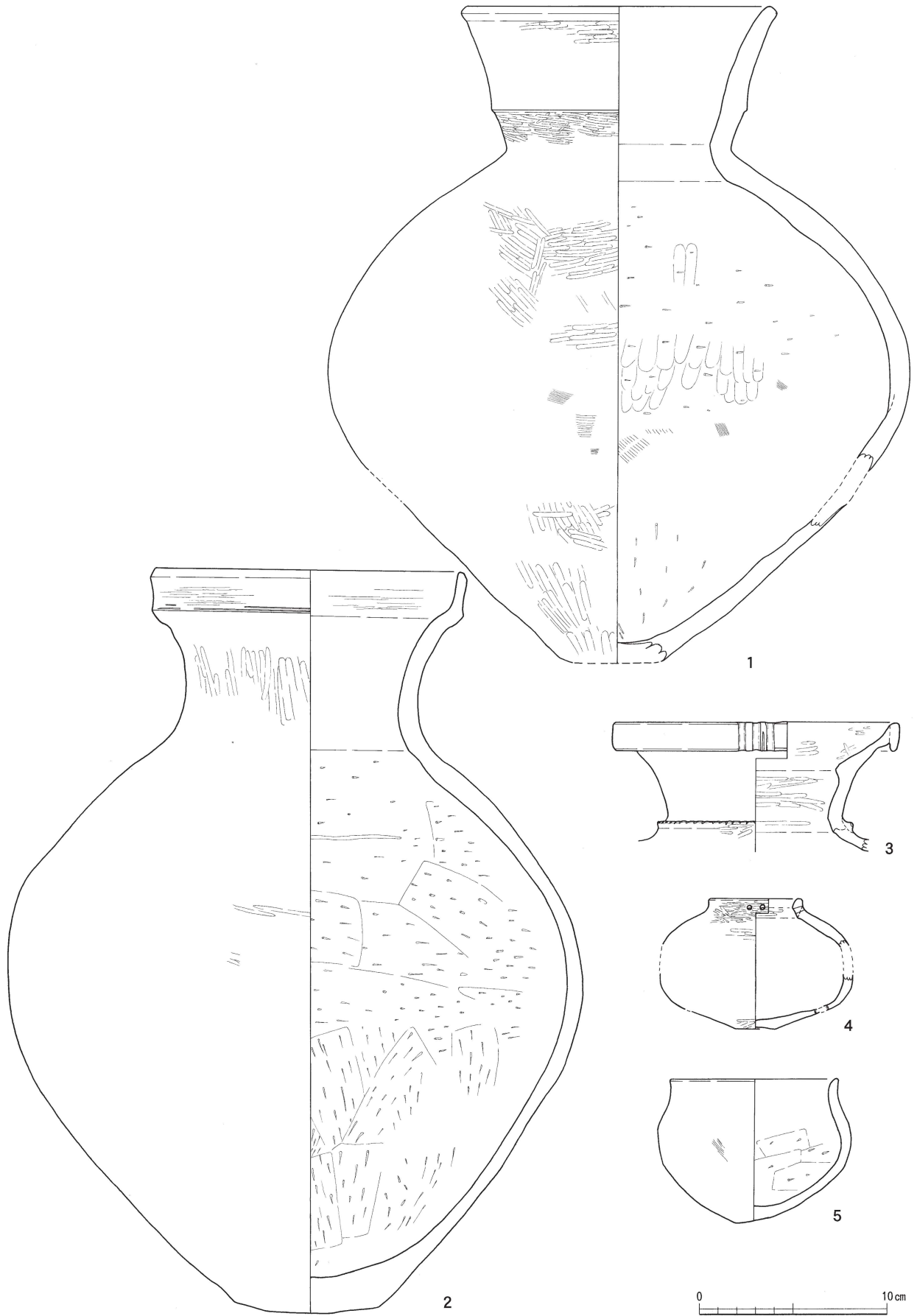
第25図 II区 1号住居跡出土土器実測図(3) (縮尺1/3)



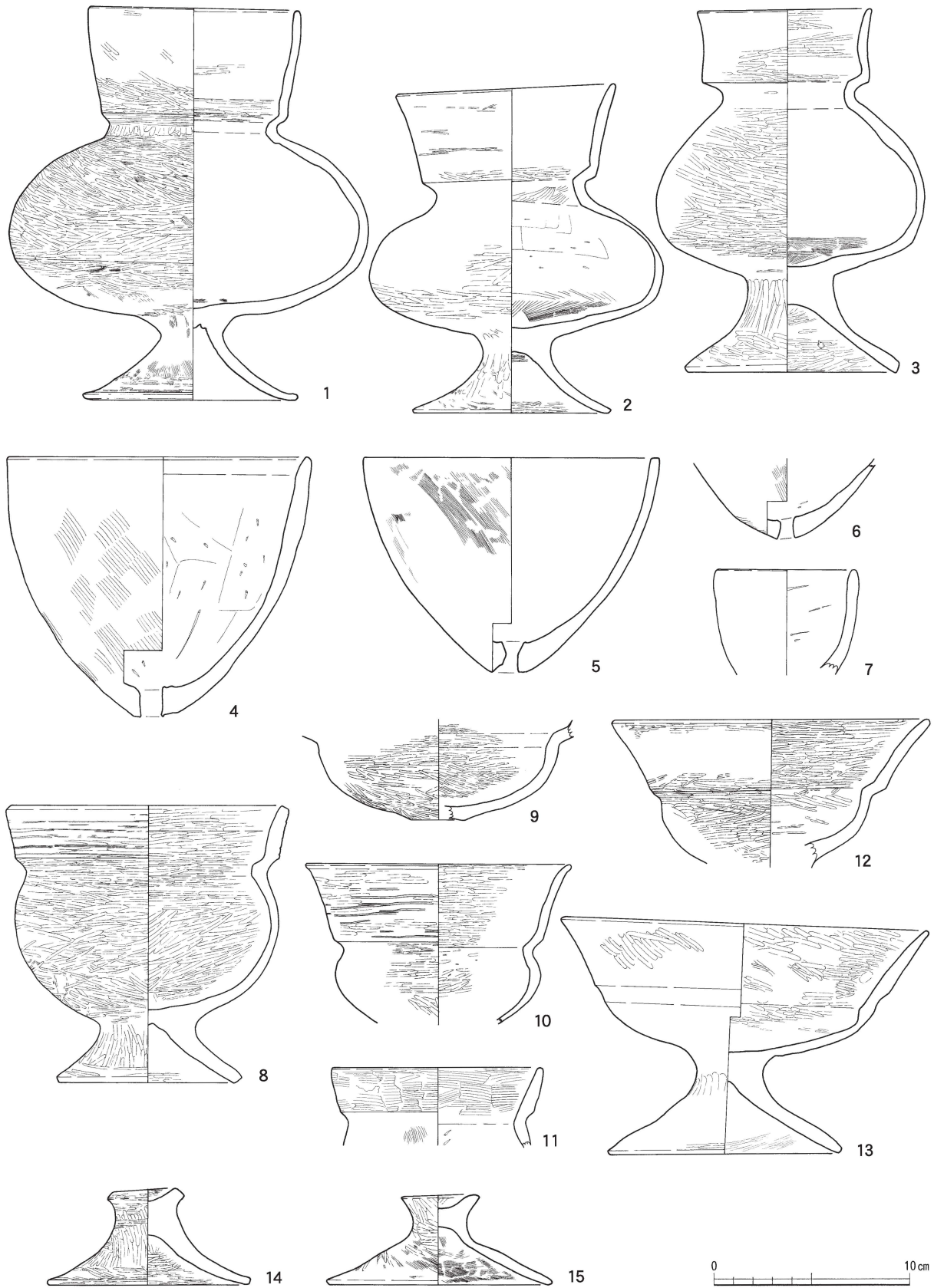
第26図 II区 1号住居跡出土土器実測図(4) (縮尺1/3)



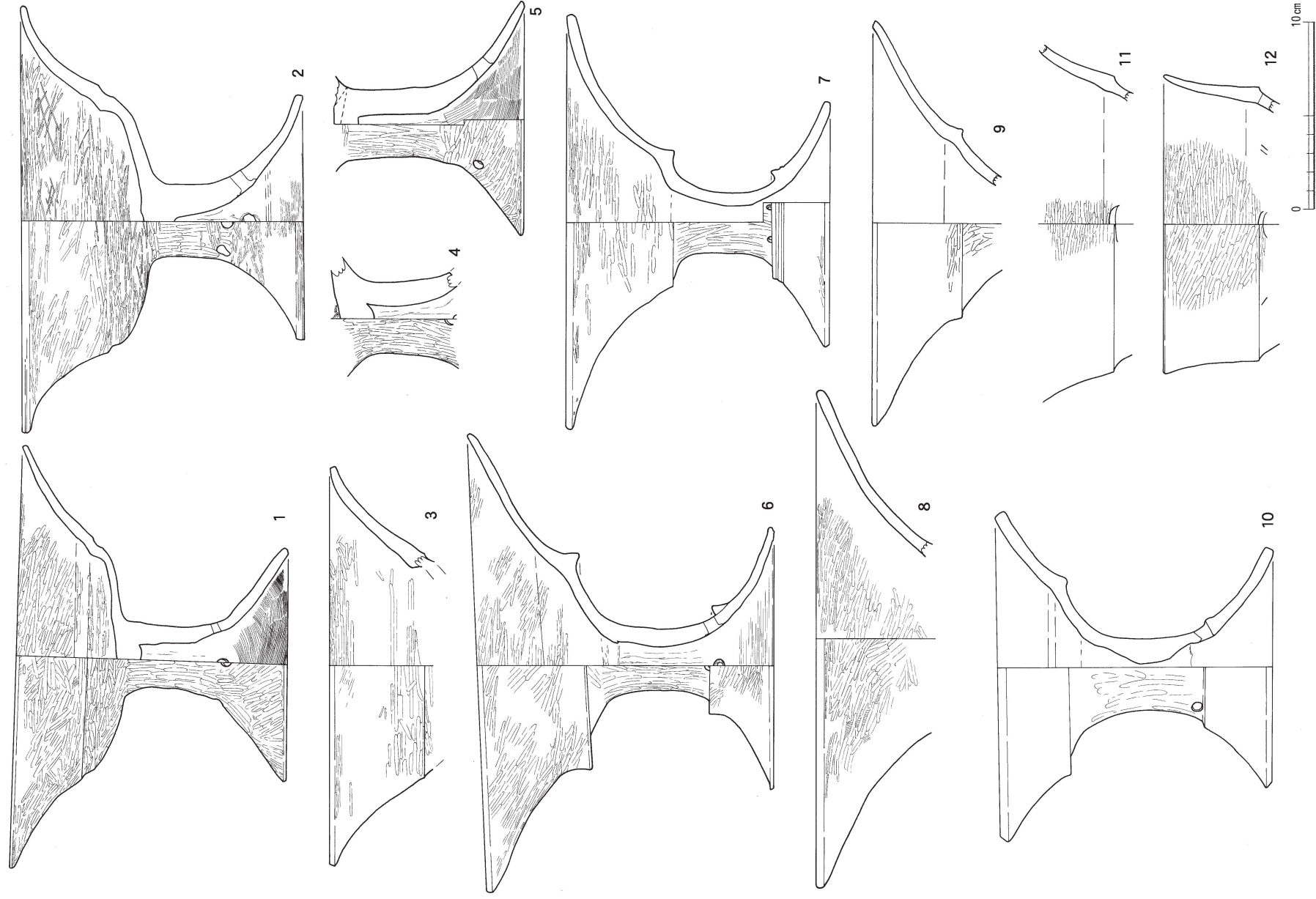
第27図 II区 1号住居跡出土土器実測図(5) (縮尺1/3)



第28図 II区 1号住居跡出土土器実測図(6)(縮尺1/3)

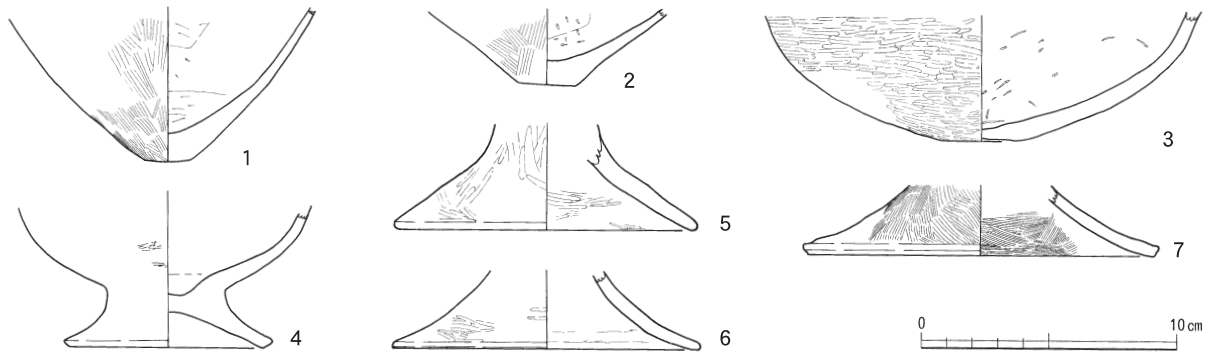


第29図 II区 1号住居跡出土土器実測図(7) (縮尺1/3)

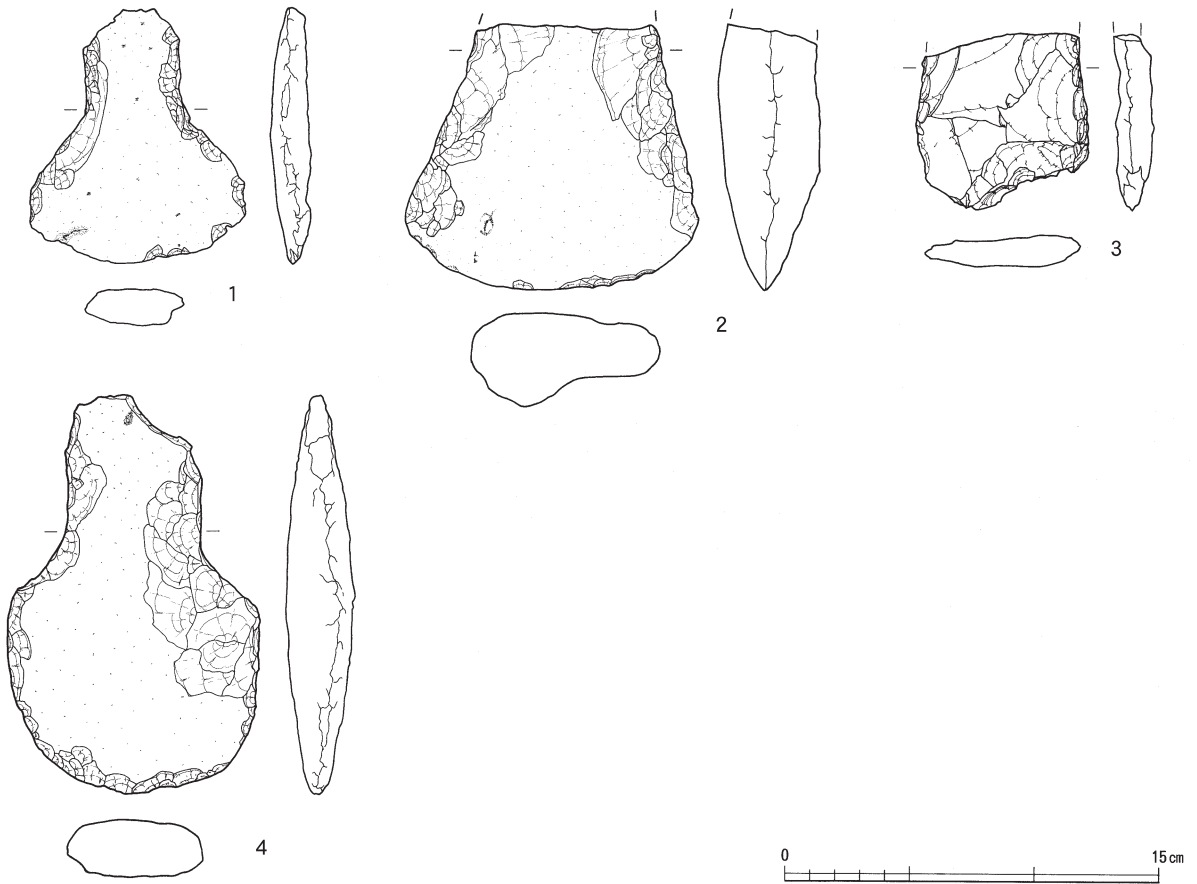


第30図 II区 1号住居跡出土土器実測図(8)(縮尺1/3)

第1節 遺構と遺構出土遺物



第31図 II区 1号住居跡出土土器実測図(9) (縮尺1/3)



第32図 II区 1号住居跡出土打製石斧実測図 (縮尺1/3)

縁端部に1条、裾端部に4条巡る。1・2は無段の柱状脚に、4個の円孔を穿つが、5のように3個のものもある。また2の円孔は、4個のうち2個を接近して施し、内面で接している。5は3個のうち1個が未貫通となっている。

器台形土器（第30図6～12）

6～10は有段状の受部に、脚部と裾部の境に円孔を施した有段状の柱状脚をもつ。6は受部内外面に赤彩痕が残り、4個の円孔を施す。7は2個一对の円孔を2箇所施し、裾部に沈線が2条巡る。10は6・7に比べて受部口縁部の開きが短く、脚部に3個の円孔を施す。11・12はいわゆる装飾器台である。内外面にミガキ調整を施した精製品で、おそらく涙滴形の透孔を施す。

底部・台部・脚部（第31図）

1・2は甕形土器、3は鉢形土器の底部と思われる。4・5は甕形土器あるいは壺形土器の台部、6・7は高坏形土器または器台形土器の脚部である。

時期は、器台形土器（第30図6～10）で器形にばらつきがみられ、時期差の存在が考えられるものの、おおむね弥生時代終末期、石川県の編年で月影式期が主体と思われる。（森）

石器（第32図）

本住居跡から出土した石器は、打製石斧が4点である（第32図1～4）。内訳は完形品が2点（1・4）、破損品が2点（2・3）である。打製石斧の分類の詳細については、第4章第2節ですでに記述しているので、ここでは省略するが、分類の結果、1・4はVI類に、3はI類にそれぞれ分けられる。なお、2は刃部のみであるため、全体の形状を決定できない。（中森）

（2） 2号住居跡（第33～38図）

遺構（第33図） 調査区北部で検出した（A-10・11、B-10区）。調査方法は、1号住居跡と同様である。住居跡北側が調査区外になるため、全掘はできなかった。

平面形態は隅丸方形を呈す。長軸は、現存長で4.80m（推定5.95m）、短軸長5.75m、遺構確認面から床面までの深さ0.26mを測る。床面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ちあがる。ピットの深さは、平均して床面より約0.1m程度と浅いため、いずれも支柱穴の可能性が疑問視される。そのため、調査時には、住居跡外部にも上部構造を支えるための施設があることを想定し、周辺の精査を繰り返し行ったが、柱穴等を確認するにはいたらなかった。また、周提などの存在も確認できなかった。遺物は、床面および覆土中で確認した。大半は「第一次堆積土」よりも上部での出土である。（白川）

遺物（第35～40図） 本住居跡覆土からは、土器、石器、粘土塊を検出した。

土器（第35～37図）

甕形土器（第35図、第36図1～5）

1号住居跡同様、口縁部外面に擬凹線を施した、有段状の口縁部をもつ甕形土器が占めるが、第35図10・13・19と無文のものもみられる。外面は体部に斜め方向のハケ調整を施したあと、頸部に横ナデ調整を施したものが多い。内面は口縁部に横ナデ調整を施し、半数以上に指頭圧痕が残る。頸部内面はほとんどが平坦部をもち、平坦面に横ナデ調整を施したものが多い。体部内面は上半部に斜めまたは横方向のケズリ調整を施す。口縁部形態は、内弯気味に立ち上がるもの（第35図1）、直立して立ち上がるもの（同図2）、外傾して開くもの（同図3～17）、外反しつつ開くもの（同図18・19、第36図1～4）がある。口縁端部の形態は丸く収めるもの（第35図9～12・16・18、第36図2・3）、平坦面をもつも

の(第35図1・3・4・14・15・19)、先細りするもの(同図2・5～8・13・17、第36図1)、外反するもの(第36図4)がある。第36図5は有段状の口縁部をもつ台付の甕形土器である。口縁部内面と体部外面に赤彩がみられる。

壺形土器(第36図6～10)

6～8は有段状の口縁部をもつ壺形土器である。6は焼成・調整とも良好な精製品で、口縁端部内外面に煤が付着している。9はやや開き気味の口縁部をもつ直口の壺形土器で、外面はハケ調整の後、ミガキ調整やナデ調整を施している。10は小型の壺形土器で、外面に板状工具によるナデ調整を施す。肩部外面に剥離痕が見られ、突帯が貼り付けられていたと考えられる。

鉢形土器(第36図11～13)

11・12は底部に円孔を有する鉢形土器である。11は深い体部をもち、12は浅い体部をもつ。13は深い体部をもつ小型の鉢形土器である。

蓋形土器(第36図14～16)

14は内外面にミガキ調整を施し、内面や鈕に指頭圧痕が残る。16は外面にミガキ調整、内面に丁寧なケズリ調整やハケ調整を施した精製品である。14・16ともに外面に煤が付着している。15は柱状の鈕をもち、14・16に比べ焼成も不良で粗雑な作りである。

高坏形土器(第37図1～3)

1は塊状の坏部をもち、「ハ」の字状に開く脚部が付く。2は無段の柱状脚に4個の円孔を施し、坏部と脚部の接合部にキザミを施す。3は坏部が剥離した高坏の脚部と思われる。坏部との接合部にナデ調整を施し、坏底部には強いナデ調整が見られる。

器台形土器(第37図5～7)

5・6は受部が有段状の器台形土器である。6は3個の円孔を施した無段の脚部が付くが、5は有段状のものが付くと考えられる。ともに精製品である。7はいわゆる装飾器台である。内外面に細く粗いミガキ調整を施す。内面に煤が付着している。

底部・脚部(第37図8～13)

8は高坏形土器または器台形土器の裾部で、9は甕形土器、10～12は甕形土器または壺形土器の底部、13は壺形土器の底部と思われる。

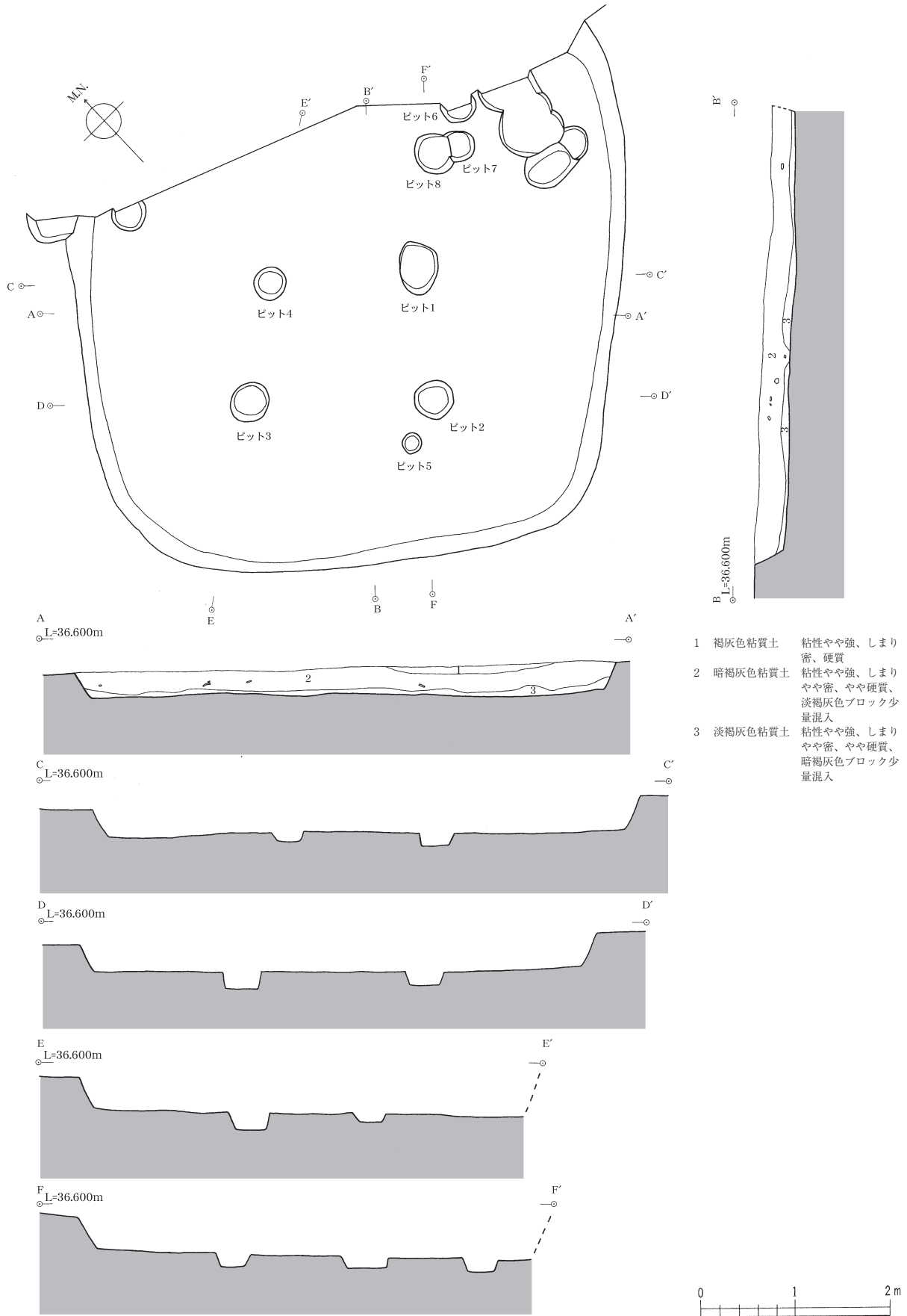
1号住居跡と同様に、弥生時代終末期、石川県の編年で月影式期が主体の時期と思われる。(森)

石器(第38図)

本住居跡から出土した石器は、打製石斧が2点である(第38図1・2)。2点とも破損品で、分類の結果、1はⅥ類に分けられるが、2は刃部を欠いているため、全体の形状を決定できない。(中森)

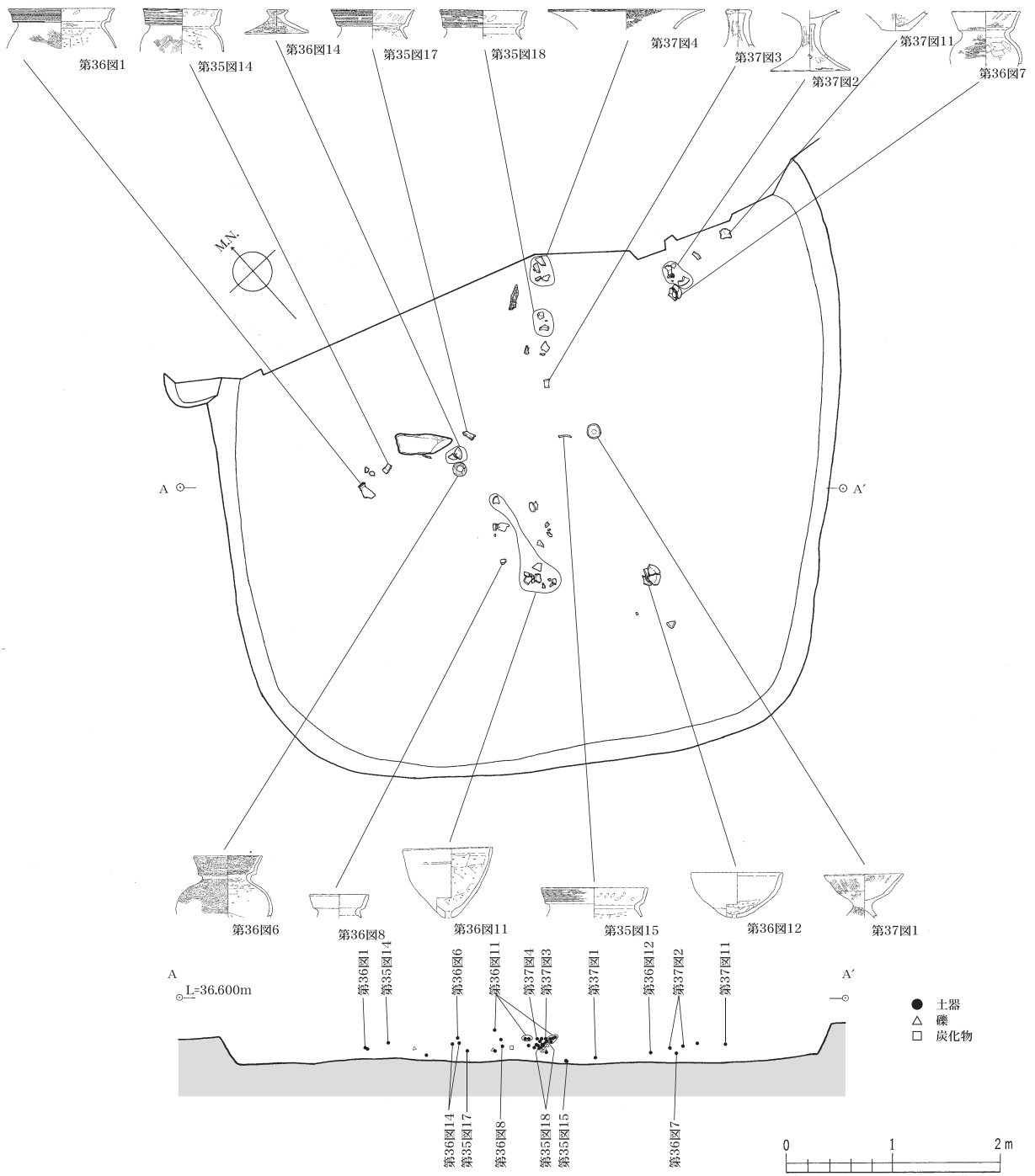
粘土塊(第39・40図)

出土した粘土塊の形はすべて不定形であり、出土時には粘性がかなり保たれており、可塑性に優れていた。粘土塊の大半は約10cm以下の適度な大きさに分けられ、鉋物が混じる。(今林)

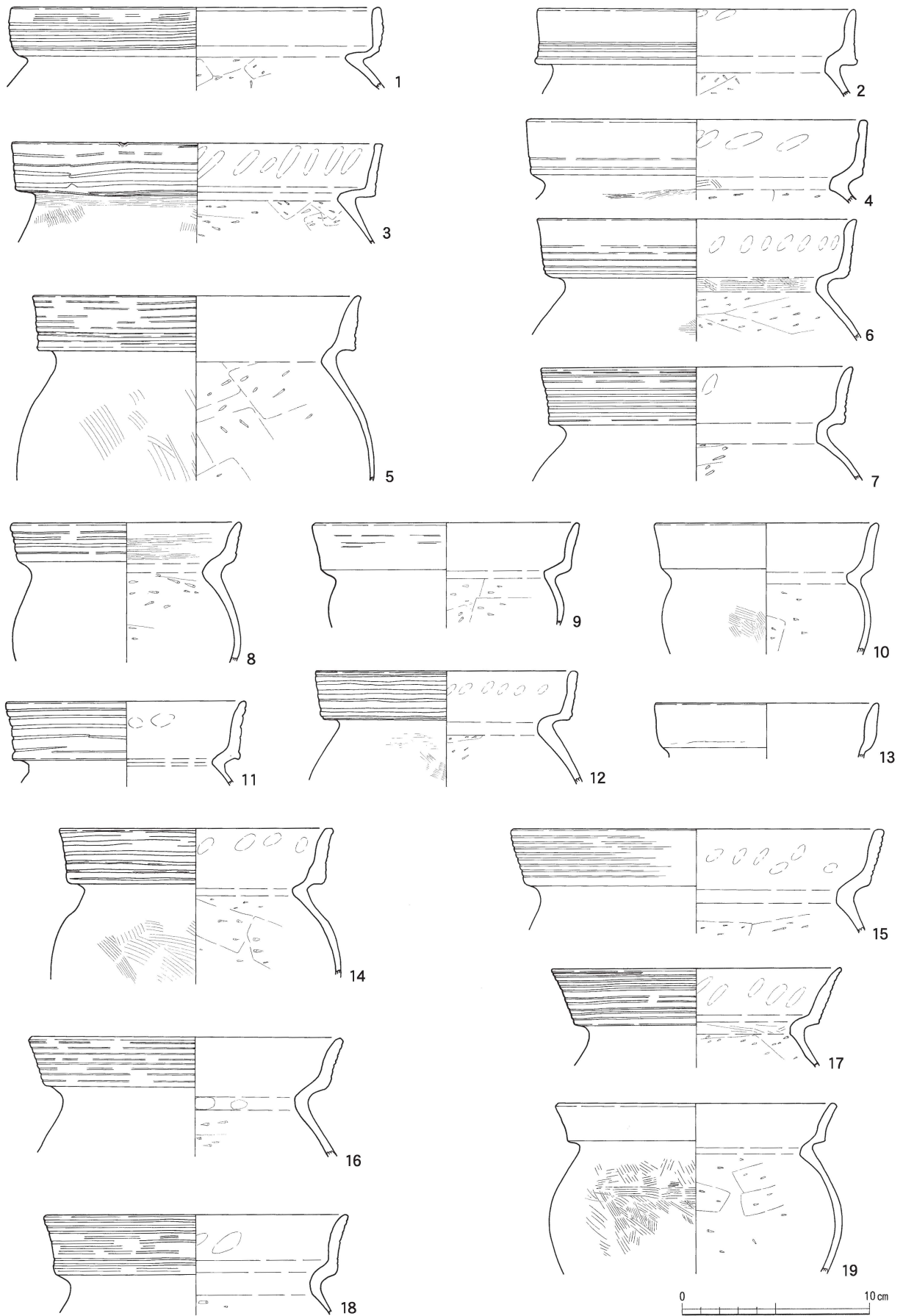


第33図 II区 2号住居跡完掘状況実測図 (縮尺1/60)

第1節 遺構と遺構出土遺物

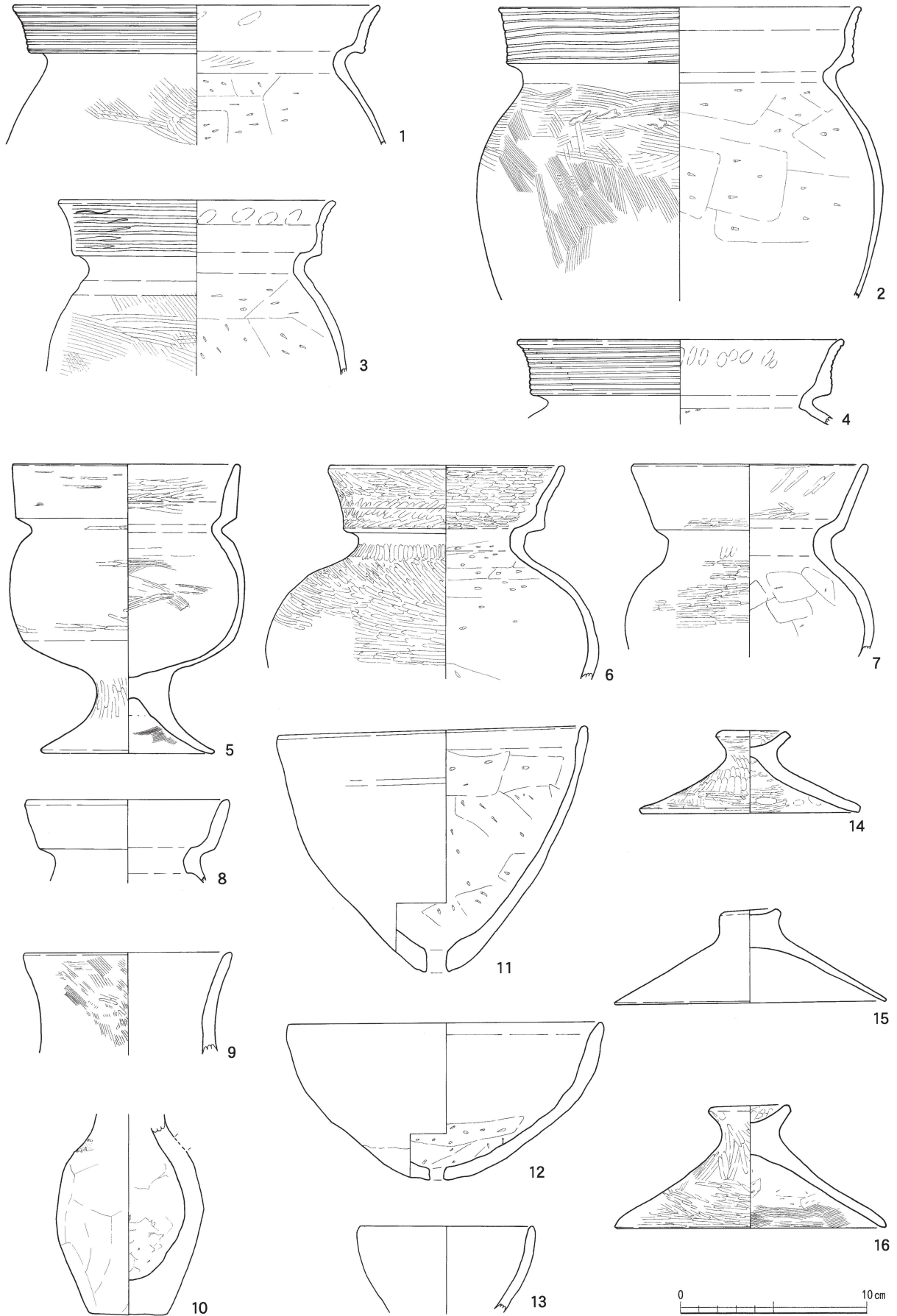


第34図 II区 2号住居跡遺物出土状況実測図 (縮尺1/60)

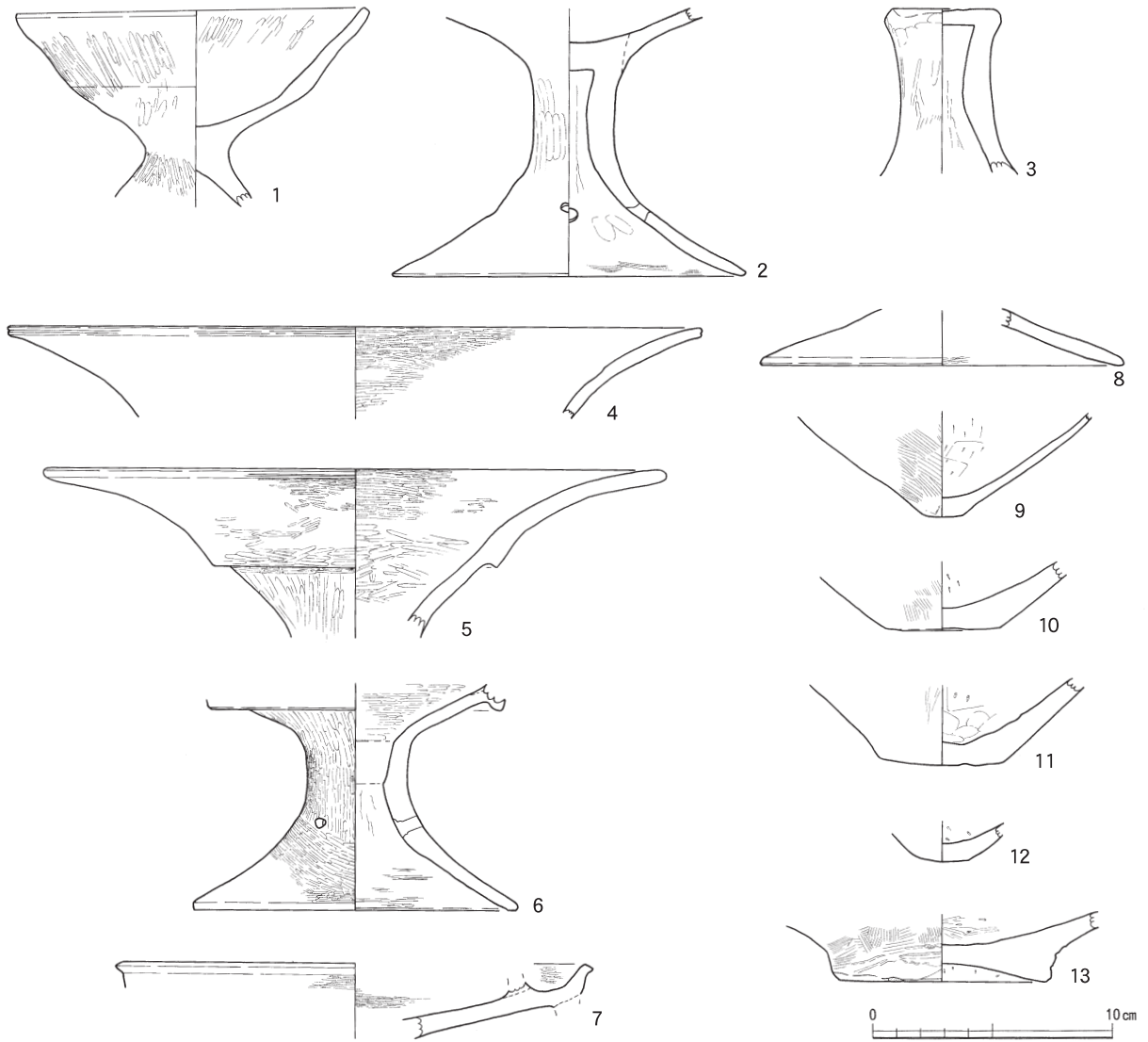


第35図 II区 2号住居跡出土土器実測図(1) (縮尺1/3)

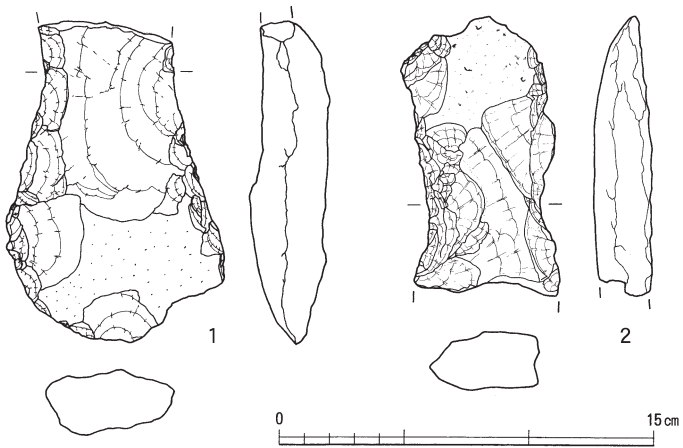
第1節 遺構と遺構出土遺物



第36図 II区 2号住居跡出土土器実測図(2) (縮尺1/3)



第37図 II区 2号住居跡出土土器実測図(3)(縮尺1/3)



第38図 II区 2号住居跡出土打製石斧実測図(縮尺1/3)

第1節 遺構と遺構出土遺物

第8表 II区 1号住居跡出土土器観察一覧表

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第23図1	有段口縁甕	1住1区	(口)16.0 (底)2.6 (高)19.7	良好	密 砂粒やや多	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ (体)ケズリ	(口)擬凹線5条 (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)2/3	体部外面全体煤 付着
2	有段口縁甕	1住3区 B5包含層	(口)21.0 (高)8.9	やや 良好	密 砂粒多・雲母	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ・指頭圧痕 (体)ケズリ	(口)擬凹線6条→横ナデ (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)3/4	
3	有段口縁甕	1住3区 B5包含層	(口)19.0 (高)5.3	不良	やや粗 砂粒多	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線4条→横ナデ (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/3	
4	有段口縁甕	1住3・4区	(口)14.2 (高)4.9	不良	やや粗 砂粒少・雲母	(内)にぶい赤褐色 (外)浅黄橙色 ～橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ (体)ケズリ	(口)擬凹線3条→横ナデ (頸)横ナデ	(口)1/1	外面煤付着
5	有段口縁甕	1住4区	(口)18.0 (高)6.8	やや 不良	密 砂粒多量	灰白色	(口～頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線7条→横ナデ (頸～体)横ナデ	(口)1/4	外面煤付着
6	有段口縁甕	1住3区	(口)16.8 (高)5.0	やや 不良	やや粗 砂粒多	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線8条→横ナデ (頸)横ナデ	(口)5/6	口縁部外面煤付 着
7	有段口縁甕	1住1区 A4包含層	(口)21.0 (高)9.7	良好	やや密 砂粒多・金雲母	(内)橙色～褐灰色 (外)にぶい橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線5条→横ナデ (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/3	
8	有段口縁甕	1住4区	(口)16.8 (底)7.3 (高)20.2	やや 良好	密 砂粒少・雲母	(内)褐灰色 (外)浅黄橙色	(口)横ナデ (頸)ハケ (体)ケズリ	(口)擬凹線6条→横ナデ (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)2/3	外面全体・体部 内面に煤付着
9	有段口縁甕	1住4区	(口)15.8 (高)8.5	やや 良好	やや密 砂粒多・雲母	(内)灰白色 (外)浅黄橙色	(口～頸)横ナデ・指頭圧痕 (体)ケズリ	(口)擬凹線6(頸)横ナデ (体)タタキ→ハケ	(口)1/1	外面煤付着
10	有段口縁甕	1住3区 B5包含層	(口)16.8 (高)11.5	やや 良好	密 砂粒多	(内)褐灰色 (外)浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線4条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)2/3	体部外面煤付着
11	有段口縁甕	1住3区 B5包含層	(口)16.0 (高)13.5	やや 良好	やや密 砂粒多	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線6条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)2/3	外面煤付着肩部 内面へら痕
12	有段口縁甕	1住4区	(口)19.0 (高)4.8	良好	やや密 砂粒多	橙色	(口～頸)横ナデ 指頭圧痕 (体)ケズリ	(口)擬凹線7条→横ナデ (頸)横ナデ	(口)1/6	口縁部内外面・ 頸部外面煤付着
13	有段口縁甕	1住4区	(口)18.7 (高)8.0	やや 不良	やや粗 砂粒多・雲母	(内)灰白色 (外)浅黄橙色	(口)横ナデ(体)ケズリ (頸)横ナデ・指頭圧痕	(口)擬凹線5条 (体)ハケ(頸)横ナデ・備先刺突列	(口)2/3	
第24図1	有段口縁甕	1住2区	(口)18.0 (高)11.8	良好	密 砂粒多・雲母	(内)浅黄橙色 (外)橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線5条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/5	
2	有段口縁甕	1住4区	(口)19.2 (高)11.7	不良	粗 砂粒多	灰白色	(口～頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線7条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/1	頸部・体部外面 煤付着
3	有段口縁甕	1住1区 B3・C4包含層	(口)26.4 (高)13.4	良好	密 砂粒多・雲母	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)浅い擬凹線8条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/6	
4	有段口縁甕	1住1区	(口)15.2 (高)6.5	不良	やや密 砂粒少	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線6条 (頸～肩)横ナデ(体)ハケ	(口)1/3	外面煤付着
5	有段口縁甕	1住3区	(口)16.0 (高)4.1	良好	密 砂粒少・雲母	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線6条 (頸)横ナデ	(口)1/4	外面煤付着
6	有段口縁甕	1住2区	(口)25.3 (高)8.7	やや 不良	やや粗 砂粒多量	灰白色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線6条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/1	
7	有段口縁甕	1住3区	(口)20.0 (高)6.6	不良	やや密 砂粒やや多	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (体)ケズリ	(口)擬凹線7条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/4	外面煤付着
8	有段口縁甕	1住3区・4区	(口)17.6 (高)13.2	不良	粗 砂粒多量	(内)橙色 (外)浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線8条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/1	口縁部煤付着
9	有段口縁甕	1住4区 A5・B5 包含層	(口)16.3 (高)10.3	やや 不良	密 砂粒やや多 雲母	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (体)ケズリ	(口)擬凹線5条→横ナデ (頸・上)横ナデ (頸・下～体)ハケ	(口)1/1	口縁部内面へら 痕
10	有段口縁甕	1住3区	(口)18.0 (高)6.0	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	暗褐色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線8条 (体)ハケ→(頸)横ナデ	(口)1/4	内外面煤付着
11	有段口縁甕	1住4区	(口)17.2 (高)9.0	やや 良好	やや密 砂粒少・雲母	(内)橙色～灰白色 (外)橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線8条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/1	
12	有段口縁甕	1住1～4区 B2・B4・B5・C6 包含層	(口)27.0 (高)5.9	不良	粗 砂粒多	浅黄橙色 ～にぶい橙色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線6条 (頸)横ナデ (体)縦ハケ	(口)1/4	
13	底部	1住2区	(底)7.0 (高)3.4	不良	粗 砂粒多	浅黄橙色 ～にぶい橙色	ケズリ	不明	(底)1/1	
14	有段口縁甕	1住4区 B5包含層	(口)16.4 (高)8.6	良好	密 砂粒やや多 雲母	灰白色	(口)横ナデ・へら痕 (頸・上)横ナデ (頸・下)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線10条 (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/2	外面煤付着
第25図1	有段口縁甕	1住3区 B5包含層	(口)19.0 (高)18.0	やや 良好	密 砂粒多	(口)浅黄橙色 (体)橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)部分的にハケ (体)ケズリ	(口)擬凹線9条 (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/1	頸部以外の外面 煤付着
2	有段口縁甕	1住1区	(口)19.8 (高)9.1	不良	やや粗 砂粒多量	浅黄橙色～橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)浅い擬凹線9条 (頸)横ナデ(体)ハケ (肩)ハケ→横ナデ	(口)1/3	

第6章 II区の遺構・遺物

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第25図3	有段口縁甕	1住3区	(口)19.2 (高)5.1	不良	やや密 砂粒多	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線8条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/4	
4	有段口縁甕	1住1・4区	(口)17.4 (高)9.6	良好	密 砂粒多・雲母	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)浅い擬凹線7条 (頸)横ナデ	(口)2/3	
5	有段口縁甕	1住3区	(口)17.4 (高)13.6	不良	やや粗 砂粒多・雲母	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線9条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/1	外面煤付着
6	有段口縁甕	1住1区	(口)14.2 (底)2.1 (高)16.6	良好	やや密 砂粒多	橙色	(口~頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線5条→横ナデ (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/1	体部外面全体煤付着
7	有段口縁甕	1住2・3区	(口)18.4 (高)10.7	やや 良好	密 砂粒やや多 雲母	灰白色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)浅い擬凹線9条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)2/3	口縁部外面煤付着
8	有段口縁甕	1住3・4区 B5包含層	(口)15.2 (高)15.8	良好	やや密 砂粒少	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ→横ミガキ (体)丁寧なケズリ	(口)擬凹線12条 (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/1	肩部以下の外面 全体に煤付着
9	有段口縁甕	1住4区	(口)17.2 (高)10.1	やや 良好	やや密 砂粒多・雲母	(内)橙色~褐灰色 (外)灰色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)浅い擬凹線9条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)5/6	
10	有段口縁甕	1住1・3区	(口)17.4 (高)4.5	良好	密 砂粒多・雲母	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線7条→横ナデ (頸)横ナデ	(口)1/3	
11	有段口縁甕	1住3区	(口)15.0 (高)4.1	良好	密 砂粒やや多 雲母	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕	(口)擬凹線8条 (頸)横ナデ	(口)1/4	
12	有段口縁甕	1住3区	(口)13.8 (高)6.1	やや 良好	やや密 砂粒多	浅黄橙色	(口)横ナデ(体)ケズリ (頸)横ナデ・指頭圧痕	(口)擬凹線3条→横ナデ (頸)横ナデ(体)ナデ?	(口)1/4	外面全体煤付着
13	有段口縁甕	1住1・2区	(口)13.0 (底)2.3 (高)12.0	良好	密 砂粒多	(内)浅黄橙色 (外)にぶい赤褐色	(口)横ナデ (頸)横ナデ・指頭圧痕 (体)ケズリ	(口)擬凹線5条 (頸)横ナデ (体)縦ハケ(底)ナデ	(口)1/6	外面全体煤付着
第26図1	有段口縁甕	1住4区 B5包含層	(口)19.0 (高)6.5	良好	やや密 砂粒多・雲母	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線6条→横ナデ (頸)横ナデ(体)タタキ	(口)1/3	外面煤付着
2	有段口縁甕	1住1区	(口)18.4 (高)7.8	不良	やや粗 砂粒多	灰白色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線11条 (頸)ナデ(体)ハケ	(口)1/4	
3	有段口縁甕	1住2・3区	(口)19.6 (高)16.7	良好	密 砂粒多・雲母	灰白色	(口)横ナデ (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線7条→横ナデ (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/1	肩部以外の外面 全体煤付着
4	有段口縁甕	1住4区 B5包含層	(口)17.2 (高)8.2	良好	密 砂粒少・雲母	(内)灰白色 (外)橙色	(口~頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)浅い擬凹線11条 (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/1	外面煤付着
5	有段口縁甕	1住3区	(口)17.2 (底)2.3	良好	密 砂粒多・雲母	赤褐色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線8条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)3/4	体部外面下半全 体に煤付着
6	底部	1住3区	(底)2.3 (高)2.3	良好	密 砂粒多量	(内)にぶい赤褐色 (外)褐色	ケズリ	ハケ	(底)1/1	外面全体煤付着
7	有段口縁甕	1住4区 B5包含層	(口)16.0 (高)16.4	良好	密 砂粒少	橙色	(口)横ナデ (頸)ハケ (体)ケズリ	(口)浅い擬凹線6条 (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/1	
8	有段口縁甕	1住4区	(口)15.2 (底)2.4 (高)15.8	良好	密 砂粒やや多 雲母	(内)橙色 (外)浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ (肩)ケズリ・指頭圧痕	(口)擬凹線5条 (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)5/6	肩部以外の外面 全体に煤付着
9	台付 有段口縁甕	1住1・2区	(口)14.6 (底)10.5 (高)22.4	やや 不良	密 砂粒ごく少量	浅黄橙色	(体)丁寧なケズリ (台・下)横ハケ	(頸・上)横ハケ (体)ハケ→横ミガキ (台)ハケ→ミガキ	(体)2/3	
10	台付 有段口縁甕	1住3区 B5包含層	(口)13.2 (底)11.1 (高)21.3	良好	密 砂粒ごく少量 金雲母	(体~台内)浅黄橙色 (口・内~外)赤褐色	(口)斜めミガキ (体)ケズリ→ナデ? (台)横ナデ (台・端)横ミガキ	(口~頸)横ミガキ (体)斜めミガキ (台)縦ミガキ (台・端)横ミガキ	ほぼ 完形	
11	小型甕	1住4区	(口)7.2 (底)2.7 (高)9.0	良好	密 砂粒少・雲母	橙色	(口)横ナデ (体)ケズリ (底)ナデ	(口)横ナデ (体・下)縦ハケ	完形	
第27図1	有段口縁壺	1住1・2・3区	(口)14.6 (底)5.1 (高)26.7	やや 良好	やや密 砂粒多量	橙色	(口~頸)横ナデ (肩)指頭圧痕 (体・下)ハケ	(口~頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/1	口縁部外面へラ 記号
2	有段口縁壺	1住1・2区	(口)13.4 (底)3.6 (高)22.1	不良	密 砂粒ごく少量	(内)灰白色~灰色 (外)灰白色	(口)横ミガキ (頸)指頭圧痕 (体・底)ハケ	(頸)横ナデ (体・上)斜めミガキ (体・下)ハケ→ミガキ	ほぼ 完形	体部外面下半全 体に煤付着
3	有段口縁壺	1住1・2区	(口)16.0 (底)約1.5 (高)26.5	やや 良好	やや密 砂粒多	(口)赤褐色 (体)浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線9条 (頸)横ナデ(肩)縦ハケ・ へラ先刺突(体)ハケ	(口)1/1	底部外面煤付着
4	体部	1住1・3区	(底)7.0 (高)23.1	やや 良好	粗 砂粒多	浅黄橙色	(体・上)横指ナデ (体・下)ハケ	(体)ハケ	(体)1/2	
5	底部	1住1・3区 B4包含層	(底)4.15 (高)8.5	不良	密 砂粒ごく少量	(内)灰色 (外)灰白色	(体)ケズリ (底)ハケ	(体)ハケ→ミガキ	(口)1/1	

第1節 遺構と遺構出土遺物

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第28図1	有段口縁壺	1住1区 A4・B4包含層	(口)17.2 (底)4.7 (高)35.1	良好	やや粗 砂粒多	橙色	(口～頸)ミガキ? (体・上)横ケズリ→縦ナデ (中)ハケ(下)ケズリ	(口～頸)横ミガキ (体・中)ハケ→ミガキ (体・下)縦ミガキ	(口)1/4	
2	有段口縁壺	1住2区	(口)16.6 (底)7.8 (高)39.8	やや 良好	やや粗 砂粒多	橙色	(口～頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線4?条→横ナデ (頸)縦ミガキ(肩)ハケ (体)ハケ→ミガキ?	ほぼ 完形	
3	広口壺	1住2区	(口)15.4 (高)7.0	不良	密 砂粒ごく少量 雲母	(内)浅黄橙色 (外)灰白色	ナデ・部分的に横ミガキ	(口・端)棒状浮文痕3×3 (口)横ナデ(肩)横ミガキ	(口)5/6	口縁部外面ごく 少量煤付着
4	無頸壺	1住4区	(口)5.2 (底)2.0 (高)7.0	良好	密 雲母	(内)橙色～灰白色 (外)橙色	(頸)横ミガキ (体)ナデ (底)放射状の窠痕	横ミガキ	(口)1/2	
5	無頸壺	1住1・2区	(口)9.0 (底)7.7 (高)9.0	やや 良好	密 砂粒多	(口)橙色 (体)褐灰色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)横ナデ (体)部分的にハケ	完形	外面煤付着
第29図1	台付 有段口縁壺	1住2区 B5包含層	(口)10.8 (底)11.1 (高)20.3	良好	密 砂粒ごく少量 金雲母	橙色	(口)ハケ→横ミガキ (底)ハケ (台)横ナデ	(口)斜めミガキ (頸・上)横ナデ (頸・下)縦ミガキ (体)ハケ→斜めミガキ (台)縦ハケ→横ミガキ	ほぼ 完形	
2	台付 有段口縁壺	1住1区	(口)11.2 (底)10.2 (高)17.0	やや 良好	密 砂粒ごく少量	(口)浅黄橙色 (外)灰白色	(口・下)横ミガキ (頸)ハケ (体・上)ケズリ(下)ハケ (台)横指ナデ	(口)横ミガキ(頸)横ナデ (体)横ミガキ (台)ハケ→縦ミガキ	ほぼ 完形	外面赤彩痕
3	台付 有段口縁壺	1住4区 B5包含層	(口)9.0 (底)10.8 (高)18.8	良好	密 砂粒ごく少量	赤褐色	(口・上)横ミガキ (口・下)(頸)横ナデ (底)ハケ(台)斜めミガキ	(口)横ミガキ (台・上)縦ミガキ (台・下)(体)斜めミガキ	ほぼ 完形	
4	有孔鉢	1住1・3区	(口)15.7 (底)2.3 (高)13.4	やや 良好	やや粗 砂粒多・雲母	橙色	(口)横ナデ (体～底)ケズリ	(口)横ナデ (体)ハケ	(口)1/2	孔径1.2cm
5	有孔鉢	1住1・3・4区 B5包含層	(口)15.4 (底)1.8 (高)11.0	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	橙色	(口～体・上)横ナデ (体・下～底) 丁寧なケズリ	ハケ	(口)1/4	孔径1.3cm
6	有孔鉢	1住1区	(底)0.9 (高)3.9	やや 良好	やや密 砂粒多・雲母	橙色	ケズリ	ハケ	(底)1/1	孔径0.9cm
7	鉢	1住4区	(口)7.0 (高)5.4	やや 不良	密	浅黄橙色	ケズリ→ナデ	不明	(口)1/4	
8	台付 有段口縁鉢	1住3区	(口)14.5 (底)9.0 (高)14.3	良好	密 砂粒少・金雲母	橙色	(口～肩)横ミガキ (体)斜めミガキ (台)横ミガキ	(口)横ミガキ→擬凹線6条 (頸)横ミガキ (体)ハケ→斜めミガキ (台)縦→横ミガキ	(口)1/3	
9	有段口縁鉢	1住1区	(底)2.8 (高)5.1	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	橙色	横ミガキ	横ミガキ	(底)1/3	
10	有段口縁鉢	1住1区	(口)13.6 (高)8.2	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	橙色	(口)横ミガキ (頸～体) ケズリ→横ミガキ	(口)擬凹線7条→横ミガキ (頸～体)横ミガキ (底)縦ミガキ	(口)1/4	
11	有段口縁鉢	1住3・4区	(口)10.8 (高)4.1	良好	やや粗 砂粒やや多 雲母	橙色	(口)横ハケ (頸)ナデ(体)ケズリ	(口)横ハケ (頸)横ナデ(体)縦ハケ	(口)1/2	
12	台付 有段口縁鉢	1住3区	(口)16.4 (高)7.7	良好	やや密 雲母	橙色	横ミガキ	(口)横ミガキ (体)ハケ→横ミガキ	(口)1/1	
13	台付 有段口縁鉢	1住1・4区	(口)19.0 (底)12.15 (高)11.9	やや 不良	やや粗 砂粒やや多	橙色	(鉢)ミガキ (台)板ナデ	(口)斜めミガキ	ほぼ 完形	
14	蓋	1住3区	(口)10.4 (高)5.1 (鈕)4.0	良好	密 金雲母	赤褐色	丁寧な横ミガキ	(口)(鈕)横ミガキ (天)縦ミガキ	ほぼ 完形	
15	蓋	1住3区	(口)11.7 (高)4.7 (鈕)4.1	やや 良好	密 砂粒ごく少量 金雲母	橙色	ハケ	(鈕)ミガキ (天)ハケ→斜めミガキ	完形	外面赤彩
第30図1	高坏	1住2区	(口)22.8 (底)14.5 (高)14.8	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	橙色	(坏・口)ミガキ (脚・底)横ミガキ (裾)ハケ	(坏)ハケ→ミガキ (脚)縦ミガキ (裾)斜めミガキ	ほぼ 完形	円孔1×4
2	高坏	1住3・4区 B5包含層	(口)22.9 (底)15.25 (高)13.2	良好	密 雲母	赤褐色	(坏)太い横ミガキ →細い不定方向のミガキ (裾)板横ナデ	(坏・口・端)沈線1条 (坏・口)(裾)ハケ→ミガキ (坏・底)ミガ (脚)縦→横ミガキ (裾・端)横ミガキ 沈線4?条	(口)5/6	円孔1×4

第6章 II区の遺構・遺物

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第30図3	坏部	1住3区 B5・B6包含層	(口)21.6 (高)5.6	良好	密 雲母	赤褐色	横ミガキ	ハケ→横ミガキ	(口)1/2	
4	脚部	1住3区	(高)6.9	良好	密 雲母	橙色	(坏)ミガキ	縦ミガキ	(脚)1/1	円孔1×4
5	脚部	1住2区	(底)12.7 (高)10.3	良好	密 砂粒少・雲母	(内)にぶい赤褐色 (外)橙色	(裾)ハケ	(脚)縦ミガキ (裾)斜めミガキ	(裾)1/1	脚端部内面煤付着 円孔1×3
6	器台	1住3区 B5包含層	(口)24.9 (底)14.3 (高)16.8	良好	密 砂粒ごく少量	橙色	(受)斜めミガキ (裾)横ナデ	(受)斜めミガキ (脚)縦ミガキ (裾)斜めミガキ	(口)3/4	円孔1×4? 受部内外面赤 彩?
7	器台	1住1区	(口)22.2 (底)13.3 (高)14.3	やや 良好	密 砂粒少	橙色	(受)横ミガキ (脚)ナデ(裾)横ナデ (脚)接合部)指頭圧痕	(受・口) ケズリ→横ミガキ (受・底)横ナデ (脚)縦ミガキ (裾)ミガキ・沈線2条	ほぼ 完形	円孔2×2
8	受部	1住3区 B5包含層	(口)27.0 (高)6.3	やや 良好	密 砂粒ごく少量 金雲母	灰白色	ミガキ	ハケ→斜めミガキ	(口)1/4	
9	受部	1住3区 A6・B6・B7包 含層	(底)21.8 (高)7.0	やや 良好	やや密 砂粒多・雲母	橙色	ナデ?	(受)横ミガキ (脚)縦ミガキ	(口)1/6	
10	器台	1住1区	(口)17.8 (底)13.0 (高)14.95	やや 不良	密 砂粒少	浅黄橙色 ～にぶい赤褐色	(脚・上)縦ナデ (裾)横ナデ	(受・下)横ナデ (脚)縦ミガキ	(口)1/8	裾部内面・脚部 外面煤付着 円孔1×3
11	裝飾器台	1住3区	(高)5.1	良好	密 金雲母	橙色	横ミガキ	横ミガキ	-	
12	裝飾器台	1住3区 B5包含層	(口)16.0 (高)6.3	良好	密 金雲母	橙色	横ミガキ	斜めミガキ	(口)1/8	
第31図1	底部	1住4区 B4包含層	(底)1.8 (高)6.1	良好	密 砂粒少	(内)灰色 (外)灰黄褐色	ケズリ	(体)縦ハケ	(底)1/1	体部外面全体煤 付着
2	底部	1住4区	(底)2.4 (高)2.9	良好	密 砂粒多・雲母	褐色	ケズリ	(体)縦ハケ (底)ケズリ	(底)1/1	内外面煤付着
3	底部	1住1・3区 B4・B5包含層	(底)2.5 (高)5.1	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	橙色	ケズリ (底)放射状のヘラ痕	横ミガキ	(底)1/1	
4	台部	1住1区	(底)8.2 (高)5.6	良好	密 金雲母	にぶい赤褐色	(体)ナデ (台)横ナデ	(体)ナデ (台)横ナデ	(底)1/1	内外面煤付着
5	台部	1住3区	(底)12.0 (高)4.2	良好	密 雲母	黒褐色	横ミガキ	縦ミガキ	(底)1/4	内面煤付着
6	裾部	1住1区	(底)13.2 (高)3.1	やや 不良	密 雲母	橙色	ナデ?	横ミガキ	(底)1/2	外面赤彩
7	裾部	1住3区 A6・B6・C6包 含層	(底)14.0 (高)2.8	良好	密	橙色	横ハケ	縦ハケ	(底)1/2	

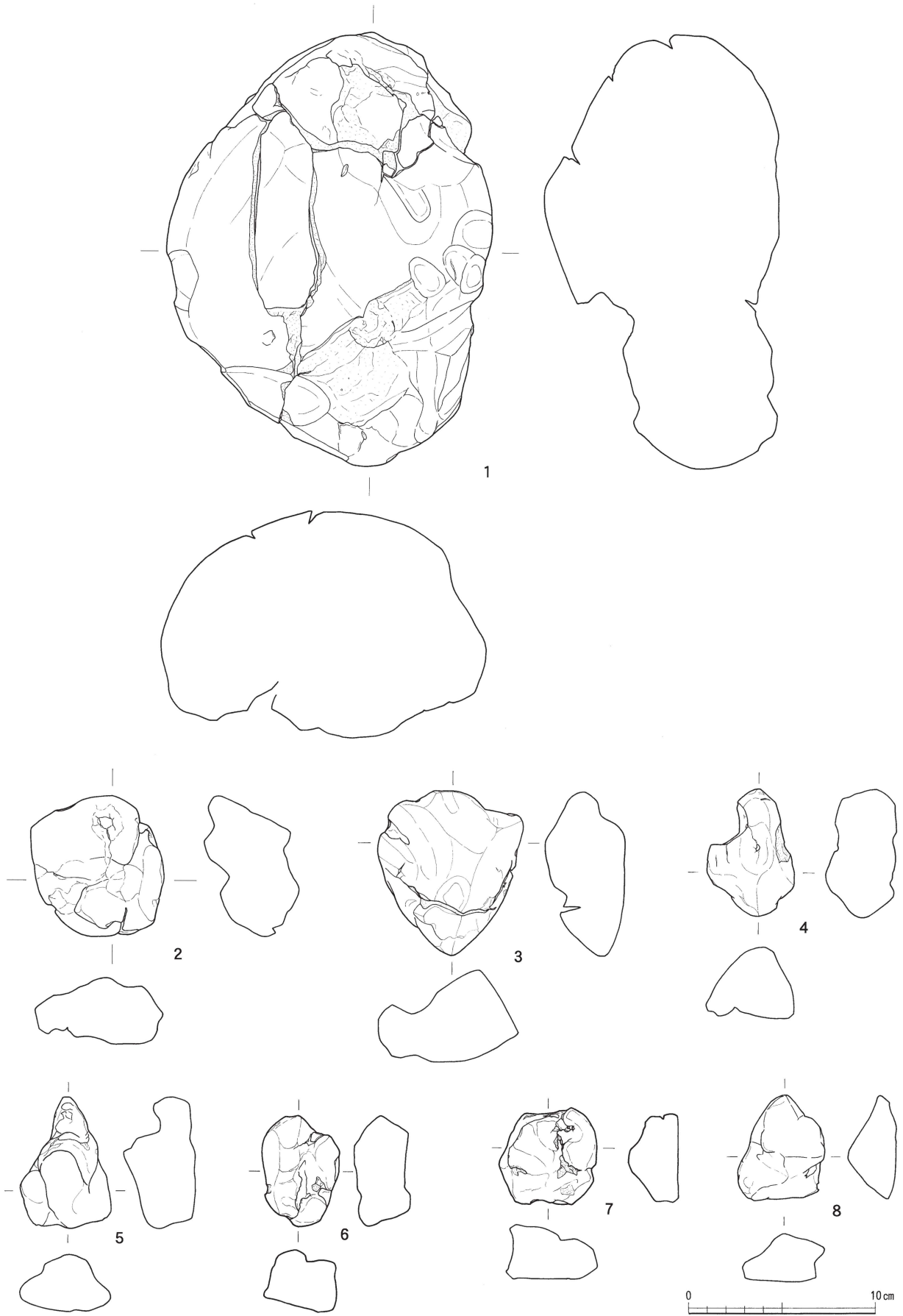
第1節 遺構と遺構出土遺物

第9表 II区 2号住居跡出土土器観察一覧表

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第35図1	有段口縁甕	2住3区	(口)20.0 (高)4.4	良好	密 砂粒少・雲母	にぶい黄橙色	(口)横ナデ (体)丁寧なケズリ	(口)擬凹線7条 (頸)横ナデ	(口)1/6	
2	有段口縁甕	2住2区	(口)17.0 (高)4.1	やや 良好	やや粗 砂粒多・雲母	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線3条→横ナデ (頸)ハケ→横ナデ	(口)1/4	
3	有段口縁甕	2住3区 A10・A11・B13 包含層	(口)20.0 (高)5.5	良好	密 砂粒やや多 雲母	黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ (体)丁寧なケズリ	(口)擬凹線6条→横ナデ (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/3	
4	有段口縁甕	2住3区	(口)18.2 (高)4.4	やや 良好	密 砂粒少	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線→横ナデ (頸)横ナデ	(口)1/6	体部内面・外面 全体煤付着
5	有段口縁甕	2住1区 A10包含層	(口)17.6 (高)9.5	やや 不良	やや粗 砂粒多・雲母	灰白色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線7条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/1	外面煤付着
6	有段口縁甕	2住2区	(口)17.2 (高)6.4	良好	密 砂粒少・雲母	(内)褐灰色 (外)赤色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線5条→横ナデ (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/3	頸部外面煤付着
7	有段口縁甕	2住3区	(口)16.8 (高)6.1	不良	やや粗 砂粒多・雲母	(内)浅黄橙色 (外)にぶい黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線9条 (頸)ナデ	(口)1/8	
8	有段口縁甕	2住1・2・4区 A10・A11 包含層	(口)12.4 (高)7.6	良好	密 砂粒やや多	(内)にぶい橙色 (外)にぶい赤褐色	(口)強い横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線5条 (頸)横ナデ	(口)3/4	外面煤付着
9	有段口縁甕	2住4区	(口)14.3 (高)5.5	やや 良好	粗 砂粒多量	橙色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線→横ナデ (頸)横ナデ	(口)1/8	
10	有段口縁甕	2住3・4区 A10包含層	(口)12.0 (高)7.0	やや 不良	やや粗 砂粒やや多	橙色～赤色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)横ナデ (体)ハケ	(口)1/2	外面煤付着
11	有段口縁甕	2住2区	(口)12.8 (高)4.6	やや 不良	やや粗 砂粒少	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線5条 (頸)横ナデ	(口)1/8	外面全体・体部 内面煤付着
12	有段口縁甕	2住2区	(口)14.0 (高)6.0	良好	密 砂粒少・雲母	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線6条→横ナデ (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/4	外面煤付着
13	有段口縁甕	2住1・4区	(口)12.0 (高)3.0	不良	やや粗 砂粒やや多	浅黄色	不明	不明	(口)1/4	
14	有段口縁甕	2住3・4区	(口)14.6 (高)8.0	やや 不良	やや粗 砂粒多・雲母	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線6条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/3	
15	有段口縁甕	2住1区 A9・B9包含層	(口)20.0 (高)5.5	やや 良好	粗 砂粒多	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線8条 (頸)横ナデ	(口)1/4	
16	有段口縁甕	2住1区	(口)16.0 (高)6.4	やや 良好	やや密 砂粒やや多	(内)赤褐色 (外)橙色	(口)横ナデ (頸)指頭圧痕(体)ケズリ	(口)擬凹線8条 (頸)横ナデ	(口)1/2	外面煤付着
17	有段口縁甕	2住1・4区	(口)15.6 (高)5.4	やや 不良	やや密 砂粒多	(内)にぶい赤褐色 (外)橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線10条 (頸)横ナデ	(口)1/4	外面煤付着
18	有段口縁甕	2住1・4区	(口)16.4 (高)5.5	やや 不良	やや粗 砂粒少・雲母	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)不明(体)ケズリ	(口)浅い擬凹線10条 (頸)横ナデ	(口)2/3	
19	有段口縁甕	2住3区	(口)15.0 (高)9.1	やや 不良	やや密 砂粒少	橙色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)横ナデ (体)ハケ	(口)1/4	頸部以外の外面 煤付着
第36図1	有段口縁甕	2住2・3・4区	(口)20.0 (高)7.4	不良	やや粗 砂粒多	浅黄橙色～灰黄 色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線9条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/4	外面煤付着
2	有段口縁甕	2住4区 A11包含層	(口)19.6 (高)15.7	やや 良好	やや密 砂粒多・雲母	淡黄色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線7条(頸)横ナデ (肩)横ナデ(体)縦ハケ?	(口)1/2	
3	有段口縁甕	2住3区	(口)14.8 (高)9.4	やや 不良	やや密 砂粒多量	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線6条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/8	頸部以外の外面 煤付着
4	有段口縁甕	2住1・3区	(口)17.6 (高)4.2	良好	やや密 砂粒多	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線9条 (頸)横ナデ	(口)1/6	
5	台付 有段口縁甕	2住1区 B9包含層	(口)12.4 (底)9.4 (高)15.5	やや 良好	やや密 砂粒少	(内)橙色 (外)浅黄橙色	(口)横ミガキ (体)ハケ	(口)横ナデ板横ナデ (体)横ミガキ (台)縦ミガキ	(口)1/2	口縁部内面、外面 赤彩痕
6	有段口縁壺	2住3・4区 A13包含層	(口)12.5 (高)11.5	良好	密 砂粒少・雲母	灰白色	(口)横ミガキ (頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)横ナデ斜めミガキ (頸)横ナデ (頸)下縦ミガキ	(口)1/1	口縁部上半内外 面煤付着
7	有段口縁壺	2住1区	(口)12.8 (高)10.3	やや 良好	やや密	(内)灰白色 (外)橙色～灰白色	(口)上縦ミガキ→ナデ (口)下横ミガキ (頸)ナデ(体)ケズリ	(口)横ミガキ→ナデ (頸)上横ナデ (体)横ミガキ (頸)下縦ミガキ	(口)2/3	
8	有段口縁壺	2住3区	(口)11.0 (高)4.3	やや 良好	やや密 砂粒少・雲母	(内)灰白色 (外)浅黄橙色 ～橙色	(口)強い横ナデ (肩)横ナデ	強い横ナデ	(口)1/6	
9	長頸壺	2住1区	(口)11.2 (高)5.4	不良	密	浅黄色	不明	ハケ→ナデ・ミガキ	(口)1/4	
10	小型壺	2住1区	(底)4.2 (高)10.8	良好	密 砂粒少・雲母	(内)橙色 (外)にぶい赤橙色	(体)下ケズリ	(頸)ナデ (体)板ナデ(底)ナデ	(底)1/2	肩部剥離痕
11	有孔鉢	2住2・3・4区 A10包含層	(口)16.6 (底)2.5 (高)13.3	やや 良好	やや密 砂粒多・雲母	(内)赤褐色 (外)橙色	(口)横ナデ (体)ケズリ	接合痕	ほぼ 完形	孔径1.2cm

第6章 II区の遺構・遺物

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第36図12	有孔鉢	2住2区	(口)17.2 (底)8.5 (高)2.0	やや不良	やや密 砂粒多・雲母	褐灰色	(口)ナデ (底)ケズリ	(口)ナデ (底)部分的にケズリ	(口)2/3	孔径0.7cm
13	鉢	2住1区	(口)9.4 (高)4.7	やや不良	密 砂粒少	橙色	不明	不明	(口)1/4	
14	蓋	2住4区	(口)11.9 (高)4.5 (鈕)4.1	良好	密 砂粒少・雲母	(内)橙色 (外)赤褐色	(鈕)ミガキ (天)横ミガキ・指頭圧痕	(鈕)横ナデ (天)縦ミガキ (口)ハケ→横ミガキ	ほぼ 完形	外面煤付着
15	蓋	2住3区	(口)14.8 (高)5.2 (鈕)3.4	不良	やや密 砂粒少・雲母	橙色	ナデ	(鈕)横ナデ (天)ナデ	(口)1/4	
16	蓋	2住3区 A11包含層	(口)14.8 (高)6.7 (鈕)4.5	良好	密 砂粒ごく少量 金雲母	(内)橙色 (外)橙色～褐灰色	(鈕)ミガキ (天)ケズリ (口)ハケ	(鈕)指頭圧痕 (天・上)縦ミガキ (天・下～口)横ミガキ	(口)1/8	外面煤付着
第37図1	高坏	2住1区	(口)14.8 (高)8.4	やや良好	密 砂粒多・雲母	浅黄橙色	(坏・上)縦ミガキ (坏・下)ナデ	縦ミガキ	(口)1/1	
2	高坏	2住1・4区	(底)15.0 (高)11.3	やや良好	密	橙色	(裾・上)指頭圧痕 (裾・下)ハケ	(脚)縦ミガキ	(底)1/2	円孔1×4
3	脚部	2住1区	(高)6.9	良好	密 砂粒少・雲母	にぶい橙色	(脚)ナデ	(坏)強いナデ (脚・下)ハケ (脚・上)縦ミガキ	(脚)1/1	
4	坏部	2住1・4区	(口)29.0 (高)3.8	やや不良	密 雲母	橙色	(口)横ミガキ	(口・端)沈線1条	(口)1/4	
5	器台	2住3区 A11包含層	(口)26.2 (高)7.1	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	赤褐色	横ミガキ	(受)横ミガキ (脚)縦ミガキ	(口)1/12	
6	器台	2住3区 B13包含層	(底)13.6 (高)8.9	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	(内)浅黄橙色 (外)灰白色～橙色	(受)横ミガキ (脚・上)横ナデ (裾)横ナデ	(受)(裾・端)横ナデ (脚)縦ミガキ (裾)斜めミガキ	(口)1/3	円孔1×3
7	裝飾器台	2住3区 B9・C9包含層	(高)3.2	良好	密 雲母	浅黄橙色～灰黄色	横ミガキ	横ミガキ	(受・底) 3/4	受部内面煤付着
8	裾部	2住3区	(底)15.2 (高)2.4	やや不良	やや粗 砂粒多	黄橙色	(裾・端)ミガキ	不明	(底)1/5	
9	底部	2住2・3・4区	(底)1.7 (高)4.4	やや不良	粗い 砂粒やや多	(内)にぶい橙色 (外)にぶい黄橙色	ケズリ	ハケ	(底)1/1	外面煤付着
10	底部	2住3区	(底)4.8 (高)2.3	良好	密 砂粒多	(内)灰黄褐色 (外)にぶい褐色	ケズリ	(体)縦ハケ (底)ナデ	(底)1/4	内面煤付着
11	底部	2住1区	(底)4.2 (高)3.3	良好	密 砂粒多	(内)灰色 (外)淡褐灰色	(体)ケズリ (底)指頭圧痕	(体)縦板ナデ (底)ナデ	(底)1/1	
12	底部	2住1区	(底)2.2 (高)1.5	良好	粗い 砂粒多 量	(内)褐灰色 (外)赤色 (2次焼成)	ケズリ	不明	(底)1/1	
13	底部	2住1区 B10・C11 包含層	(底)9.6 (高)2.4	良好	やや粗 砂粒多・雲母	(内)にぶい赤褐色 (外)橙色	ナデ→丁寧なケズリ	(体)ハケ (底)ケズリ	(底)2/3	



第39図 II区 2号住居跡出土粘土塊実測図(1)(縮尺1/3)



第40図 II区 2号住居跡出土粘土塊実測図(2)(縮尺1/3)

第10表 II区 2号住居跡出土粘土塊観察一覧表

挿図No	出土地区	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	色調	胎土	備考
第39図1	2住2区	23.2	17.5	13.2	3940	淡黄白-灰色	長石少・石英少	植物遺体含む
2	2住2区	7.5	7.1	5.1	214	淡灰白色・灰色	長石少・石英少	炭化物含む
3	2住2区	8.9	7.8	4.9	221	淡灰白色・灰色	長石少・石英少	
4	2住2区	6.9	4.2	3.85	95	淡灰白色・灰色	長石少・石英少	
5	2住2区	7.0	4.4	3.9	86	淡灰白色・灰色	長石少・石英少	
6	2住2区	5.9	4.15	3.3	70	淡灰白色・灰色	長石少・石英少	
7	2住2区	5.15	5.25	2.9	67	淡灰白色・灰色	長石少・石英少	
8	2住2区	5.7	4.7	2.6	50	淡黄白色・灰色	長石少・石英少	
第40図1	2住2区	5.65	3.8	2.5	41	淡灰白色・灰色	長石少・石英少	
2	2住2区	5.8	3.8	2.4	41	淡灰白色・灰色	長石少・石英少	
3	2住2区	5.1	3.3	2.4	30	淡灰白色・灰色	長石少・石英少	
4	2住2区	3.9	4.4	1.7	29	淡灰白色・白色	長石少・石英少	
5	2住2区	4.0	4.9	2.0	28	淡灰白色・白色	長石少・石英少	
6	2住2区	4.15	2.4	2.0	20	淡灰白色・灰色	長石少・石英少	
7	2住2区	4.4	3.3	2.2	19	淡灰白色・灰色	長石少・石英少	
8	2住2区	5.2	2.5	2.5	18	淡黄白色・灰色	長石少・石英少	
9	A11包含層	11.1	6.7	4.7	297	淡橙色・褐灰色	長石少・石英少・チャート極少・雲母極少	
10	A11包含層	6.4	4.5	2.8	57	淡橙色・褐灰色	長石少・石英少・角閃石極少・雲母極少	
11	A11包含層	5.3	5.0	3.7	51	淡橙色・褐灰色	長石少・石英少・角閃石極少・雲母極少	
12	A11包含層	5.7	3.8	2.6	40	淡橙色・褐灰色	長石少・石英少・角閃石極少・雲母極少	
13	A11包含層	4.2	2.8	2.55	28	淡橙色・褐灰色	長石少・石英少・角閃石極少・雲母極少	
14	A11包含層	4.0	3.5	2.1	26	淡橙色・褐灰色	長石少・石英少・角閃石極少・雲母極少	
15	A11包含層	4.3	3.2	2.2	24	淡橙色・褐灰色	長石少・石英少・角閃石極少・雲母極少	
16	A11包含層	3.5	2.7	2.6	23	淡橙色・褐灰色	長石少・石英少・角閃石極少・雲母極少	

II 土坑・ピット・溝跡 (第41図)

土坑12基、ピット約390基、溝跡2条を検出した。遺物を検出した遺構にのみ番号を付した (第19図)。出土遺物は、土坑3・6、ピット4・8・14出土のもの (第42図)を除き、すべて細片であり、図化しえなかった。遺構の個別記載は、遺構出土遺物一覧表を付して記述に換える (第7表)。 (白川)

土坑3 (第41図)

遺構 調査区北東部で検出した (A-3区)。長軸長0.78m、短軸長0.6m、遺構確認面から床面までの深さ0.26mを測る。 (白川)

遺物 (第42図1~3) 土師器坏Aが3点出土した。1は底部をヘラ切り離し後軽くナデ。底部と体部の境は2・3と比べて明瞭である。2は底部ヘラ切り離し後軽くナデ。やや深めの体部で、口縁部内面に浅い沈線が巡るが、これは明確にデザインされたものではなく、口縁端部のナデ調整の痕跡であろう。体部外面に墨書を有するが判読不明である。3は体部のロクロ襷が顕著に残る。底部ヘラ切り離し未調整である。

これらの土器は、大枠で見れば、底部から体部が折れ曲がるものや、底部と体部の境が消失した碗形状とは異なり、すべて底部から体部にかけて外側に開くように立ち上がるものである。しかし、細部では相違点が多くみられる。1は底部と体部との境がはっきりしているのに比べ、3は両者の境が明確でない。全体の法量では1・3は2に比べて扁平であり、また1・2に比べ、3は口径が約1cm小さい。

これら3点とも同一の土坑から検出されたということは、前述の差異点がそれほど時期差を表さない、あるいは生産地等の違いによって形状に差異があることは確かだが、利用時においては区別されない程度のものであったと捉えることができよう。 (中野)

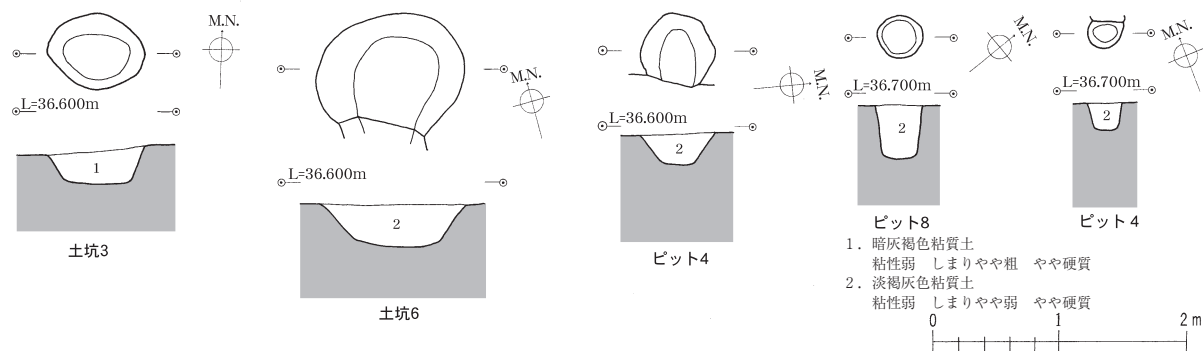
土坑6 (第41図)

遺構 調査区北部で検出した (B-8・9区)。長軸長1.18m、短軸現存長0.89m (推定1.02m)、遺構確認面から床面までの深さ0.32mを測る。 (白川)

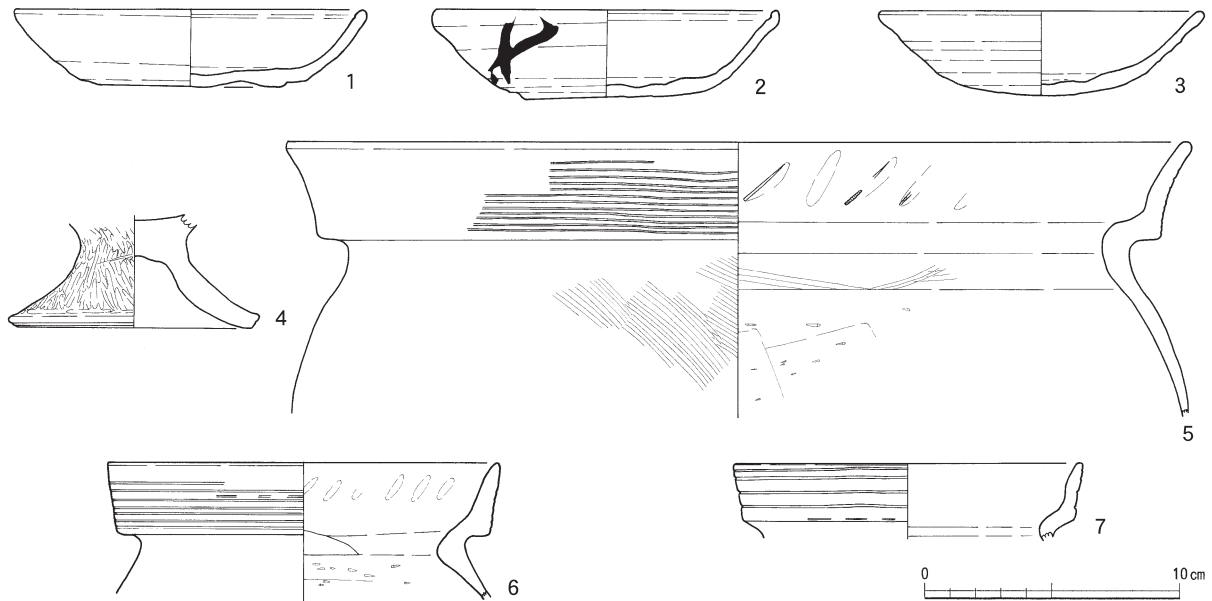
遺物 (第42図4) 4は弥生土器である。甕形土器または壺形土器の台部。外面にミガキ調整を施した精製品である。 (森)

ピット4 (第41図)

遺構 調査区東部で検出した (B-2区)。長軸現存長0.53m (推定0.70m)、短軸長0.60m、遺構確認面から床面までの深さ0.23mを測る。 (白川)



第41図 II区 土坑・ピット実測図 (縮尺1/60)



第42図 II区 土坑・ピット出土土器実測図（縮尺1/3）

遺物（第42図5） 5は弥生土器である。有段状の口縁部をもつ甕形土器。口径35.8cmの大型品で、口縁部外面に擬凹線を施し、口縁部内面に篋状工具の痕が見られる。（森）

ピット8（第41図）

遺構 調査区東部で検出した（B-2区）。長軸長0.39m、短軸長0.33m、遺構確認面から床面までの深さ0.41mを測る。（白川）

遺物（第42図6） 6は弥生土器である。有段状の口縁部をもつ甕形土器。口縁部外面に擬凹線を施し、口縁部内面に指頭圧痕がみられる。頸部内面は「く」の字状に折れるが、部分的に平坦面をもつ。（森）

ピット14（第41図）

遺構 調査区東部で検出した（B-3区）。長軸長0.28m、短軸長現存0.21m（推定0.28m）、遺構確認面から床面までの深さ0.21mを測る。（白川）

遺物（第42図7） 7は弥生土器である。有段状の口縁部をもつ甕形土器。口縁部外面に5条の擬凹線を施す。（森）

第11表 II区 土坑・ピット出土土器観察一覧表

挿図No	器種	出土地区	法量 (cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第42図1	坏	土坑3	(口)14.0 (底)約8.2 (高)3.1	やや良好	やや密 2mm以下の白色 砂粒・金雲母	(内)浅黄橙色 (外)淡浅黄橙色～ 浅黄橙色	回転ナデ	(口)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)2/3	
2	坏	土坑3	(口)13.8 (底)約7.2 (高)3.6	良好	密 2mm以下の白色 砂粒	(内)浅黄橙色 (外)濃浅黄橙色	回転ナデ→(底)ナデ	(口)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)2/3	外面墨書
3	坏	土坑3	(口)13.0 (底)約2.0 (高)3.4	良好	密 2mm以下の白色 砂粒	(内)濃黄橙色 (外)浅黄橙色～ 淡灰浅黄橙色	回転ナデ→(底)ナデ	(口)回転ナデ (底)回転ヘラ切り →ケズリ	(口)1/3	
4	台部	土坑6	(底)9.8 (高)4.5	良好	密 金雲母	橙色	(体)ミガキ (台)横ナデ	縦ミガキ	(底)5/6	
5	有段口縁甕	ピット4 B2包含層	(口)35.8 (高)10.9	やや良好	密 砂粒やや多 雲母	浅黄橙色	(口)横ナデ・ヘラ痕 (頸・上)横ナデ (頸・下)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線11条→横ナデ (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/8	
6	有段口縁甕	ピット8	(口)15.6 (高)5.4	やや良好	密 砂粒やや多	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線8条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/4	外面煤付着
7	有段口縁甕	ピット4	(口)13.8 (高)3.0	やや不良	やや粗 砂粒多・雲母	にぶい黄橙色	(口～頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線5条 (頸)横ナデ	(口)1/4	外面煤付着

第2節 包含層出土遺物

I 縄文土器（第43・44図）

本調査区の包含層から出土した縄文土器は、早期から晩期にわたる時期幅を有する。そのうち主体を占めるのは、早期および前期である。

第43図1は、押型文を有すもの。2～9は、口縁形状に沿わせ爪形文を横走させる土器である。4は、地文に縄文を有し、5～9は、条痕調整である。10～21は、条痕調整を有する胴部破片である。22は、器面の剥落が著しく詳細は不明であるが、連続爪形文の可能性はある。23～29は、爪形文を施すもの。30～35・37は、同一個体と考えられる。口唇部に刻みを有し、縄文地に半裁竹管状工具による押し引き沈線を有する。36は、口唇端部に縄文を有する。突帯を有し、突帯下部を爪形文で刻む。

第44図1～23は、縄文を有する。24は、口唇部に粘土紐を貼りつけることにより肥厚させる。25は、太さの異なる2本の半裁竹管状工具で文様を構成するもの。26は、刺突を有する曲線的な沈線で文様を構成するもの。27は、縄文地に沈線により文様を構成するもの。28は、外反しながら立ち上がり、口唇端部が内弯する口縁を呈する。縄文施文後に横位方向に波状に沈線を施す。29は、口縁部に横走する沈線を多条に配す。上部の沈線間に刺突を配する。口唇端部に縄文を有す。31は、縄文を施すもの。30・32は、縦位の条痕を施すもの。

それぞれの時期を以下に述べる。

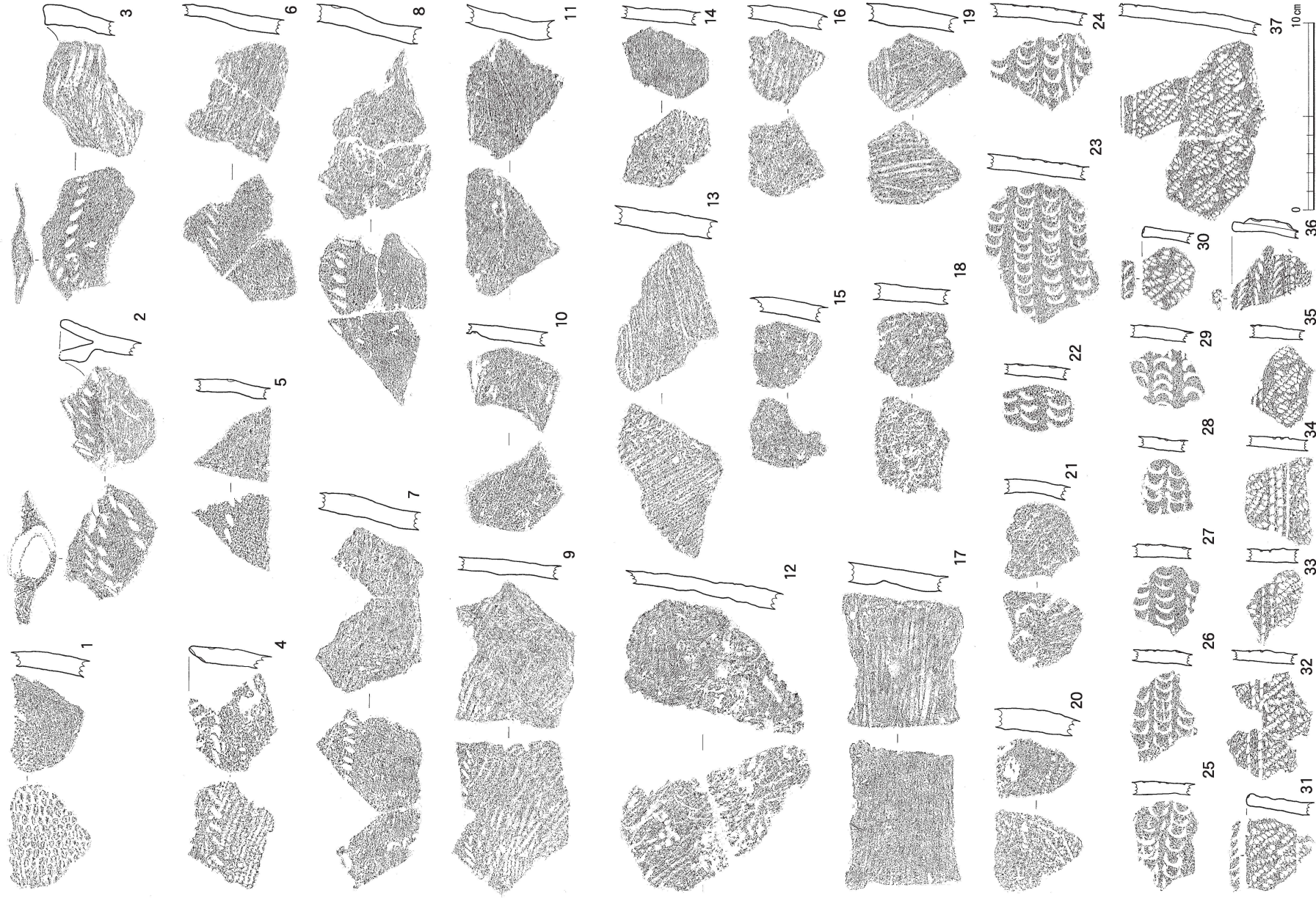
第43図1は、早期に位置づけ得る。2～21は、粕畑式～入海式に併行する位置づけを与えることができよう。22は、北白川下層Ⅰb式～Ⅱa式にあたるものであろう。23～29は、爪形文の形状から北白川下層Ⅱb式に併行する位置づけが推察される。30～35・37は、前期後葉に位置づけられる。36は、手法から北白川下層Ⅲ式に近似する位置づけを与えることができよう。

第44図1～23は、前期に位置づけられよう。24・25は、船元Ⅳ式～里木Ⅱ式に比定される。26～28は、中津式に併行するものと考えられる。29は、御経塚式の鉢形土器である。31は、胎土・色調から八日市新保式に伴う粗製の深鉢形土器であると判断される。30・32は、条痕から晩期後半と判断される。(白川)

II 弥生土器（第45～55図）

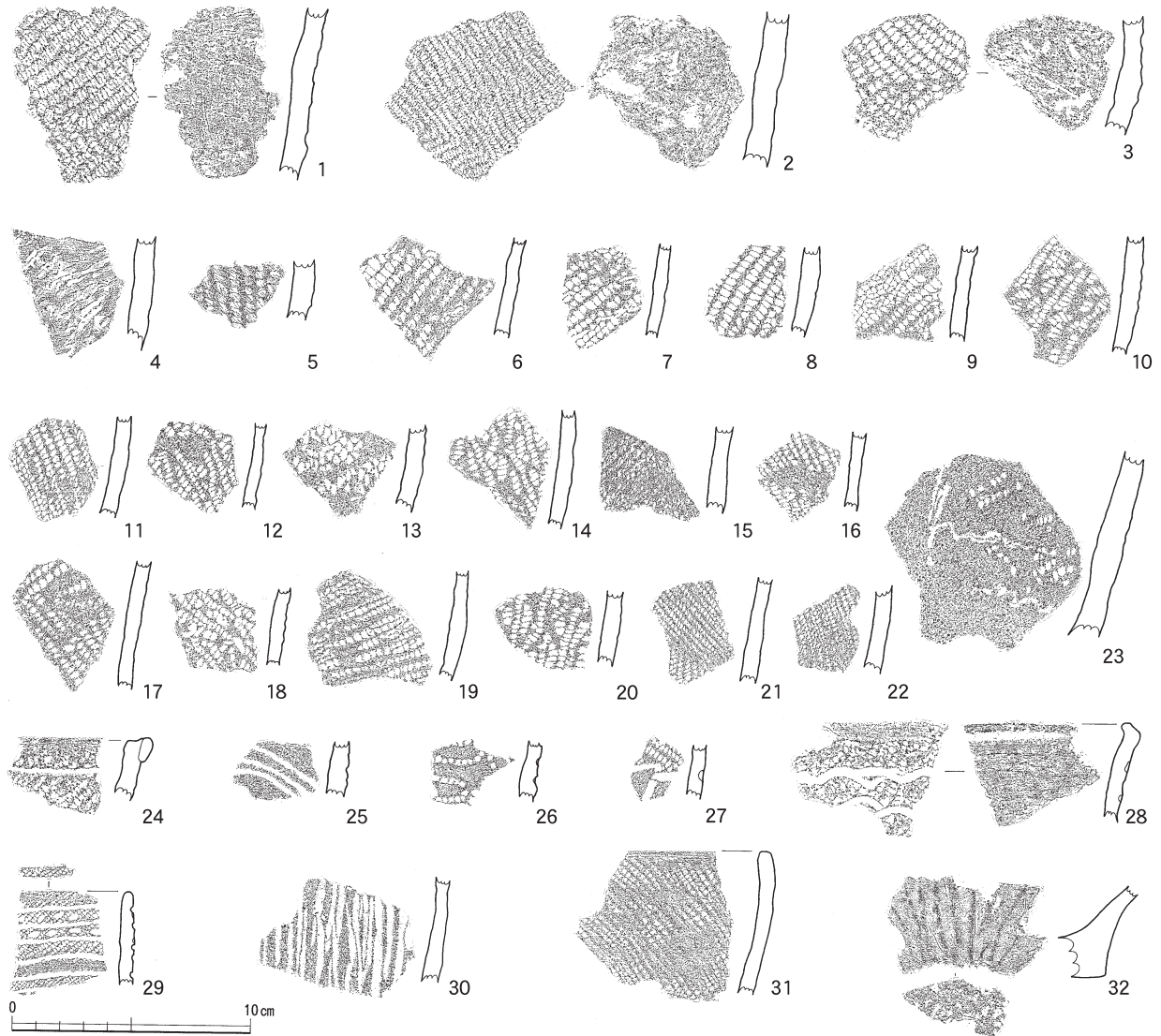
甕形土器（第45～48図、第49図1～9）

第45～48図、第49図1～7は有段状の口縁部をもつ甕形土器である。大部分が口縁部外面に擬凹線を有し、無文のものは1割程である。口縁部形態は内傾・内弯するもの（第46図1～6）、直立するもの（第45図1、第46図7～20）、外傾するもの（第45図2～6、第47図1～20）、外反するもの（第45図7・8、第48図1～18、第49図1～7）がある。第46図20は口縁部に強い横方向のナデ調整を加えた結果、中央で括れた形態をもつ。口縁端部の形態は、丸く収めるもの（第45図1～6、第46図1～3・5～7・14～17、第47図2～6・8～11、第48図2・15、第49図5～7）、平坦面をもつもの（第46図8～10、第47図1、第48図11・12、第49図2）、先細りするもの（第45図8、第46図18～20、第47図12、第48図14・18、第49図1・4）、外反するもの（第45図7、第48図6～10）がある。口縁部形態は外傾または外反するものが多く、外傾するものには口縁端部を丸く収めるものが、外反するものには口縁端部が先細りするものや外反するものが多いようである。体部最大径は中心より上に置かれ、自立不可能な平底をもつ。口径35cmを越える大型品（第45図8）から口径11.1cm・器高10.1cmの小型品（第47図20）まで



第43图 II区 包含層出土土器実測図(1) (縮尺1/3)

第2節 包含層出土遺物



第44図 II区 包含層出土土器実測図(2) (縮尺1/3)

第12表 II区 縄文土器出土区一覽表

挿図No	出土地区	挿図No	出土地区	挿図No	出土地区	挿図No	出土地区	挿図No	出土地区
第43図1	B12包含層	第43図15	C17包含層	第43図29	B17包含層	第44図6	C7包含層	第44図20	表採
2	C13包含層	16	C15包含層	30	表採	7	C17包含層	21	B7包含層
3	C7包含層	17	C5包含層	31	表採	8	C17包含層	22	B7包含層
4	C13包含層	18	C14包含層	32	B17包含層	9	C17包含層	23	B13包含層
5	C17包含層	19	C17包含層	33	B17包含層	10	B17包含層	24	B7包含層
6	C13包含層	20	B17包含層	34	C17包含層	11	B3包含層	25	C6包含層
7	C5包含層	21	C6包含層	35	B17包含層	12	B17包含層	26	C10包含層
8	C8包含層	22	B17包含層	36	C16包含層	13	C11包含層	27	B13包含層
9	C14包含層	23	C17包含層	37	B17包含層	14	B17包含層	28	B17包含層
10	C14包含層	24	B17包含層	第44図1	C17包含層	15	B7包含層	29	A11包含層
11	B17包含層	25	B17包含層	2	C14包含層	16	表採	30	A10包含層
12	C17包含層	26	C17包含層	3	C1包含層	17	C9包含層	31	A12包含層
13	C6包含層	27	B17包含層	4	C16包含層	18	B17包含層	32	B17包含層
14	C16包含層	28	B17包含層	5	C1包含層	19	C17包含層		

あるが、口径17cm前後を中心として、口径14～20cmのものがほとんどである。外面調整は体部に斜め方向のハケ調整を施したあと、頸部に横ナデ調整を施している。内面調整は口縁部に横ナデ調整を施し、指頭圧痕が残るものが多い。頸部内面はほとんどが平坦部をもち、平坦面に横ナデ調整やハケ調整を施し、指頭圧痕が残るものもある。体部内面は上半部に斜めまたは横方向のケズリ調整を施したあと、底部から上方向にケズリ調整を施す。第45図7は内外面に赤彩を施す。同図8は焼成良好で調整も丁寧な精製品である。第46図6は口縁部外面にハケ調整を施したあと、擬凹線を施す。第47図4は頸部外面に、同図5は口縁部外面下端に篋状工具による刺突が見られる。同図13・15は頸部内面にミガキ調整を施す。同図18は内外面にミガキ調整を施し、口縁部内面と外面全面に赤彩を施す。台部が付く可能性がある。第48図8は口縁端部に篋状工具による3個のキザミが見られる。同図11は体部外面・口縁部外面にミガキ調整を施す。壺形土器の可能性もある。第49図6は体部外面に目の粗いハケ調整を、頸部内面の平坦面にミガキ調整を施す。口縁部内外面に赤彩痕が残る。同図8・9は「く」の字状の口縁部をもつ甕形土器である。8は口縁端部を面取りし、9はやや上方へ摘み上げている。どちらも内外面に強い横ナデ調整を施している。

壺形土器（第49図10～13、第50図、第51図1～6）

第49図11～13、第50図1～3は有段状の口縁部をもつ壺形土器である。第49図10は球形の体部に安定した平底をもつ。同図11は甕形土器に近い器形であるが、外面全体にハケ調整を施したあと、部分的にミガキ調整を施す。底部に3本の直線からなる篋描きの記号文が見られる。同図12・13、第50図1は口縁部下端を外下方へ突出させる。第50図1は肩部に突帯を貼り付け、その上に棒状工具の側面でキザミを施した大型品である。同図2・3は口縁部外面に擬凹線を施す。どちらも小型で焼成も甘い。外面に煤が付着している。同図4は受口状の口縁部の下端に粘土帯を貼り付けていたと見られ、剥離痕が残る。同図5は長頸の壺形土器の系譜を引き、受口状の口縁部をもつ。同図15・16は有段状の口縁部をもつ台付の壺形土器である。扁球状の体部をもつ。同図7～14も有段状の口縁部をもつが、同図7・9・10・14は内外面に丁寧なミガキ調整を施した精製品で、同図11・13は赤彩を施し、台部が付く可能性がある。同図17・18・22は短頸直口の壺形土器で櫛描波状文を施し、器形に差異はあるものの、文様・胎土ともによく似た土器である。どれも上から下方向へ文様を施している。同図19・20は短頸広口の壺形土器である。内外面に丁寧なナデ調整を施し、20は精製品と言ってもよいものである。第51図1はやや外傾して開く口縁部をもつ直口の壺形土器で、焼成良好な精製品である。第50図2・3は無頸の壺形土器で、3は短く立ち上がった口縁部に2個一対の円孔を2箇所配してあり、第54図17のような蓋形土器とセットになると思われる。第51図5は肩部突帯直下に櫛状工具による刺突文と、直線文3条を施す。第51図6は櫛描直線文と篋状工具による刺突文を施している。

鉢形土器（第51図7～18、第52図1～8）

第51図7～11は有段状の口縁部をもつ鉢形土器である。7・8は外傾して開く口縁部をもつ精製品である。同図9・10は外反して開くやや長めの口縁部をもつ。10は体部が浅く、高坏形土器の坏部に近い器形である。同図11は短い口縁部に擬凹線を施している。同図12～14は有段状の口縁部をもつ台付の鉢形土器で、13は口縁部外面に沈線を12条施し、赤彩を施している。14は12・13に比べて口縁部が短く、底部に焼成前に円孔を施した精製品で、体部と台部との接合部に、「コ」の字状工具によるキザミを施している。同図15・16は「く」の字状の口縁部をもつ鉢形土器である。同図17は底部に円孔を有する鉢形土器で、底部内面に篋状工具による縦方向のナデ調整を施している。第52図2～5も底部が欠損して

いるが、底部に円孔を有する可能性がある。第51図18は深い体部をもつ尖底の鉢形土器で、精製品である。第52図1は直線的に立ち上がる深い体部をもつ。同図7は口径が大きく、浅い体部をもつ精製品である。

高坏形土器（第52図9～17、第53図1～9）

第52図9～17、第53図1は坏部が有段の鉢状を呈する。第52図9・11は坏部が碗状でやや深く、口縁部が大きく外反して開く。同図16も同様の器形であるが、9・11に比べてやや小型である。同図10は坏部が浅く、口縁部が大きく開き、端部に沈線を施す。同図15は浅い坏部に短い口縁部をもち、赤彩を施している。脚部は4個の円孔を施し、無段の柱状脚が付く。第53図4～6は小型の高坏型土器である。4・5は坏底部からの立ち上がりが明瞭で、6は坏部が浅い碗状を呈する。第53図8のような「ハ」の字状に開く脚部が付くと思われる。同図7は坏部が碗状に大きく開き、同図9は坏底部と口縁部の境に稜をもち、口縁部が短く外反して開く。

器台形土器（第53図10～12・17～21、第54図1～12）

第53図10～12は受部が有段状の器台形土器で、丁寧なミガキ調整を施した精製品である。脚部は有段の柱状脚が付く、同図11は2個一対の円孔を施し、同図12は3個の円孔と4条の沈線を施す。脚部は他にも、無段の柱状脚（同図17・18）や、短く太い柱状脚（同図19）、受部から「ハ」の字状に開くもの（同図20・21）がある。第54図1～12はいわゆる装飾器台である。1は口縁端部内外面に篋状工具でキザミを施し、円孔や逆三角形の透孔を施している。2は受部端面内外面に篋状工具によるキザミを施し、円孔を穿つ。3は垂下部分に円形スタンプ文とS字スタンプ文を上から下へ順に施し、4個の円孔を穿つ。5は垂下部分に擬凹線を7条施し、垂下部分と受部の接合面にはハケ調整を施している。6は4個の円孔を穿ち、裾部に直線文と羽状の刺突文を施している。7は口縁部と垂下部分にミガキ調整を施したあと、擬凹線を施し、三角形の透孔を上下交互に配する。8～11は焼成や調整など良好な精製品であるが、1～4に比べて小型で加飾も少なく、涙滴形の透孔のみを施している。12も小型であるが、円孔とおそらく涙滴形の透孔を施すと考えられる。1と2、5と6、9と10は胎土・焼成からそれぞれ同一個体と考えられる。

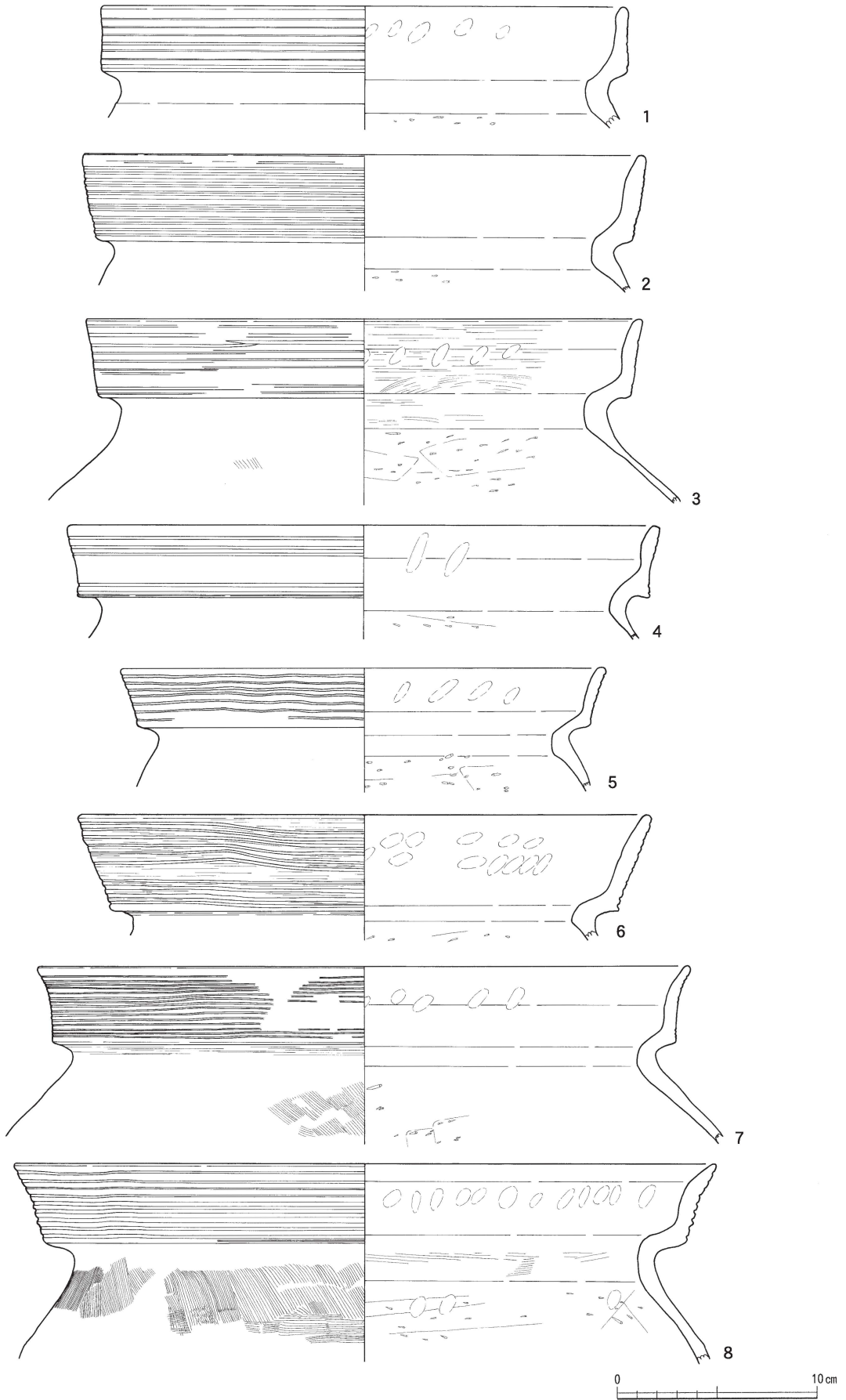
蓋形土器（第54図13～19）

13～15は天井部が外反して開き、16・17は内弯して開く。17はミガキ調整を施したあとに2個一対の円孔を2箇所施す。第51図3のような無頸の壺形土器とセットとなると思われる。

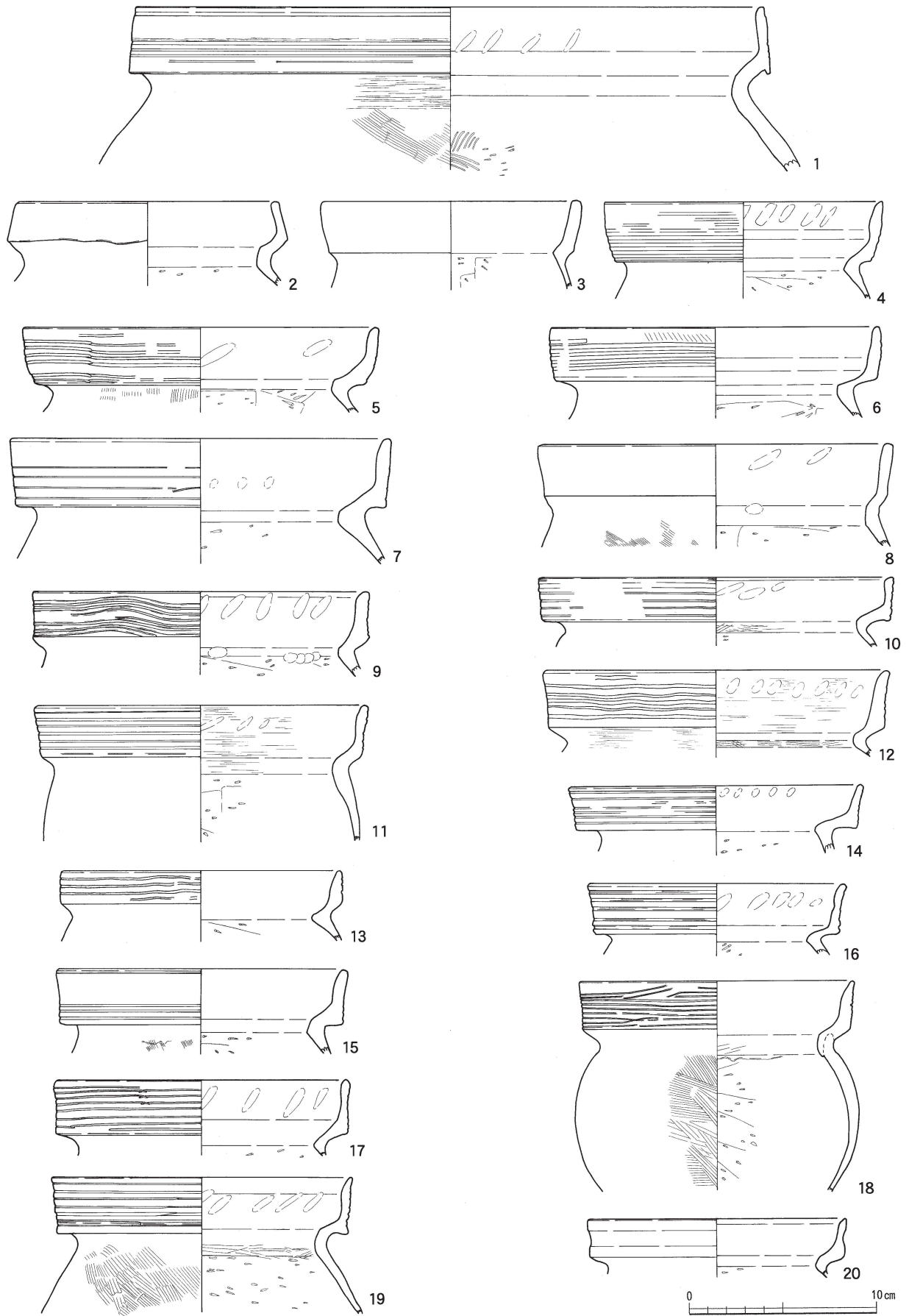
脚部・底部・台部（第53図13～16・22・23、第54図20～24、第55図）

第53図13～16・22・23は高坏形土器または器台形土器の脚部である。13～16は端部を上方へ折り返した裾部である。13は篋描直線文を2条施す。14は裾端部に粘土帯を貼り付けて上下に拡張し、沈線を2条施し、脚部との接合面にキザミを施す。16は折り返しの接地部に篋状工具によるキザミを施している。22・23は無段の柱状脚の裾部である。23の円孔は焼成前に穿ち、焼成後内側から拡大させている。第54図20～24、第55図1～5は甕形土器・壺形土器などの底部である。安定した広い平底のもの（第54図20・23・24）、狭い平底のもの（第55図1・2）、丸底のもの（同図3・4）などがある。第54図21は焼成後三角形に穿孔を施している。同図22の外面には「×」状の篋描きの記号文が見られる。第55図6～14は台部である。全て「ハ」の字状に開き、端部に面を取るものが多い。甕形土器・壺形土器・鉢形土器の台部と考えられる。

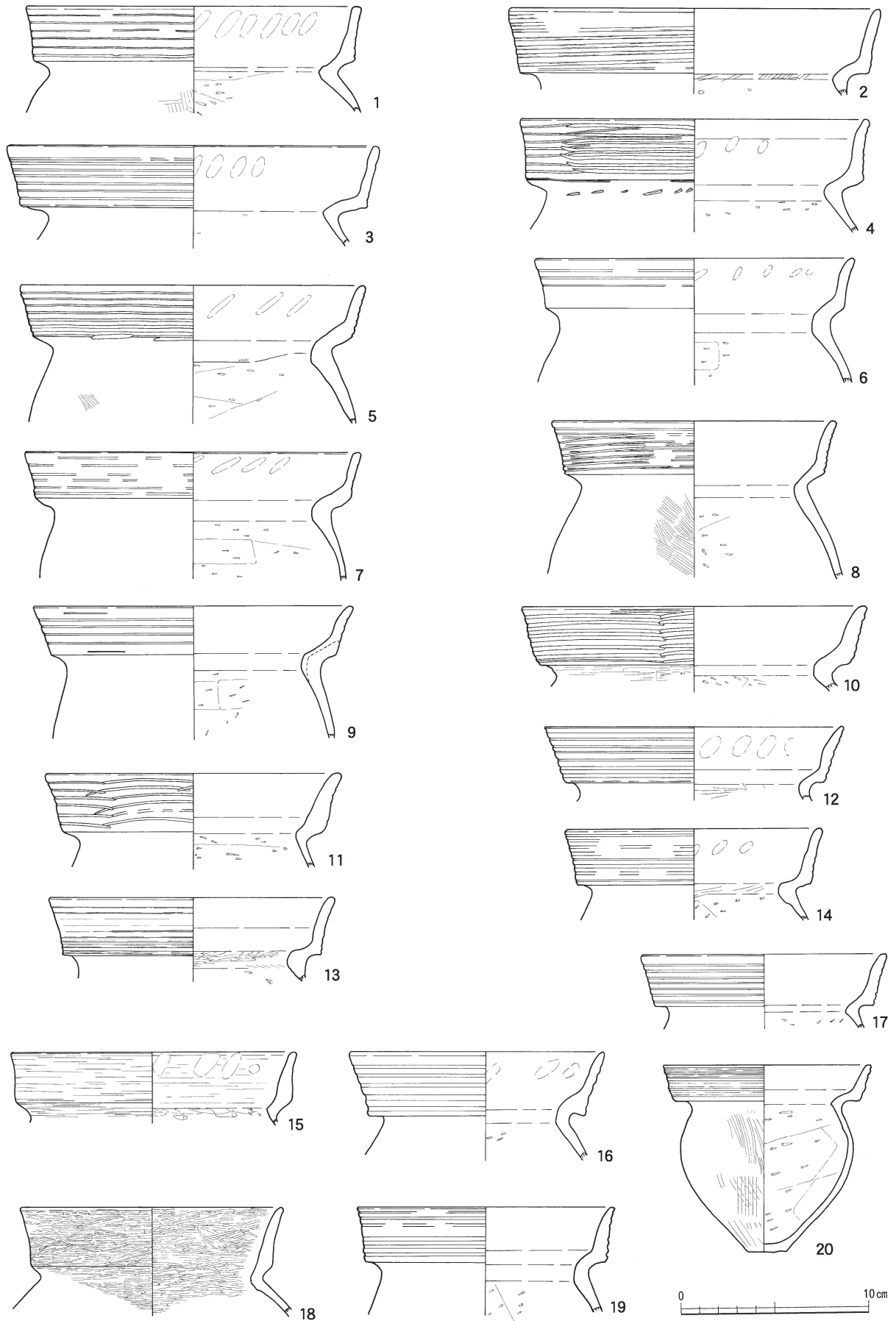
1・2号住居跡同様、弥生時代終末期（月影式期）が主体の時期と思われる。しかし、いわゆる装飾



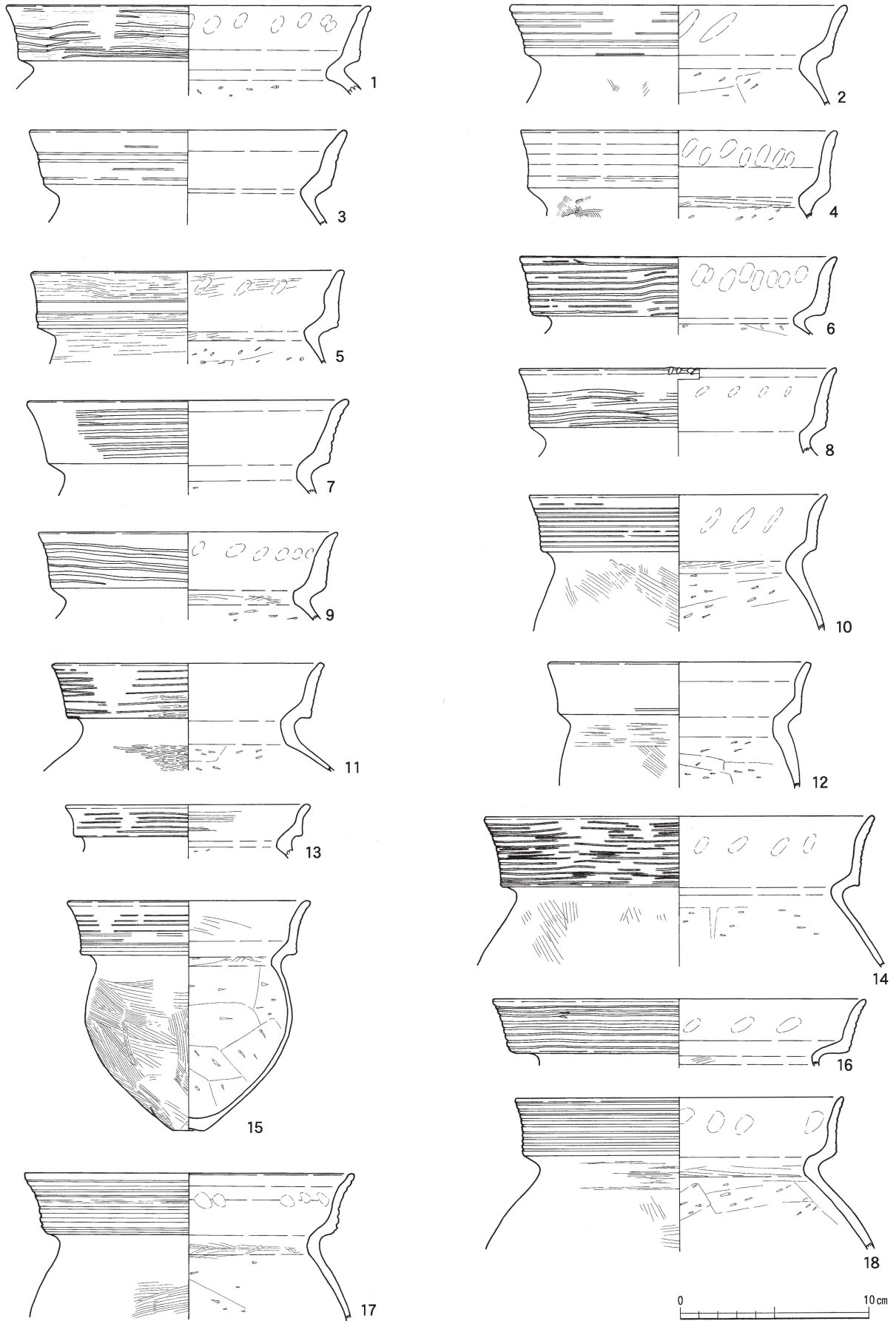
第45図 II区 包含層出土土器実測図(3) (縮尺1/3)



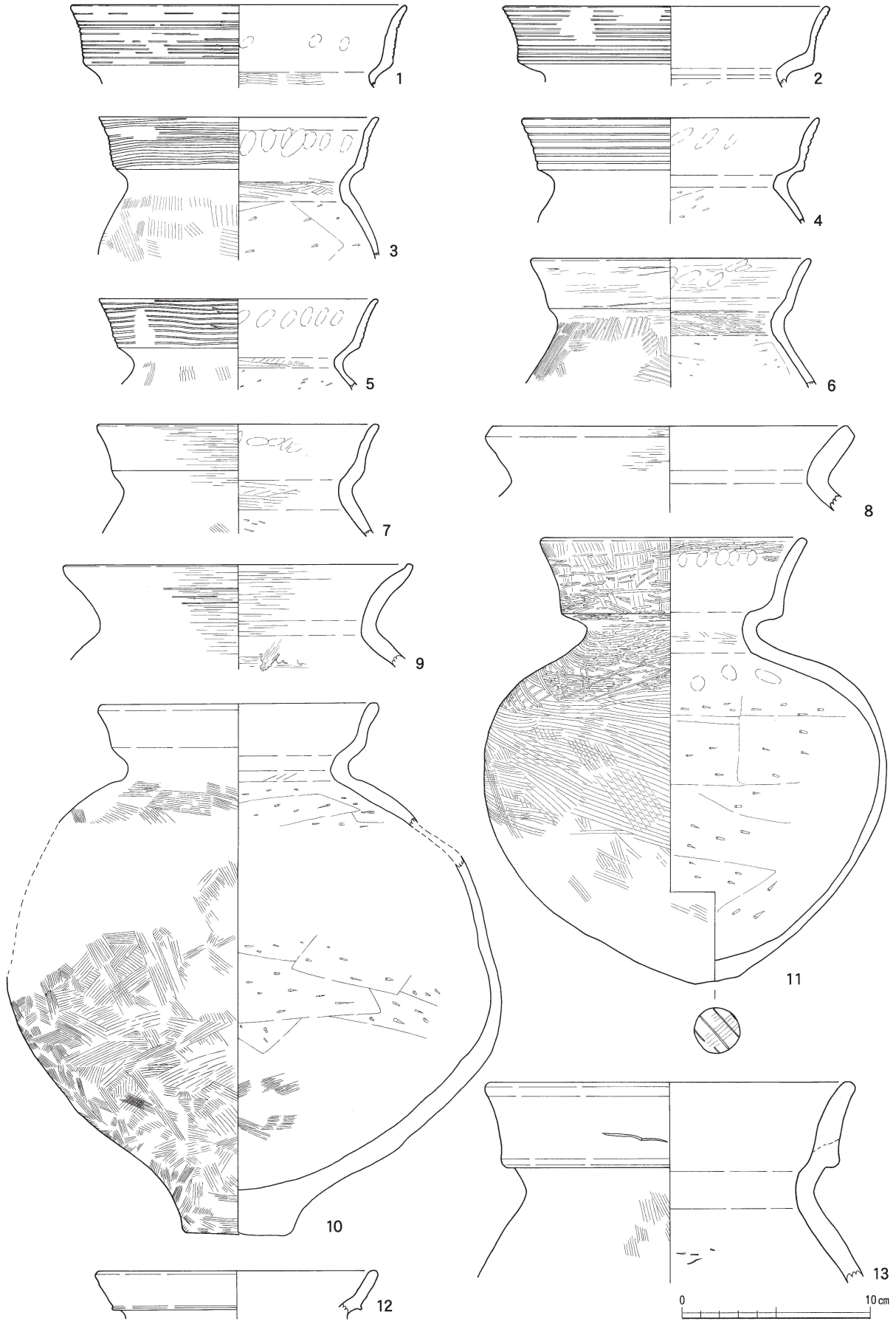
第46図 II区 包含層出土土器実測図(4) (縮尺1/3)



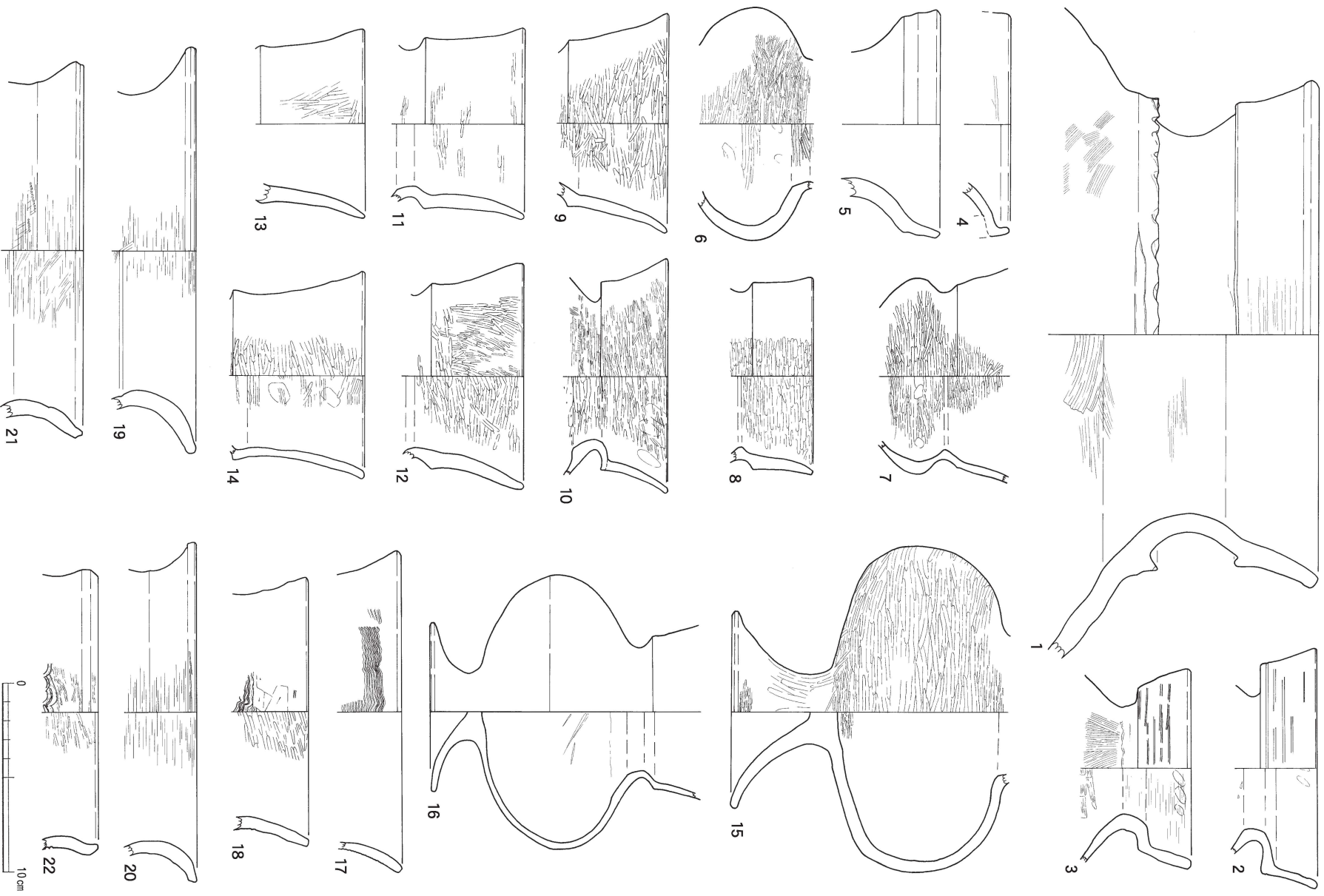
第47図 II区 包含層出土土器実測図(5) (縮尺1/3)



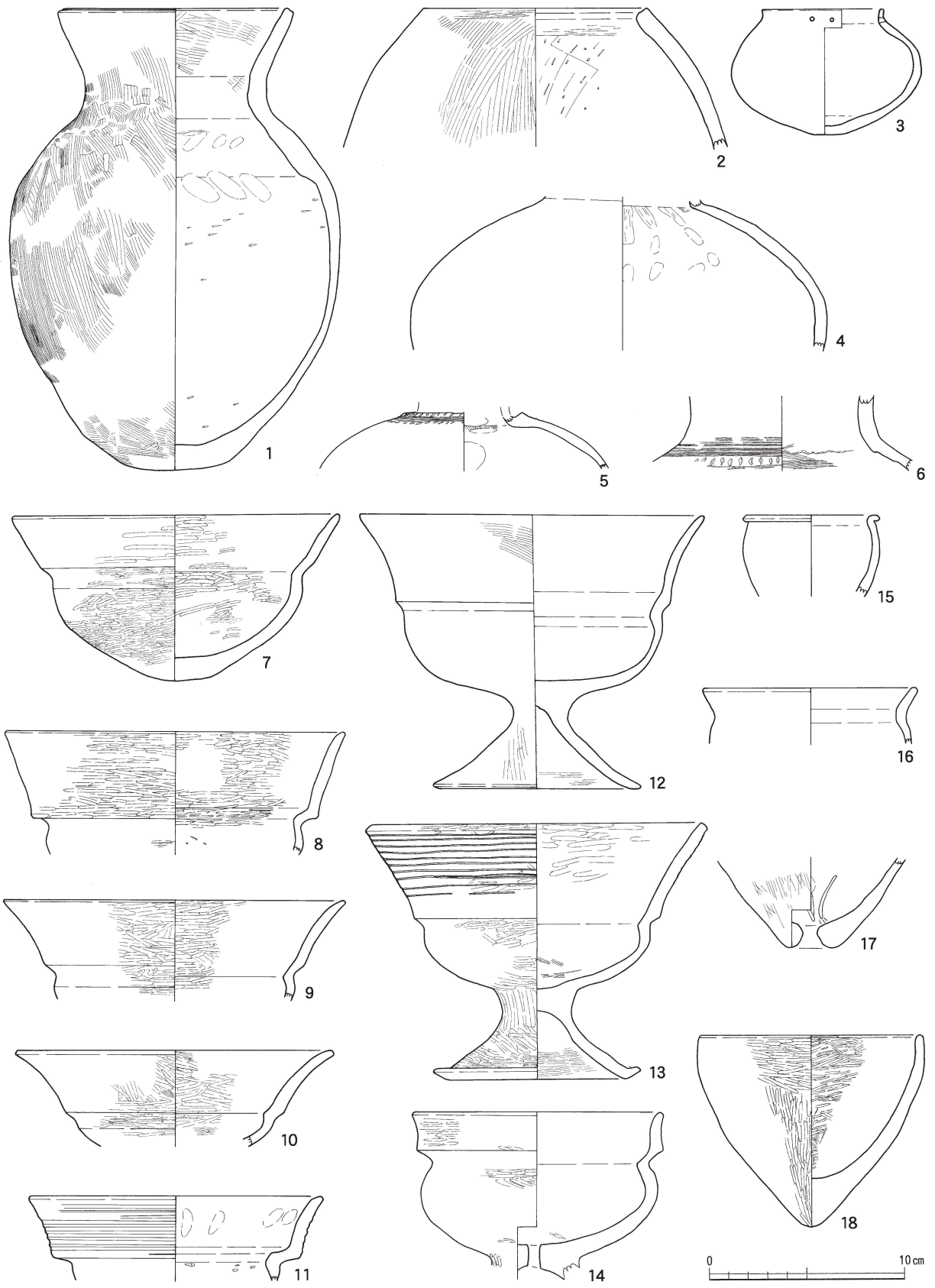
第48圖 II区 包含層出土土器実測図(6)(縮尺1/3)



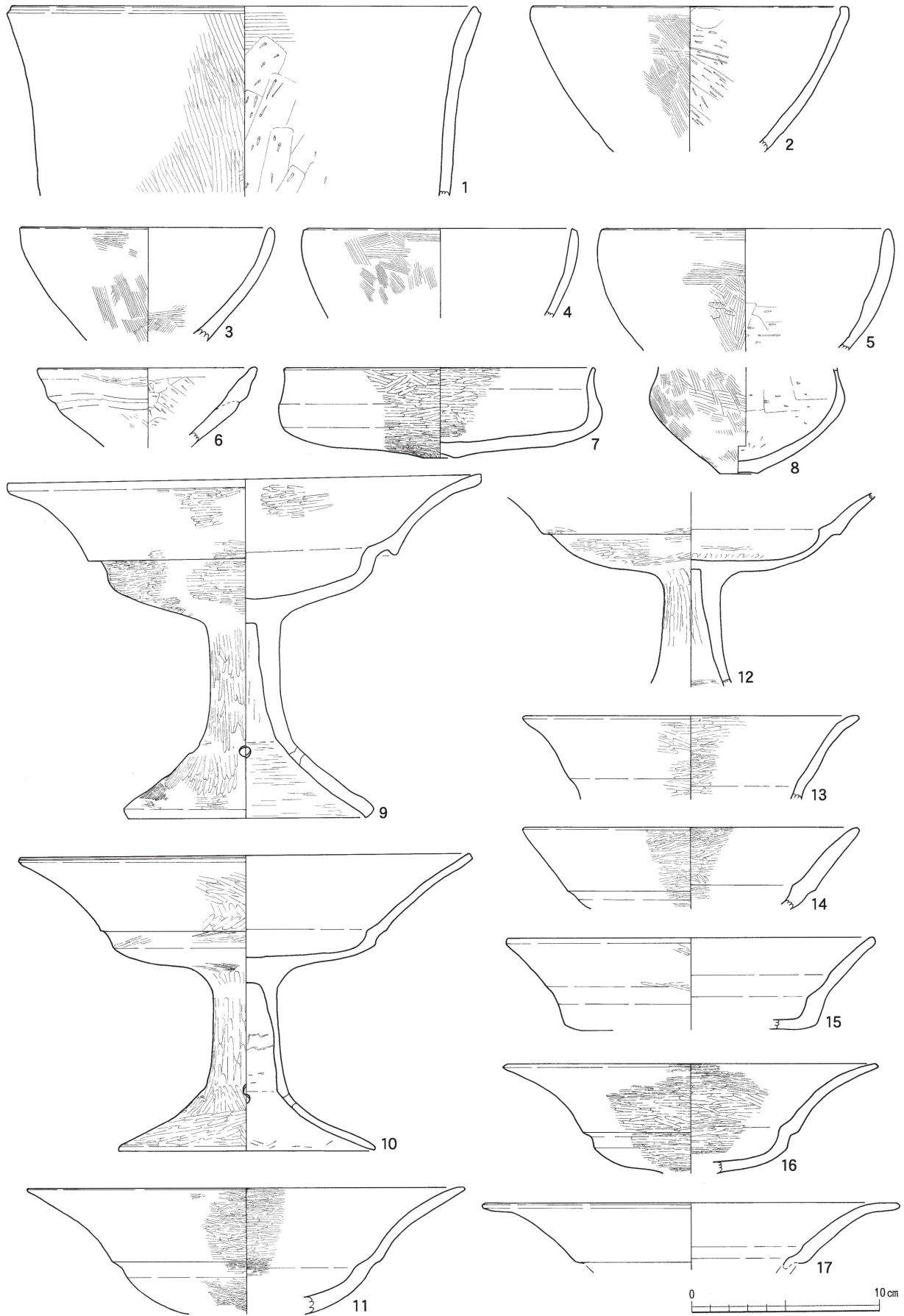
第49図 II区 包含層出土土器実測図(7) (縮尺1/3)



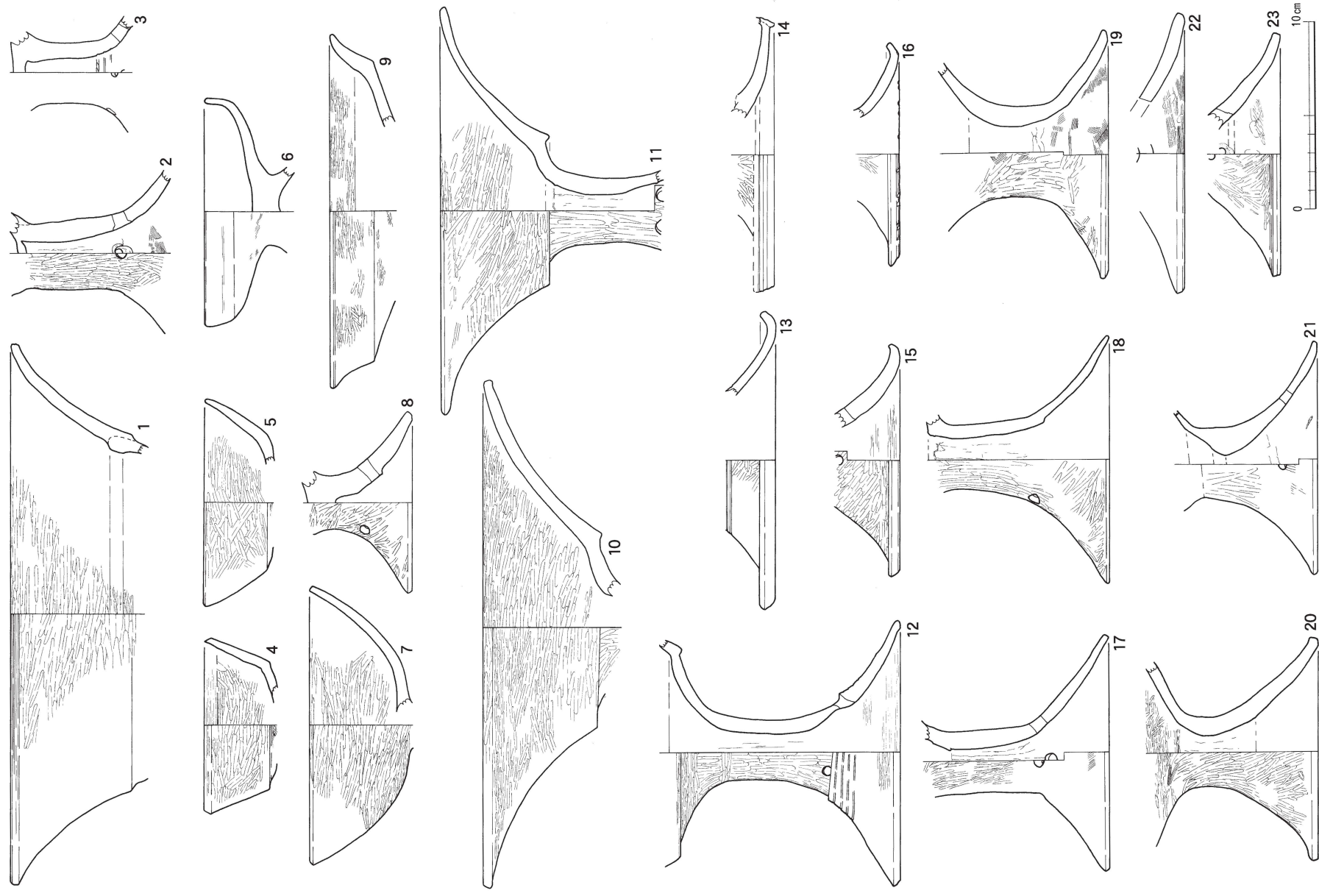
第50圖 II区 包含層出土土器実測図(8)(縮尺1/3)



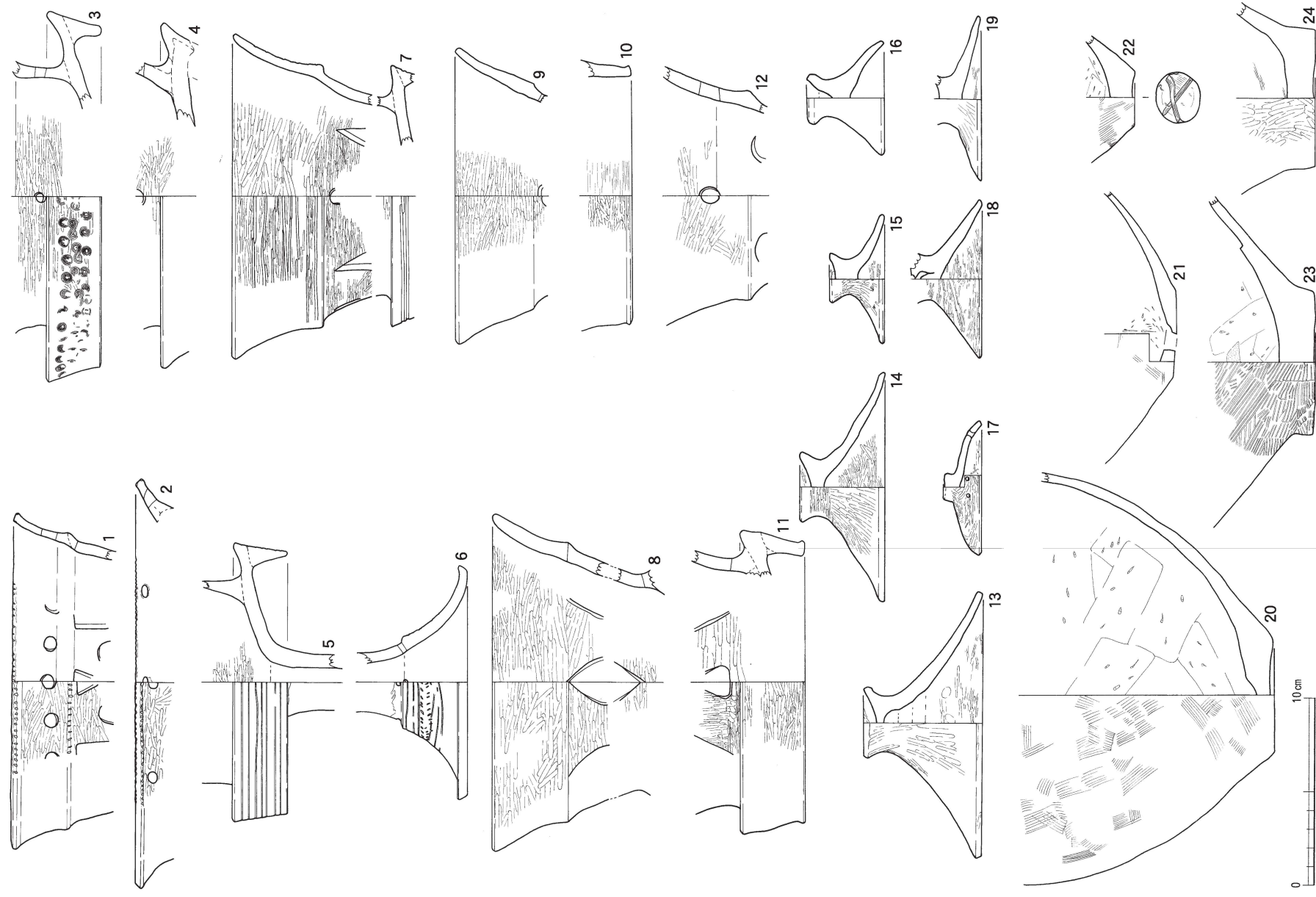
第51図 II区 包含層出土土器実測図(9) (縮尺1/3)



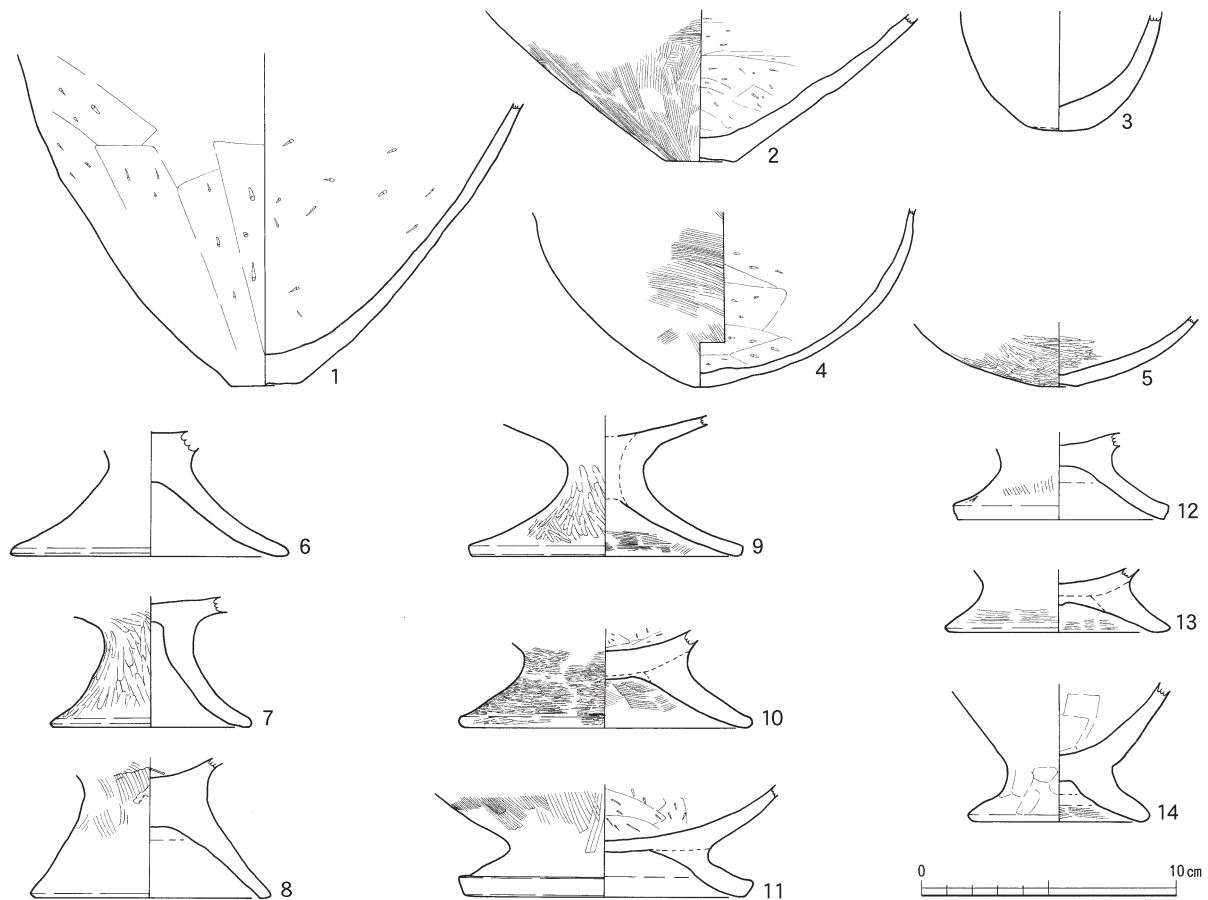
第52図 II区 包含層出土土器実測図(10) (縮尺1/3)



第53図 II区 包含層出土土器実測図(11) (縮尺1/3)



第54图 II区 包含層出土土器実測图 (12) (縮尺1/3)



第55図 II区 包含層出土土器実測図(13) (縮尺1/3)

器台の中には、月影式期のなかでも古相を示すもの(第54図1~3)と新相を示すもの(同図8~12)がみられ、時期差が認められる。また、後続する白江式期にみられる櫛描文を施した壺形土器(第50図17・18、第51図5・6)や、東海系と考えられる高坏形土器(第53図7)なども若干存在し、白江式期まで含む可能性も指摘できるが、白江式期に特徴的な外来的要素が確実には見られず、ほぼ月影式期の範疇に収まるものと考えられる。(森)

参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1991 『畝田遺跡』
 金沢市教育委員会 1996 『西念・南新保遺跡Ⅳ』
 楠 正勝 2003 「装飾器台の成立と展開」『庄内式土器研究』XXVI 庄内式土器研究会
 田嶋明人 1986 「Ⅳ考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察—」『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2005 『坂井兵庫地区遺跡群Ⅱ』 遺物編
 堀 大介 2002 「古墳成立期の土器編年—北陸南西部を中心に—」『朝日山』 朝日町教育委員会
 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』 石川考古学研究会

第2節 包含層出土遺物

第13表 II区 包含層出土弥生土器観察一覧表

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第45図1	有段口縁甕	C12包含層	(口)26.4 (高)6.1	やや不良	やや密砂粒やや多	橙色	(口)横ナデ (体)横ナデ	(口)擬凹線7条 (頸)横ナデ	(口)1/6	外面煤付着
2	有段口縁甕	A 8・A 14 包含層	(口)28.6 (高)6.2	やや不良	やや粗砂粒多	橙色	(口~頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線13条 (頸)横ナデ	(口)1/4	口縁部外面煤付着
3	有段口縁甕	C17包含層	(口)28.0 (高)9.2	やや不良	やや粗砂粒やや多	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線9条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/14	頸部外面煤付着
4	有段口縁甕	A 14・B 14 包含層	(口)30.0 (高)5.8	不良	やや粗砂粒少	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (体)ケズリ	(口)擬凹線5条 (頸)横ナデ	(口)1/6	
5	有段口縁甕	B 5包含層	(口)24.6 (高)6.3	不良	やや密砂粒やや多	(内)浅黄色 (外)浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線7条 (頸)横ナデ	(口)1/6	口縁部外面煤付着
6	有段口縁甕	C 8・C 9包 含層	(口)28.8 (高)6.4	良好	やや密砂粒多	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線10条 (頸)横ナデ	(口)1/6	外面全体煤付着
7	有段口縁甕	B5・B7・B8 包含層	(口)33.0 (高)9.0	やや良好	やや密砂粒少	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線15条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/3	内外面赤彩?
8	有段口縁甕	B 9・B 10・ C 9包含層	(口)35.4 (高)10.1	良好	密砂粒少・雲母	にぶい黄褐色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ (肩)ケズリ、指頭圧痕	(口)擬凹線10条 (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)2/3	口縁部外面煤付着
第46図1	有段口縁甕	B14包含層	(口)33.8 (高)8.8	良好	やや密砂粒多・雲母	(内)灰白色 (外)褐灰色 ~灰白色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ (体)ケズリ・ハケ	(口)擬凹線5条→横ナデ (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/8	
2	有段口縁甕	A 13・B 13 包含層	(口)14.1 (高)4.2	良好	密砂粒少	(内)灰白色 (外)浅黄橙色	(口~頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)横ナデ (体)縦ハケ	(口)1/4	外面煤付着
3	有段口縁甕	A 11・B 10 包含層	(口)14.0 (高)4.6	良好	やや密砂粒多量	橙色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)ミガキ?	(口)1/4	
4	有段口縁甕	B 5包含層	(口)15.0 (高)5.2	良好	密砂粒やや多	(内)浅黄橙色 (外)浅黄橙色 ~橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (体)ケズリ	(口)擬凹線5条→横ナデ (頸)横ナデ	(口)1/4	
5	有段口縁甕	A13包含層	(口)19.2 (高)4.6	やや良好	密砂粒多	にぶい褐色 ~浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線6条→横ナデ (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/4	
6	有段口縁甕	A 13・B 13 包含層	(口)17.8 (高)5.0	やや不良	密砂粒少	橙色	(口~頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)ハケ→擬凹線5条 (頸)横ナデ	(口)1/3	外面煤付着
7	有段口縁甕	A14包含層	(口)20.4 (高)6.8	不良	やや密砂粒多量	(内)浅黄色 (外)浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (体)ケズリ	(口)擬凹線4条→横ナデ (頸)横ナデ	(口)1/6	
8	有段口縁甕	B 13・B 14 包含層	(口)19.0 (高)5.5	良好	やや密砂粒少・雲母	橙色	(口~頸)横ナデ 指頭圧痕 (体)ケズリ	(口~頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/3	口縁部外面煤付着
9	有段口縁甕	B10包含層	(口)18.2 (高)4.1	良好	やや密砂粒少・雲母	灰色	(口~頸)横ナデ 指頭圧痕 (体)ケズリ	(口)擬凹線7条 (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/2	
10	有段口縁甕	A13包含層	(口)19.0 (高)3.7	良好	密砂粒少	灰白色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ→ハケ (体)ケズリ	(口)擬凹線6条 (頸)横ナデ	(口)1/12	外面全体煤付着
11	有段口縁甕	B 5包含層	(口)18.0 (高)7.3	良好	やや密砂粒多・雲母	(内)赤褐色 (外)暗赤褐色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線7条 (頸)横ナデ	(口)1/6	体部外面煤付着
12	有段口縁甕	B 5・C 5 包含層	(口)18.4 (高)4.7	良好	密砂粒やや多 雲母	(内)赤褐色 (外)橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線6条→横ナデ (頸)強い横ナデ	(口)1/4	
13	有段口縁甕	B 9包含層	(口)15.2 (高)4.8	不良	やや密砂粒少	橙色	(口~頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線4条 (頸)横ナデ	(口)1/8	
14	有段口縁甕	B14包含層	(口)19.8 (高)3.7	不良	密砂粒多	浅黄色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (体)ケズリ	(口)擬凹線8条→ナデ (頸)横ナデ	(口)1/4	
15	有段口縁甕	B 5包含層	(口)17.6 (高)4.5	良好	やや密砂粒多・雲母	にぶい黄褐色	(口~頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線→横ナデ (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/6	
16	有段口縁甕	A 8包含層	(口)14.0 (高)3.9	良好	密砂粒少・雲母	(内)にぶい赤褐色 (外)灰黄色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)浅い擬凹線5条 (頸)横ナデ	(口)1/4	外面煤付着
17	有段口縁甕	A 14・B 14 包含層	(口)16.0 (高)4.2	不良	密砂粒多	灰白色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (体)ケズリ	(口)擬凹線7条 (頸)横ナデ	(口)1/4	
18	有段口縁甕	B 13・B 14 包含層	(口)14.8 (高)11.3	良好	やや密砂粒やや多	にぶい赤褐色	(口)横ナデ (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線8条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/6	
19	有段口縁甕	A13包含層	(口)16.2 (高)7.4	良好	やや密砂粒多	(内)褐灰色 (外)にぶい橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸-上)横ナデ (頸-下)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線7条 (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/6	外面煤付着
20	有段口縁甕	B 10・C 11 包含層	(口)14.0 (高)3.0	良好	密砂粒少・雲母	橙色	(口~頸)横ナデ (体)ケズリ	横ナデ	(口)1/4	外面煤付着
第47図1	有段口縁甕	A16包含層	(口)18.1 (高)5.8	良好	密砂粒少・雲母	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (体)丁寧なケズリ	(口)擬凹線6条→横ナデ (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/4	
2	有段口縁甕	B2・B3・C2 包含層	(口)20.0 (高)5.6	やや不良	やや密砂粒多	浅黄褐色	(口)横ナデ (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)浅い擬凹線8条 (頸)横ナデ	(口)2/3	口縁部外面煤付着

第6章 II区の遺構・遺物

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第47図3	有段口縁甕	B14包含層	(口)20.0 (高)5.5	良好	密 砂粒少・雲母	(内)灰白色 (外)灰黄褐色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)横ナデ	(口)擬凹線7条→横ナデ (頭)横ナデ	(口)1/4	外面煤付着
4	有段口縁甕	A14・B14 包含層	(口)18.6 (高)6.1	やや 良好	密 砂粒やや多	にぶい黄褐色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線7条 (頭)横ナデ・櫛先刺突文	(口)1/3	外面煤付着
5	有段口縁甕	C12包含層	(口)18.6 (高)7.5	やや 不良	やや粗 砂粒多	(内)浅黄褐色 (外)にぶい橙色	(口)横ナデ・ヘラ痕 (頭)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線7条 (頭)横ナデ (口・下)ヘラ痕(体)ハケ	(口)1/8	口縁部外面煤付 着
6	有段口縁甕	A13・A14 包含層	(口)17.0 (高)6.2	やや 不良	やや粗 砂粒多	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線3条 (頭)横ナデ	(口)1/4	
7	有段口縁甕	B2包含層	(口)18.0 (高)6.9	やや 良好	やや密 砂粒多・雲母	浅黄褐色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線6条→横ナデ (頭)横ナデ	(口)1/6	口縁部外面煤付 着
8	有段口縁甕	B14包含層	(口)15.1 (高)8.2	良好	密 砂粒多・雲母	(内)橙色 ～にぶい橙色 (外)橙色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線8条 (頭)横ナデ(体)ハケ	(口)1/6	外面全体煤付着
9	有段口縁甕	A13包含層	(口)17.1 (高)7.2	やや 不良	やや密 砂粒多量・雲母	橙色	(口～頭)不明 (体)ケズリ	(口)擬凹線5条 (頭)横ナデ	(口)1/6	
10	有段口縁甕	C1包含層	(口)18.6 (高)4.3	不良	やや粗 砂粒多量	橙色	(口～頭)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線7条 (頭)縦横ナデ	(口)1/4	外面煤付着
11	有段口縁甕	B2包含層	(口)16.0 (高)5.1	良好	密 砂粒少し・雲母	橙色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線6条 (頭)横ナデ	(口)1/6	
12	有段口縁甕	D1包含層	(口)16.0 (高)4.0	やや 良好	やや密 砂粒少	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)ハケ	(口)擬凹線8条 (頭)横ナデ	(口)1/4	
13	有段口縁甕	A12・A13・ B13包含層	(口)15.4 (高)4.5	良好	密 砂粒少量 金雲母	赤褐色	(口)横ナデ(体)ケズリ (頭)ハケ→横ミガキ	(口)擬凹線8条→横ナデ (頭)横ナデ	(口)1/4	
14	有段口縁甕	B3包含層	(口)13.8 (高)4.9	やや 良好	やや粗 砂粒多・雲母	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線8条 (頭)横ナデ	(口)1/4	
15	有段口縁甕	B9・B11 包含層	(口)15.4 (高)3.9	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	(内)褐色 (外)にぶい赤褐色	(口)強い横ナデ・指頭圧痕 (頭)横ミガキ (体)ケズリ→ナデ	強い横ナデ	(口)1/4	内外面煤付着
16	有段口縁甕	B5包含層	(口)12.8 (高)5.8	やや 不良	粗 砂粒やや多 雲母	浅黄色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線5条 (頭)横ナデ	(口)1/3	
17	有段口縁甕	A5・B5包 含層	(口)13.2 (高)4.0	やや 不良	やや密 砂粒少	浅黄褐色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線7条 (頭)横ナデ	(口)1/4	頸部外面煤付着
18	有段口縁甕	B9・C12包 含層	(口)14.0 (高)5.9	良好	密 雲母	橙色	横ミガキ	横ミガキ	(口)1/3	口縁部内外面赤 彩 頸部外面煤付 着?
19	有段口縁甕	B9包含層	(口)14.0 (高)5.7	良好	密 砂粒少・雲母	(内)赤褐色 (外)橙色	(口～頭)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線6条 (頭)横ナデ	(口)1/4	口縁部外面煤付 着
20	有段口縁甕	B14包含層	(口)11.1 (底)2.1 (高)10.1	良好	やや粗 砂粒多・雲母	にぶい黄褐色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線4条 (頭)横ナデ(体)ハケ	(口)2/3	外面全体煤付着
第48図1	有段口縁甕	B2包含層	(口)19.4 (高)4.8	良好	やや密 砂粒少・雲母	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線5条→横ナデ (頭)横ナデ	(口)1/4	
2	有段口縁甕	A10包含層	(口)18.0 (高)5.3	不良	やや粗 砂粒多量・雲母	浅黄褐色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)横ナデ(体)ケズリ	(口)浅い擬凹線7条 (頭)横ナデ(体)ハケ	(口)1/3	外面煤付着
3	有段口縁甕	B1・B2 包含層	(口)17.0 (高)4.9	やや 良好	やや粗 砂粒やや多 雲母	橙色	(口～頭)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線6条→横ナデ (頭)横ナデ	(口)1/3	外面煤付着
4	有段口縁甕	B10包含層	(口)17.0 (高)4.6	良好	密 砂粒少・雲母	(内)浅黄褐色 (外)橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線5条→横ナデ (頭)横ナデ(体)ハケ	(口)1/4	
5	有段口縁甕	B5・C6 包含層	(口)16.8 (高)5.0	良好	やや密 砂粒多・雲母	(内)橙色 (外)褐灰色～橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線5条→横ナデ (頭)横ナデ	(口)1/4	外面煤付着
6	有段口縁甕	B5包含層	(口)17.0 (高)4.1	やや 不良	粗 砂粒やや多	(内)浅黄褐色 (外)灰白色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線8条 (頭)横ナデ	(口)1/3	外面煤付着
7	有段口縁甕	A16包含層	(口)17.2 (高)5.0	良好	密 砂粒やや多	橙色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線8条 (頭)横ナデ	(口)1/4	
8	有段口縁甕	B2包含層	(口)17.0 (高)4.7	良好	密 砂粒少・雲母	浅黄褐色	(口)横ナデ・指頭圧痕	(口・端)窺キザミ3目 (口)浅い擬凹線5 (頭)横ナデ	(口)1/4	口縁部下端外面 煤付着
9	有段口縁甕	A13包含層	(口)16.0 (高)4.2	良好	やや密 砂粒少・雲母	赤褐色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)ハケ(体)ケズリ	(口)浅い擬凹線6条 (頭)横ナデ	(口)1/4	
10	有段口縁甕	C4・C5 包含層	(口)16.0 (高)7.3	良好	やや密 砂粒やや多 雲母	(内)にぶい黄褐色 (外)橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頭)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線10条 (頭)横ナデ(体)ハケ	(口)1/4	外面煤付着
11	有段口縁甕	B5包含層	(口)14.6 (高)5.8	良好	密 砂粒多・雲母	にぶい褐色 ～浅黄褐色	(口)横ナデ (頭)ミガキ? (体)ケズリ	(口)擬凹線6条→横ミガキ (頭)横ナデ(体)ミガキ	(口)1/3	

第2節 包含層出土遺物

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第48図12	有段口縁甕	A14包含層	(口)14.0 (高)6.6	やや良好	密 やや多・雲母	橙色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口~頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/4	外面煤付着
13	有段口縁甕	B17包含層	(口)13.0 (高)2.5	良好	やや密 砂粒少	(内)淡赤浅黄橙色 ~浅黄橙色 (外)浅黄橙色 ~淡橙色	(口)横ハケ (体)ケズリ	(口)浅い擬凹線5条 (頸)横ナデ	(口)1/12	
14	有段口縁甕	B1・B3包含層	(口)20.8 (高)8.0	不良	密 砂粒やや多 雲母	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)浅い擬凹線11条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/4	外面煤付着
15	有段口縁甕	B13包含層	(口)13.0 (底)1.7 (高)12.25	やや不良	やや粗 砂粒多	(内)ぶい赤褐色 (外)浅黄橙色	(口)横ナデ (頸)ハケ (体)ケズリ	(口)浅い擬凹線8条 (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/6	外面全体煤付着
16	有段口縁甕	B9包含層	(口)20.0 (高)3.6	不良	やや粗 砂粒少	(内)橙色 (外)灰黄色	(口)横ナデ (頸)ハケ	(口)擬凹線8条 (頸)横ナデ	(口)1/4	外面煤付着
17	有段口縁甕	B9包含層	(口)17.6 (高)7.8	良好	密 砂粒多・雲母	黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸・上)ナデ (頸・下)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線7条 (頸)横ナデ (体)ハケ	(口)5/6	外面煤付着
18	有段口縁甕	B7・B8・B9包含層	(口)17.6 (高)8.1	良好	やや密 砂粒少	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線9条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/3	
第49図1	有段口縁甕	B2包含層	(口)18.0 (高)4.5	やや不良	やや粗 砂粒多	(内)褐灰色 (外)浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ハケ	(口)擬凹線11条 (頸)横ナデ	(口)1/12	
2	有段口縁甕	B2・C2包含層	(口)17.0 (高)4.1	良好	やや密 砂粒やや多 雲母	(内)浅黄橙色 ~灰黄色 (外)浅黄橙色	(口~頸)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線13条 (頸)横ナデ	(口)1/3	外面煤付着
3	有段口縁甕	B9包含層	(口)15.0 (高)7.6	やや良好	密 砂粒少・雲母	浅黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線9条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/2	口縁部煤付着
4	有段口縁甕	B2包含層	(口)16.0 (高)5.6	不良	やや密 砂粒多	黄橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線6条 (頸)横ナデ	(口)1/4	
5	有段口縁甕	B9包含層	(口)15.0 (高)4.9	良好	密 砂粒少・金雲母	(内)浅黄橙色 (外)灰白色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)ハケ(体)ケズリ	(口)擬凹線9条 (頸)横ナデ(体)ハケ	(口)1/4	
6	有段口縁甕	A14包含層	(口)15.0 (高)6.9	良好	密 砂粒少	(内)橙色 ~浅黄橙色 (外)橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ミガキ(体)ケズリ	(口~頸)横ナデ (体)粗いハケ一部ナデ	(口)1/5	口縁部内外面赤彩?
7	有段口縁甕	A14・B14・C14包含層	(口)15.0 (高)5.9	良好	密 砂粒少・雲母	(内)橙色 (外)ぶい赤褐色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ハケ(体)ケズリ	(口~頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/4	
8	くの字甕	B2・B3包含層	(口)19.6 (高)3.8	やや不良	粗 砂粒多・雲母	褐灰色	横ナデ	横ナデ	(口)1/6	
9	くの字甕	B6包含層	(口)18.6 (高)5.0	良好	やや密 砂粒少	橙色	(口)横ナデ (体)ナデ	強い横ナデ	(口)1/4	外面煤付着
10	有段口縁壺	C17包含層	(口)15.0 (底)5.9 (高)28.9	やや不良	やや粗 砂粒多	橙色	(口~頸・上)横ナデ (頸・下)ハケ (体)ケズリ(底)ハケ	(口~頸)横ナデ (体)ハケ	(口)1/4	
11	有段口縁壺	B13包含層	(口)13.8 (底)2.3 (高)23.8	良好	やや密 砂粒多・雲母	(口)ぶい赤褐色 (体)灰白色	(口・上)横ミガキ 指頭圧痕 (口・下)ナデ(頸)ハケ (肩)指頭圧痕(体)ケズリ	(口)縦ハケ→横ミガキ (頸)横ミガキ (肩)ハケ→ミガキ (体)ハケ (底)ハケ・ヘラ痕	(口)1/1	
12	有段口縁壺	A7包含層	(口)15.0 (高)2.6	良好	やや密 砂粒少・雲母	ぶい赤褐色	横ナデ	横ナデ	(口)1/8	
13	有段口縁壺	B9・B10包含層	(口)19.6 (高)10.7	やや不良	密 砂粒少	(内)灰白色 (外)灰白色~橙色	(口~頸)横ナデ	(口~頸)横ナデ (体)縦ハケ	(口)1/3	
第50図1	有段口縁壺	A10・B9包含層	(口)26.9 (高)14.4	良好	密 砂粒少・雲母	(内)ぶい黄橙色 (外)橙色	横ナデ	(口~頸)横ナデ (肩)ハケ	(口)1/14	
2	有段口縁壺	B17包含層	(口)12.8 (高)4.4	やや不良	密 砂粒多	浅黄橙色~橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)擬凹線5?条→横ナデ (頸)横ナデ	(口)1/2	外面煤付着
3	有段口縁壺	A10・A11包含層	(口)14.8 (高)3.6	やや不良	やや密 砂粒少	橙色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)擬凹線4条 (頸)横ナデ	(口)1/6	外面煤付着
4	受口状口縁壺	B16包含層	(口)11.8 (高)2.6	良好	やや密 砂粒少量 金雲母	橙色	横ナデ	(口)横ナデ (頸)横ナデ→ハケ	(口)1/12	
5	受口状口縁壺	B2包含層	(口)12.0 (高)5.2	やや不良	やや密 砂粒少	(内)浅黄橙色 (外)橙色	不明	ナデ	(口)1/8	
6	壺	A11包含層	(高)6.2	良好	密 雲母	橙色	(頸)ハケ(体・下)横ナデ (体・中)横ナデ→横ミガキ (肩)横ナデ・指頭圧痕	横ミガキ	(体)1/3	外面煤付着
7	有段口縁壺	B5包含層	(高)7.0	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	橙色	(口)ミガキ(体)ケズリ →横ミガキ・指頭圧痕	横ミガキ	(体)1/4	
8	有段口縁壺	B5・C3・C4・C5包含層	(口)10.6 (高)4.4	良好	密 砂粒少・雲母	ぶい赤褐色	横ミガキ	横ミガキ	(口)1/2	

第6章 II区の遺構・遺物

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第50図9	有段口緑壺	A 8 包含層	(口)11.6 (高) (5.9)	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	橙色	横ミガキ	横ミガキ	(口)1/6	
10	有段口緑壺	A17包含層	(口)12.4 (高) (5.5)	良好	密 砂粒少・雲母	(内)灰色～黄褐色 (外)黄褐色	(口)横ミガキ・指頭圧痕 (頸)横ミガキ(肩)ケズリ	(口～頸)横ミガキ (肩)縦ハケ→横ミガキ	(口)1/3	
11	有段口緑壺	C 8 包含層	(口)10.1 (高) (7.1)	やや 良好	やや密 雲母	橙色	横ミガキ	横ミガキ	(口)1/6	内外面赤彩
12	有段口緑壺	A11包含層	(口)12.0 (高) (6.4)	良好	密 雲母	橙色	(口)横ミガキ (頸)横ナデ	(口)縦→横ミガキ (頸)横ミガキ	(口)1/6	
13	有段口緑壺	B 2 包含層	(口)10.0 (高) (5.8)	やや 不良	密 雲母	浅黄橙色	ナデ?	縦ミガキ	(口)1/6	内外面赤彩痕
14	有段口緑壺	B 9 包含層	(口)11.0 (高) (7.2)	良好	密 雲母	橙色	(口)横ハケ→横ミガキ 指頭圧痕	横ミガキ	(口)1/8	
15	台付壺	A9・B8・C7・ C 8 包含層	(底)10.4 (高) (1.8)	良好	密 砂粒ごく少量 金雲母	黄橙色	(底)ミガキ (台)横ナデ	(体)ハケ→横ミガキ (台・上)縦ミガキ (台・下)横ミガキ	(底)1/4	体部内外面煤付着
16	台付 有段口緑壺	C17包含層	(底)9.0 (高) (14.6)	やや 良好	密 砂粒少	橙色	不明	不明	(底)1/6	
17	短頸壺	C 10・C 11 包含層	(口)17.0 (高) (3.4)	良好	やや密 砂粒少量・雲母	赤褐色	横ナデ	横ナデ→櫛描波状文	(口)1/8	
18	短頸壺	B10包含層	(口)14.2 (高) (4.0)	良好	やや密 砂粒少・雲母	(内)褐色～灰黄色 (外)褐色	ハケ→横ミガキ	波状文→板ナデ	(口)1/12	
19	広口壺	C 8 包含層	(口)21.6 (高) (4.2)	良好	密 砂粒少	橙色	(口)横ナデ (頸)ハケ	(口)横ナデ (頸)ハケ→横ナデ	(口)1/12	
20	広口壺	C 8 包含層	(口)18.0 (高) (3.6)	良好	やや密 砂粒少量・雲母	橙色	横ナデ	縦ハケ→横ナデ	(口)1/6	
21	短頸壺	包含層	(口)19.6 (高) (4.1)	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	にぶい赤褐色	ナデ	(口)ナデ (頸)ハケ→横ナデ	(口)1/8	
22	短頸壺	C10包含層	(口)15.1 (高) (3.0)	良好	やや密 雲母	褐色	横ミガキ	横ミガキ→櫛描波状文	(口)1/12	
第51図1	長頸壺	C 11・C 12 包含層	(口)12.2 (底)5.5 (高) (23.8)	良好	密 砂粒少・雲母	(内)赤褐色 (外)橙色	(口～頸)斜めナデ (肩)ナデ・指頭圧痕 (体)ケズリ	(口)横ナデ (頸)縦ハケ→横ナデ (体～底)ハケ	(口)1/4	
2	無頸壺	B 9・B10・ C 8 包含層	(口)11.4 (高) (7.4)	良好	密 砂粒多量・雲母	(内)橙色 (外)赤色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)横ナデ (体)縦ハケ	(口)1/3	
3	無頸壺	B11包含層	(口)6.3 (底)1.8 (高) (6.5)	やや 不良	密 砂粒ごく少量 雲母	(内)橙色 (外)橙色～赤色	ナデ	(口)ナデ (体)不明	完形	円孔 2×2
4	壺	A 9 包含層	(高) (7.8)	良好	密 砂粒多・雲母	(内)灰白色 (外)浅黄橙色	ナデ・指頭圧痕	ナデ	(肩)1/1	
5	壺	包含層	(高) (2.9)	やや 不良	やや密	(内)淡灰色 (外)濃浅黄橙色	(頸)横ナデ (肩)ハケ・指頭圧痕	(肩)櫛先刺突文 直線文3条・櫛先刺突文	(肩)1/4	
6	壺	B14包含層	(高) (3.9)	やや 良好	密 砂粒ごく少量 雲母	(内)にぶい黄橙色 (外)橙色	(肩)横ハケ	(肩)櫛描直線文9条 露先刺突文 櫛描直線文2条残存	(肩)1/4	
7	有段口緑鉢	A 5・B 5 包含層	(口)16.9 (底)2.5 (高) (8.6)	良好	密 砂粒少・雲母	(内)橙色 (外)赤褐色	横ミガキ	横ミガキ	(口)1/2	
8	有段口緑鉢	A 14・B 14 包含層	(口)17.4 (高) (6.3)	良好	密 雲母	(内)橙色～灰黄色 (外)赤色～灰黄色	(口～頸)横ミガキ (体)丁寧なケズリ	(口)横ミガキ (頸)横ナデ(体)横ミガキ	(口)1/4	
9	有段口緑鉢	A14包含層	(口)17.6 (高) (5.2)	良好	やや密 砂粒少量・雲母	にぶい黄褐色	横ミガキ	横ミガキ	(口)1/6	口縁部内外面・ 体部外面煤付着
10	有段口緑鉢	A 9・B 9・ B10包含層	(口)16.4 (高) (5.0)	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	橙色	斜めミガキ	(口)ハケ→斜めミガキ (底)横ミガキ	(口)1/6	
11	有段口緑鉢	C14包含層	(口)15.2 (高) (4.6)	やや 良好	密 砂粒少	橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (頸)横ナデ(体)ケズリ	(口)浅い擬凹線7条 (頸)横ナデ	(口)1/2	
12	台付 有段口緑鉢	A 14・C 13 包含層	(口)18.0 (底)10.8 (高) (14.15)	不良	密 雲母	橙色	(台)強い横ナデ	(口)ハケ (台)縦ミガキ	(口)1/3	
13	台付 有段口緑鉢	A10・A11・ B11・C11・ C12包含層	(口)17.8 (底)10.8 (高) (13.4)	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	橙色	(口)横ミガキ (底)ミガキ (台)強い横ナデ	(口)横ミガキ→擬凹線12条 (底)横ミガキ (台・上)縦ミガキ (台・下)斜めミガキ	(口)1/6	外面赤彩
14	台付有孔鉢	A 9・B 8 包含層	(口)13.0 (高) (8.1)	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	橙色	(口)横ナデ (体)ミガキ	(口)横ミガキ(頸)横ナデ (体)斜めミガキ (台)縦ミガキ	(口)1/4	孔径0.5cm
15	鉢	C 7 包含層	(口)7.0 (高) (4.2)	良好	やや密 雲母	褐灰色	横ナデ	横ナデ	(口)1/4	内外面煤付着

第2節 包含層出土遺物

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第51図16	鉢	B 8 包含層	(口)11.0 (高)(2.9)	やや良好	密雲母	浅黄橙色	横ナデ	横ナデ	(口)1/8	
17	有孔鉢	B 2 包含層	(底)2.4 (高)(3.6)	やや良好	やや密砂粒少量・雲母	にぶい橙色	指頭圧痕・寛痕	縦ハケ	(底)1/1	孔径1.8cm
18	鉢	B 9 包含層	(口)11.5 (高)(9.9)	良好	密雲母	赤褐色	ケズリ→粗いミガキ	(口)横ミガキ (体)縦ミガキ	(口)1/8	
第52図1	鉢	C 8 包含層	(口)25.4 (高)(10.2)	良好	やや密砂粒多・雲母	赤色～橙色	(口)横ハケ (体)ケズリ	縦ハケ	(口)1/12	
2	鉢	A14包含層	(口)17.0 (高)(8.0)	良好	密砂粒多・雲母	(内)灰白色 (外)にぶい橙色	(口)横ナデ・指頭圧痕 (体)ケズリ	ハケ	(口)1/4	
3	鉢	C17包含層	(口)15.6 (高)(6.1)	やや良好	やや密雲母	浅黄橙色	(体・下)ハケ	(口)横ハケ (体)縦ハケ	(口)1/6	
4	鉢	B16・B17・ C17包含層	(口)14.8 (高)(4.7)	不良	やや密砂粒少量・雲母	灰白色	不明	(口)横ナデ (体)ハケ	(口)1/4	
5	鉢	A11包含層	(口)15.4 (高)(6.6)	良好	やや密砂粒少・雲母	にぶい赤褐色 ～にぶい褐色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)横ナデ (体)ハケ	(口)1/8	
6	鉢	B11包含層	(口)11.8 (高)(4.3)	良好	密砂粒少・雲母	にぶい黄褐色	(口)横ナデ (体)ケズリ	(口)横ナデ (体)ハケ→ナデ?	(口)1/8	
7	鉢	B8・B9・C9 包含層	(口)16.8 (底)1.9 (高)4.95	良好	密金雲母	赤褐色	(体)横ミガキ (底)斜めミガキ	(体)横ミガキ (底)不定方向のミガキ	(口)1/4	
8	鉢	C14包含層	(底)2.0 (高)(5.7)	やや良好	やや密砂粒多	(内)橙色 (外)橙色～褐灰色	ケズリ	(体)縦ハケ (底)ケズリ	(底)1/1	外面煤付着
9	高坏	B13包含層	(口)25.4 (底)13.45 (高)18.1	やや不良	密砂粒ごく少量 雲母	(内)浅黄褐色 (外)灰白色	(坏・口)横ミガキ (裾)強い横ナデ	(坏・口)ハケ→横ミガキ (脚～裾・上) 丁寧な縦ミガキ (裾・下)横ミガキ	(口)3/4	円孔1×4
10	高坏	B16・C16 包含層	(口)24.4 (底)13.8 (高)16.0	良好	密砂粒少・雲母	浅黄褐色～灰黄色	(坏)細かいミガキ? (脚・下)横ケズリ (裾・上)板ナデ (脚・下)ケズリ	(坏・口・端)沈線1条 (坏)ハケ→斜めミガキ (脚)縦ミガキ (裾)斜めミガキ	(口)1/3	
11	坏部	C5・C6 包含層	(口)23.4 (高)(6.8)	良好	密金雲母	(内)橙色 (外)にぶい赤褐色	横ミガキ	(坏・口)横ミガキ (坏・底)斜めミガキ	(口)1/4	坏部煤付着
12	高坏	A9・A11・ B9包含層	(高)(10.5)	良好	密砂粒ごく少量 雲母	橙色	(坏)ミガキ (裾)ハケ	(坏)ハケ→横ミガキ (脚)縦ミガキ	(坏)2/3	
13	坏部	A9・A10 包含層	(口)18.0 (高)(4.5)	良好	密砂粒少	橙色	横ミガキ	横ミガキ	(口)1/4	
14	坏部	C9包含層	(口)16.0 (高)(4.4)	良好	やや密金雲母	橙色	横ミガキ	横ミガキ	(口)1/12	口縁部内外面赤彩
15	坏部	B9・C8・C9 包含層	(口)19.8 (高)(5.0)	不良	密砂粒ごく少量	黄褐色	不明	斜めミガキ	(口)1/4	口縁部内外面赤彩
16	坏部	B9・C8 包含層	(口)20.2 (高)(5.9)	良好	密	橙色	横ミガキ	横ミガキ	(口)1/8	
17	坏部	B3包含層	(口)22.2 (高)(3.7)	やや良好	密砂粒ごく少量	橙色	不明	不明	(口)1/12	
第53図1	坏部	B5包含層	(口)29.0 (高)(7.4)	良好	密雲母	橙色～灰黄色	横ミガキ	(口・端)沈線2条 (口)斜めミガキ	(口)1/10	
2	脚部	B3包含層	(高)(8.8)	良好	密雲母	赤褐色	(脚)横ナデ (裾)ハケ→ナデ	縦ハケ→縦ミガキ	(脚)1/1	円孔1×4
3	脚部	B5包含層	(高)(6.7)	やや不良	密砂粒ごく少量	橙色	(坏)ミガキ? (脚)横ナデ・沈線3条	縦ミガキ	(脚)1/1	円孔1×4
4	小型高坏	A13・B13 包含層	(口)9.4 (高)(3.9)	良好	やや密砂粒多・雲母	橙色	(坏・口・端)横ナデ (坏・口)横ミガキ 指頭圧痕	(坏・口)ミガキ (坏・底・上)横ナデ (坏・底・下)ミガキ	(口)1/3	内面煤付着?
5	小型高坏	B4包含層	(口)11.2 (高)(3.8)	良好	密雲母	浅黄褐色	横ミガキ	ハケ→横ミガキ	(口)1/8	
6	小型高坏	A8包含層	(口)12.4 (高)(4.9)	やや不良	やや粗砂粒多・雲母	橙色	ナデ	ハケ→ナデ	(口)3/4	
7	坏部	A9・B9 包含層	(口)15.0 (高)(5.6)	良好	密砂粒少・雲母	淡橙色	横ミガキ	横ミガキ	(口)1/8	
8	脚部	A9包含層	(底)9.8 (高)(6.0)	良好	密砂粒少・雲母	浅黄褐色	横ナデ	斜めミガキ	(裾)1/2	円孔1×3
9	坏部	B8・B9・C3・ C4包含層	(口)49.0 (高)(3.6)	良好	密雲母	橙色	(受・口)横ミガキ (受・底・上)ミガキ→ナデ (受・底・下)ミガキ	ミガキ	(口)1/6	
10	受部	B10包含層	(口)27.2 (高)(7.4)	良好	密砂粒少・金雲母	橙色	斜めミガキ	(口)横ミガキ (脚)縦ミガキ	(口)3/4	
11	器台	B9・C10 包含層	(口)22.0 (高)(11.9)	やや良好	密	赤褐色	(受)ハケ→斜めミガキ (脚)縦ミガキ	(受)ハケ→斜めミガキ (脚)縦ミガキ	(口)1/2	円孔2×?

第6章 II区の遺構・遺物

挿図No	器種	出土地区	法量 (cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第53図12	器台	A 9 包含層	(底)14.3 (高)12.6	やや 良好	密 砂粒少・金雲母	にぶい黄橙色 ～橙色	(裾)強い横ナデ	(受)横ミガキ (脚)縦→横ミガキ (裾)横ミガキ →擬凹線4条	(底)3/4	受部外面煤付着 円孔1×3
13	裾部	A 16・A 17 包含層	(底)16.0 (高)2.7	良好	やや密 砂粒	浅黄橙色	横ナデ	(脚)縦ミガキ・匏描直線文2条 (脚・端)横ナデ	(底)1/12	
14	裾部	B 9 包含層	(底)14.0 (高)2.3	良好	密 雲母	灰白色	強い横ナデ	(裾)縦ミガキ (裾・折返し)横ミガキ (裾・端)横ナデ・沈線2条	(底)1/12	
15	裾部	B 7・B 8・C 8包含層	(底)12.6 (高)3.5	良好	密 砂粒ごく少量	(内)赤色 (外)橙色	強い横ナデ	斜めミガキ	(底)1/2	円孔1×?
16	裾部	A 9 包含層	(底)12.0 (高)2.4	良好	やや密 砂粒少	(内)灰白色 (外)浅黄橙色	不明	(裾)縦ミガキ (裾・端)横ナデ (裾・端・下)匏先キザミ	(底)1/5	
17	脚部	B 9・B 10 包 含層	(底)12.8 (高)10.1	やや 不良	密 砂粒ごく少量	(内)にぶい橙色 (外)橙色	(裾)ナデ?	(脚)縦ミガキ (裾)ハケ→ナデ?	(裾)3/4	円孔1×4
18	脚部	C 16・C 17 包含層	(底)13.4 (高)9.9	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	(内)にぶい黄橙色 (外)橙色	(裾)横ナデ	(脚)縦ミガキ (裾)斜めミガキ	(裾)2/3	円孔1×3
19	脚部	B 9・B 10・ C 9 包含層	(底)13.4 (高)9.1	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	赤褐色	(脚)横ナデ (裾)ハケ	(脚)ハケ→縦ミガキ (裾)ハケ→斜めミガキ	(裾)1/4	
20	脚部	B 7・C 7 包含層	(底)12.0 (高)9.4	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	橙色	(受)横ミガキ (裾)横ナデ	ハケ→斜めミガキ	(裾)3/4	
21	脚部	B 3・B 4 包含層	(底)12.6 (高)7.8	やや 不良	密 砂粒ごく少量 雲母	(内)橙色 (外)にぶい赤褐色	縦ナデ	(受)横ナデ(脚)縦ミガキ (裾)ハケ→ナデ?	(裾)1/4	円孔1 残存 外面赤彩?
22	裾部	C 9 包含層	(底)15.0 (高)2.5	やや 良好	密 雲母	橙色	横ハケ・指頭圧痕	不明	(底)1/2	円孔1 残存
23	裾部	B 2 包含層	(底)13.0 (高)3.9	良好	やや密 雲母	にぶい橙色	強い横ナデ 一部ミガキ・指頭圧痕	縦ミガキ	(底)1/6	円孔1 残存
第54図1	裝飾器台	A 17 包含層	(口)18.0 (高)5.5	良好	密 砂粒少・雲母	浅黄橙色	横ナデ (受・口・端)匏先キザミ	横ミガキ (有段・上下端) 匏先キザミ	(口)1/10	
2	裝飾器台	A 16 包含層	(高)2.5	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	浅黄橙色	横ナデ (垂下・端)匏先キザミ	斜めミガキ (垂下・端)匏先キザミ	(垂下) 1/12	円孔
3	裝飾器台	B 1・B 2 包含層	(高)4.8	やや 良好	密 雲母	浅黄橙色～橙色	(受・口)横ミガキ (受・底)ナデ (垂下)横ナデ	(受・口)横ミガキ (受・底・上面)横ナデ (坏・底・下面)ミガキ (垂下)横ミガキ →スタンプ文	(垂下) 3/4	円孔1×4
4	裝飾器台	C 11 包含層	(高)3.2	良好	密 砂粒ごく少量	浅黄橙色	斜めミガキ	(受・口)横ミガキ (受・底・上面) (垂下)横ナデ (受・底・下面)ミガキ	(受)1/8	円孔1 残存
5	裝飾器台	A 10・B 10 包含層	(高)7.6	やや 良好	密	橙色	(受)横ミガキ	(受)ミガキ (垂下)擬凹線7条 →横ナデ	(受)3/4	
6	脚部	B 9・B 10 包含層	(底)12.6 (高)6.0	やや 良好	密	(内)橙色 (外)灰白色～橙色	ナデ?	(裾)匏描文施文 直線文3条・羽状刺突 文 直線文3条	(底)1/3	円孔1×4
7	裝飾器台	C 8・C 9 包含層	(口)17.4 (高)7.9	良好	やや密 砂粒少量・雲母	浅黄橙色	(受・口)横ミガキ	(受・口)横ミガキ →擬凹線8条	(口)1/8	
8	裝飾器台	A 1・B 1 包含層	(口)18.0 (高)6.3	良好	密 砂粒ごく少量 金雲母	橙色	横ミガキ	横ミガキ	(口)1/6	
9	裝飾器台	B 8 包含層	(口)18.0 (高)5.0	良好	密 雲母	橙色	横ミガキ	横ミガキ	(口)1/12	
10	裝飾器台	B 9 包含層	(高)2.7	良好	密 雲母	橙色	横ナデ	横ミガキ	(垂下) 1/3	
11	裝飾器台	B 4・B 5・C 7包含層	(高)6.1	良好	密	橙色	(受・口)横ミガキ (垂下)横ナデ	(受・口)(垂下)横ミガキ (受・底)横ナデ	(垂下) 1/6	
12	裝飾器台	A 9 包含層	(高)5.6	やや 良好	密 雲母	浅黄橙色 ～にぶい褐色	横ミガキ	斜めミガキ	(口)1/8	
13	蓋	C 17 包含層	(口)14.2 (高)6.4 (鈕)3.6	良好	密 砂粒少し・雲母	にぶい赤褐色	(鈕)縦ミガキ (天・上)ナデ(天・下)ハケ →横ミガキ・指頭圧痕	縦ミガキ	(口)1/6	

第2節 包含層出土遺物

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第54図14	蓋	B7包含層	(口)12.4 (高)4.6 (鈕)3.8	良好	密 砂粒ごく少量 金雲母	橙色	(鈕)ナデ・一部ミガキ (天)横ミガキ	(鈕)横ミガキ (天)縦ミガキ	(鈕)1/1	外面赤彩
15	蓋	B12・C13 包含層	(口)7.0 (高)3.0 (鈕)2.7	良好	密	橙色	丁寧な横ミガキ	(鈕~天)縦ミガキ (口)横ハケ→縦ミガキ	(口)1/2	
16	蓋	B11包含層	(口)6.2 (高)4.3 (鈕)2.8	やや 良好	密 砂粒ごく少量 金雲母	(内)浅黄橙色 (外)橙色	(鈕)横ナデ (天)ナデ	ナデ	(口)1/2	
17	蓋	B11包含層	(口)7.3 (高)2.1 (鈕)1.4	良好	密 砂粒多	橙色	横ミガキ→穿孔	(天)縦ミガキ (口)横ミガキ	ほぼ完形	円孔2×2
18	蓋	B16包含層	(口)5.6 (高)4.0	良好	密	淡灰褐色	横ミガキ	ハケ→横ミガキ	(口)2/3	
19	蓋	B1包含層	(口)9.0 (高)2.6	やや 良好	密 砂粒ごく少量 金雲母	橙色	粗いハケ	(鈕)横ナデ (天)粗いハケ	(口)1/4	外面赤彩
20	底部	C13包含層	(底)6.0 (高)13.4	やや 不良	粗 砂粒多	(内)浅黄橙色 (外)橙色	ケズリ	(体)ハケ (底)ケズリ、ハケ	(体)1/2	
21	底部	B16包含層	(底)4.7 (高)3.9	良好	やや密 砂粒少・雲母	(内)にぶい黄褐色 (外)褐灰色	ケズリ	(体)ハケ→ナデ (底)ケズリ	(底)1/1	焼成→三角形に 穿孔
22	底部	B13包含層	(底)2.8 (高)2.7	やや 良好	やや粗 砂粒多量・雲母	浅黄橙色	ケズリ	縦ハケ	(底)1/1	底部外面ヘラ記 号
23	底部	B9包含層	(底)7.7 (高)5.4	良好	密 砂粒少・雲母	(内)橙色~褐色 (外)灰色	丁寧なケズリ	ハケ	(底)1/1	体部外面煤付着
24	底部	B11包含層	(底)7.3 (高)4.3	良好	密 砂粒少 雲母	(内)浅黄褐色 (外)褐灰色	ナデ	(体)縦ミガキ (底)ケズリ	(底)1/3	
第55図1	底部	A9包含層	(底)2.9 (高)13.2	やや 良好	やや密 砂粒少	褐灰色	ケズリ	ハケ→ナデ 部分的にケズリ	(体)1/4	外面全体・内面 下半、輪状に煤 付着
2	底部	B17包含層	(底)2.6 (高)6.0	良好	密 砂粒少・雲母	(内)灰黄褐色 (外)にぶい褐色	(体)丁寧なケズリ (底)ハケ、ナデ	(体)ハケ (底)ケズリ	(底)2/3	
3	底部	B5包含層	(底)2.4 (高)4.8	やや 不良	密 金雲母	(内)橙色 (外)橙色 ~にぶい褐色	不明	不明	(底)1/1	
4	底部	B17包含層	(高)7.0	やや 良好	粗 砂粒多量	(内)にぶい黄褐色 (外)褐色	ケズリ	ハケ	(底)1/1	外面全体煤付着
5	底部	A9・B9包 含層	(底)1.3 (高)2.7	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	橙色	横ミガキ	丁寧なミガキ	(底)1/1	内外面煤付着
6	台部	B3包含層	(底)11.1 (高)5.0	やや 不良	密 砂粒ごく少量	(内)にぶい赤褐色 (外)橙色	不明	不明	(口)1/6	外面赤彩?
7	台部	B5包含層	(底)8.0 (高)5.2	良好	密 砂粒少・雲母	にぶい橙色	(体)ケズリ (台)ナデ	縦ミガキ	(底)1/1	
8	台部	B2包含層	(底)9.5 (高)5.6	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	にぶい赤褐色	(体)ナデ (台)横ナデ	(台・上)縦ハケ (台・下)横ナデ	(底)1/2	
9	台部	B5・B6包 含層	(底)10.4 (高)5.5	やや 良好	密 砂粒ごく少量 雲母	(内)浅黄褐色 (外)橙色	(体)ナデ (台)横ハケ	縦ミガキ	(底)1/3	
10	台部	B3包含層	(底)11.7 (高)4.0	良好	密 砂粒ごく少量 雲母	(内)にぶい黄褐色 (外)橙色	(体)丁寧なケズリ (台)横ハケ→横ナデ	横ミガキ	(底)1/4	
11	台部	B5包含層	(底)11.2 (高)4.5	良好	やや密 砂粒やや多	橙色	(底)ケズリ (台)横ナデ	(体)縦ハケ (台)横ナデ	(底)1/1	
12	台部	B1包含層	(底)8.5 (高)3.4	良好	やや密 砂粒多・雲母	(内)浅黄褐色 (外)橙色	(体)ケズリ (台)横ナデ	縦ハケ→横ナデ	(底)1/3	
13	台部	B3包含層	(底)8.9 (高)2.6	良好	密 砂粒少・雲母	(内)褐灰色 (外)にぶい黄褐色	(体)ケズリ (台)横ナデ	横ナデ	(底)1/3	
14	台部	B13包含層	(底)7.2 (高)5.5	良好	密 砂粒多	にぶい橙色	(体)ケズリ→ナデ (台)横ハケ→ナデ	(台)指押え→ナデ	(底)3/4	

Ⅲ 須恵器・土師器 (第56・58～65図)

古墳時代の土器 (第56図 1～12)

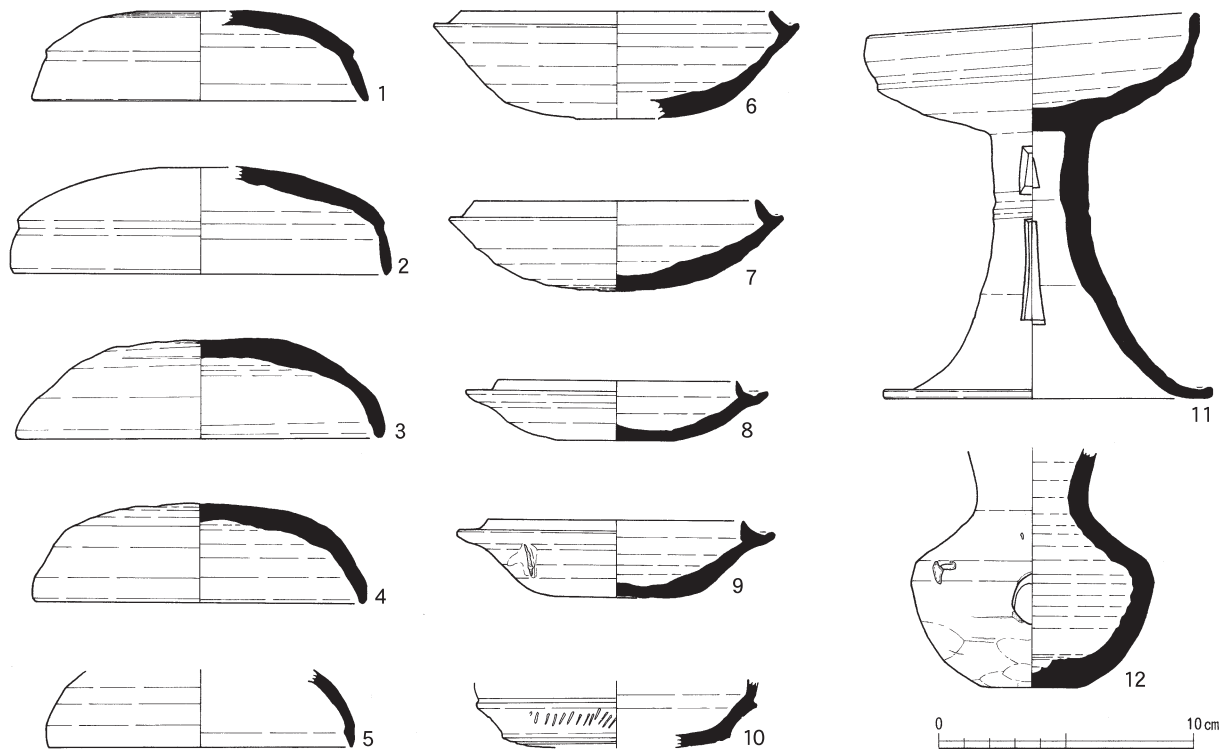
すべて須恵器であり、集中せず広域に分布していることから、二次的に調査区に混入したものと考えられる。

1～3は坏蓋である。1・2は蓋の天井部と体部との境に稜線が退化した凹線が巡る。口縁端部は若干先細りをするが明確でない。3は天井部と体部の境がなく、口縁端部内側にやや強めのナデを巡らす。4は小型でかつ体部と底部との変化点付近よりヘラ削りが施されているなど、蓋というよりも無台坏(かえりのある蓋とセットになる、いわゆる坏G)の可能性がある。5は小片であるが小型の蓋の口縁部と思われる。

6～9は坏である。6・7は口径に差があるが、両者とも底部ヘラ切り離し未調整である。8・9は口径が10cm以下と小型化していて、9の方が底部から口縁部にかけて直線的で変化が少ない。

10・11は高坏である。10は高坏の身の部分で、体部に1条の稜線を巡らせ、その下にやや崩れた刺突を施す。11は長脚2段高坏であり、稜線の退化した凹線を体部に巡らす、無文である。スカシは痕跡風ではなく内部まで貫通するように、しっかりと2段2方に設けている。12は甕である。口縁部を欠く。

これらの遺物の時期は、もっとも古いのはTK43型式期(1・2)であり、新しいのはTK217型式期(5・8・9)である。この遺物の時期幅は、東古市縄手遺跡から南方に約1km離れた東諏訪間1・2号墳と共通している。また、古墳群に近接する大畑古窯の操業時期も、6世紀後半から7世紀初頭であり、当遺跡周辺の遺跡が古墳時代末の限られた時期に集中する傾向が見て取れる。



第56図 II区 包含層出土土器実測図(14) (縮尺1/3)

平安時代前期の土器（第57図）

包含層から出土した当該期の遺物には、須恵器、土師器、緑釉陶器がある。これらについて、食膳具では坏類、調理具では長胴甕、鍋を中心に下記の通り分類を行った。

須恵器

坏A：環状の高台を持たない坏を坏Aとし、下記のように細分する。

- a：底部から体部が外に開き気味に立ち上がり、全体的に厚手のもの
- b 1：底部から体部が外に開き気味に立ち上がり、全体的に薄手のもの
- b 2：底部から体部が外に開き気味で直線的に長く立ち上がり、全体的に薄手のもの
- c：底部と体部にかけて折れ曲がるように立ち上がり、全体的に薄手で扁平、小型のもの
- d：底部を静止糸切り技法で切り離す、いわゆるベタ高台のもの

坏B：環状で1 cm未満の高さの高台を持つ坏を坏Bとし、下記のように細分する。

- a：底部から体部が上方に立ち上がり、境が明瞭で、高台がその変化点よりも内側に接着されるもの
- b 1：底部から体部が内弯しつつ、外に開き気味に立ち上がるもの
- b 2：底部から体部が内弯しつつ、口縁部にかけては直線的立ち上がる、やや深めのもの
- c：底部を回転糸切り技法で切り離した後、高台を接着するもの

坏蓋：坏に対応する蓋を坏蓋とし、鈕を持つものを坏B蓋とし、それ以外を無鈕蓋とする。

皿A：口径に対し器高が低く、明確に坏Aと分離できるものを皿Aとし、下記のように細分する。

- a：底部と体部にかけて折れ曲がるように立ち上がり、口縁部が直線的に外に開くもの
- b：底部と体部にかけて折れ曲がるように立ち上がるが、口縁部が外に開かず上方に向き、体部がやや内弯した形状になっているもの
- c：底部と体部にかけて内弯するように立ち上がり、境が明瞭でないもの

碗B、大平鉢：環状の高台の高さが1 cm以上で、器高が6 cmを超えるものを碗Bとし、それと同形態の体部を持つものも含める。この内口径が20cmを超え、かつ口縁部上面に沈線が巡るものを大平鉢とする。

その他の器種：双耳瓶、壺、壺蓋、平瓶、直口壺、台付短頸壺、甕がある。

土師器その他

坏A：環状の高台を持たない坏を坏Aとし、下記のように細分する。

- a 1：底部から体部が外に開き気味に立ち上がり、全体的に薄手のもの
- a 2：底部から体部が外に開き気味で直線的に長く立ち上がり、全体的に薄手のもの
- b：底部と体部にかけて内弯するように立ち上がり、全体的に薄手で扁平のもの

碗A：環状の高台を持たず、底部が回転糸切り未調整のものを碗Aとし、下記のように細分する。

- a 1：底径が6 cm以上で、口径が13cm以上、器高が4 cm前後の大型のもの
- a 2：底径が6 cm以上で底部が厚く、口径が12cm前後のもの
- b 1：底径が5 cm前後で、器高が3 cm以上のもので体部が薄手のもの
- b 2：底径が5 cm前後で、器高が3 cm以上のもので体部が厚手のもの
- c：底径が4.5cm前後で、器高が3 cm未満の扁平なもの

碗B：環状の高台を持ち、底部と体部の境が明瞭でないものを碗Bとし、下記のように細分する。

- a：5 mm以上の高さの高台を持ち、器高が5 cm以上で口縁部端が上方に立ち上がるもの

b 1 : 器高が4.5cm以下のもので、底部外面の切り離し痕跡をナデ消すもの

b 2 : 器高が4.5cm以下のもので、底部外面の回転糸切り離し痕を残すもの

皿A : 口径が14cm以上で、かつ器高が2.5cm以下の扁平なものを皿Aとする。

その他 : 食膳具では緑釉陶器皿、内黒土師器がある。

長胴甕 : 口径が25cm未満で、体部が長胴と考えられるものを長胴甕とし下記のように細分する。

a : 口縁端部を上方につまみ出すもの

b : 口縁端部を上方にやや外反させつつ、つまみ出すもの

c : 口縁端部を外側につまみ出し、S字状にするもの

鍋 : 口径が25cm以上で、広口と考えられるものを鍋とし下記のように細分する。

a : 口縁端部を上方につまみ出すもの

b : 口縁端部を上方にやや外反させつつ、つまみ出すもの

c : 口縁端部を外側につまみ出し、S字状にするもの

d : S字状の口縁端部を肥厚させるもの

以下、包含層出土土器について、個別に詳細を述べる。なお法量、胎土等は遺物観察表に記載している。

須恵器

坏A (第58図1～13)

坏A aは1・2が該当する。奈良期から続く箱坏の流れを汲むが、体部は外傾しており、また扁平な形態である。

坏A b 1は3～5が該当する。3は底部・体部ほぼ同じ厚さで、ロクロ襷の幅が広くうねるように体部が引き出されている。4・5は体部が直線的だが、体部の微細な傾斜変化点は3と同様、間隔が広い。5の口縁部内面に煤状の付着物がある。

坏A b 2は6～8が該当する。6・7ともに体部に細かい間隔のロクロ襷を持つ。また共通して口縁端部にのみ重ね焼き痕を持つ。

坏A cは9～12が該当する。9は体部を欠くが、内面にみられる底部と体部との境がはっきりしている。底部内面に判読不明の墨書を持つ。10～12は口径が13cm未満、また器高も3cm未満である。12の体部外面に「□合」、底部外面に「富万呂田」と判読できる墨書を持つ。

坏A dは18が該当する。底部を静止糸切り離し技法で作り出す、いわゆるベタ高台を持ち、内弯する体部を特徴とする。

坏B (第58図14～30)

坏B aは14・15が該当する。ともに小破片であるが、高台の位置や形状から、14の方が15よりもやや先行するものと思われる。

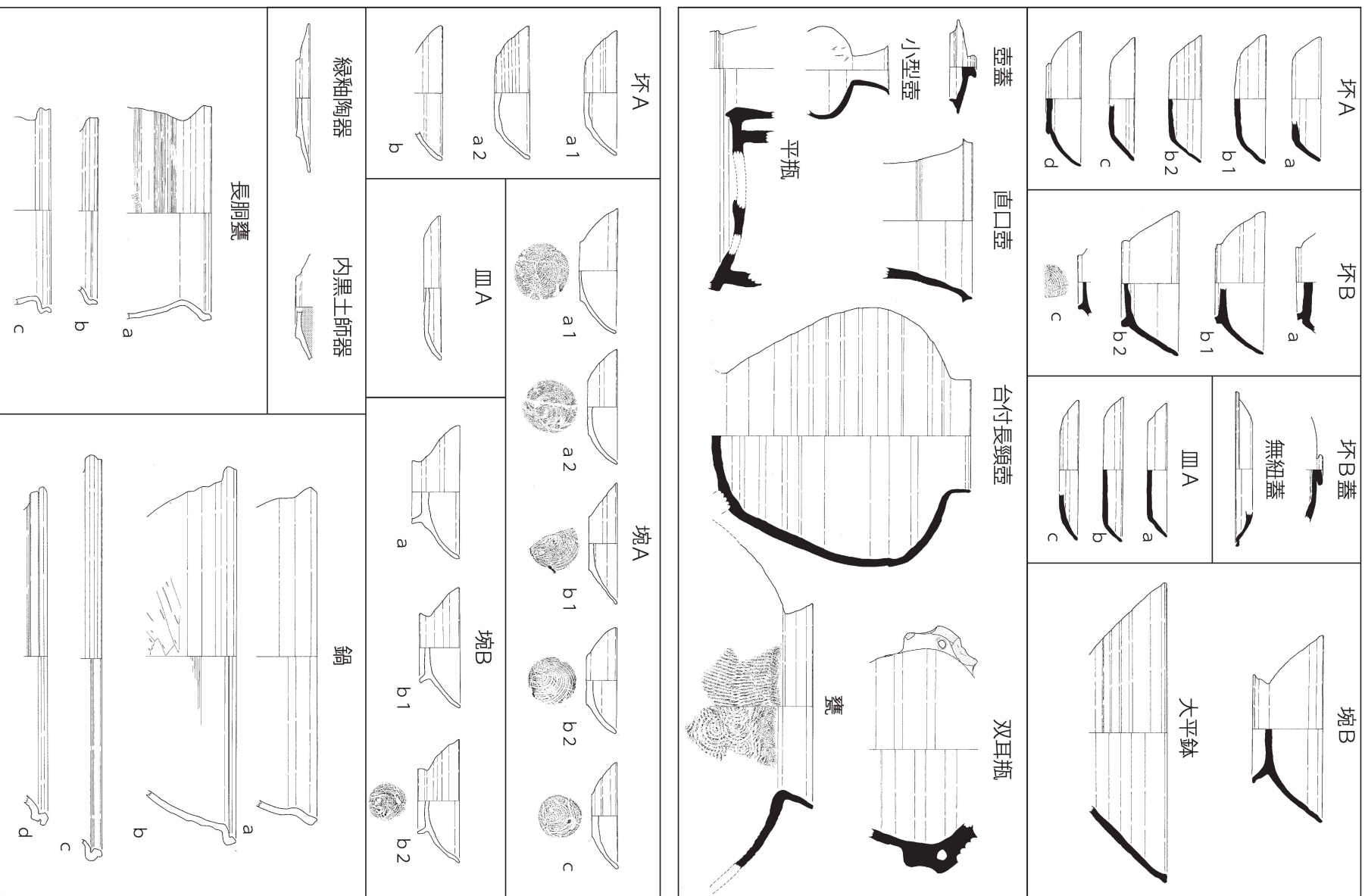
坏B b 1は16～21が該当する。18・19・21の器高が4.6～5.2cmであり、15cm前後の口径に対して扁平な器形である。

坏B b 2は22～26が該当する。この内、24・25は体部の残存部分端からの推定である。

坏B cは30が該当する。低く小型の高台を持ち、高台内側に回転糸切り離し痕を残す。

坏蓋 (第59図1～9)

坏B蓋は1～3、また鈕の痕跡を持つ6が該当する。口縁端部は下方に折り曲げる。



第57図 須惠器・土師器分類図

無鈕蓋は鈕の痕跡を持たない7が該当する。その他は天井部が残っている個体ではないが、口縁端部が玉縁状の8、薄手で口縁端部が玉縁状の9もその可能性がある。

皿A（第59図10～32）

皿A aは10～15が該当する。10・11・15は口径が14cm以下、12～14は16cm以上である。15は見込みに「安」?の墨書を持つ。

皿A bは16～21が該当する。18・19・21の体部にはロクロ襷が目立つ。

皿A cは22～32が該当する。残りが悪く、復元口径であるので図上では口径にばらつきが見られるが、15cm前後が中心になるものと考えられる。

碗B、大平鉢（第60図1～9）

碗Bは1～5が該当し、6～8もその可能性がある。この内1・2には底部外面に回転糸切り離し痕がわずかに残る。また2、6～8には口縁端部内側に強めのナデを巡らしている。

大平鉢は9が該当する。口径が30cmを超える大型である。

その他の器種（第60図10～19、第61図、第62図）

瓶類（第60図10～19）

瓶は10～19が該当する。この内14は平瓶の頸部の可能性がある。17・18は双耳瓶で、18は胴体下部にまで耳部分が接着されている。19は大型の平瓶で、把手部分は断面板状のものが接着されている。

壺類（第61図1～12、第62図1～8）

第61図1は壺蓋で、小型で精巧な作りである。同図2・3が小型壺である。同図8～12は壺の底部である。直口壺は同図4・5、第62図1～3が該当すると思われる。すべて口縁部である。同図4は台付短頸壺であり、高台部を欠損する。同図5は短頸壺であるが底部は不明である。

甕類（第62図6～8）

甕は6～8が該当する。口縁部のみである。

土師器

坏A（第63図1～15）

坏A a 1は1～3・6・10が該当する。器高が3.1～3.2の扁平なものである。この内、3・6は残存率が1/8と悪いため、この2つを除外した口径では13～14cmの幅になる。

坏A a 2は4・5・7・8・13が該当する。器高は3.6～3.9で、口径は残存率が1/4以下の4・7・13を除外しても13.4～13.9であり、14cmを超えない。坏A a 1に比べて深身であり、体部の細かいロクロ襷が目立つ。

坏A bは11・12・14・15が該当する。これらはすべて底部を欠くので、後述の碗Aを含む可能性がある。

碗A（第63図15～30）

碗A a 1は16・18が該当する。18は薄手で、底部から口縁部にかけて緩やかに内弯させている。底部外面にみられる回転糸切り時の同心円状の痕跡は、間隔が詰まっていて細かい。

碗A a 2は17が該当し、20～22もその可能性がある。底部から体部にかけて厚さが変わらず、全体的に厚い。底部外面にみられる回転糸切り時の同心円状の痕跡は、間隔が詰まっていて細かい。

碗A b 1は23・24が該当する。体部が薄手で間隔の広いロクロ襷を持つ。底部外面にみられる回転糸切り時の同心円状の痕跡は、間隔が詰まっていて細かい。

壙A b 2は25が該当し、19・30もその可能性がある。底部が円盤状に突出し、また底部外面にみられる回転糸切り時の同心円状の痕跡は、やや間隔が空いている。

壙A cは26・27が該当し、28・29もその可能性がある。底部が円盤状に突出し厚手だが、体部は底部に比べて薄手である。また底部外面にみられる回転糸切り時の同心円状の痕跡は、やや間隔が空いている。

壙B（第64図4～12）

壙B aは6・7が該当する。高台径は6.5cm前後であり、やや外側に踏ん張る高台を持つ。

壙B b 1は4が該当し、5もその可能性がある。高台径は7cm以上で、高台自体も細い。

壙B b 2は10～12が該当する。11・12は底部調整を除けば、4と法量がほぼ一致する。

皿A（第64図13、14）

皿Aは13・14が該当する。底部と体部にかけて内弯するように立ち上がり、境が明瞭でない。

その他の食膳具（第64図15～17）

緑釉陶器皿は15が該当する。軟質である。16は内黒土師器の皿で、17は内黒の有台碗である。

長胴甕（第64図18～27）

長胴甕 aは21～24が該当する。頸部の屈曲が緩やかで、全体的に厚手である。

長胴甕 bは25・26が該当する。残存率は悪く、全体の形は不明だが、長胴甕 aに比べて薄手である。

長胴甕 cは27が該当する。長胴甕 bに比べて、さらに薄手になる。

鍋（第65図1～7）

鍋 aは1が該当する。頸部の屈曲が緩やかで、全体的に厚手である。

鍋 bは2～4が該当する。胎土がやや粗く、頸部の屈曲ははっきりしている。

鍋 cは6が該当し、5もその可能性がある。砂がほとんど混入しない緻密な胎土である。

鍋 dは7が該当する。砂がほとんど混入しない緻密な胎土である。（中野）

IV 中世土器（第66図1～17）

土師器皿（第66図1～8）

1～8は土師器皿である。いずれも手捏成形である。口径は7.2～9.0cmのものが多く、小皿が主体となる。1～6は口縁部に一段ナデを施し、外反気味に立ち上げる。先端部は丸く収める。6のみ口縁端部外面に「面取り」を施す。7・8は口縁部に強い二段ナデを施し、先端部を外反させる。

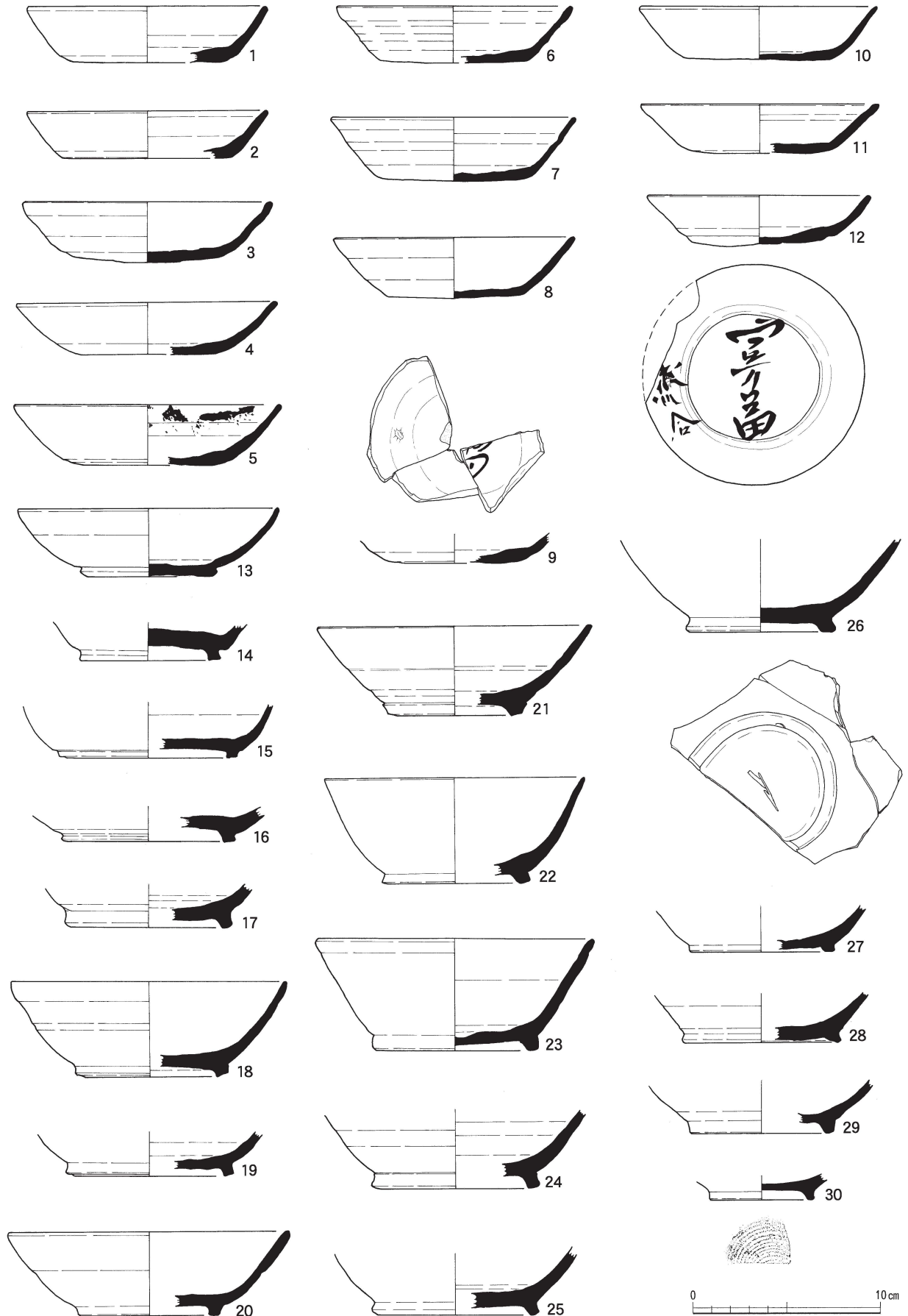
7・8（A aタイプ 伊野1995）のように古い様相を示すものも認められるが、胎土の精密さに欠けることや、面取りを施したものが認められることから、概ね12世紀後半から13世紀代のものと考えられる。（奥井）

灰釉陶器（第66図9）

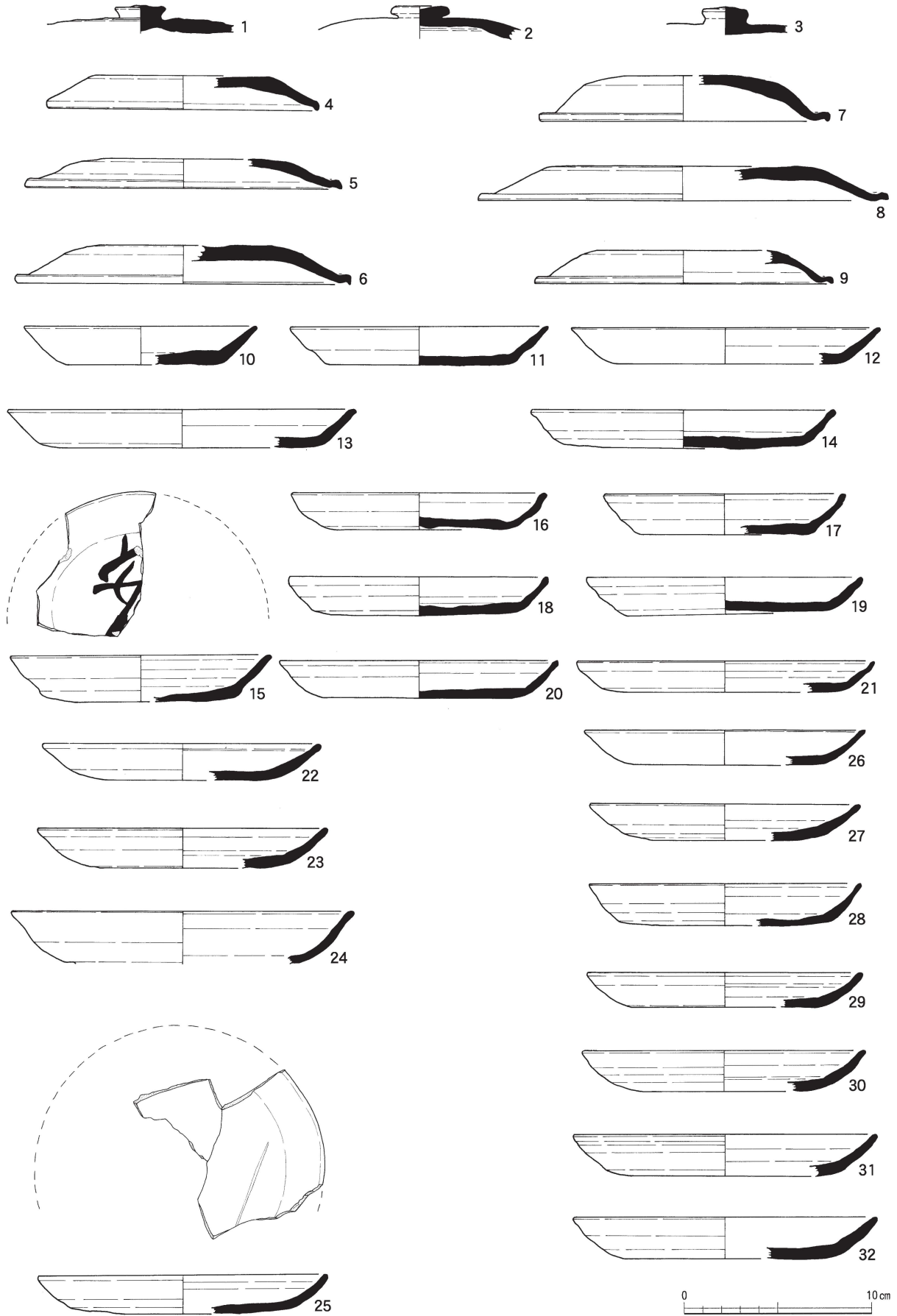
9は碗である。底部から体部にかけて内弯気味に立ち上がる器形を呈する。ロクロ成形で、底部には削り出し高台を有する。

越前焼（第66図10～12）

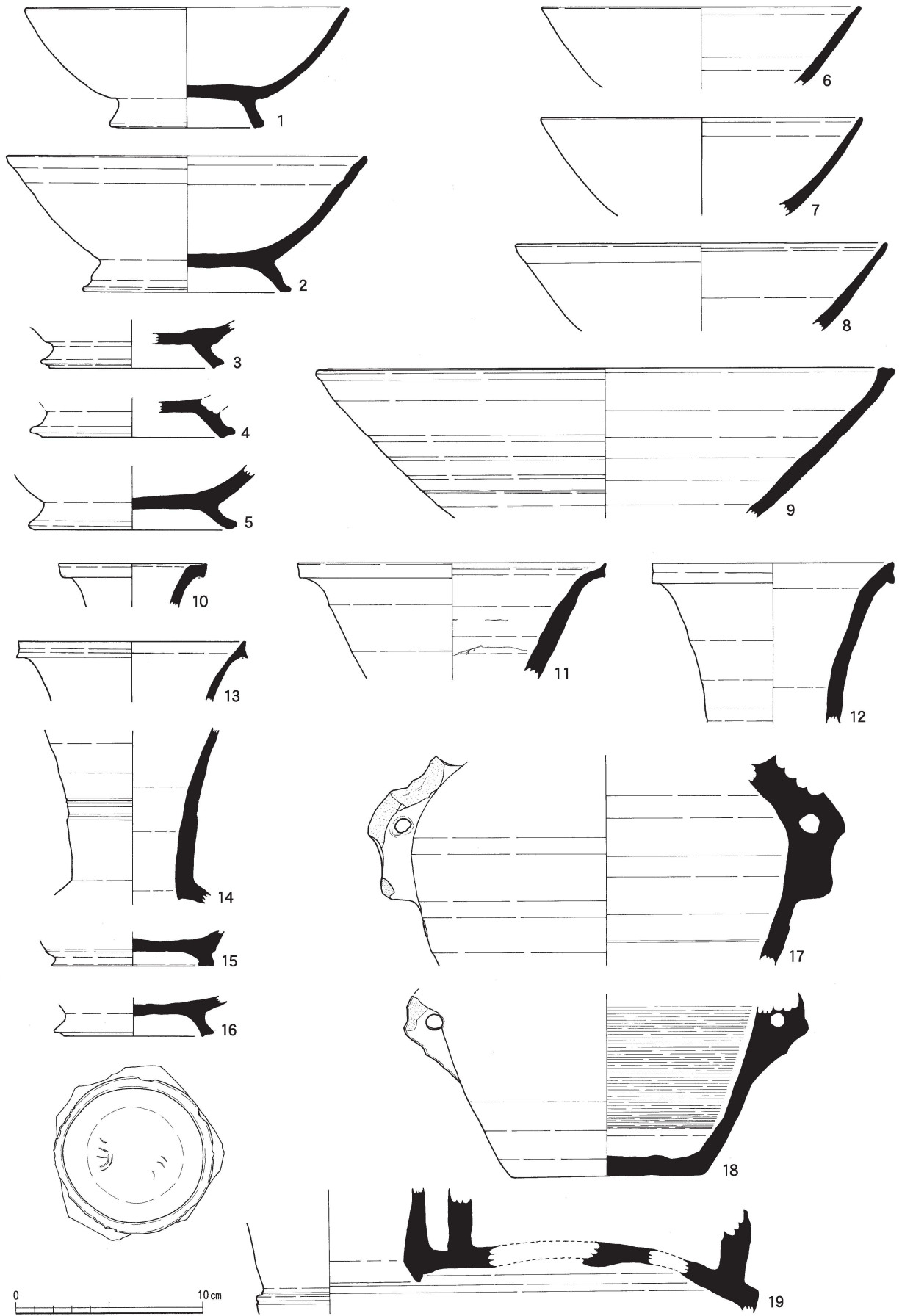
10は壺である。外面に線刻を有する。体部内面に輪積み成形の継目がみられる。11・12は播鉢である。11は、やや外傾する器形を呈する口縁部片。口縁上端面に沈線を有する。12は、底部である。底部の外周は摩滅し、緩やかに立ち上がる器形を呈する。焼成はあまい。体部外面にナデ調整を施す。内面の屈曲部分から下位に播り目を有する。播り目は使い込まれ、磨滅している。



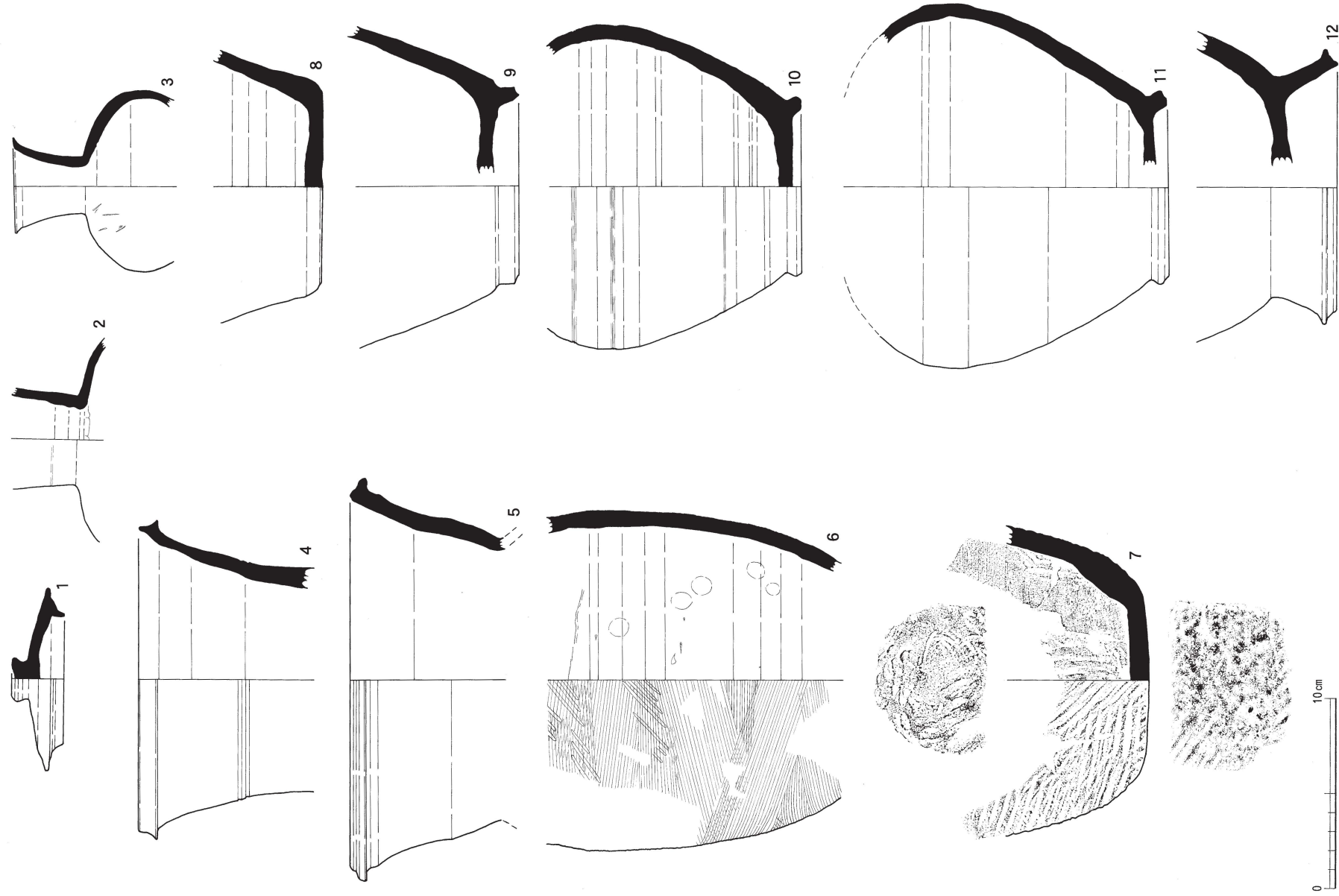
第58図 II区 包含層出土土器実測図 (15) (縮尺1/3)



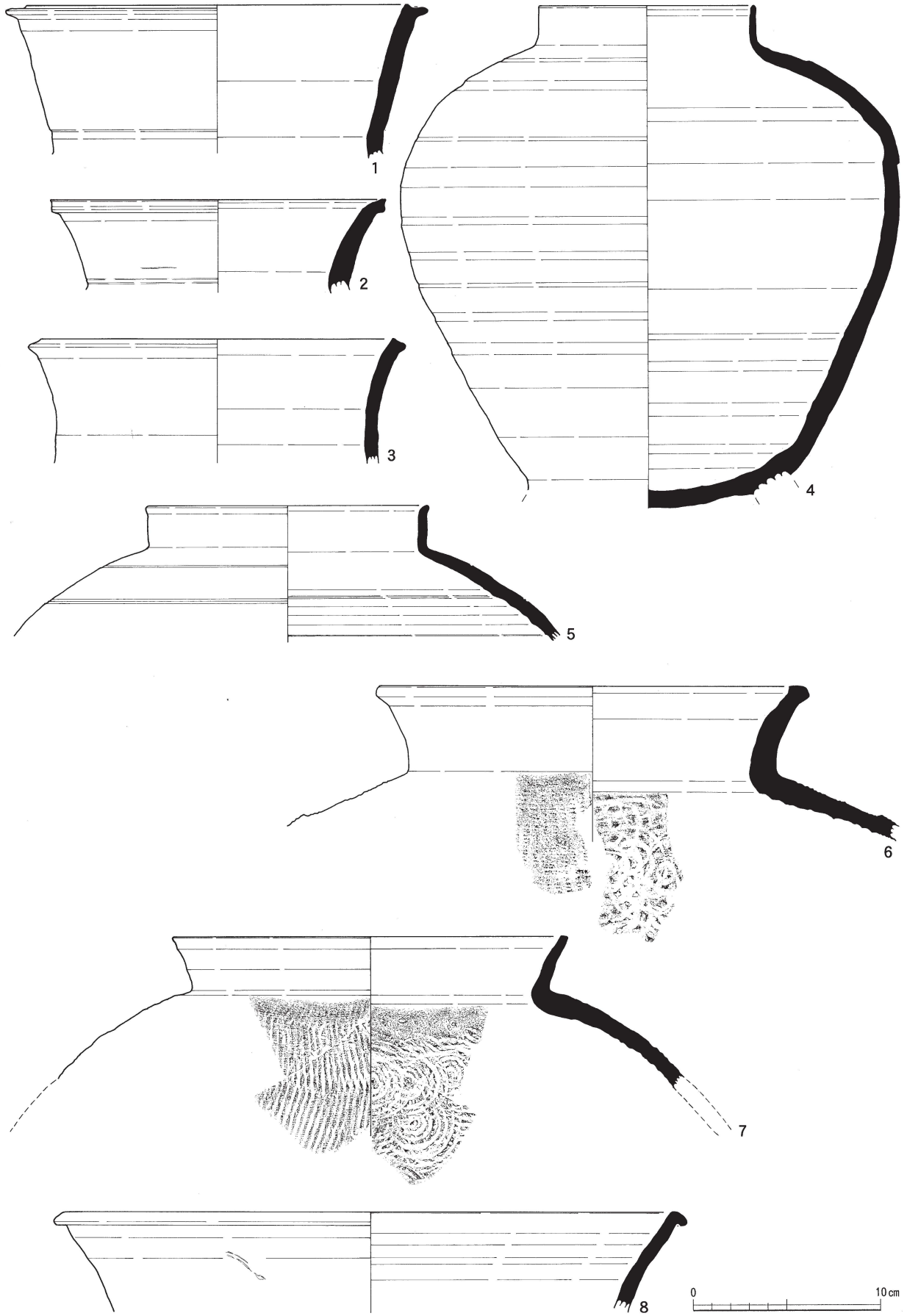
第59圖 II区 包含層出土土器実測図 (16) (縮尺1/3)



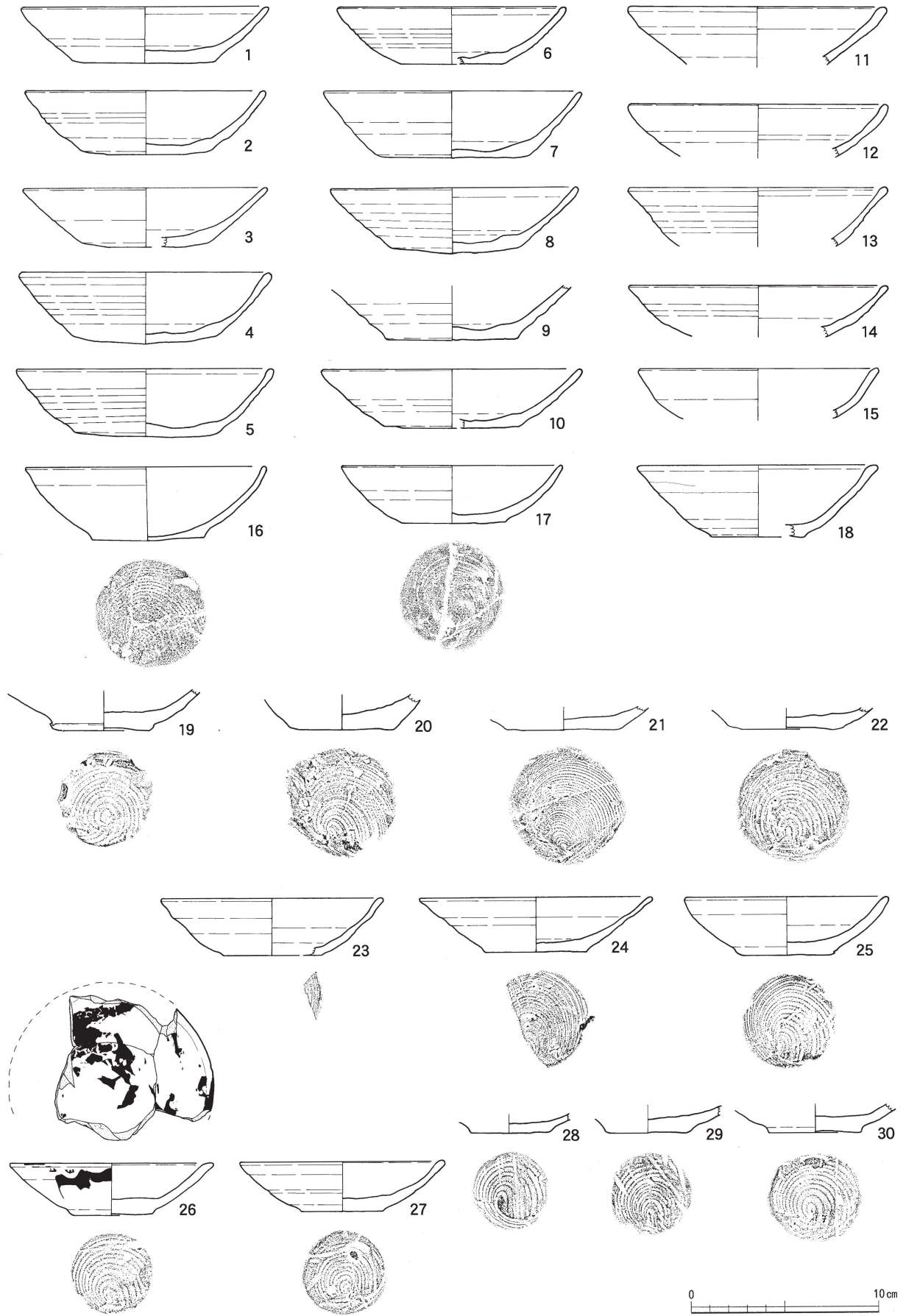
第60図 II区 包含層出土土器実測図 (17) (縮尺1/3)



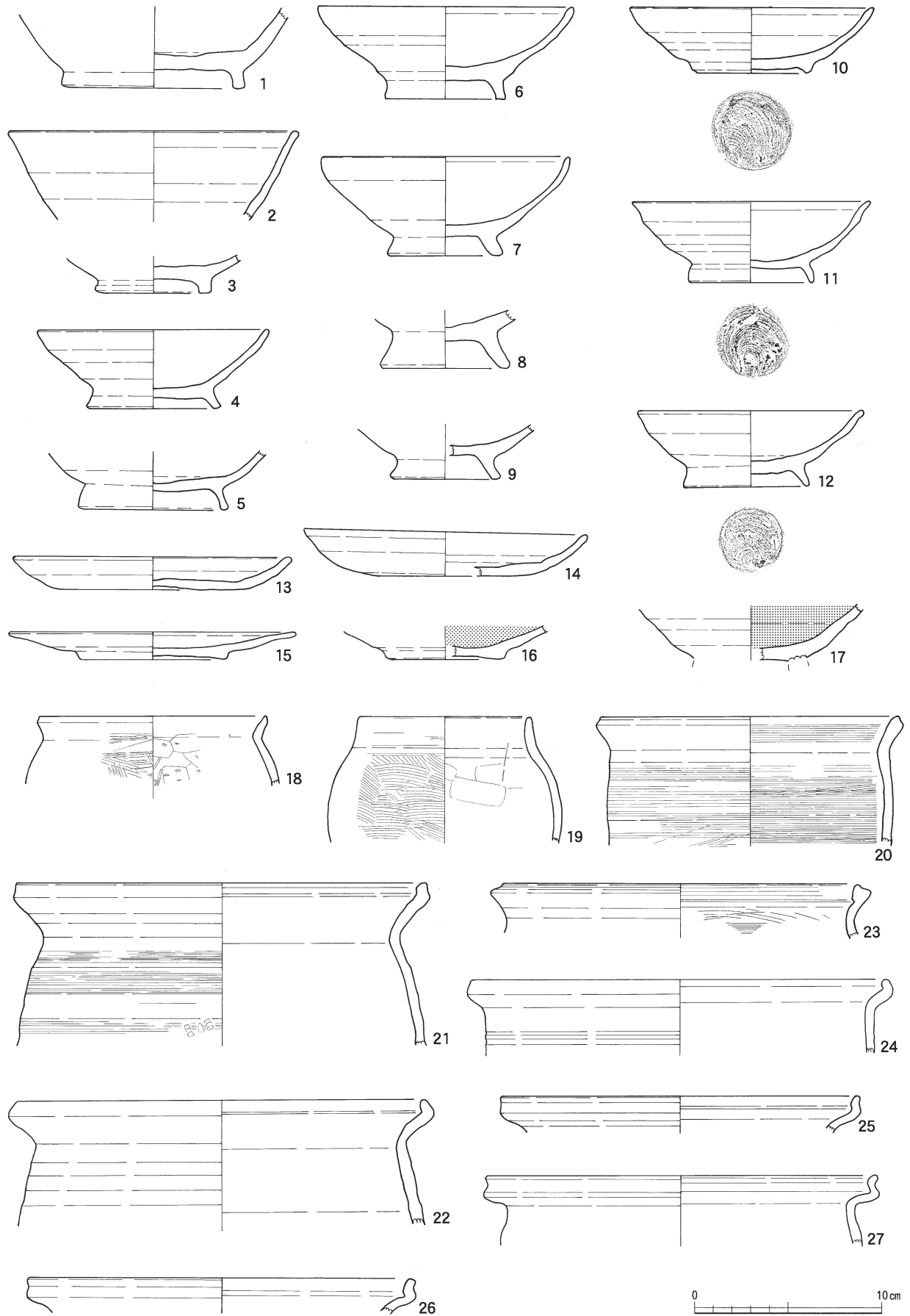
第61圖 II区 包含層出土土器実測図 (18) (縮尺1/3)



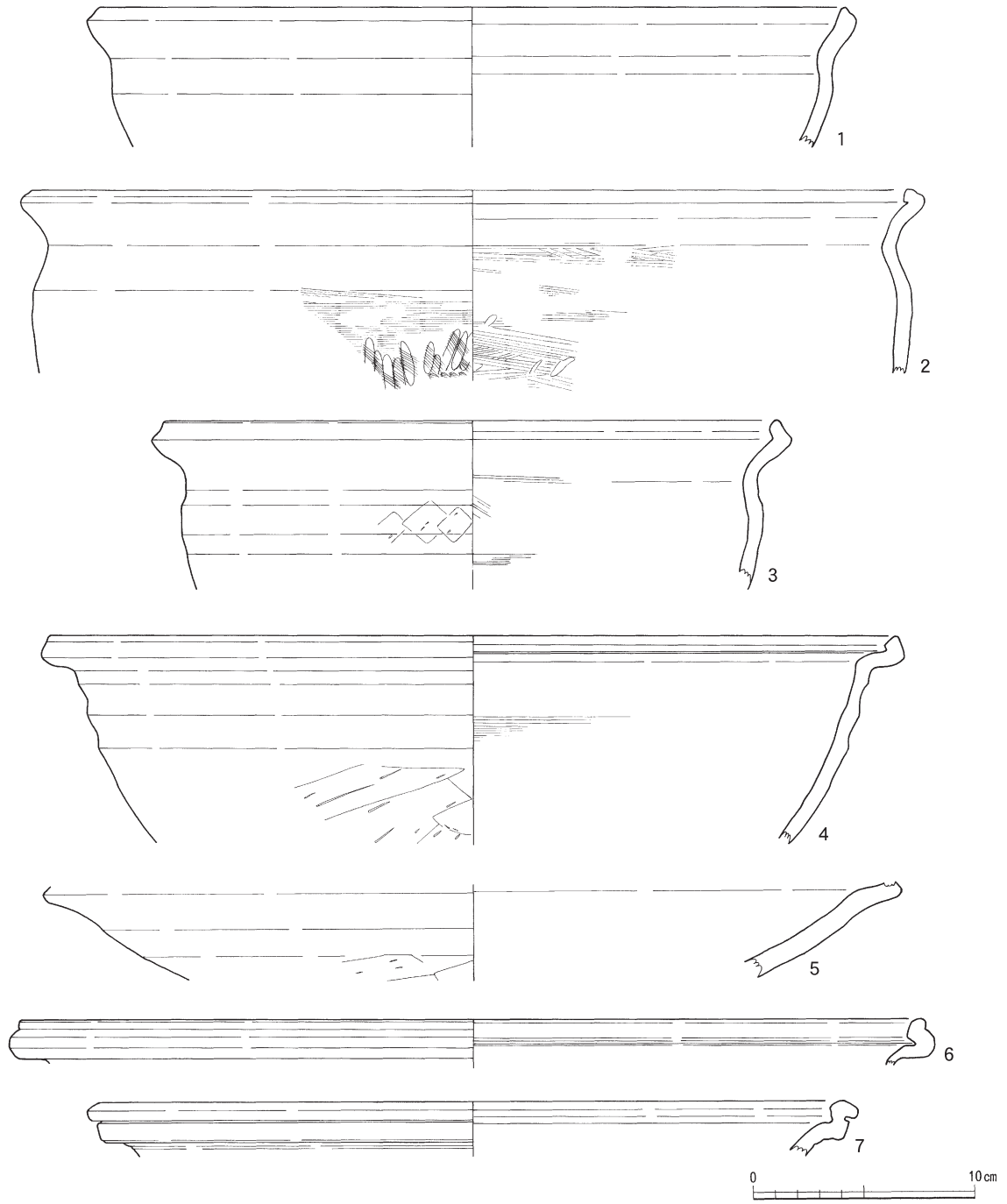
第62図 II区 包含層出土土器実測図 (19) (縮尺1/3)



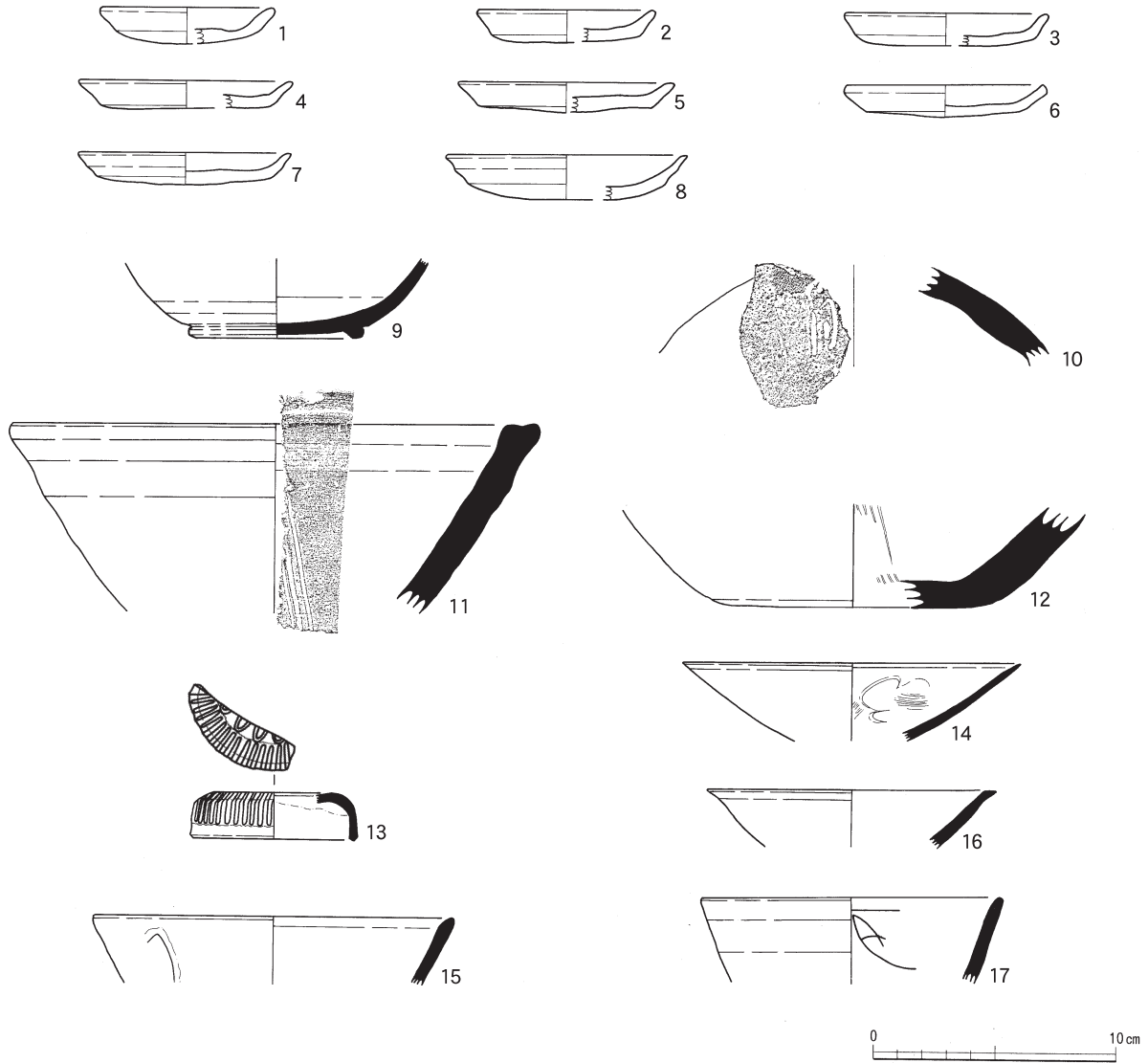
第63圖 II区 包含層出土土器実測図(20) (縮尺1/3)



第64図 II区 包含層出土土器実測図 (21) (縮尺1/3)



第65図 II区 包含層出土土器実測図(22) (縮尺1/3)



第66図 II区 包含層出土土器実測図(23) (縮尺1/3)

越前焼(10~12)は、中世後期に位置づけられる。

青磁・白磁類(第66図13~17)

13は白磁合子蓋である。口縁端部が三角状を呈する。外面に蓮弁文を施す。14・15は青磁碗である。14は、緩やかに立ち上がる器形を呈する。体部内面に陰刻文を施す。15は、体部外面に片切彫鏤蓮弁文を施す。16・17は白磁碗である。16は、外傾する器形で、口縁端部が外反する。17は、内面に陰刻で草花文を施す。釉は青みのある白色を呈する。

時期については、13・14・17は、中世前期~後期の幅に収まり、15・16は、中世前期に位置づけられる。(北野)

参考文献

伊野近富 1995 「1. 土師器皿」 『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編

第2節 包含層出土遺物

第14表 II区 包含層出土須臾器一覽表

図版番号	器種	法量(cm)	出土地点	胎土	焼成	色調	調整	残存率	備考
第56図1	蓋	(口)13.2 (高)3.55	B11包含層	密 1mm以下の白色砂粒	やや良好	内-淡褐色 外-灰褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(天井)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/8	1mm以下の黒斑
2	蓋	(口)14.6 (高)4.2	C7包含層	密 2mm以下の白色砂粒	良好	内-灰色 外-褐色～暗灰色	内-回転ナデ 外-回転ヘラ切り→回転ナデ	(口)1/6	2mm以下の黒斑
3	蓋	(口)14.0 (高)3.9	A7・B7・B10 包含層	密 4mm以下の白色砂粒	良好	内-白灰色 外-灰色、緑色自然釉	内-(口)回転ナデ(天井)ナデ 外-(口)回転ナデ(天井)回転ヘラ切り→ケズリ?	(口)1/6	
4	蓋(無台坏)	(口)13.2 (高)4.0	B5～7包含層	やや密 1mm以下の白色砂粒	やや良好	内-灰色 外-灰色～暗灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(天井)回転ヘラケズリ	(口)1/4	
5	蓋	(口)12.0	B8包含層	密	良好	灰色	回転ナデ	(口)1/6	
6	坏	(口)12.5 (底)約3.3 (高)4.3	B7・B8包 含層	密 1mm以下の白色 砂粒	良好	内-紫灰色 外-暗灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(口)1/4	
7	坏	(口)11.0 (高)3.6	B8包含層	密	良好	内-灰色 外-暗灰色(底)灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(天井)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/4	
8	坏	(口)9.4 (底)4.8 (高)2.4	B8包含層	密 1mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-淡灰色 外-灰色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(口)1/6	
9	坏	(口)10.0 (底)約5.0 (高)3.1	C9包含層	密 1mm以下の白色 砂粒	良好	内-灰色 外-褐色、緑色自然 釉	内-回転ナデ→(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(口)1/4	1mm以下の黒斑
10	高坏	—	A7包含層	やや密 1mm以下の白色砂粒	やや 良好	内-褐色 外-灰色～暗灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(体)1/6	
11	高坏	(口)12.8 (底)13.0 (高)15.2	C1包含層	密 1mm以下の白色 砂粒	良好	内-(坏)暗灰色 (脚)暗褐色 外-灰色～暗灰色	内-(坏)回転ナデ→ナデ(脚)回転ナデ 外-回転ナデ(坏)回転ヘラ切り	(口)2/3	透かし2方
12	臍	(底)3.6 (孔)2.0	B7包含層	密 3mm以下の白色砂粒	良好	灰色～暗灰色	内-(頸)回転ナデ 外-(体)上半回転ナデ、下半不定方向のケズリ	(体)1/3	
第58図1	坏A	(口)12.8 (底)8.0 (高)3.05	B6包含層	密 1mm以下の白色 砂粒	不良	内-淡灰色 外-淡灰色、口縁端 5mm灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/8	生焼け
2	坏A	(口)13.0 (底)9.0 (高)2.6	C8包含層	密 1mm以下の白色 砂粒	やや 良好	淡灰色～褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)ナデ	(口)1/8	
3	坏A	(口)13.6 (底)約3.5 (高)3.3	A7・B7包 含層	やや密 2mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-淡灰色、口縁端5mm暗灰色 外-灰色、口縁端5mm 暗灰色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/3	
4	坏A	(口)15.0 (底)7.2 (高)2.8	B10包含層	やや密	不良	内-淡灰白色 外-淡黄橙色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ→ナデ (底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/8	生焼け
5	坏A	(口)14.4 (底)7.0 (高)3.3	C7包含層	密 1mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-灰色 外-淡灰色、口縁端 10mm灰色	内-回転ナデ→(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/8	体部内面煤付着
6	坏A	(口)13.0 (底)8.0 (高)2.9	C7包含層	粗い 1mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-灰色 外-灰色、口縁端5 mm暗灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/7	
7	坏A	(口)13.2 (底)約7.0 (高)3.5	B9包含層	密 3mm以下の白色 砂粒	良好	内-緑灰色 外-緑灰色、口縁端 5mm灰色	内-(口)回転ナデ→(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/6	1mm以下の黒斑
8	坏A	(口)13.0 (底)7.3 (高)3.3	C2包含層	密 1mm以下の白色 砂粒	良好	内-灰色 外-灰色、口縁端5 mm暗灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/4	
9	坏A	(底)約5.4	A7・B8包 含層	やや粗い 6mm以下の白色 砂粒	不良	淡灰色	内-回転ナデ→ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(底)3/4	底部内面墨書
10	坏A	(口)12.8 (底)7.8 (高)2.9	B1・B2包 含層	やや粗い 2mm以下の白色 砂粒	やや 不良	内-灰色～白灰色 外-灰色、口縁端5 mm暗灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)2/3	2mm以下の黒斑
11	坏A	(口)12.8 (底)約5.3 (高)2.7	C11包含層	やや粗い 1mm以下の白色 砂粒	不良	内-淡黄灰色 外-淡褐色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/6	生焼け
12	坏A	(口)12.0 (底)約7.0 (高)2.8	B8包含層	やや密 2mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-灰色 外-淡灰色～灰色 口縁端5mm暗灰色	内-回転ナデ→(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)7/8	底部外面墨書 「富万呂田」 「?合」
13	坏A	(口)14.0 (底)7.4 (高)3.7	B1・B3・B4 包含層	密 0.5mm以下の白 色砂粒	良好	暗灰色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)静止糸切り→ナデ	(口)1/12	
14	坏B	(底)7.6	C8包含層	やや密 2mm以下の白色砂粒	良好	内-淡紫灰色 外-紫灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(底)1/1	
15	坏B	(底)9.5	A8包含層	やや密 1mm以下の白色砂粒	良好	内-暗灰色 外-暗緑灰色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(底)1/4	
16	坏B	(底)9.1	C2包含層	密 2mm以下の白色砂粒	良好	内-灰色(高台)淡灰色 外-暗灰色(高台)淡灰色	内-回転ナデ→ナデ 外-回転ヘラ切り→回転ナデ	(底)1/4	
17	坏B	(底)9.0	A12包含層	やや密 2mm以下の白色砂粒	不良	淡褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(底)1/4	生焼け
18	坏B	(口)14.8 (底)8.4 (高)5.2	A9・B7包 含層	密 2mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-褐色 外-暗灰色、黒色自然 釉	内-回転ナデ→(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/2	1mm以下の黒斑
19	坏B	(底)9.0	B9包含層	密 1mm以下の白色砂粒	良好	灰色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(底)1/4	

第6章 II区の遺構・遺物

図版番号	器種	法量(cm)	出土地点	胎土	焼成	色調	調整	残存率	備考
20	坏B	(口)15.0 (底)7.6 (高)4.6	B7・B9包 含層	やや密 3mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-淡褐色(高台) 灰色 外-灰色~黒灰色	内-回転ナデ→(底)ナデ 外-回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(口)1/4	底部内面に重ね 積み焼成の跡
21	坏B	(口)14.8 (底)7.2 (高)4.8	B7・C7包 含層	密 2mm以下の白色 砂粒	良好	内-灰色 外-暗灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/6	
22	坏B	(口)14.0 (底)8.0 (高)5.7	C7包含層	密 1mm以下の白色 砂粒	良好	内-灰色 外-暗灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(口)1/12	
23	坏B	(口)15.0 (底)9.0 (高)6.0	C6・C7包 含層	やや密 2mm以下の白色 砂粒	やや 不良	内-赤紫色(高台)暗灰 …口縁端1cm暗褐色 外-暗赤褐色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(口)1/6	
24	坏B	(底)9.0	B3包含層	やや粗い 1mm以下の白色 砂粒	不良	内-淡灰白色 外-淡褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(底)1/3	生焼け
25	坏B	(底)9.0	B6包含層	やや粗い 2mm以下の白色 砂粒	やや 不良	内-淡灰色 外-灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→回転ナデ→ナデ	(底)1/2	
26	坏B	(底)8.0	A6・A7・B7 包含層	密 1mm以下の白色 砂粒	良好	内-暗灰 外-灰色~緑灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(底)2/3	底部外面沈線 接部ツメ痕
27	坏B	(底)7.8	B6・C10包 含層	密 1mm以下の白色 砂粒	やや 不良	内-褐色 外-暗灰色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(底)1/3	1mm以下の黒斑
28	坏B	(底)8.5	B6・C6包 含層	粗い 1mm以下の白色 砂粒	やや 良好	淡褐色	内-回転ナデ、ナデ 外-(口)回転ナデ(底)静止ヘラ切り	(底)1/2	2mm以下の黒斑 煤付着
29	坏B	(底)8.0	C9包含層	密 2mm以下の白色 砂粒	やや 不良	内-灰色 外-淡灰色	内-回転ナデ 外-回転ナデ→ナデ(底)回転ヘラ切り	(底)1/4	
30	坏B(埴B)	(底)5.4	C9包含層	密	良好	淡灰色	内-ミガキ? 外-(口)回転ナデ(底)回転糸切り	(底)1/4	
第59図1	坏蓋	(紐)2.8	C7包含層	やや密 1mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-淡灰色 外-灰色~暗灰色	内-回転ナデ→ナデ 外-回転ヘラ切り	(紐)2/3	
2	坏蓋	(紐)3.2	C8包含層	密 2mm以下の白色 砂粒	やや 不良	内-灰色 外-淡褐色	内-(口)回転ナデ(天井)ナデ 外-(口)回転ナデ(天井)回転ヘラ切り	(紐)1/2	
3	坏蓋	(紐)2.5	C7包含層	密 1mm以下の白色 砂粒	やや 不良	内-淡灰色 外-灰色~褐色	内-(天井)ナデ 外-(口)回転ナデ(天井)回転ヘラ切り	(紐)1/1	
4	坏蓋	(口)14.6 (高)1.8	C2包含層	やや密 1mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-白灰色 外-淡灰色	内-(口)回転ナデ(天井)ナデ 外-(口)回転ナデ (天井)回転ヘラ切り→回転ナデ	(口)1/4	
5	坏蓋	(口)17.0 (高)1.6	B5・B9包 含層	やや密 2mm以下の白色 砂粒	やや 不良	内-淡灰色 外-淡灰色、口縁端1cm暗灰色	回転ナデ	(口)1/4	
6	坏蓋	(口)18.0	A7・B6包 含層	密 1mm以下の白色 砂粒	良好	内-褐色 外-灰色、口縁端5mm 黒色自然釉	内-(口)回転ナデ(天井)回転ナデ→ナデ 外-(口)回転ナデ (天井)回転ヘラ切り→回転ナデ	(口)1/4	1mm以下の黒斑
7	坏蓋	(口)15.6 (高)2.5	A7・B7・B8 包含層	やや密 1mm以下の白色 砂粒	良好	内-(天井)灰色(口)暗褐色 外-灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(天井)回転ヘラ切り→ナデ	(口)3/4	1mm以下の黒斑
8	坏蓋	(口)22.0 (高)1.9	B4包含層	やや粗い 1mm以下の白色 砂粒	やや 不良	内-淡灰色 外-灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(天井)回転ヘラ切り	(口)1/4	
9	坏蓋	(口)16.0 (高)1.8	B7包含層	やや密 1mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-淡紫色 外-淡紫色、口縁端1cm淡灰色	回転ナデ	(口)1/6	
10	皿A	(口)12.6 (底)8.0 (高)2.1	C5包含層	やや粗い 1mm以下の白色 砂粒	良好	暗灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→回転ナデ→ナデ	(口)1/8	
11	皿A	(口)14.0 (底)10.0 (高)2.1	B7包含層	密 1mm以下の白色 砂粒	良好	内-緑灰色 外-緑灰色、口縁端 5mm灰色	内-(口)回転ナデ(底)回転ナデ→ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/2	1mm以下の黒斑
12	皿A	(口)16.6 (底)12.0 (高)2.0	B9包含層	密 2mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-灰色 外-灰色、口縁端1cm 暗灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)ナデ	(口)1/6	
13	皿A	(口)16.4 (底)約8.2 (高)2.1	B7・C7包 含層	密 2mm以下の白色 砂粒	良好	内-淡灰色 外-淡緑灰色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-(口)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→ケズリ→回転ナデ→ナデ	(口)1/12	
14	皿A	(口)18.6 (底)14.0 (高)2.1	A9・B8包 含層	やや粗い 3mm以下の白色 砂粒	良好	灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/8	
15	皿A	(口)14.0 (底)6.7 (高)2.5	B5包含層	密 1mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-淡緑灰色 外-淡緑灰色、口縁 端5mm黒灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/8	底部内面墨書 「安?」
16	皿A	(口)13.7 (底)9.0 (高)2.0	B8包含層	やや粗い 1.5mm以下の白 色砂粒	やや 良好	内-灰色 外-灰色、口縁端5mm 暗灰色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/3	
17	皿A	(口)13.0 (底)9.0 (高)2.2	A8・B7包 含層	密 1mm以下の白色 砂粒	良好	内-灰色 外-灰色、口縁端5mm 暗灰色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-(口)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→回転ナデ→ナデ	(口)1/4	1mm以下の黒斑
18	皿A	(口)14.0 (底)約8.5 (高)2.2	B8包含層	やや粗い 7mm以下の砂粒	やや 良好	内-灰 外-灰色、口縁端5mm 暗灰色	内-回転ナデ→(底)ナデ 外-(口)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→回転ナデ→ナデ	(口)2/3	1mm以下の黒斑
19	皿A	(口)14.8 (底)10.8 (高)2.1	B7包含層	やや密 1mm以下の白色 砂粒	良好	内-緑灰色~灰色 外-淡緑灰色~淡灰 色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-(口)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→回転ナデ→ナデ	(口)2/3	1mm以下の黒斑
20	皿A	(口)15.0 (底)10.2 (高)2.0	C9包含層	やや密 2mm以下の砂粒	やや 良好	内-灰色 外-淡灰色、口縁端 10mm暗灰色	内-回転ナデ→(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/3	
21	皿A	(口)16.0 (底)11.0 (高)1.7	C6包含層	粗い 5mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-灰色 外-灰色、口縁端5mm 暗灰色	回転ナデ	(口)1/8	

第2節 包含層出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	出土地点	胎土	焼成	色調	調整	残存率	備考
22	皿A	(口)15.0 (底)8.0 (高)2.0	C 9 包含層	やや密 2mm以下の白色 砂粒	不良	内-淡灰白色 外-淡黄褐色	内-回転ナデ 外-回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(口)1/3	生焼け
23	皿A	(口)15.6 (底)8.8 (高)2.2	B 8 包含層	やや粗い 3mm以下の白色 砂粒	不良	内-白灰色 外-淡灰色、 口縁端5mm灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/3	生焼け
24	皿A	(口)18.0	B10包含層	密 1mm以下の白色砂粒	不良	内-淡灰色 外-淡黄灰色	回転ナデ	(口)1/8	生焼け
25	皿A	(口)15.6 (底)約7.5 (高)2.2	C 7 包含層	やや密 2mm以下の白色 砂粒	やや 不良	内-灰白色~淡灰色 外-淡灰色~淡褐色 口縁端5mm灰色	内-回転ナデ→(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/6	底部内面ヘラ跡
26	皿A	(口)15.0 (底)10.0 (高)1.9	A 7・B 8 包 含層	粗い 1mm以下の白色 砂粒	不良	内-淡灰色 外-淡灰色、 口縁端5mm灰色	内-回転ナデ→(口縁端)ケズリ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/3	
27	皿A	(口)14.5 (底)8.0 (高)2.0	B 6 包含層	やや密 1mm以下の白色 砂粒	不良	内-淡灰色 外-淡灰色、 口縁端10mm淡褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/8	生焼け
28	皿A	(口)14.6 (底)約7.0 (高)2.3	C 5 包含層	やや密 1mm以下の白色 砂粒	不良	灰白色、 口縁端淡灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(口)1/8	
29	皿A	(口)15.0 (底)9.0 (高)2.2	B11包含層	やや粗い 4mm以下の白色 砂粒	不良	内-灰色 外-黄灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(口)1/6	生焼け
30	皿A	(口)14.8 (底)10.0 (高)1.9	C ? 包含層	やや密 3mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-灰色 外-淡灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/4	
31	皿A	(口)16.0 (底)10.0 (高)2.25	C 7 包含層	やや粗い 3mm以下の白色 砂粒	不良	内-白色~淡褐色 外-白灰色、 口縁端10mm褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)ナデ	(口)1/4	生焼け
32	皿A	(口)16.2 (底)11.0 (高)2.3	B11包含層	やや粗い 4mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-緑灰色 外-緑灰色、 口縁端灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/4	1mm以下の黒斑
第60図1	碗B	(口)17.4 (底)8.4 (高)6.5	B 7・C 7 包 含層	密 2mm以下の白色 砂粒	良好	暗灰色	内-回転ナデ→(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転糸切り→回転ナデ	(口)1/10	2mm以下の黒斑
2	碗B	(口)19.4 (底)11.3 (高)7.3	A 7・B 7 包 含層	密 1mm以下の白色 砂粒	良好	内-灰色 外-灰色、 (高台)一部暗灰色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-回転ナデ(底)回転糸切り	(口)1/10	
3	碗B	(底)9.0	B 6 包含層	密 2mm以下の白色砂粒	良好	緑灰色	内-回転ナデ→ナデ 外-回転ナデ	(底)1/3	1mm以下の黒斑
4	碗B	(底)11.0	B 7 包含層	密 1mm以下の白色砂粒	良好	内-灰色 外-灰色(高台端部)暗灰色	内-(体)回転ナデ→ナデ 外-回転ナデ	(底)1/4	
5	碗B	(底)11.2	C 7 包含層	やや密 2mm以下の白色砂粒	やや 良好	内-淡灰色(高台)褐色 外-灰色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ナデ	(底)2/3	高台内煤付着
6	碗B	(口)17.2	B 7 包含層	密 1mm以下の白色砂粒	良好	内-暗灰色 外-灰色~暗灰色	回転ナデ	(口)1/4	1mm以下の黒斑
7	碗B	(口)17.2	包含層	密 1mm以下の白色砂粒	やや 不良	内-淡灰色 外-青灰色	回転ナデ	(口)1/6	内面生焼け
8	碗B	(口)20.0	C 7 包含層	密 1mm以下の白色砂粒	やや 良好	内-淡紫灰色 外-淡灰色	回転ナデ	(口)1/8	
9	大平鉢	(口)31.0	B 6 ~ 8 包 含層	やや粗い 5mm以下の白色砂粒	やや 良好	内-褐色 外-淡緑灰色、口縁端3mm白灰色	内-回転ナデ 外-回転ナデ→ナデ、ケズリ	(口)1/6	1mm以下の黒斑
10	壺	(口)8.0	B10包含層	密 1mm以下の白色砂粒	良好	内-淡灰色、緑色自然釉 外-淡灰色	回転ナデ	(口)1/4	1mm以下の黒斑
11	壺	(口)16.6	B6・B7・B9・ C6包含層	密 2mm以下の白色砂粒	やや 不良	淡紫灰色	回転ナデ	(口)1/8	2mm以下の黒斑
12	壺	(口)12.8	B 7 包含層	密 2mm以下の白色砂粒	良好	内-黒灰色~暗灰色 外-黒色~灰色、黒色自然釉	回転ナデ	(口)1/4	
13	壺	(口)12.2	A 7・B 8 包 含層	粗い 1mm以下の白色砂粒	不良	内-灰色~黒色、口縁端淡灰色 外-淡灰色~黒色	回転ナデ	(口)1/4	
14	壺頸部(平 瓶)	-	B 7 包含層	やや粗い 1mm以下の白色砂粒	やや 良好	内-淡紫灰色(頸下)紫灰色 外-淡紫灰色	回転ナデ	(頸)1/2	
15	壺	(底)8.7	C 9 包含層	密 2mm以下の白色砂粒	やや 良好	内-淡褐色、暗緑色自然釉? 外-灰色~黒灰色	内-回転ナデ 外-回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(底)1/1	
16	壺	(底)8.6	B 8 包含層	密 1mm以下の白色砂粒	良好	内-暗灰色(高)紫灰色 外-暗灰色(体)一部緑灰色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(底)1/1	底部外面ツメ痕
17	双耳瓶	-	C 6 包含層	やや粗い 4mm以下の白色砂粒	やや 良好	内-暗灰色 外-暗緑色釉	内-回転ナデ 外-不明	(体)1/4	2mm以下の黒斑
18	双耳瓶	(底)10.2	C 4・C 5 包 含層	密 1mm以下の白色砂粒	やや 不良	内-暗灰色 外-青灰色~黒灰色	内-(体)カキ目?(底)指頭圧痕 外-(体)ケズリ(耳)ナデ(底)ナデ	(底)2/3	底部内面煤付着?
19	平瓶	-	B 1・B 2 包 含層	密 5mm以下の白色砂粒	良好	内-灰色 外-淡褐色	ナデ	(体)3/4	
第61図1	壺蓋	(口)7.0 (高)2.8 (紐)2.3	B 7 包含層	密	良好	内-暗灰色 外-褐色~黒灰色	回転ナデ	完形	3mm以下の黒斑
2	小型壺	-	C 6 包含層	密 1mm以下の白色砂粒	良好	内-灰色 外-淡灰色~暗灰色	回転ナデ	(頸)1/3	
3	小型壺	(口)5.1	A7・B7・B8 包含層	密 1mm以下の白色砂粒	やや 良好	内-淡灰色 外-淡灰色~暗灰色	内-回転ナデ 外-(口~肩)回転ナデ(体)回転ナデ→ナデ	(口)1/1	1mm以下の黒斑
4	壺	(口)17.0	B7・B8・C6 包含層	やや粗い 5mm以下の白色砂粒	不良	内-暗灰色~黒色、緑色自然釉 外-灰色~黒色	内-不明 外-回転ナデ	(口)1/2	
5	壺	(口)21.4	B 7 包含層	やや密 2mm以下の白色砂粒	やや 良好	内-灰色 外-淡灰色~暗灰色、口縁端灰色	回転ナデ	(口)1/4	

第6章 II 区の遺構・遺物

図版番号	器種	法量(cm)	出土地点	胎土	焼成	色調	調整	残存率	備考
6	壺	—	B 7・B 9 包含層	やや密 3mm以下の白色砂粒	やや良好	内—灰褐色 外—灰色～暗褐色	内—回転ナデ 外—タタキ→カキ目	(体)1/3	内面指頭圧痕 内面煤付着
7	壺	(底)約8.0	B3・C5・C6 包含層	密 1mm以下の白色砂粒	良好	内—灰色 外—褐色(底)緑色自然釉	内—回転ナデ→タタキ? 外—タタキ	(底)3/4	
8	壺	(底)10.0	C 6 包含層	やや密 2mm以下の白色砂粒	良好	内—淡紫灰色 外—淡紫褐色	内—(体)回転ナデ 外—(底)静止ヘラ切り(体)ナデ	(底)1/4	底部内外面指頭 圧痕
9	壺	(底)10.4	B6・B7・C6・C7 包含層	やや粗い 2mm以下の白色砂粒	やや良好	内—紫灰色 外—灰色	内—(体)回転ナデ(底)ナデ 外—(体)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(底)1/4	
10	壺	(底)9.8	B 3・B 4・C 2・C 4・C 5 包含層	密 6mm以下の白色砂粒	良好	内—灰色 外—暗灰色	内—(口)回転ナデ(底)ナデ 外—(体)ケズリ→回転ナデ、ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(底)1/3	
11	壺	(底)9.4	A7・B6・B7 包含層	密 1mm以下の白色砂粒	やや良好	内—淡灰色 外—淡灰色～黒灰色	内—回転ナデ 外—回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(底)1/2	
12	壺	(底)14.6	C12包含層	密 2mm以下の白色砂粒	やや良好	内—淡緑色自然釉(高台)灰色 外—褐色	内—(体)回転ナデ 外—(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(底)1/4	3mm以下の黒斑
第62図1	壺	(口)22.6	B 7 包含層	やや密 2mm以下の白色砂粒	やや良好	内—灰色 外—灰色(頭部下部)暗灰色	回転ナデ	(口)1/8	
2	壺	(口)18.0	B 2 包含層	密 1mm以下の白色砂粒	やや良好	内—淡灰色 外—淡灰色～灰色	回転ナデ	(口)1/6	
3	壺	(口)18.8	B 8 包含層	やや密 1mm以下の白色砂粒	良好	内—褐色、緑色自然釉 外—暗灰色～黒色	回転ナデ	(口)1/8	
4	台付短頸壺	(口)5.9	A 7・B 7 包含層	密 5mm以下の白色砂粒	良好	内—灰色 外—灰褐色～黒褐色	内—(口)回転ナデ(底)ナデ(体)ケズリ?、回転ナデ 外—(口)ケズリ→回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ケズリ?	(口)1/3	3mm以下の黒斑
5	短頸壺	(口)15.2	C 4・C 5 包含層	密 2mm以下の白色砂粒	良好	褐色	内—回転ナデ 外—(口)回転ナデ(体)不明	(口)1/8	体部内面煤付着
6	甕	(口)21.0	B 7・C 7 包含層	密	良好	内—(口)緑釉(体)灰色 外—(口)灰色(体)暗緑色釉	内—(頭)回転ナデ(体)タタキ 外—(口)回転ナデ(体)タタキ	(口)1/36	斑点状黒色釉
7	甕	(口)21.3	B4・B6・C6～8 包含層	密 4mm以下の白色砂粒	良好	暗灰色	内—(口～肩)回転ナデ(体)タタキ 外—(口～肩)回転ナデ(体)タタキ	(肩)1/2	
8	甕	(口)34.0	B3～6・C3・C4・C8 包含層	密 1mm以下の白色砂粒	良好	灰色	回転ナデ	(口)1/10	外面ヘラ傷跡

第15表 II 区 包含層出土土師器観察一覧表

図版番号	器種	法量(cm)	出土地点	胎土	焼成	色調	調整	残存率	備考
第63図1	坏A	(口)13.4 (底)約7.7 (高)3.1	B 4 包含層	やや密 3mm以下の白色砂粒、金雲母	やや良好	内—濃黄褐色 外—淡黄褐色～濃黄褐色	内—回転ナデ 外—(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/3	
2	坏A	(口)13.0 (底)約6.8 (高)3.5	B 3 包含層	密 1mm以下の白色砂粒	良好	内—黄褐色(口)橙色 外—橙色	内—回転ナデ→(底)ナデ 外—(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/3	
3	坏A	(口)13.1 (底)約6.8 (高)3.2	B 3 包含層	やや密、金雲母	やや良好	内—淡褐色 外—濃黄褐色	内—回転ナデ 外—(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/8	内面煤付着
4	坏A	(口)13.6 (底)約7.5 (高)3.9	B 3 包含層	やや密 3mm以下の白色砂粒	やや良好	内—濃黄褐色 外—黄褐色	内—回転ナデ 外—(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/4	
5	坏A	(口)13.9 (底)7.8 (高)3.65	C 3 包含層	密 1mm以下の白色砂粒、金雲母	やや良好	内—淡灰色 外—淡黄褐色～淡灰色	内—回転ナデ 外—(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/2	内面黒斑
6	坏A	(口)12.4 (底)5.4 (高)3.1	B 3 包含層	密	やや良好	内—淡灰黄褐色 外—淡黄褐色	内—回転ナデ 外—(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/8	
7	坏A	(口)14.0 (底)8.4 (高)3.6	C 3 包含層	やや粗い 3mm以下の白色砂粒	やや不良	内—淡黄褐色(口)濃黄褐色 外—(口)橙色(底)黄褐色	内—回転ナデ 外—(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/4	
8	坏A	(口)13.4 (底)約6.8 (高)3.6	A12包含層	やや粗い 3mm以下の白色砂粒	やや不良	黄褐色～淡褐色	内—回転ナデ 外—(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)2/3	
9	坏A	(底)7.2	B 3 包含層	やや粗い 2mm以下の白色砂粒、金雲母	良好	橙色	内—回転ナデ 外—(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り	(底)2/3	
10	坏A	(口)14.0 (底)7.2 (高)3.2	B 3 包含層	やや密 1mm以下の白色砂粒、金雲母	良好	淡灰褐色	内—回転ナデ→(底)ナデ 外—(口)回転ナデ(底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/4	
11	坏A	(口)13.7	B 2 包含層	密、金雲母	良好	内—橙色 外—淡灰褐色	回転ナデ	(口)1/8	
12	坏A	(口)14.0	A 4・A 5 包含層	やや粗い 1mm以下の砂粒	良好	内—黄褐色 外—淡褐色	回転ナデ	(口)1/6	
13	坏A	(口)13.8	B 3 包含層	やや密	やや不良	黄褐色	回転ナデ	(口)1/4	
14	坏A	(口)14.0	B 3 包含層	やや密、金雲母	やや不良	内—淡黄褐色 外—淡黄褐色～暗灰色	回転ナデ	(口)1/4	内外面煤付着
15	坏A	(口)13.0	C 7 包含層	密	やや不良	内—黄褐色 外—黄褐色～淡灰色	回転ナデ	(口)1/4	
16	塊A	(口)13.0 (底)6.1 (高)4.1	C12包含層	やや密	不良	淡灰色	内—回転ナデ? 外—(口)回転ナデ(底)回転糸切り	(口)2/3	

第2節 包含層出土遺物

図版番号	器種	法量(cm)	出土地点	胎土	焼成	色調	調整	残存率	備考
17	埴A	(口)12.0 (底)5.6 (高)3.2	C11包含層	やや粗い 1mm以下の白色 砂粒	不良	内-明褐色 外-淡褐色	内-不明 外-(口)不明(底)回転系切り	(口)1/4	
18	埴A	(口)13.0 (底)5.0 (高)3.9	B3包含層	やや密、金雲母	良好	内-(口)淡褐色 (底)淡褐色 外-淡褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(底)1/1	
19	埴A	(底)5.4	C5包含層	密、金雲母	良好	内-淡褐色 外-黄褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(底)1/1	
20	埴A	(底)5.6	C9包含層	密、金雲母	良好	内-褐色~灰褐色 外-暗褐色	内-回転ナデ 外-(口)ナデ(底)回転系切り	(底)1/1	内面煤付着
21	埴A	(底)6.3	包含層	やや密	やや 不良	内-黄褐色 外-淡灰色~黄褐色	内-回転ナデ→ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(底)1/1	
22	埴A	(底)6.2	A11包含層	やや粗い 1mm以下の褐色砂粒	やや 良好	内-褐色 外-淡灰黄褐色	内-回転ナデ 外-(口)ナデ(底)回転系切り	(底)1/1	
23	埴A	(口)12.0 (底)5.2 (高)3.1	C7包含層	密	良好	内-淡褐色 外-褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(底)1/6	
24	埴A	(口)12.6 (底)5.4 (高)3.0	C7包含層	密	良好	内-淡褐色 外-褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(口)1/12	
25	埴A	(口)11.0 (底)4.8 (高)3.3	C4包含層	密	良好	内-淡褐色(口)橙色 外-褐色	内-回転ナデ→(底)ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(口)1/3	
26	埴A	(口)11.0 (底)4.4 (高)2.85	C6包含層	やや密 1mm以下の白色 砂粒	やや 良好	褐色 口縁部1cm淡褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(口)1/8	内外面煤付着 内面墨書?
27	埴A	(口)11.0 (底)4.4 (高)2.7	C4・C5包 含層	密 0.5mm以下の白 色砂粒	やや 不良	内-淡黄褐色 外-淡黄褐色~黄褐 色	内-回転ナデ? 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(口)1/8	
28	埴A	(底)4.2	B2包含層	密、金雲母	良好	内-灰褐色 外-明褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(底)1/1	
29	埴A	(底)4.6	C4包含層	やや密、金雲母	良好	内-赤褐色 外-褐色	内-ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(底)1/1	底部外面ヘラ跡
30	埴A	(底)5.0	C4包含層	密	やや 良好	黄褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(底)1/1	
第64図1	埴B	(底)9.9	B2包含層	やや密 2mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-淡褐色 外-淡灰色	内-回転ナデ→(底)ナデ 外-(口)回転ナデ (底)回転ナデ	(底)1/1	
2	埴B	(口)15.6	C7包含層	やや密	不良	淡黄褐色	回転ナデ	(口)1/6	
3	埴B	(底)6.2	C1・C3包 含層	密 3mm以下の白色砂粒	やや 良好	淡赤灰色	内-回転ナデ 外-回転ナデ(底)回転ナデ	(底)3/4	
4	埴B	(口)12.55 (底)7.4 (高)4.3	C12包含層	密	良好	淡褐色~褐色	内-回転ナデ 外-回転ナデ(底)回転ナデ	(口)1/1	ほぼ完形
5	埴B	(底)8.2	A6包含層	粗い 3mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-淡黄褐色 外-黄褐色	内-回転ナデ→(底)ナデ 外-(口)上半回転ナデ・下半ケズリ (底)回転ナデ	(底)1/1	
6	埴B	(口)14.0 (底)6.5 (高)5.0	B3包含層	やや密 2mm以下の白色 砂粒	やや 良好	黄褐色	内-ナデ? 外-回転ナデ(底)回転ナデ	(口)1/4	
7	埴B	(口)13.5 (底)6.3 (高)5.35	C3包含層	やや密	やや 不良	内-黄褐色 外-淡黄褐色	内-(口)回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転ナデ	(口)1/4	
8	埴B	(底)7.0	C4包含層	やや密	良好	内-黄褐色 外-濃黄褐色	内-ナデ? 外-回転ナデ	(底)3/4	
9	埴B	(底)6.0	B12・C12包 含層	密	不良	内-明黄褐色(高台)黄褐色 外-明黄褐色	内-回転ナデ? 外-(口)回転ナデ(底)回転ナデ	(底)1/1	
10	埴B	(口)13.2 (底)6.5 (高)3.6	C11包含層	密	良好	褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(口)1/3	
11	埴B	(口)12.8 (底)6.8 (高)4.35	C11包含層	密	良好	内-淡褐色(高台)淡 黄褐色 外-淡褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(口)1/3	内面黒斑
12	埴B	(口)12.0 (底)6.8 (高)4.15	C11包含層	密	良好	内-淡褐色~黄褐色 外-淡褐色~褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)回転系切り	(口)1/2	
13	皿	(口)14.8 (底)約10.0 (高)1.8	B7包含層	やや密	不良	内-淡灰色 外-淡黄褐色	内-回転ナデ→(底)ナデ 外-(口)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/2	
14	皿	(口)15.3 (底)約8.0 (高)2.5	A7・B7・B8 包含層	やや密 3mm以下の白色 砂粒	やや 良好	内-淡灰色 外-淡褐色	内-(口)回転ナデ(底)ナデ 外-(口)回転ナデ (底)回転ヘラ切り→ナデ	(口)1/3	
15	皿	(口)15.4 (底)7.8 (高)1.5	A9包含層	やや密	やや 不良	黄褐色 淡緑色釉	不明	(口)1/4	
16	皿	(底)6.4	C4包含層	やや粗い	やや 不良	内-黒色 外-黄褐色~褐色	内-内黒 外-回転ナデ	(口)1/4	内黒土器
17	有台坏	-	B3包含層	やや密 1mm以下の白色砂粒	良好	内-黒色 外-褐色	内-内黒 外-(口)回転ナデ	(底)1/3	内黒土器
18	甕	(口)12.2	A14包含層	やや粗い 2mm以下の砂粒	やや 不良	内-暗黄褐色 外-淡灰褐色	内-(口)回転ナデ(体)ケズリ 外-(口)回転ナデ(体)ハケ	(口)1/8	外面煤付着
19	壺	(口)9.0	B2包含層	やや密 2mm以下の白色砂粒	良好	内-淡褐色 外-暗褐色	内-ナデ 外-(口)ナデ(体)ハケ	(口)1/4	

第6章 II区の遺構・遺物

図版番号	器種	法量(cm)	出土地区	胎土	焼成	色調	調整	残存率	備考
20	甌	(口)16.0	B 7 包含層	粗い、金雲母	良好	内-褐色 外-淡褐色	内外カキ目	(口)1/8	内外面煤付着
21	長胴甕	(口)22.0	B 8 包含層	密 0.5mm以下の白色砂粒、金雲母	やや良好	内-淡橙色(口)橙色 外-黄橙色(口)淡橙色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ (体)回転ナデ→タタキ後カキ目	(口)1/8	
22	長胴甕	(口)23.0	B 8 包含層	やや粗い 1mm以下の白色砂粒、金雲母	やや不良	内-黄橙色 外-灰褐色	回転ナデ	(口)1/6	外面煤付着
23	長胴甕	(口)19.0	C 11 包含層	やや粗い 1mm以下の白色砂粒	やや良好	内-淡黄褐色 外-黄褐色	内-回転ナデ→カキ目 外-回転ナデ	(口)1/6	
24	長胴甕	(口)23.0	C 7 包含層	粗い、金雲母	不良	淡灰黄褐色	回転ナデ	(口)1/12	内面煤付着
25	長胴甕	(口)19.0	C 12 包含層	やや粗い、 金雲母	良好	黄褐色	回転ナデ	(口)1/12	
26	長胴甕	(口)21.0	C 11・C 12 包含層	やや密、金雲母	良好	黄褐色	回転ナデ	(口)1/4	
27	長胴甕	(口)21.0	E 8 包含層	やや粗い、 金雲母	やや不良	内-暗黄褐色～褐色 外-暗黄褐色	回転ナデ	(口)1/8	内面煤付着
第65図1	鍋	(口)38.0	B 8 包含層	やや粗い、 金雲母	やや良好	灰黄褐色	回転ナデ	(口)1/12	外面煤付着
2	鍋	(口)41.0	B 8 包含層	やや粗い 1mm以下の白色砂粒	良好	淡灰褐色	内-(口)回転ナデ(体)回転ナデ→カキ目 外-(口)回転ナデ(体)タタキ→カキ目	(口)1/12	内外面煤付着
3	鍋	(口)28.0	C 7 包含層	やや粗い	やや不良	内-淡黄褐色 外-(口)淡黄褐色 (体)褐色	内-回転ナデ	(口)1/12	外面煤付着?
4	鍋	(口)41.4	B 8 包含層	粗い 1mm以下の白色砂粒、金雲母	やや良好	内-暗黄褐色 外-暗褐色	内-(口)回転ナデ (体)ナデ	(口)1/8	外面煤付着
5	鍋	—	C 5・C 7 包含層	密、金雲母	良好	内-淡褐色 外-淡灰褐色	内-回転ナデ 外-上半回転ナデ・下半ケズリ	(口)1/8	外面煤付着
6	鍋	(口)40.8	B 2・B 3 包含層	密	良好	黄褐色	回転ナデ	(口)1/8	内外面煤付着
7	鍋	(口)35.0	B 3 包含層	やや粗い	やや不良	内-黄褐色 外-黄褐色～淡褐色	回転ナデ	(口)1/8	
8	皿	(口)9.6 (底)約4.0 (高)1.8	C 4 包含層	密、金雲母	やや良好	内-淡黄褐色 外-黄褐色	内-回転ナデ 外-(口)回転ナデ(底)ナデ	(口)1/6	
9	皿	(口)7.2 (底)約4.8 (高)1.4	B 7 包含層	密	良好	灰褐色	内-不明 外-(口)不明(底)ナデ	(口)1/4	手捏
10	皿	(口)8.6 (底)約4.0 (高)1.3	B 7 包含層	やや密	良好	橙色	内-ナデ 外-(口)ナデ(底)ナデ	(口)1/2	手捏
11	皿	(口)9.0 (底)4.6 (高)1.3	包含層	密	やや不良	内-淡黄褐色 外-淡褐色	(口)ナデ	(口)1/3	手捏 底部外面指頭圧痕
12	皿	(口)7.6 (底)3.8 (高)1.2	B 2 包含層	密 0.5mm以下の白色砂粒 金雲母	やや不良	橙色	内-不明 外-(口)ナデ(底)ナデ	(口)1/3	手捏
13	皿	(口)8.4 (底)約6.7 (高)1.2	C 6 包含層	密	やや不良	内-淡黄褐色～褐色 外-灰黄褐色～褐色	内-ナデ? 外-(口)ナデ?	(口)1/4	手捏
14	皿	(口)9.0 (底)6.4 (高)1.2	B 13 包含層	やや密	やや良好	内-橙色 外-淡褐色	内-ナデ 外-(口)ナデ(底)ナデ	(口)1/6	手捏
15	皿	(口)10.0 (底)6.0 (高)1.2	C 1 包含層	密	良好	内-灰褐色 外-褐色	内-ナデ 外-不明	(口)1/4	手捏
16	皿	(口)9.0 (底)約6.0 (高)1.05	A 13 包含層	密	不良	内-淡灰黄褐色 外-淡黄褐色	(口)ナデ(底)ナデ	(口)1/4	手捏
17	皿	(口)7.2 (底)6.0 (高)0.9	B 5 包含層	やや密	やや不良	淡黄褐色	内-(口)ナデ(底)ナデ 外-不明	(口)1/3	手捏

第2節 包含層出土遺物

第16表 II区 包含層出土中世土器観察一覧表

挿図No	器種	出土地区	法量(cm)	焼成	胎土	色調	内面調整	外面調整	残存率	備考
第66図1	土師器皿	B7包含層	(口)7.2 (高)1.5	良好	密 雲母・クサリ 礫を少量含む	にぶい橙色	(口)ヨコナデ (見込)ナデ	(口)一段ナデ (底)指頭圧痕	1/3	
2	土師器皿	B2包含層	(口)7.2 (高)1.3	良好	密 雲母を少量含む	橙色	(口)ヨコナデ (見込)ナデ	(口)一段ナデ (底)指頭圧痕	1/2	
3	土師器皿	包含層	(口)8.3 (高)1.3	良好	密 クサリ礫をわ ずかに含む	にぶい橙色	(口)ヨコナデ (見込)ナデ	(口)一段ナデ (底)指頭圧痕	1/2	
4	土師器皿	B13包含層	(口)8.8 (高)1.1	良好	密 雲母を少量含む	にぶい橙色	(口)ヨコナデ (見込)ナデ	(口)一段ナデ (底)指頭圧痕	1/6	
5	土師器皿	C6包含層	(口)9.0 (高)1.2	良好	密 クサリ礫をわ ずかに含む	橙色	(口)ヨコナデ (見込)ナデ	(口)一段ナデ (底)指頭圧痕	1/3	
6	土師器皿	A13包含層	(口)8.0 (高)1.3	良好	密	灰白色	(口)ヨコナデ (見込)ナデ	(口)一段ナデ (底)指頭圧痕	1/3	口縁端部に「面 取り」を施す
7	土師器皿	包含層	(口)8.8 (高)1.3	良好	密 クサリ礫をわ ずかに含む	浅黄橙色	(口)ヨコナデ (見込)ナデ	(口)二段ナデ (底)指頭圧痕	1/3	
8	土師器皿	C4包含層	(口)10.0 (高)1.8	良好	密 雲母をわずか に含む	にぶい黄橙色	(口)ヨコナデ (見込)ナデ	(口)二段ナデ (底)指頭圧痕	1/6	
9	灰釉陶器 碗	C7包含層	(底)7.2 (高)3.1	良好	密 少量の黒色粒 を含む	(胎)灰色 (釉)緑灰色	回転ナデ	回転ナデ	高台～体 部下半部 残存	削り出し高台
10	越前焼 壺	C4包含層	(高)6.1	良好	密	(胎)赤灰色 (釉)緑灰色	ナデ	ナデ	体部片	肩部に線刻を施 す
11	越前焼 播鉢	C15包含層	(口)22.0 (高)7.7	良好	密	赤褐色	ナデ	ナデ	口縁部～ 体部上半 部 1/12 残存	
12	越前焼 播鉢	C15包含層	(底)10.0 (高)3.9	不良	密	浅橙色	不明瞭	不明瞭	底部片	
13	白磁 合子蓋	C6包含層	(口)6.8 (底)4.7 (高)1.9	良	やや密	白灰色	ナデ	ナデ	1/3	連弁文の陰刻を 施す
14	青磁碗	C4包含層	(口)12.4 (高)3.5	良好	密	緑灰色	ナデ	ナデ	口縁部片	体部内面に鎬連 弁を施す
15	青磁碗	表採	(口)14.8 (高)3.3	良好	密	明緑灰色	ナデ	ナデ	口縁部片	体部外面に片切 影鎬連弁を施す
16	白磁碗	C10包含層	(口)15.2 (高)2.6	良好	密	灰白色	ナデ	ナデ	口縁部片	
17	白磁碗	C5包含層	(口)11.4 (高)4.3	良好	密	青白色	ナデ	ナデ	口縁部片	体部内面に陰刻 草花文を施す

V 石器（第67～70図）

II区で包含層（表土・客土等を含む）より出土した石器は、総数で41点を数える。以下、器種別に記述するが、各器種内の分類については、第4章第2節ですでに述べているので、全て省略する。

イ 打製石斧（第67・68図、打製石斧観察一覧表）

打製石斧は総数で30点出土している。主に、九頭竜川もしくは周辺の支流の川原礫・転石を素材にしていると思われる。全体の傾向や特徴についてはすでに触れたが、再度列記しておく。

- ① 表面に自然面を大きく残し、裏面に第一剥離面と思われる、側方からの剥離面を大きく残す。
- ② 刃部は素材（剥片）の鋭利な側縁辺をそのまま利用するため、調整は全体の形状を整える程度で、ごくわずかであることが多い。
- ③ 刃部以外の形状調整、特に基部や括れ部への調整は緻密で、時に著しい潰れなども観察できる。

本資料中、分類可能であったのは22点で、Ⅲ・Ⅳ類は確認できない。以下、確認できた各類について記述する。

I類（第67図2）

いわゆる短冊形と呼ばれるものである。総数で2点出土し、完形品は図示した1点のみである。両面に自然風化面を残しており、平板状の自然石を加工したものと思われる。頭部には調整痕がなく、折り取りの可能性もある。刃部には調整が入るが、剥離面の跡が若干残るほかは、ほとんど磨耗して潰れている。左側面には緻密な剥離調整痕を残すが、右側面は剥離調整後、研磨調整により剥離面をほぼ全て磨り潰し、稜線を作り出している。

Ⅱ類（第67図1・3・4）

広義では短冊形に含まれるが、刃部がやや広がり、撥形との中間形態をとるものである。総数で3点出土し、全て完形品である。1は頭部調整が比較的密で、一見刃部のようにも見えるが、磨耗・摩滅痕は観察できない。3は刃部の摩滅が非常に激しく、一部は剥離痕まで潰れている。4は刃部の片面（表面）のみを研磨し、磨製石斧の刃部のように仕上げている。

V類（第67図5～8、第68図1）

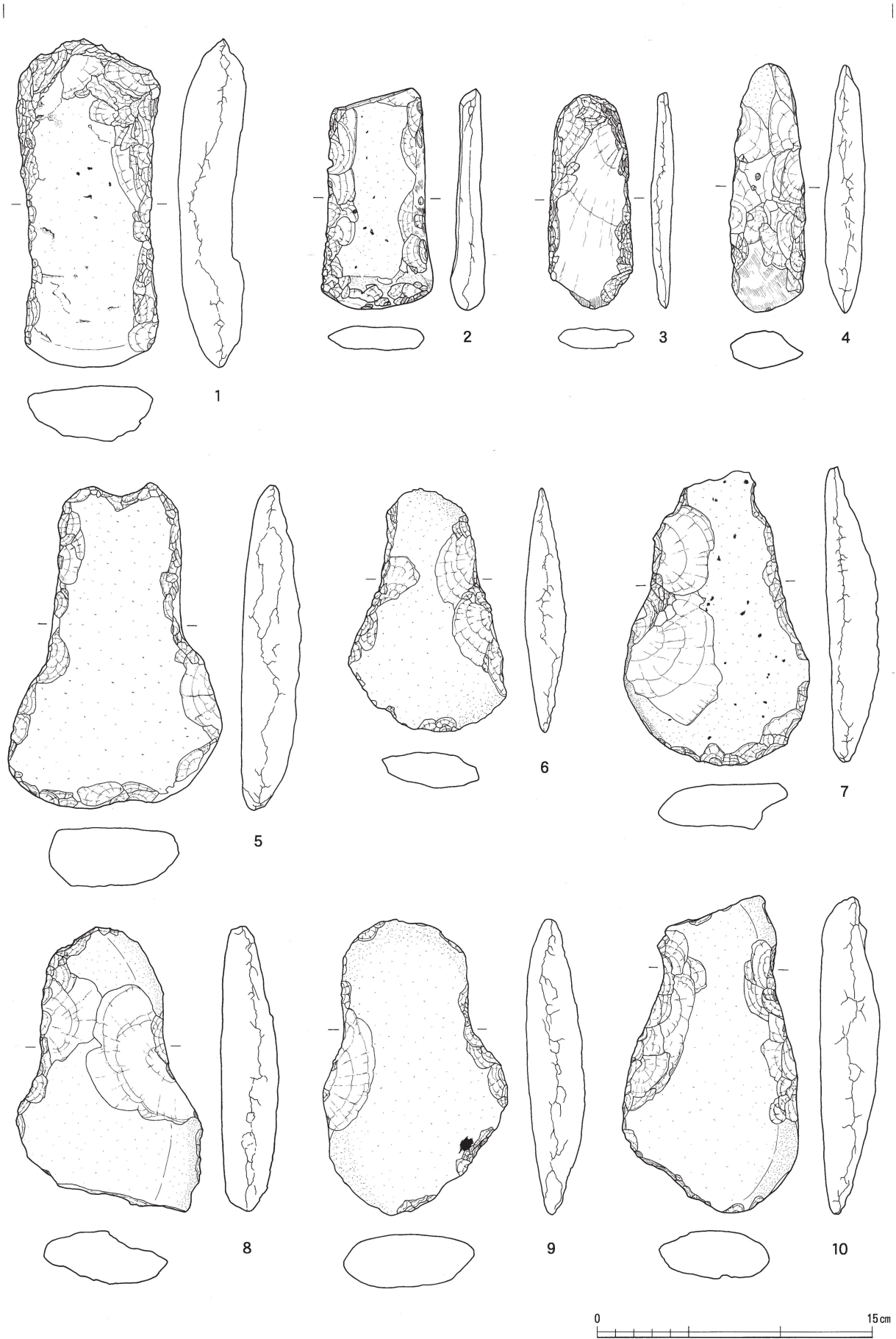
いわゆる撥形と呼ばれる一群である。総数で6点出土し、完形品は4点（第67図5～7、第68図1）、破損品は2点（第67図8、1点図示せず）である。第67図5は、頭部への調整が密で、特に頭頂部に抉りを作成している。同図8には刃部がないが、欠失したのか未調整なのかは不明である。第68図1は全体の形状が歪であり、実用性に疑問が残る。

Ⅵ類（第67図9・10、第68図2～9）

いわゆる分銅形と呼ばれる一群である。総数で11点出土し、出土数では最も多い。完形品は8点（第67図9、第68図2～7・9）、破損品は3点（第67図10、第68図8、1点図示せず）である。第67図10は、頭部および刃部調整がなく、頭部は折り取りの、刃部は一部欠失した可能性がある。第68図3は、頭部に折れたような跡があるが、他の剥離面に比べて風化が進んでいるため、素材段階ですであつた剥離面であろうと思われる。同図7は本資料中最大の打製石斧で、両面に形状調整が施され、自然面は残されていない。同図9はいわゆるミニチュア品である。

ロ 磨石類（第69図1・2、磨石類観察一覧表）

総数で3点出土している。完形品2点（1・2）はいわゆる磨石（I類）であり、破損品1点はいわ



第67圖 II区 包含層出土打製石斧實測圖(1) (縮尺1/3)



第68図 II区 包含層出土打製石斧実測図(2) (縮尺1/3)

第2節 包含層出土遺物

第17表 II区 打製石斧観察一覧表

No	地区	出土遺構	分類	遺存状態	最大長(mm)	刃部幅(mm)	基部幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考	図版No
1	A・B5	1住4区	Vb	完形	103.40	86.10	38.50	15.00	119.8	珪晶質安山岩		第32図1
2	A・B5	1住4区	-	刃部片	106.00	115.00	-	38.55	516.4	閃緑岩		第32図2
3	A・B5	1住4区	I	端部片	69.00	66.70	-	13.50	77.2	石英安山岩		第32図3
4	A・B5	1住4区	Vb	完形	162.00	101.80	54.30	25.60	455.1	閃緑岩		第32図4
5		2住1区	Vb	基部部欠	127.00	83.80	51.20	25.90	323.7	安山岩		第38図1
6	A10	2住3区	-	刃部欠?	110.20	-	59.85	21.15	164.2	石英安山岩		第38図2
7	B2	包含層	Vb	完形	135.45	113.55	47.00	28.00	275.9	安山岩		第68図2
8	B2	包含層	Vb	刃部片	100.00	83.20	-	19.50	202.5	閃緑岩		
9	B3	包含層	-	基部部片?	60.00	-	62.40	9.55	48.7	安山岩		
10	C5	包含層	-	刃部片?	59.00	92.20	-	14.25	85.1	黒色片岩		
11	A6	包含層	IIa	完形	182.00	72.60	78.55	33.75	596.3	石英安山岩		第67図1
12	A6	包含層	-	刃部片	116.50	103.00	-	29.00	352.4	安山岩		
13	B6	包含層	VIa	完形	221.00	154.00	106.30	29.10	1011.2	石英安山岩		第68図7
14	A7	包含層	Vc	完形	118.00	93.55	51.70	28.75	308.3	安山岩	未製品か	第68図1
15	A7	包含層	Vb	完形	129.00	88.00	48.40	22.00	219.6	珪晶質安山岩		第67図6
16	B7	包含層	-	基部部片?	52.00	-	94.45	21.00	144.1	安山岩		
17	B7	包含層	IIb	完形	117.20	45.70	38.85	11.85	77.8	石英安山岩		第67図3
18	B8	包含層	Vb	完形	132.00	107.75	67.90	29.75	554.1	安山岩		第67図9
19	C8	包含層	VIa	基部部欠	118.00	116.10	60.35	21.65	289.7	安山岩		第68図3
20	B9	包含層	-	両端部欠	68.35	-	68.75	17.00	75.2	石英安山岩	側面に微細な剥離	
21	B9	包含層	Vb	完形	147.00	107.60	65.60	27.10	450.2	安山岩		第67図7
22	C9	包含層	Vb	刃部片	163.00	110.90	64.70	17.40	363.4	安山岩		第68図8
23	C10	包含層	I	刃部欠	108.30	-	58.55	19.20	137.9	石英安山岩		
24	A12	包含層	Vb	完形	207.00	107.60	75.65	37.45	936.7	安山岩		第68図6
25	C12	包含層	-	完形?	115.00	-	75.00	24.60	249.4	石英安山岩	一部に微細な剥離	
26	C12	包含層	VIa	完形	162.00	103.50	69.15	33.35	557.7	安山岩		第68図5
27	C12	包含層	-	完形?	135.00	125.00	-	29.70	523.7	石英安山岩	未製品か	
28	C12	包含層	IIb	完形	135.30	37.75	41.70	21.30	119.1	砂岩		第67図4
29	C14	包含層	Vc	完形	176.00	116.35	65.60	32.00	753.5	閃緑岩		第67図5
30	C15	包含層	Vb	基部部欠	176.00	97.00	63.60	31.45	612.0	閃緑岩		第67図10
31	B16	包含層	Vb	完形	70.00	43.65	43.55	9.05	30.0	濃尾流紋岩		第68図9
32	B17	包含層	-	破片	75.40	-	69.00	12.50	70.4	石英安山岩		
33	C17	包含層	Vb	基部部欠	122.00	102.40	53.70	24.40	330.2	安山岩		
34		表採	Ia	基部部欠	119.85	60.20	50.00	18.25	161.8	石英安山岩		図67図2
35		表採	V	刃部欠	159.00	100.20	66.10	30.20	484.2	閃緑岩		図67図8
36		試掘	VIa	完形	141.90	123.00	53.55	19.80	313.0	安山岩		図68図4

ゆる凹石(Ⅱ類)である。

ハ 砥石(第69図3・4、砥石観察一覧表)

総数で2点出土している。いずれも四方の側面が著しく磨耗しており、特に3は、金属製の刃物によると思われる顕著な切削痕や線刻痕が、側面や端部に多く見受けられる。

ニ 器種不明品(第69図5・6、器種不明品観察一覧表)

石器と思われるが、器種の特定が困難なものを器種不明品とする。5は、形状が磨製石斧のようにも見受けられるが、金属製の刃物によると思われる顕著な切削痕が観察できるため、少なくとも磨製石斧ではないと判断する。前述した砥石に同様な切削痕が残されているもの(第69図3)があり、石材も同じであることから、変形して使用困難になった砥石の形状を削り直し、再利用を図ったものである可能性が高い。切削痕が金属製の刃物によるものならば、これらの所産時期はおそらく中世以降であろう。

6は、表面に自然面を残す薄い剥片で、側縁辺の表裏を研磨して、刃部を作出している。おそらく石包丁の破片と思われる。

ホ 尖頭器(第70図1・2、尖頭器観察一覧表)

総数で2点出土している。1は先端から側辺にかけての一部を欠失している。下端部の一部が白っぽく変色し、付着物も若干見受けられることから、装着痕を残しているものと思われる。(中森)



第69図 II区 包含層出土磨石類・砥石・器種不明品実測図（縮尺1/3）

第18表 II区 包含層出土磨石類観察一覧表

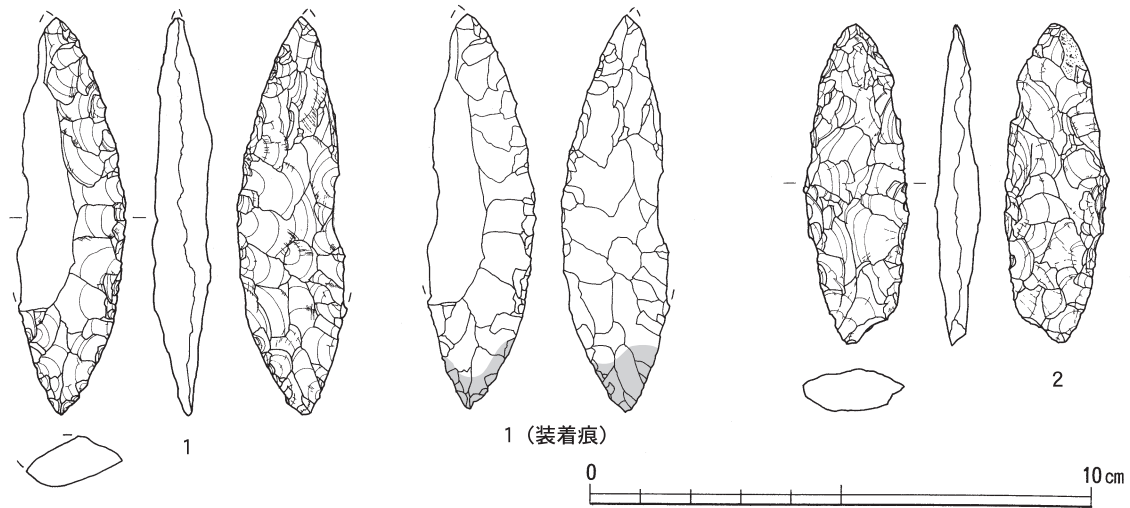
No	地区	出土遺構	分類	遺存状態	A	B	C	D	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考	図版No
1	C 5	包含層	I c	完形	×	○	○	◎	99.00	90.20	53.80	744.0	安山岩		第69図 1
2	C 17	包含層	II	破片	○	-	-	-	52.15	50.45	10.60	24.5	濃尾流紋岩		
3	C 17	包含層	I a	完形	×	×	◎	×	93.00	88.30	67.15	739.2	安山岩		第69図 2

第19表 II区 包含層出土砥石観察一覧表

No	地区	出土遺構	遺存状態	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考	図版No
1	B 8	包含層	破片	63.00	52.40	25.70	92.3	凝灰岩	側面および端部に顕著な切削痕・線刻痕	第69図3
2	B 9	包含層	破片	112.00	49.00	28.70	191.7	凝灰岩		第69図4

第20表 II区 包含層出土器種不明品観察一覧表

No	地区	出土遺構	遺存状態	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	備考	図版No
1	B 3	包含層	破片	60.00	29.60	9.75	20.0	安山岩	石包丁破片か	第69図 6
2	B 8	包含層	両端部欠	105.50	40.25	20.85	115.8	凝灰岩	切削痕あり。砥石の再加工品か。	第69図 5



第70図 II区 包含層出土尖頭器実測図 (縮尺2/3)

第21表 II区 包含層出土尖頭器観察一覧表

No	地区	出土遺構	遺存状態	最大長(mm)	最大幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	備考	図版No
1	C12	包含層	完形	63.75	20.65	8.45	10.6	チャート		第70図2
2	C13	包含層	破損	79.50	20.90	11.40	12.9	珪質岩	装着痕あり	第70図1

VI 鉄器 (第71図)

鉄鏃 (第71図)

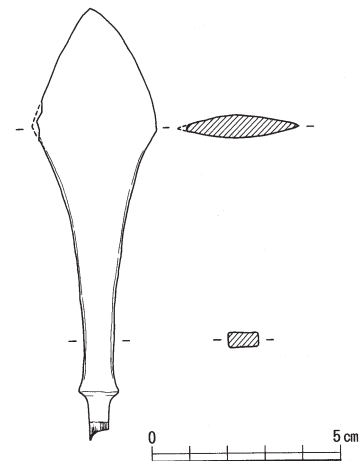
B-17区より、1点のみ出土している。全体に錆膨れが著しく、掲載した実測図はX線画像を参考に作成したものである。

有茎鏃で、茎部と刃部の一部を欠損しており、全長11.3cm (鏃身部長3.2cm、頸部長6.9cm、茎部長1.2cm)を測る。身幅が広く、器厚の薄い、いわゆる広根形の鉄鏃で、奈良～平安時代の製品と考えられる¹⁾。

(中森)

註

- 1) 鉄鏃の実測と観察は、当センターの鈴木篤英氏による。なお、津野仁氏の分類(津野1990)によれば、本資料は柳葉^{まわのかつき}Ⅱ式関籠被に相当すると思われ、その中心時期は8世紀から11世紀前半とされる。



第71図 II区 包含層出土鉄器実測図 (縮尺1/2)

参考文献

- 津野 仁 1990 「古代・中世の鉄鏃 -東国の出土品を中心にして-」 『物質文化』54 物質文化研究会 59頁～75頁

VII 土製品 (第72図)

土錘 (第72図1～24)

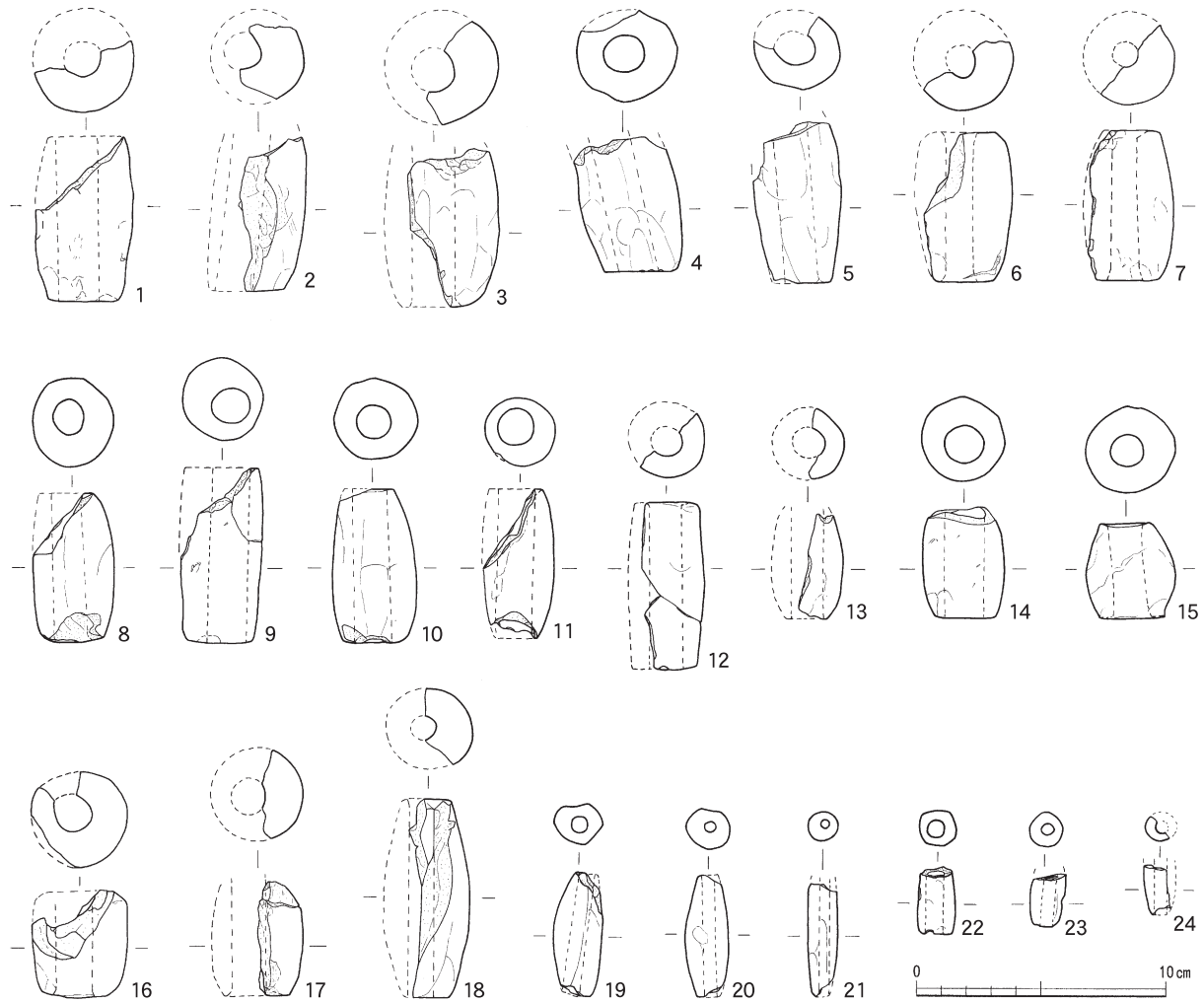
土錘は包含層からの出土であり、時期は不明である。出土した土錘は全て管状土錘であり、形態から幾つかに分類することができる。和田晴吾氏は管状土錘を5種に分類し、時期や分布域を述べている。ここでは和田分類(和田1985)を用いる。縦長で長軸断面が楕円形を呈し、長さに対して幅が1/2未満

のものをb類とし、長軸断面が長方形をなす端正な形のをc類、そしてc類を短くした形で断面が正方形に近いものをd類とする。今回出土した土錘は、1～12はc類に、13～17はd類に、18～24はb類に該当する。全ての土錘は、棒状のものに粘土を巻き付けるか貼り付けた後に、丸棒状の工具を引き抜いたものと考えられる。細かな条痕が長軸方向に走るものと、短軸方向に走るものがあり、長軸方向の条痕は軟質の状態時にそのまま引き抜かれた際のもの、短軸方向の条痕は回転させながら引き抜いた際のものと考えられる(細辻2001)。内面には、砂粒が長軸方向に移動しているのを2点(1・7)観察でき、他の土錘では砂粒の移動を確認できなかったが、内面に擦れてミガキを行ったような状態であったことから工具を引き抜いたと推測する。孔径は、1.3～1.8cm(1～18)と0.4～0.7cm(19～24)の二つに分けられ、これは土錘の形態によって使用する丸棒状の工具が違うことによる。成形時に両端を切り、面を持たすもの(1・2・4・6～10・12・14～16)と持たさないもの(3・5・11・13・17～24)があり、また棒状のものを引き抜いた後に孔径を整形するもの(6・7)もある。外面はナデにより整形を行うが、1・2の両側は篋状工具によって整形を行っている。重量は完形のものがないため、規格性を論じることはできない。大沼芳幸氏は、近江地域から出土した土錘の分析から、形態の差異は網の使用法によるとし、重量の軽いb・d類を刺網系、c類を巻網・曳網系に使用している(大沼1992)。また、各遺跡の形態別出土量を検討した結果、時期により漁法が変化し、そのことからある程度形態によって時期差が表れるとしている。この指摘は琵琶湖岸という土錘の出土量が多い地域の検討であり、他地域においても同じ様相となるかは未定であり、今後の課題となる。(今林)

参考文献

- 大沼芳幸 1992 「人はそれでもタンパクシツを欲した」 『紀要』第5号(財滋賀県文化財保護協会)
- 細辻真澄 2001 「任海宮田遺跡出土の土錘について」 『富山考古学研究』第4号(財富山県文化財振興団)
- 和田晴吾 1985 「土錘・石錘」 『弥生文化の研究』5 雄山閣

第2節 包含層出土遺物



第72図 II区 包含層出土土製品実測図(縮尺1/3)

第22表 II区 包含層出土土製品観察一覧表

挿図No	出土地区	最大長(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	色調	胎土	焼成	残存率	備考
第72図1	B6包含層	(6.6)	3.85	1.6	(49.3)	淡黄灰~淡橙色	長石多	やや良	1/3	
2	C6包含層	(6.2)	(2.65)	1.5	(46.5)	淡明橙色	長石多・雲母極少	良	1/3	黒斑有
3	C2包含層	(6.2)	(4.3)	1.7	(60.0)	橙色	長石少	良	1/2	
4	C5包含層	(5.4)	4.05	1.6	(67.4)	淡赤褐色	石英極多・長石少	良	2/3	
5	B3包含層	(6.4)	3.55	1.4	(49.5)	淡橙色	石英少・長石少	やや不良	1/2	
6	B4包含層	6.0	(3.95)	1.5	(45.1)	淡橙~赤橙色	石英少・長石少	やや良	1/2	黒斑有
7	C5包含層	6.0	(3.65)	1.5	(42.4)	淡灰橙褐色	長石少・角閃石極少・チャート極少	良	1/2	
8	B5包含層	6.0	3.3	1.3	(48.9)	淡橙色	石英少・長石少	不良	2/3	
9	A7包含層	7.0	3.2	1.6	(52.2)	橙~赤橙色	石英多	良	3/4	
10	B6包含層	6.2	3.4	1.5	(53.2)	淡橙色	石英少・長石少・雲母極少	良	5/6	
11	C2包含層	6.0	2.85	1.4	(24.4)	淡明橙色	石英極少	やや不良	2/3	
12	B5包含層	6.7	(3.15)	1.8	(28.3)	淡褐橙色	長石少	良	1/2	
13	C8包含層	(4.2)	(2.85)	1.3	(12.0)	淡明橙色	長石極少	やや不良	1/2	
14	C7包含層	(4.5)	3.4	1.5	37.2	淡明橙色	長石極少	やや良	1/1	
15	B3包含層	3.85	3.6	1.4	40.8	淡橙色	雲母極少	良	1/1	
16	C4包含層	4.3	(3.8)	1.7	(46.3)	橙~灰褐色	長石極少	良	1/3	
17	C3包含層	(4.3)	(3.55)	1.4	(25.4)	淡赤橙色	長石極少	良	1/3	
18	表探	7.9	(3.45)	(1.0)	(39.6)	淡明橙色	石英極少・長石極少	やや良	1/2	
19	B6包含層	5.0	1.9	0.7	13.4	淡赤褐色	石英少	良	1/1	
20	C2包含層	4.9	1.75	0.5	10.9	淡橙色	長石少	やや不良	1/1	
21	包含層	(4.5)	(1.25)	0.4	(6.5)	淡橙色	石英極少	やや不良	4/5	
22	C5包含層	(2.7)	1.55	0.7	(5.9)	橙褐色	石英多	やや良	1/3	
23	C5包含層	(2.1)	1.4	0.5	(4.0)	明橙色	長石少	やや良	1/3	
24	C2包含層	(2.0)	(1.4)	0.5	(1.4)	淡黄褐色	-	やや良	1/4	

第7章 まとめ

第1節 遺物

I 縄文土器

本遺跡で検出した縄文土器の時期について述べる。

I区では、晩期前葉～後期後半段階の土器群を検出している。それらは主に、御経塚式、中屋式に比定される。

II区では、縄文時代早期から晩期にわたる土器群を検出している。それらは主に、粕畑式～入海式、北白川下層I b式～II a式、北白川下層II b式、北白川下層III式、船元IV式～里木II式、中津式、御経塚式、八日市新保式に比定される。(白川)

II 弥生土器～古式土師器

月影式土器の時間的位置づけ

今回の調査では、月影式土器が多く出土している。この月影式土器の位置づけをめぐるのは、弥生土器に位置づける立場(谷内尾1983、田嶋1986、楠1998)と古式土師器に位置づける立場(橋本1966・1975、吉岡1967、堀2002・2004)があり、問題は土器型式の検討だけではなく、他地域を含めた社会の様相から明らかにすることが重要である。このように非常に難しい問題であることから、月影式土器の研究史と福井県における位置づけを時間軸に沿って概観したい。

1960年代に入って、橋本澄夫氏はそれまでの研究の成果を整理し、北陸地方の編年案を提示した。その中で、月影式期に遺跡数の爆発的な増加や遺跡の立地が変化したこと、土器斉一化の方向等を弥生時代の社会とは違う社会が行ったと推定し、月影式を古式土師器の可能性が高いと位置づけた(橋本1966)。

吉岡康暢氏は、弥生時代後期には「越中より能登半島基部を占める邑知地溝帯に中心をおく北陸東北部、この南につらなる加越国境付近より福井平野にいたる北陸西部、閉鎖的な南越盆地南部」の三分布圏が存在し、それぞれに地域的差があったとした。月影式土器の段階では、それぞれの地域の特徴が希薄化し、ほぼ統一されることから、古式土師器と位置づけた(吉岡1967)。

さらに橋本氏は、前段階の土器と比較して、月影式土器を製作技法や器形から著しく規格化・斉一化が進んだと述べている。範囲は金沢平野や福井平野を中心に分布し、隣接する能登平野や富山平野にも強い影響力を与えていると指摘している。また、小型器台や有透装飾器台を月影式に位置づけた(橋本1975)。

この時期に福井県で刊行された大田山古墳群や中遺跡の報告書では、これまでの研究の成果から月影式土器を古式土師器に位置づけて報告されている(福井県教育庁埋蔵文化財センター「以下、福井県埋文」1975、1979)。

1980年代に入ると、谷内尾晋司氏は、資料が増加したことをふまえて、月影式の分類を行った。従来の月影式を2型式に分類し、月影II式が従来の月影式土器に該当し、月影I式は前段階の法仏式と月影II式を結ぶ過渡期の型式とした。月影I式では、斉一性が失われ、個別地域差が最も顕在化することから、社会が変動的であったことを指摘している。月影II式は、橋本氏と同様に福井平野から金沢平野までの北陸西部に分布しており、さらに手取扇状地を中心とした北加賀の狭い地域に限定され、地域差が

明確化してきたと述べている。月影Ⅱ式では、小型器台や有透装飾器台が出現するも、小型丸底埴を伴っていないことから、完成されたセットで導入されていない。それは、外部の影響を受けつつも、独自の在地式祭祀をおこなっているからと指摘している（谷内尾1983）。谷内尾氏は、文中では月影式の位置づけに言及していないが、表の中で弥生土器に位置づけている。これは、月影式には地域差が存在することや、次の古府クルビ式の段階から有透装飾器台などの在地祭式土器が消滅し、畿内系祭式土器が現れるからと考えたからであろう。なお、古府クルビ式は、布留式土器に併行する時期である。

田嶋明人氏は、谷内尾晋司氏が分類した月影Ⅰ式と月影Ⅱ式との再検討を行った。田嶋氏は、漆町遺跡の整理から、3・4群を月影式に、5・6群を白江式に設定した。谷内尾氏の編年では、3群は「月影Ⅰ式」に、4・5群と6群の一部は「月影Ⅱ式」に位置づけられる。田嶋氏は、3・4群は組成のほとんどが法仏式に求められ（装飾器台は除く）、各器種が極限にまで定型化しており、外来系土器を基本的に含まず、極めて閉鎖的であると指摘している。5・6群は、「月影系土器群が、その組成と形態を地域間交流の進展に伴い波及してきた外来系土器群に譲り、変質・解体していく過程の土器群」とし、4群と5群との間に画期をみとめ、5・6群を「白江式」とした（田嶋1986）。

この時期の福井県の報告書では、菜山崎遺跡や長屋遺跡などで、月影式土器を古式土師器に位置づけている（福井県埋文1986 a、1986 b）。しかし、その後刊行された光源寺遺跡や南江守大槇遺跡の報告書では、月影式土器は出土していないが白江式の土器が出土しており、白江式土器を古式土師器に位置づけ、それ以前の段階を弥生土器として認識されている（福井県埋文1993、1994 a）。1986年の段階で、月影式土器の石川県における研究成果と、福井県における報告書による位置づけに差異が生じているが、1993年では研究成果に沿った位置づけがされている。これは、福井県において、石川県を中心に行われている編年観を受け入れるのに時間がかかったためと考えられる。また、長泉寺遺跡の報告書では、月影式土器の位置づけを弥生時代末から古墳時代初頭と幅を持たせ、明確な位置づけを行っていない（福井県埋文1994 b）。これは、後述する近畿地方における庄内式土器を、弥生土器か古式土師器に位置づけるかの論議と絡んでおり、庄内式土器とほぼ併行関係にある月影式土器の位置づけを保留にしたことによると考えられる。

1990年代に入り、楠正勝氏は、西念・南新保遺跡から出土した弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器を、5期19小期に分類した。月影式は4期に、白江式は5期前半に相当する。また、田嶋氏の3・4群に4期が、5・6群が5期前半に相当する。西念・南新保遺跡が、北陸東北部と北陸西部地域の両縁辺部に位置することから、北陸東北部からの流入が見られ、北陸西部とは土器組成に違いが見られるとしている。4期は、前段階の特徴を持つ土器が引き続き残るが、器高の縮小化・脚部の矮小化現象が見られるとしている。5期前半になると、それまでの系譜を引く土器が終わり、外来系土器が波及してくるとしている。特に、祭式土器に外来系土器のものが見られるようになる。また、隣り合った遺跡でも土器の様相に違いが見られ、当該期の複雑な社会状況が表れていると指摘している（楠1998）。

この時期の福井県の報告書では、小稲津遺跡やそれ以後に刊行された報告書でも、月影式土器を弥生時代末から古墳時代初頭に位置づけており、前述の長泉寺遺跡と同様の理由によるものと考えられる（福井県埋文2002）。

堀大介氏は、石川県だけでなく福井県の資料も検討を行い、月影式期には装飾器台の出現や器台・鉢の無文化、特徴的な月影形甕が出現することなどから、法仏式と月影式の間には大きな画期があるとし、月影式土器を古墳時代早期（堀氏は庄内式併行期に古墳時代早期という時期名称を使用）に位置づけて

いる（堀2002、2004）。

以上のように、月影式土器の編年作業は、石川県の資料を中心として行われており、福井県を中心とした資料での編年作業はほとんど行われていない。福井県の報告書において、1993年刊行の光源寺遺跡の報告書から、月影式土器が土師器から弥生土器に位置づけが変わったのは、石川県の資料を中心に行った編年観の変更に影響を受けていることがわかる。これまでの研究を概観すると、資料の少ない時代では、月影式土器は前段階とは明らかに違う様相をしており、弥生土器とは一線を画していると考えられてきた。月影式の資料の増加に伴い検討を加えると、土器組成は前段階の法仏式に系譜を求めることが明らかである。しかし、堀氏も述べているが、月影式期から小型器台や有透装飾器台の祭式土器が表れるのは、他地域からの影響を受け、社会が変化を迎えていると指摘できる。北陸地方においては、土器の組成や型式を中心に時期区分を行っていることがうかがえる。古墳時代の開始時期については様々な考え方があり、それぞれの考え方や他地域の様相を見てみたい。

古墳時代開始期のメルクマールを、定型化した古墳の出現に置く立場（都出1979）、副葬品の組成の変化に置く立場（白石1979）、その他の要素を含めた様相の変化に置く立場（寺澤1980）がある。弥生土器が伝統的な地域色が表れる土器なのに対し、土師器は広域に斉一性が認められる土器である。近畿地方では、弥生土器と布留式土器の間を埋める土器として、庄内式土器が提唱された（田中1965）。庄内式土器は、近畿地方中心部に分布するが、他地域の土器や布留式土器に影響を与える。

近畿地方では、纏向遺跡や箸中山古墳（箸墓）などが存在する大和地域を中心に、古墳時代の開始時期についての研究が多く行われてきた。定型化した古墳の定義についても様々な立場が存在する。都出比呂志氏は、全国的に定型化された前方後円墳による政治的秩序の形成や祭式の統一性が成されることに重きを置く立場である（都出1979）。都出氏によると、定型化された前方後円墳として箸中山古墳があげられており、時期は布留0式期である。それより以前に造られた前方後円墳は、大和地域では纏向石塚古墳や纏向矢塚古墳の庄内式期中頃があり、四国では鶴尾神社4号墳が同じく庄内式期中頃、関東では神門3～5号墳が庄内式期後半に赤塚次郎氏が位置づけており（赤塚1995）、広い地域に庄内式期から前方後円墳が存在する。白石太一郎氏は、小林行雄氏が副葬品の組成から行った古墳編年（小林1956）の第2段階が布留式の極めて古い段階に相当することから、第1段階の発生期の古墳を庄内式の新しい段階に想定した（白石1979）。その一方で、寺澤薫氏は、時期区分というのは土器や特定の要素のみの変化ではなく、「原則的にあらゆる人為物の様式（土器、金属器、住居、墓、集落…）の画期によって総体化された『古墳文化（時代）』という新時代の規定によって成立すべき概念である」という立場を取る。さらに、その中でも初期大和政権の中心となった大和地域の様相を重要視する。土器についても、寺澤氏は畿内五様式を6つの様式に細分し、様式6には甕に見られる連続ラセンタタキ手法や小型器台、小型丸底土器の祖形が庄内式の前段階としての要素が含まれているとし、様式6を庄内0式と設定した。この時期に、「大和における集落の形成と消長の画期、高地性集落の消長、銅鐸の終焉、纏向遺跡と纏向石塚古墳の造営」が始まるとした。小型祭式土器の出現は、祭祀行為の変化による社会の変化が起きていることから、時期区分として最大の画期と捉えた（寺澤1980、1986）。都出氏と寺澤氏の論考を比較してみると、都出氏は、前方後円墳が全国的に普及し、政治的に統一された時点をもって古墳時代の始まりとするのに対して、寺澤氏は古墳時代の人為物の様式が表れた時点をもって始まりとするとしている。つまり、社会の変化が始まった段階（庄内0式）か、変化が全国に広まり定着した段階（布留0式）を定点とするかで認識を異にする。

以上、概観してきたように、福井県や石川県を中心とした北陸地方では、土器組成を中心に時期区分を行ってきており、古墳や副葬品などの社会変化から時期区分を行ってきた近畿地方とは、方法において違っている。北陸地方の土器組成における研究では、月影式土器は弥生土器の様相を引き継ぐとされている。しかし、月影式土器の土器組成においても、祭式土器の出現や内面ヘラケズリによる薄甕化など他地域からの影響と考えられる要素が見られる。他地域からの要素は、土器だけでなく、集落や墓制、他の遺物の様相にも影響を与えている可能性がある。このような影響は、社会変化に起因すると考えられ、今後は様々な様相を含めて検討することを課題としたい。

月影式土器の器種組成比率

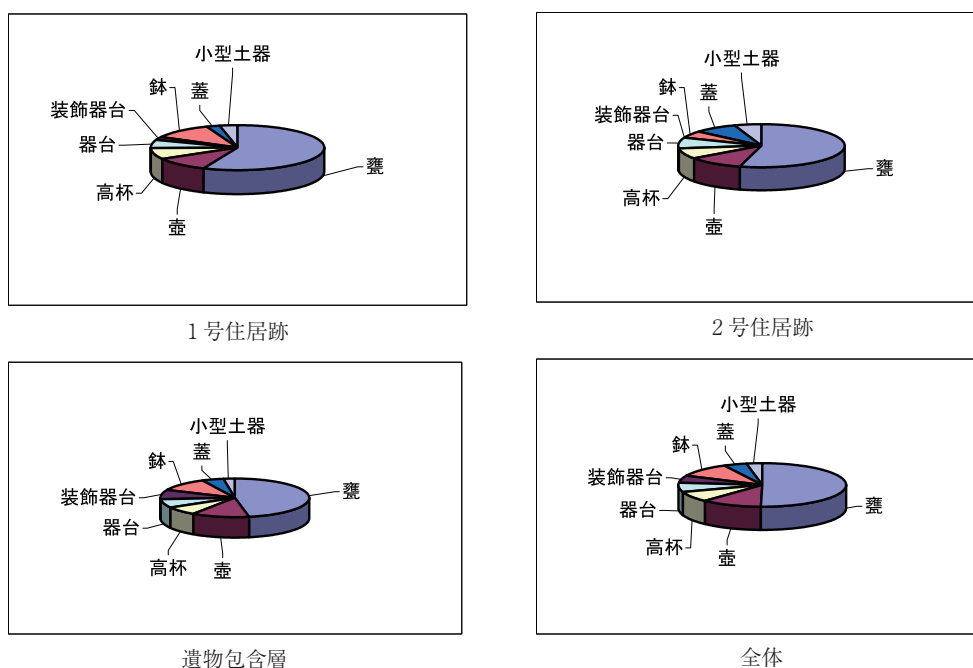
今回の調査では、月影式後半期の土器が多量に出土したこともあり、月影式後半期における器種別の出土比率を算出した(第73図)。1号住居跡と2号住居跡、遺物包含層、それらを含めた全体を対象にした。住居跡から出土した遺物は、住居に伴うものではなく、住居廃絶後に廃棄された性格のものであるが、集落での土器組成の比率を考える上で参考にといい、対象に含めた。また、図化できた土器を計測対象とし、図化できなかった細片は計測対象外とした。このことから、この算出結果は厳密な意味での正確なものとは言えず、あくまでも参考程度として扱うことになる。

甕は、住居跡や包含層、全体の出土比率においても50%前後の数値を示している。これは甕が煮沸具として使用され、壊れやすいという特色から、他の器種と比較して大量に生産されたということであろう。それ以外の器種は、ほとんどが全体の10%以下の数値を示している。

今回は当調査のみを対象とし、時期や地域間による比率の比較検討を行えなかったが、今後に向けての参考資料として提示しておく。(今林)

第23表 月影式土器の器種組成比率表

	甕	壺	高杯	器台	装器	鉢	蓋	小型土器	計
1住	49	9	7	5	2	10	2	3	87
割合(%)	56.3	10.345	8.046	5.7471	2.2989	11.494	2.2989	3.4483	100
2住	20	4	3	3	0	2	3	2	37
割合(%)	54.1	10.811	8.1081	8.1081	0	5.4054	8.1081	5.4054	100
包含層	90	24	14	14	15	21	9	5	192
割合(%)	46.9	12.5	7.2917	7.2917	7.8125	10.938	4.6875	2.6042	100
計	159	37	24	22	17	33	14	10	316
割合(%)	50.3	11.709	7.5949	6.962	5.3797	10.443	4.4304	3.1646	100



第73図 月影式土器の器種組成比率

参考文献

- 赤塚次郎 1995 「前方後円（方）墳出土の土器」 『季刊考古学』第52号 雄山閣
- 楠 正勝 1998 「弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器」 『西念・南新保遺跡Ⅳ』 金沢市教育委員会
- 小林行雄 1956 「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」 『京都大学文学部五十周年記念論集』 京都大学文学部
- 白石太一郎 1979 「近畿における古墳の年代」 『考古学ジャーナル』No164 ニュー・サイエンス社
- 田嶋明人 1986 「Ⅳ考察—漆町遺跡出土土器の編年的考察—」 『漆町遺跡Ⅰ』 石川県立埋蔵文化財センター
- 田中 琢 1965 「布留式以前」 『考古学研究』12 - 2 考古学研究会
- 寺澤 薫 1980 「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題」 『六条山遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所
- 寺澤 薫 1986 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」 『矢部遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所
- 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」 『考古学研究』26 - 2 考古学研究会
- 橋本澄夫 1966 「北陸」 『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』 河出書房
- 橋本澄夫 1975 「弥生土器—中部 北陸4—」 『考古学ジャーナル』No111 ニュー・サイエンス社
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1975 『太田山古墳群』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1979 『中遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1986 a 『柴山崎遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1986 b 『長屋遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1993 『光源寺遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1994 a 『南江守大槇遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1994 b 『長泉寺遺跡』
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2002 『小稲津遺跡』
- 堀 大介 2002 「古墳成立期の土器編年—北陸南西部を中心に—」 『朝日山』 朝日町教育委員会
- 堀 大介 2004 「コシ政権の誕生（上・下）」 『古代学研究』166号・167号 古代学研究会
- 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」 『北陸の考古学』 石川考古学研究会
- 吉岡康暢 1967 「北陸における土師器の編年」 『考古学ジャーナル』No 6 ニュー・サイエンス社

Ⅲ 須恵器・土師器

以下、本遺跡で検出した須恵器・土師器の時間的位置づけ、および歴史的背景を検討する。

時間的位置づけ（第74図）

須恵器生産終末期における編年は、田中照久氏¹⁾、水村伸行氏²⁾、およびロクロ土師器の編年は、越前では水村氏³⁾、石川県では出越茂和氏⁴⁾によって整理されている。また、当遺跡の横を流れる九頭竜川上流の勝山市猪野口南幅遺跡において、松村晶生氏⁵⁾が消費地側の検討を行っている。しかし、10世紀代の土師器については、良好な資料の多くが祭祀土坑であることから、埋納器種が偏在している可能性があり、また流通が発達する中、地域差も器種構成に影響すると思われる。今回は上記の先行研究を基に、

消費地ということもあり、包含層資料から想定できる当遺跡の存続期間の判定を目的とし、検討を行った。なお、以下で用いる「期」は、東古市縄手遺跡における平安時代のみでの区分である。

平安集落開始以前

須恵器坏A a・坏B a・坏B 蓋

9世紀第2四半期を中心とする。少量であり、東古市縄手遺跡の平安時代における集落開始時に搬入されたものか、あるいは混入したものか、両者の可能性がある。

I期

須恵器坏A b 1・b 2・坏B b 1・皿A a、土師器坏A a 1・a 2・長胴甕a・鍋a（土坑3）

9世紀第3四半期を中心とする。須恵器A、土師器Aの浅深の2種があるが、土坑3での共伴例からして、これらは時期差というよりは生産地差と考えられる⁶⁾。

弥生時代以降、平安時代では、この時期から集落として本格化したとみるべきであろう。

II期

須恵器坏A c・坏B b 2・無紐蓋・皿A b・碗B・大平鉢、土師器坏A b・長胴甕b・鍋b

9世紀第4四半期～10世紀初頭を中心とする。墨書土器を含むが、土器の総量はさほど多くない。鉢伏2号、3号窯式に併行するもので、近隣の遺跡では奥乙ヶ谷遺跡（窯）の時期である⁷⁾。

III期

須恵器坏A d・皿c、土師器碗A a 1・碗B a

10世紀第2四半期を中心とする。金比羅山登り口窯式（小曾原2号窯式）⁸⁾に併行すると考えられるが、小曾原2号窯の資料が少ないため、須恵器皿2に形態的に後続し、かつ一定量を占める須恵器皿cと、それと同形態の土師器皿、また石川県加賀地方の千木ヤシキダ遺跡S B 14（旧P 92）の資料⁹⁾との対比で土師器碗A a 1を補った。

IV期

土師器碗A a 2・碗B b 1・長胴甕c・鍋c

10世紀第3四半期を中心とする。須恵器は消滅している。土師器碗B b 1とb 2の間の差異が生産地差ならば、碗B b 2は当期に含まれる。

V期

土師器碗A b 1・碗B b 2

10世紀第4四半期を中心とする。4期からの形態変化は漸進的である。

VI期

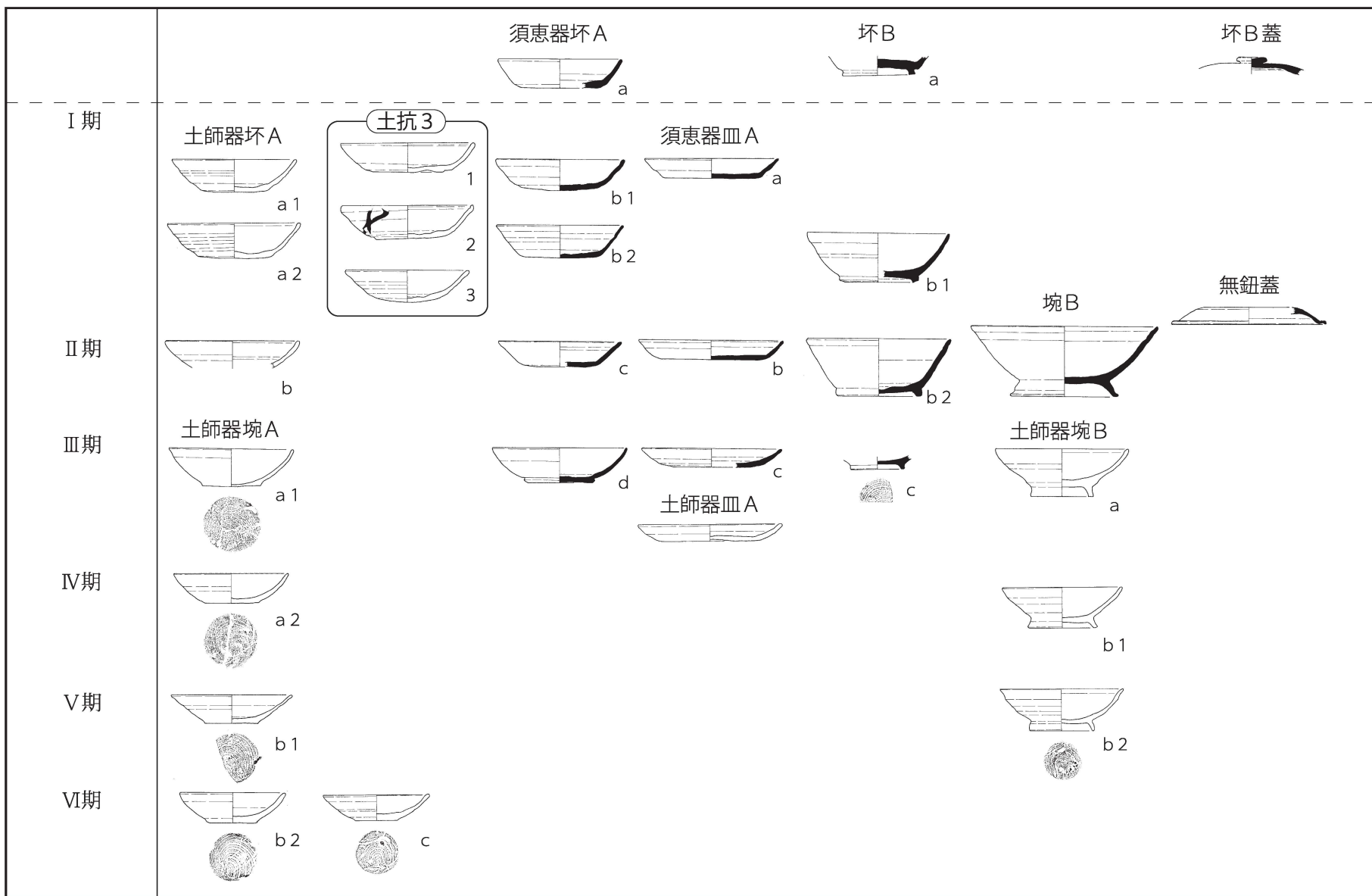
土師器碗A b 2・c・鍋d

11世紀前半代を中心とする。和田防町遺跡S K 034出土土器群以前のものと捉えられる。

歴史的背景の検討

平安時代前期から中期にかけての東古市縄手遺跡の様相は、遺物のほとんどが包含層出土ということから、具体像を描くのは困難である。検討の結果、9世紀第3四半期頃から集落が営まれたこと、そして11世紀代までのある程度長期間にわたって存続していたことが想定できる。また、墨書土器のなかで「富万呂田」等判読できたものも含まれており、これらの意義について大まかであるがまとめてみたい。

越前地域では、9世紀後半から11世紀の遺物を含む集落遺跡は、和田防町遺跡（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター1986）のみであるが、10世紀代に集落がいったん途切れる可能性がある。坂井平野の



第74図 須恵器・土師器の時間的位置づけ

集落遺跡について、広範囲に調査した坂井兵庫遺跡群では、律令期には8世紀代から集落が増加するが、9世紀第3四半期から遺物量が激減し、10世紀初頭で廃絶する(中川2005)。また、猪野口南幅遺跡では、遺跡の開始は9世紀第3四半期の可能性があるが、10世紀前半で途絶えている(勝山市教育委員会2001)。北陸地域全体においても、官衙的あるいは寺院関連以外の遺跡は、9世紀末～10世紀初めにかけて多くが廃絶するなど(宇野1991)、いわば「須恵器とともに消滅」しているようにも見える。これは調査面積等による制約もあり、10世紀代の土器様相が明確でないことも関係していると思われるが、全体的な傾向と捉えていいであろう。このようにしてみると、東古市縄手遺跡は周辺地域と比べて集落成立期が遅いこと、10世紀になっても廃絶せず続くことの2点が特色として挙げられる。

当遺跡の場所は九頭竜川中流域の狭小な地域であり、荘園等に伴う計画的な大規模開発というよりは、長期間定住したということを含め、移住による小集団の自発的な開発と捉えた方が妥当と考えられる。しかし、開発後進地域であったとしても、律令期である当時期に新たに入植して開発を行い、その土地を長期間占有するといった行為が可能であったかが問題になる。

ここで、文献史学側から上記の問題が可能かどうか検討する。幸いなことに越前地域においては、東大寺荘園に関する史料が多数残されており、検討が行われている。

まず、班田収受が機能していた荘園成立以前、8世紀中葉までにおいて、小規模墾田が在地の集団のみならず遠隔地の集団によって開かれていて、それが国内・郡内移住による新集落の建設を伴っていたと考えられること、そして、初期荘園は開始時から周辺住人の労働力に依存しており、さらに他郡からの農繁期の移入耕作者も必要としていたこと(堅田2001)が指摘されている。この農繁期の募集には、功賃のみならず「魚酒」による饗宴を行なってまで、競って人員確保が行われたようであり、それに対する禁制も出ている¹⁰⁾。このことは荘園成立以前、荘園経営時を通じて、国境を越える移動は別として、移住に大きな制約がなかったということになる¹¹⁾。

さらに、それ以降の東大寺荘園の解体期はどうかというと、天曆5年(951)の「越前国足羽郡庁牒」において、道守荘・鎧荘は条里こそ残っているものの荒地と化し、寄作人がいなくなっていること、糞置荘に至っては場所すら不明になっていることが報告されている。また、その前年である天曆4年の「東大寺封戸荘園并寺用帳」には坂井郡桑原荘の記載がなく、それ以前に廃絶したものと考えられる(村井1965)。ここで言う寄作人がなくなったということは、つまり10世紀半ばよりも前の時点で、荘園付近から他地域へ、新たな生活基盤が作れるからこそ移住していったわけである。

文献上からは、初期荘園が9世紀以降徐々に衰退していった状況はわかるものの、いつが転機かは明確にしがたい。ここで考古学分野から推測してみると、前述の坂井兵庫遺跡群の調査成果からは、9世紀第3四半期が転換点であることが窺える。そして、この時期から集落が営まれる東古市縄手遺跡は、それら荘園近辺の集落からの移住先として位置づけることも可能である。しかし、平野部から東古市縄手遺跡のある狭い地域へ移住することについて、どんな動機があったのかは新たに問題点として残る。また、この9世紀第3四半期は土器の形態においても、北陸古代土器編年というⅣ期からⅤ期になる転換点であり、8世紀以来の箱坏形態から埴型に移行する画期である。単に東古市縄手遺跡のみの問題ではなく、この須恵器形態の転換期は、例えばそれまで8世紀以来の農耕行程、儀礼一般において重視されていた屋外饗宴用食膳具としての機能が、耕作単位の小規模化等で共食用程度しか重視されなくなっていくという、消費側・利用側の変化が現れたものかもしれない¹²⁾。少なくともこの後、初期荘園が廃絶していった以上、荘園側にもなんらかの難点が増大していったのは確かであろう。この時期の集落遺

跡事例の増加を待ちたい。

(中野)

註

- 1) 田中照久 1988 39～44頁
- 2) 水村伸行 1989 4～7頁、1990 49～58頁
- 3) 水村伸行 1997 66～69頁
- 4) 出越茂和 1989 158～177頁
- 5) 勝山市教育委員会 2001 101～103頁
- 6) 猪野口南幅遺跡S B03P166において、須恵器坏A 2 b (遺物番号9) と土師器坏A 1 a (遺物番号10) の共伴例がある。
(勝山市教育委員会 2001 45、47頁)
- 7) 永平寺町教育委員会 1996 7～32頁
- 8) 田中照久 1988 44頁
- 9) 出越茂和 1989 169～172頁
- 10) 「魚酒」については、梅田康夫氏によれば、「(1)「魚酒」の提供は、大土地所有化の借耕関係や公田賃租において、「耕種」の事実において耕地占有が決定されることから、個別経営の外部からも労働力を確保せんとして行われた慣行であること」(梅田1993:430頁)とまとめられている。つまり、春の耕作開始時点に着手できた田が、収穫までの一年間の占有が認められることから、賃租とはいえ着手面積が多いほど収穫できる量は多くなる。そこで、春の一時期に「魚酒」を用いてまで労働力を確保しても元が取れるということで、「競作」が行われた。
この「魚酒」に対する禁令は延暦9年(790)と弘仁2年(811)に出されたが、それ以降はない。
- 11) 大町健氏は、寛平8年(896)4月2日太政官符について、「諸郷の百姓は、それぞれ、従来の律令郷制の枠から、開墾田を中心に、山中に開発の拠点を作っていった。個々に、山中に入っていった彼らは、「群居雑処」と言われるような、新たな集落、村落関係を作り出していった。その起点は9世紀末から百余年前、すなわち、8世紀末ということになる」(大町1991:148頁)と解説している。このことを単純に一般化できるわけではないが、班田収受の機能不全に先行して、律令の民衆把握が弛緩しはじめていたことを示すものであろう。
- 12) 福井県出土墨書土器についての集成を釘谷紀氏が行っていて、それによると須恵器消滅とともに墨書土器もみられなくなることが挙げられている(釘谷2004)。墨書は祭祀用の吉祥句を除けば食器識別符号であり、墨書土器にみられる施設名、人名といったものは、両者が同一の目的で使用されていたとみてよいのではないか。つまり、施設名、人名ともに、食器の所属を示す為のものであったと思われる。その食器が混同される可能性のある状況は、利用者が不特定多数であったということである。このことから、V期以降消費側・利用側としては、須恵器が饗宴に利用できるような器種構成でなくなっても、例えば共同で行う溝修繕などの際の共食用には、墨書土器が示すように須恵器を用い続けたのではないか。その点において、「墨書土器は須恵器の用途と同様であったため、須恵器が消滅すると同時に墨書する理由も無くなった可能性」(釘谷2004:98～99頁)との指摘は重要と思われる。

引用・参考文献

- 宇野隆夫 1991 「第Ⅱ章 資料の集成と分析 1 集落」 『律令社会の考古学的研究 北陸を舞台として』 桂書房
- 梅田康夫 1993 「日本古代における「魚酒」の提供」 『金沢法学 第36巻第1・2号』 金沢大学法学部
- 永平寺町教育委員会 1996 『奥乙ヶ谷遺跡第1次発掘調査・第2次発掘調査・堂谷窯跡試掘調査報告書』 永平寺町埋蔵文化財調査報告第5集
- 大町 健 1991 「2村落首長と民衆」 『日本村落史講座第4巻政治1(原始、古代、中世)』 雄山閣
- 堅田 理 2001 「壱田永年私財法と浮浪人」 『続日本紀研究 第330号』 続日本紀研究会
- 勝山市教育委員会 2000 『勝山市猪野口南幅遺跡』 勝山市埋蔵文化財調査報告第13集
- 釘谷 紀 2004 「福井県墨書土器概観」 『あさひシンポジウム2003記録集 山の信仰を考えるー越知山と泰澄を深めるためにー』 朝日町教育委員会
- 田中照久 1988 「小曾原古窯跡群の概要」 『シンポジウム北陸の古代時研究の現状と課題』 資料編 石川考古学研究会 北陸古代土器研究会
- 出越茂和 1989 「金沢における八～十世紀の食膳土器」 『金沢市末窯跡群』 金沢市教育委員会
- 出越茂和 1994 「北陸の施釉陶器ー加賀を中心にー」 『古代の土器研究会第3回シンポジウム 古代の土器研究 ー律令的土器様式の西・東3 施釉陶器ー』 古代の土器研究会
- 中川佳三 1999 「第4節 S D-22出土の土器について」 『大関東遺跡・大味上遺跡』 福井県埋蔵文化財調査報告第44集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 中川佳三 2005 「第3章まとめ 第3節古代」 『坂井兵庫遺跡群Ⅱ(遺物編)』 福井県埋蔵文化財調査報告第81集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1986 「第X章 和田防町遺跡第Ⅱ次調査」 『六条・和田地区遺跡群』 福井県埋蔵文化財調査報告第11集
- 水村伸行 1989 「鉢伏1号窯址とその年代」 『福井考古学会々報』 第28号 福井考古学会
- 水村伸行 1990 「第Ⅳ章 総括」 『鉢伏2・3号窯址灰原発掘調査概報』 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報3 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 水村伸行 1997 「第2節 越前国における古代末期の土師器編年」 『中・近世の北陸ー考古学が語る社会史ー』 北陸中世土器研究会
- 村井康彦 1965 「第2章 古典荘園の基本構造 2 荘園と寄作人」 『古代国家解体過程の研究』 岩波書店

Ⅳ 粘土塊

未焼成粘土塊の近年の類型として、京都市岩倉忠在地遺跡で古墳時代初頭の竪穴住居跡からの出土があげられる(若林ほか 2006)。竪穴住居跡や近接する遺構から粘土塊が複数出土しており、その場所において土器製作に関する作業が行われた可能性が指摘されている。当遺跡の出土位置は、竪穴住居廃絶後の覆土中であることから、廃絶住居を利用した、素材の備蓄も考慮される。(今林)

参考文献

- 若林邦彦ほか 2006 『岩倉忠在地遺跡』 同志社大学歴史資料館

第2節 遺構・遺跡

本遺跡において検出した遺構のうち、主要なものについて触れ、まとめに換えたい。

I 遺構

竪穴住居跡

以下、Ⅱ区で検出した主要な遺構である、2棟の竪穴住居跡¹⁾について若干の検討を加える。

いずれも覆土から多量の土器を検出した(第22・34図)。まず、遺物出土状況について触れる。

「竪穴住居跡窪地への廃棄行為による遺物(住居覆土上層出土遺物)は、本質的に住居そのものに伴う遺物ではない」とされる(小林2002)。また、本遺跡の竪穴住居の廃絶から遺物の廃棄までの時間幅の推定は、出土状況からは困難である。このような認識に立ちながらも、本遺跡においては、竪穴住居跡出土土器と本調査区で検出した主体となる遺物とは同時期(月影式期)であることや、包含層出土遺物で月影式期以前に遡るのは縄文土器であり、隔たりが大きいことから、おおむね出土遺物と近似する時間的位置を保持すると仮定される。

1号住居跡から検出した土器は、その出土位置(垂直分布)から、「第一次堆積土」形成後の廃棄または流れ込みが想定される(第22図)。「廃棄行為にも、その捨てるモノ・捨てる場所・捨てる動機により、様々な種類の廃棄行為があり、各々のタイミングで捨てられた遺物群が重複して出土する」ため廃棄の同時性は保証できない(小林1996)。本遺跡の竪穴住居跡の場合、検出した土器は、型式学的に月影式の時間幅に収まるため、比較的近似した時間的位置である蓋然性を認めるにすぎない²⁾。1号住居跡の遺物の平面分布は南側に偏り、廃棄ないし流れ込みが南側からなされた可能性が指摘できる。土器片の磨滅の程度や近辺での接合率の高さから、流れ込みよりは廃棄の可能性が高いと思われる。

2号住居跡は、床面からの検出と、「第一次堆積土」より上部での検出が確認できる。しかし、床面直上の土器(第35図15)は破片であり、住居跡のほぼ中央部に位置すること、また、第37図4のように出土位置に高低差のある破片が接合する例もあることから、「第一次堆積土」形成とほぼ同時期の廃棄ないし流れ込みの可能性も考えられ、明確に遺構に伴うとは判断しがたい。2号住居跡の遺物の平面分布は、中央部および北側に偏る。1号住居跡と同様に、磨滅の程度や近辺での接合率の高さ、さらに住居跡壁面付近で遺物を確認していないことから、廃棄の可能性を指摘できる。

1号住居跡および2号住居跡の遺物出土状況は、縄文時代の竪穴住居跡研究において、いわゆる「吹上パターン」と呼ばれる出土状況に類似する(小林1965)。縄文時代の竪穴住居跡の議論では、「第一次堆積土」の形成に季節的移動を想定する立場(末木1975、石井1977)と、人為的な行為を想定する立場(山本1987)がある³⁾。しかし、立地条件や社会構造が異なる時代の竪穴住居跡に、その議論をそのまま当てはめることはできない。弥生時代以降の住居跡研究においては、土屋根の崩落が「第一次堆積土」に関与している可能性を示唆するものもある⁴⁾。層位の観察からの土層の成因解明については、現状では困難であり、先に述べたように異なる解釈が提示される結果となっている。「考古学的な堆積層の堆積はその土質の組織、時代あるいは場所によって独自性をもつものである」とされるように、歴史的・地理的な要因も加味されなければならない(ハリス1995)。一見同様の堆積に見えても、それらが単一の要因に拠るとは言えず、さまざまな堆積状況があったことが想定される。問題は、分層した単位が何に起因するのか、集落論や住居跡論に還元できていないところにある。各層中のブロックや炭化物

の含有率・土質・色調から何を明らかにできるのか、またできないのかを考えていかなければならない。以上のような現状において、本遺跡の遺物出土状況の解釈は困難である。

次に、竪穴住居を構成する施設について触れていく。1号住居跡では、ピット1～4を、その配置や深度から支柱穴と判断した。一方、2号住居跡では、ピットの深度が浅く、また平面上で南側に偏った配置であることから、明確に支柱穴になるとは言いがたいが、ピット1～4がその可能性を保有すると指摘するに留めたい。1号住居跡の南東部に見られるテラス状の部分は、周辺部分との対比から、土を盛って貼りつけたのではなく、地山を部分的に残して掘りこんだものと判断した。幅が0.5m弱であることや、住居壁面から床面にかけて緩やかな傾斜をもつ形状であること、また、平坦面を形成しないことから、いわゆる「ベンチ状遺構⁵⁾」とは異なる。

福井県において、月影式期の竪穴住居跡の調査例は、近年増加している。しかし、後世の削平を受けるなど、遺物出土状況が把握できる例は少ない。そのため、推論には、時代および地域を異にする竪穴住居跡についての議論を適用しなければならなくなり、前提条件が多い。今後、資料増加を待ち、周辺地域の資料との比較を通して、位置づけを再考しなければならない。

II 遺跡

今回の発掘調査における成果として、主に以下の4点があげられる。

①県内で検出例の少ない、縄文時代早期～前期・晩期の土器を検出したこと（I区で晩期・II区で早～前期、晩期）。本遺跡の土器様相から、越前地方（少なくとも永平寺町周辺）における縄文時代早期～前期の土器は、東海・近畿地方の影響を受けていることが明らかになった。②月影式期の竪穴住居跡を検出したこと（II区）。また、遺構覆土内から多量の月影式土器を検出したこと。③まとまった律令期の土師器・須恵器を検出したこと（II区）。④類例の少ない石組遺構を検出したこと（I区）。

なお、I区とII区は、立地条件が異なること、出土遺物の保有する時間的位置および幅が異なることから、同一時期の集落の広がりとして捉えることはできない。便宜上、同一の遺跡名で括られているものの、本来は時間的・空間的に異なる集落であったと判断される。（白川）

註

- 1) 「竪穴住居跡」という名称については、関和彦氏による以下のような批判がある。「報告書において担当者が『竪穴住居』と表記するという事は、学問的にいえばその『竪穴』遺構が住居であると認識したということである。しかし、今まで多くの場合、慣用的に『竪穴』遺構ができれば反射的に『竪穴住居』としたのであろう」というものである（関1999）。しかしながら、どのような条件をみたせば、遺構を竪穴住居跡として認定できるのか、問題提起はされるものの明確な指針は示されていないのが現状であろう。規模や施設で判断する方法もあろうが、同様の規模・構造でも、時代・時期・地域によって機能・性格が異なっていた可能性もある。福井県内での弥生時代～古墳時代の竪穴住居跡検出例は必ずしも多くないが、隣接する石川県においては、柱穴を有さないものや一辺が2～3m程度のものも「竪穴住居跡」として報告される例がある。例えば、宝達志水町（旧押水町）竹生野遺跡では、2～3mの規模で柱穴が認められないもの“第21号竪穴住居”、金沢市額新町遺跡では、ピット1基のみのもの“第2号竪穴住居址S T02”・長軸3.2mのもの“第8号竪穴住居址S T08”・長軸3.2mで柱穴無しもの“第9号竪穴住居址S T09”、志賀町鹿首モリガフチ遺跡では、柱穴が不規則で支柱穴らしきものが認められないもの“第3号竪穴住居跡”などが竪穴住居跡として報告されている（越坂1988、田中1984、南1995）。また、宮本長二郎氏の研究によれば、竪穴住居には、伏屋式のものや壁立式のように柱穴を必要としないものが認められる（宮本1996）。本遺跡においては、

上部構造を推定する根拠を見出すことができなかったため、上の例に該当するか判断できず、上部構造の問題には触れることはできない。また、日常的に「住居」として使用したのかという問いにも考古学的手法を用い答えることは困難である。上記の批判を免れないであろうが、居住スペースが確保できるか否かといった点を考慮し、便宜的に第7図には土坑、第21・33図には竪穴住居跡という名称を用いた。なお、この判断は、今後の研究の進展により適宜改変されるべきものである。

- 2) 実際の手続きにおいては、このような資料が一括と認定され、それが編年上の基準資料となってきたため、土器操作においては、有意なまとまりなのかもしれない。しかし、層位の安定性を保証するために、型式学的なまとまりを利用することは、一括性により土器の同時性を保証する方法と循環していることを認識しておかなければならない。
- 3) それぞれの立場においても、解釈がわかれ意見はまとまっていない。林謙作氏は、『第一次堆積土』は、末木が指摘しているように、遺物はほとんど含まず、きわめて細粒で均質である場合が圧倒的に多い。この特徴は、すくなくとも東日本では、縄文時代に限らずすべての時期に共通する。(中略) 朽ちかけた屋根や壁の隙間から土ほこりが吹き込んだと考えれば、『第一次堆積土』のこのような特徴は説明がつく」としている(林2004)。また、西田正規氏による、自然堆積か人為的堆積か、「どちらの可能性によるものか、堆積した土層断面の観察で判断できることだろうか」という指摘もある(西田1989)。西田氏の指摘どおり、現状においては土層断面自体から、自然堆積と人為的堆積を見分けることは困難ないし不可能であろう。しかし、林氏の指摘のとおり、「第一次堆積土」の形成が通時代的な現象であるならば、自然堆積の可能性が高いように思われる。
- 4) 古墳時代の例では、群馬県の黒井峯遺跡や中筋遺跡などで確認されている(大塚1998)。これらは、火山灰の堆積により放棄された集落のもので、竪穴住居の崩壊の過程が通常とは異なるという状況であるため、このような堆積土が一般的であるとはいえない。また、地域的差異・時間的差異も考慮しなくてはならないため、安易な類推はできない。
- 5) 他に、「ベッド状遺構」「テラス状遺構」「屋内高床部」などの名称もある。名称については、帝京大学山梨文化財研究所での研究集会「遺跡・遺物から何を読み取るか(Ⅲ)―住まいと住まい方―」で議論されているが、統一見解を得るには至っていない(平野編2000)。

参考文献

- 浅川滋男編 1998 『先史日本の住居とその周辺』 奈良国立文化財研究所シンポジウム報告 同成社
- 石井 寛 1977 「縄文社会における移動と地域組織」 『調査研究集録』2 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石野博信 1990 『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館
- 大塚晶彦 1998 「第二節 土屋根をもつ竪穴住居 ―焼失家屋の語るもの―」 『先史日本の住居とその周辺』 奈良国立文化財研究所シンポジウム報告 同成社
- 越坂一也ほか 1988 『竹生野遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 小林謙一 1996 「竪穴住居跡のライフサイクルからみた住居廃絶時の状況 ―南関東の縄文中期集落での遺物出土状態を中心に―」 山梨県考古学協会1996年度研究集会『すまいの考古学 ―住居の廃絶をめぐって』資料集 山梨県考古学協会
- 小林謙一・大野尚子 2002 「土器と遺構のライフサイクル ―縄文中期集落遺跡を読み解くために―」 『民族考古』第6号 「民族考古」編集委員会
- 小林達雄 1965 「遺物埋没状況及びそれに派生する問題」 『米島貝塚』 庄和町教育委員会
- 末木 健 1975 「移動の所産としての吹上パターン」 『山梨県中央道埋蔵文化財調査報告書―北巨摩郡長坂・明野・葎崎地内』 山梨県教育委員会

- 関 和彦 1999 「古代びとの建物仕様 ―竪穴「住居」論批判―」 『遺跡・遺物から何を讀みとるか(Ⅲ) ―住まいと住まい方―』 資料集 帝京大学山梨文化財研究所
- 田中孝典ほか 1984 『鹿首モリガフチ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 西田正規 1989 『縄文の生態史観』 東京大学出版会
- 林 謙作 2004 『縄文時代史Ⅱ』 雄山閣
- エドワード・ハリス著 小沢一雅訳 1995 『考古学における層位学入門』 雄山閣
- 平野 修編 2000 「討論」 『研究集会報告集 住まいと住まい方 ―遺跡・遺物から何を讀みとるか』 帝京大学山梨文化財研究所
- 福井県教育委員会 1993 『福井県遺跡地図』
- 南 久和 1995 『金沢市額新町遺跡』 金沢市教育委員会
- 宮本長二郎 1996 「竪穴住居の復元」 『考古学による日本歴史15 家族と住まい』 雄山閣
- 山本暉久 1987 「縄文時代社会と移動―『集団移動』論をめぐる研究の現状とその問題点について」 『神奈川考古』23

圖 版